

中級レベルの日本語学習者における場所を表す格助詞「に」の習得に関する研究：中国語を母語とする学習者を対象として

岡田，美穂

<https://doi.org/10.15017/1785341>

出版情報：九州大学，2016，博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済



中級レベルの日本語学習者における
場所を表す格助詞「に」の習得に関する研究

－中国語を母語とする学習者を対象として－

九州大学大学院比較社会文化学府

岡田美穂

平成 28 年 6 月

目次

第1章 序論	1
1.1 問題の所在	1
1.2 研究の目的	9
1.3 本研究の対象	10
1.3.1 中級レベルの日本語学習者を対象とする理由	10
1.3.2 中国語話者に加え韓国語話者にも調査協力を依頼する理由	11
1.4 用語の定義	11
1.5 論文の構成	13
第2章 先行研究概観	16
2.1 日本語学における格助詞の研究	16
2.1.1 格助詞「に」、「へ」、「で」、「を」の歴史的変遷	18
2.1.2 伝統的な日本語文法としての格助詞「に」、「で」、「を」の分析	22
2.1.2.1 格助詞「に」の研究	22
2.1.2.2 格助詞「で」の研究	26
2.1.2.3 格助詞「を」の研究	28
2.1.2.4 伝統的な日本語文法としての格助詞研究「に」、「で」、「を」のまとめ	30
2.1.3 生成文法および格文法の影響を受けた格助詞「に」、「で」、「を」の分析	31
2.1.3.1 生成文法とは	31
2.1.3.2 格文法とは	32
2.1.3.3 「項」と「付加詞」とは	33
2.1.3.4 場所を表す「に」の研究	34
2.1.3.5 場所を表す「で」の研究	39
2.1.3.6 場所を表す「を」の研究	44
2.1.3.7 格助詞「で」の限定の表現について	47
2.1.3.8 格助詞「に」の存在表現の2つの解釈について	50
2.1.3.9 生成文法および格文法の影響を受けた格助詞研究「に」、「で」、「を」のまとめ	51
2.1.4 日本語学における格助詞研究のまとめ	51
2.2 日本語教育における場所を表す「に」の習得に関する研究	53
2.2.1 理論的背景	54
2.2.2 日本語能力が初級レベルの学習者を対象とした習得に関する研究	60
2.2.2.1 格助詞間の習得順序に関する研究	60
2.2.2.2 格助詞内の機能の習得順序に関する研究	62
2.2.2.3 場所を表す「に」習得上に現れる誤用を分析している研究	66

2.2.3	日本語能力が中級レベルの学習者を対象とした習得に関する研究	72
2.2.4	日本語能力が上級レベルの学習者を対象とした習得に関する研究	79
2.2.5	日本語教育における格助詞研究のまとめ	82
第3章	研究課題	83
3.1	研究課題と仮説	83
3.1.1	中級レベルの日本語学習者が用いる存在場所を表す「に」	83
3.1.2	存在場所「に」と範囲限定「で」の混同による「で」→「に」の誤用が現れる 発達段階があるか	91
3.1.3	移動先「に」と動作場所「で」の混同による「で」→「に」の誤用が現れる発 達段階があるか	95
3.1.4	場所名詞が「対比」された場合と場所名詞が「文頭」に置かれた場合に存在場 所「に」→「で」の誤用が動作場所「で」とは無関係に現れる発達段階があるか	103
3.2	研究方法	109
3.3	調査協力者	114
3.3.1	中級レベルの日本語学習者とは	115
3.3.2	調査協力者	116
第4章	仮説「存在場所『に』と範囲限定『で』の混同による『に』→『で』の誤用」の 検証	118
4.1	国内の日本語学習者(多国籍)を対象とした調査	118
4.1.1	仮説の検証	118
4.1.2	調査票作成の留意点	119
4.1.3	調査協力者	121
4.1.4	結果と考察	123
4.1.5	まとめ	125
4.2	日本語学習環境の異なる中国語話者を対象とした調査(JFL と JSL)	126
4.2.1	仮説の検証	126
4.2.2	調査票の修正	127
4.2.3	JFL 環境の「中位レベル」の中国語話者を対象とした調査	129
4.2.4	JSL 環境の「中位レベル」の中国語話者を対象とした調査	132
4.2.5	初級レベルの日本語学習者のデータによる回帰分析	134
4.2.6	まとめ	138
4.3	韓国語母語話者を対象とした調査	139
4.3.1	仮説の検証	139
4.3.2	分析の方法および調査票の修正	139
4.3.3	調査協力者	141

4.3.4	調査の結果と考察	141
4.3.5	まとめ	146
第 5 章	仮説「移動先『に』と動作場所『で』の混同による『で』→『に』の誤用」の検 証.....	147
5.1	移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同	147
5.1.1	仮説の検証	147
5.1.2	調査の概要	148
5.1.3	予備調査とその結果.....	148
5.1.4	本調査とその結果	155
5.1.5	まとめ	159
5.2	動詞が表す「移動」の分かり易さと移動先を表す「に」の正答率との関係.....	161
5.2.1	仮説の検証	161
5.2.2	調査の概要	162
5.2.3	「に」と共に用いられる移動を表す動詞.....	163
5.2.4	調査票	163
5.2.5	分析の結果と考察	166
5.2.6	まとめ	173
第 6 章	仮説「場所名詞が『対比』された場合と場所名詞が『文頭』に置かれた場合に動 作場所『で』とは無関係に起こる存在場所『に』→『で』の誤用」の検証	175
6.1	場所名詞が対比された場合の存在場所「に」→「で」の誤用	175
6.1.1	中国語話者を対象とした調査	175
6.1.2	仮説の検証	176
6.1.3	調査票	176
6.1.4	調査とその結果.....	177
6.1.5	韓国語話者を対象とした調査	179
6.1.6	仮説の検証	179
6.1.7	調査票	179
6.1.8	調査の結果と考察	180
6.1.9	まとめ	181
6.2	場所名詞が文頭に置かれた場合の存在場所「に」→「で」の誤用	181
6.2.1	中国語話者を対象とした調査	182
6.2.2	仮説の検証	182
6.2.3	予備調査.....	183
6.2.4	本調査のための調査票作成の留意点.....	188
6.2.5	調査協力者	190
6.2.6	分析の方法	190

6.2.7	中国語話者を対象とした調査の結果と考察	190
6.2.8	韓国語話者を対象とした調査	192
6.2.9	仮説の検証	192
6.2.10	調査協力者	193
6.2.11	分析の方法	193
6.2.12	韓国語話者を対象とした調査の結果と考察	193
6.2.13	まとめ	195
第7章	結論	196
7.1	本研究の要約	196
7.2	本研究の意義	202
7.3	教育現場への応用	204
7.4	今後の課題	205
参考文献	207
付録 I:	資料	218
資料A	第4章 4.1.2 調査票(国内の多国籍の日本語学習者)	218
資料B	第4章 4.2.2 調査票(JSL の中国語話者)	220
資料C	第4章 4.2.2 調査票(JFL の中国語話者)	222
資料C	第4章 4.2.2 調査票(JFL の中国語話者)	224
資料C	第4章 4.2.2 調査票(JFL の中国語話者)	226
資料C	第4章 4.2.2 調査票(初級レベルの英語話者)	228
資料D	第4章 4.3.2 調査票(韓国語話者)	234
資料D	第4章 4.3.2 調査票(韓国語話者)	236
資料D	第4章 4.3.2 調査票(韓国語話者)	238
資料E	第4章 4.3.2 調査票についての注意(韓国語話者用)	240
資料E	第4章 4.3.2 調査票についての注意(韓国語話者用)	241
資料F	第5章 予備調査(1)(「去」か「在」翻訳の調査)	241
資料F	第5章 予備調査(2-1)(文脈があるもの)	242
資料F	第5章 予備調査(2-2)(文脈がないもの)	243
資料F	第5章 予備調査(3)(「この食堂()ご飯を食べよう」)	245
資料G	第5章 本調査の調査票(移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」)	246
資料G	第5章 本調査の調査票(移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」)	248
資料H	第5章 問題文の種類(動詞が表す「移動」と「に」の正答率)	250
資料H	第5章 調査票(動詞が表す「移動」と「に」の正答率)	253
資料H	第5章 調査票(動詞が表す「移動」と「に」の正答率)	255
資料I	第5章 アンケート調査(「移動」が分かり易い動詞とは)	257
資料J	第6章 予備調査(「文頭」と「文中」)	258

資料 J 第 6 章 予備調査(「文頭」と「文中」の翻訳調査).....	260
資料 K 第 6 章 本調査の調査票(「文頭」と「文中」).....	261
付録Ⅱ：表 2-2.表 2-3.	263
表 2-1. 日本語学習者が格助詞「に」、「で」、「を」を習得するために必要な格助詞「に」、「で」、「を」の用法	52
表 3-1. 「中級クラス」の日本語学習者が書いた場所を表す「に」と「で」	85
表 4-1. 日本語レベルと(b)、(c)を正しく回答した場合の正答率との関係	123
表 4-2. 日本語レベル「中級の下」と「中級の中」で問(c)を正しく回答した場合の正答率の差の検定	124
表 4-3. 日本語レベル「中級の中」と「中級の上・上級」で(c)を正しく回答した場合の正答率の差の検定	124
表 4-4. 日本語レベル間で(b)を正しく回答した場合の正答率と(c)を誤って回答した場合の誤答率との相関係数	125
表 4-5. JFL の「単純存在ニ」「動作デ」「範囲デ」「条件付存在ニ」の正答率	130
表 4-6. JFL の「中位レベル」の「単純存在ニ」「動作デ」「範囲デ」「条件付存在ニ」の正答率	130
表 4-7. JFL の目的変数「条件付存在ニ→デ誤答率」と説明変数「動作デ」正答率および「範囲デ」正答率の重回帰分析の結果	131
表 4-8. JFL の目的変数「単純存在ニ→デ誤答率」と説明変数「動作デ」正答率および「範囲デ」正答率の重回帰分析の結果	132
表 4-9. JSL の「単純存在ニ」「動作デ」「範囲デ」「条件付存在ニ」の正答率	133
表 4-10. JSL の「中位レベル」の「単純存在ニ」「動作デ」「範囲デ」「条件付存在ニ」の正答率	133
表 4-11. JSL の目的変数「条件付存在ニ→デ誤答率」と説明変数「動作デ」「範囲デ」正答率の重回帰分析の結果	133
表 4-12. 初級レベルの日本語学習者の「単純存在ニ」「動作デ」「範囲デ」「条件付存在ニ」の正答率	135
表 4-13. 日本語能力が初級レベルの日本語学習者の目的変数「単純存在ニ→デ誤答率」と説明変数「動作デ」「範囲デ」正答率の重回帰分析の結果	136
表 4-14. JSL の目的変数「単純存在ニ→デ誤答率」と説明変数「動作デ」「範囲デ」正答率の重回帰分析の結果	136
表 4-15. 日本語能力が初級レベルの日本語学習者の目的変数「条件付存在ニ→デ誤答率」と説明変数「動作デ」「範囲デ」正答率の重回帰分析の結果	138
表 4-16. 韓国語を母語とする日本語学習者の「単純存在ニ」「動作デ」「範囲デ」「条件付存在ニ」の正答率	142
表 4-17(=表 4-5). 中国語を母語とする日本語学習者の「単純存在ニ」「動作デ」「範	

「デ」「条件付存在ニ」の正答率.....	142
表 4-18. 韓国語話者で合計得点が 32 点以上 42 点以下の目的変数「条件付存在ニ→デ誤答率」と説明変数「動作デ」「範囲デ」正答率の重回帰分析の結果	143
表 4-19. 中国語話者で合計得点が 26 点以上の目的変数「条件付存在ニ→デ誤答率」と説明変数「動作デ」「範囲デ」正答率の重回帰分析の結果.....	145
表 5-1. 予備調査(1)の(a)(b)に対応する中国語文に「去」「在」が用いられた数	149
表 5-2. 予備調査(2-1)の[例 c][例 d]の「に」が「～に行く」または「～にいる」として用いられた数	151
表 5-3. 予備調査(2-2)の回答で「に」が「移動する場所」として用いられた数と「存在する場所」として用いられた数.....	153
表 5-4. 予備調査(3)の回答で()に「に」と「で」が用いられた数および、翻訳文に「在」または「去」が用いられた数	154
表 5-5. 「動作デ」「移動先ニ」「存在ニ」「ヲ」「カラ」の正答率と(標準偏差).....	158
表 5-6. 目的変数「動作デ」の「デ→ニ」誤答率、説明変数「移動先ニ」正答率および「存在ニ」正答率の重回帰分析の結果.....	159
表 5-7. 「入る」類「集まる」類「泊まる」類の正答率の分散分析の結果	166
表 5-8. 「入る」類「集まる」類「泊まる」類に「移動」が感じられる回答の割合	167
表 5-9. 日本語学習者が「人や物の移動が分かり易い」と思う文の順位	168
表 6-1. 中国語話者の「単純存在ニ」「動作デ」「範囲デ」「対比存在ニ」の正答率	178
表 6-2. 韓国語話者の「単純存在ニ」「動作デ」「範囲デ」「対比存在ニ」の正答率	180
表 6-3. 予備調査：「文中ニ」と「文頭ニ」の「に」→「で」の誤答数(誤答率)....	185
表 6-4. 予備調査：「私は日本にいる」に対応する中国語の翻訳調査の結果.....	186
表 6-5. 予備調査：「日本に私はいる」に対応する中国語の翻訳調査の結果.....	187
表 6-6. 中国語話者の「文頭ニ」「文中ニ」「動作デ」「範囲デ」「ヲ」「カラ」の正答率	191
表 6-7. 中国語話者の「文頭ニ→デ誤答率」の平均と「文中ニ→デ誤答率」の平均	191
表 6-8. 韓国語話者の「文頭ニ」「文中ニ」「動作デ」「範囲デ」「ヲ」「カラ」の正答率	194
表 6-9. 韓国語話者の「文頭ニ→デ誤答率」の平均と「文中ニ→デ誤答率」の平均	194
図 1-1. 本論文の構成.....	15
図 2-1. ESL の自然な習得順序	56
図 2-2. ESL の否定構造の発達の順序.....	57
図 2-3. 名詞・形容詞・動詞の否定形の発達順序.....	59
図 2-4. 予想される日本語学習者の場所を表す「に」の発達段階.....	109
図 4-1. 日本語レベルと (b)、(c) を正しく回答した場合の正答率との関係	123

図 5-1. 調査の流れ	148
図 5-2. 予備調査(1)	149
図 5-3. 予備調査(2-1)	151
図 5-4. 予備調査(2-2)	152
図 5-5. 予備調査(3)	154
図 5-6. 調査の流れ	162
図 5-7. 格助詞選択式テストの「に」を正答とする o の問題文に対し「移動」が感じ られるかどうかを調べるためのアンケート調査用紙	166
図 5-8. 「入る」類「集まる」類「泊まる」類「いる」類「動作デ」の問題文における 助詞選択のパターン	170
図 7-1. 推測される日本語学習者の場所を表す「に」の発達段階	202

第 1 章

序論

1.1 問題の所在

本研究は日本語学習者の場所を表す格助詞「に」の習得に関する研究である。日本語学習者は、日本語学習が始まって早い段階で存在場所を表す格助詞「に」と動作場所を表す格助詞「で」を学習した後、それらを混同することが知られている(久保田 1994、八木 1996、高見沢・ハント・蔭山・池田・伊藤・宇佐美・西川 2008、野田・迫田・渋谷・小林 2001 等)。存在場所を表す格助詞「に」(以下、存在場所を表す「に」)とは「あそこに佐藤さんがいます」(『みんなの日本語初級 I 本冊』, p. 80)や「東京ディズニーランドは千葉県にあります」(『みんなの日本語初級 I 本冊』, p. 80)のように存在文における存在場所を表す名詞に後接される「に」である。そして、動作場所を表す格助詞「で」(以下、動作場所を表す「で」)とは「私は駅で新聞を買います」(『みんなの日本語初級 I 本冊』, p. 46)のように動詞が表す行為・動作が生起する場所を表す名詞に後接される「で」のことである。すなわち、1.4 で後述するが本研究では、存在場所を表す「に」は存在を表す動詞の「いる」または「ある」と共に用いられる格助詞を指し、動作場所を表す「で」は動作や行為を表す動詞と共に用いられる格助詞を指す。

存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同による誤用は、2.2.2 で後述するが、日本語能力が初級レベルの母語の異なるさまざまな日本語学習者に現れることが知られている(久保田 1994、八木 1996、市川 1997 等)。このことから、日本語学習者の存在場所を表す「に」の発達段階¹は、まず動作場所を表す「で」との混同による誤用が現れる段階があると言える。では、次はどのような段階があるのか。しかし、次の段階はまだ明らかにされていない。次の段階がどのような段階かを明らかにするためには、日本語能力が中級レベルの日本語学習者を対象として存在場所を表す「に」の使用状況を調べなければならない。

以下の(1)、(2)は、日本語能力が初級レベルの日本語学習者の「に」と「で」の誤用である。(1)は韓国語を母語とする日本語学習者が「に」を用いるべきところに「で」を用いた誤用であり(以下、「に」→「で」の誤用)、(2)は英語を母語とする日本語学習者が「で」を用いるべきところに「に」を用いた誤用である(以下、「で」→「に」の誤用)。以下、問題となる格助詞に下線を渡し、下線を施した格助詞が誤用である文には

¹ 詳細は 2.2.2 で述べるが、発達段階とはある 1 つの項目の習得において、同じ言語を学習する学習者が辿る習得の道筋のことで、学習者の母語からの転移が習得の途上に出現することも分かっているが、学習者の母語や学習の方法などが異なっても、同じ言語を学習する学習者間に共通した発達段階が存在することも分かっている(Ellis, 1985, Towell & Hawkins, 1994, 白畑・若林・村野 2010)。

文頭に「*」を付す²。

(1)*家でいる。

(2)*食堂にうどんを食べた。

(1)は、日本語学習者が場所を表す名詞に「で」を用いる傾向が強く、「場所を表す指標」である場所名詞と「で」を一括りにした「場所を表す指標+で」といった単位を想定しているとも考えられる誤用であると解釈されている³(松田・斎藤 1992)。(2)は、存在場所を表す「に」の過剰使用による誤用であるという指摘がある⁴(久保田 1994)。(1)の「に」→「で」の誤用と(2)の「で」→「に」の誤用は、初級から中級へと日本語能力が向上するにつれて現れなくなるのであろうか。

次の(3)、(4)は日本語能力が中級レベルの日本語学習者の「に」と「で」の誤用である。これらは中国語を母語とする日本語学習者による誤用で、(3)が「に」→「で」の誤用であり、(4)が「で」→「に」の誤用である。これらの例から日本語能力が中級レベルになっても日本語学習者には「に」と「で」の誤用が現れることが分かる。

(3)*クラスで2人韓国人がいる。

(4)*あの喫茶店にコーヒーを飲もう。

中級レベルの学習者によるこの(3)、(4)の誤用は、初級レベルのときに現れる(1)、(2)の誤用と現象的には同じもののように見える。しかし、そのような見方が正しいとすれば、日本語学習者の存在場所を表す「に」と「で」の習得は中級レベルになっても進んでいないことになる。現象的に同じように見える(1)、(3)の「に」→「で」の誤用と(2)、(4)の「で」→「に」の誤用は質的に同じものなのか。

² 下線が施されている箇所は正しくとも、それ以外の箇所が誤用である場合は(例「(6)ホームヘルパーは家にいたら、子供たちもととても安心だ」)、誤用文であることを示す「*」を付していない。つまり、「ホームヘルパーは」の「は」は誤用であるが、「家にいたら」の「に」が正しいため、誤用文であることを示す「*」を付していないということである。((0))

³ 2.2.2.5 で後述するが、松田・斎藤(1992)では場所を表す「に」と「で」の使用に関して誤選択が多いのは、場所という実質的意味のみに着目する方略がとられていると解釈されており、特に「で」の誤用については、「場所を表す指標+で」といった単位が想定されているとされている。しかし、「に」と「で」がどのような「場所」の場合に誤用されているのかという記述はない。

⁴ 初級レベルにおいて存在場所を表す「に」の過剰使用が見られることを指摘したのは久保田(1994)である。福岡(1996)は「に」の過剰使用を指摘しているが「に」が存在場所を表す「に」であるとは言及していない。中級レベルでは蓮池(2004)が中国語を母語とする日本語学習者における「に」の過剰使用を指摘している。いずれも「場所」がどのような「場所」の場合に「に」の過剰使用が起こるのかについての記述はない。

(3)、(5)、(6)は筆者が担当した留学生を対象とした日本語の作文の授業の中で中国語を母語とする一人の日本語学習者が同じ時期に書いた文である。

(3) *クラスで 2 人韓国人がいる。

(5) ホームヘルパーとは老人の家で世話をする人だ。

(6) ホームヘルパーは家にいたら、子供たちもとても安心だ。

(3)と(6)は人の存在を表していると思われる。(3)は「に」→「で」の誤用であるが、(6)では「ホームヘルパー」が存在する場所「家」に存在場所を示す「に」が正しく後接されている。一方、(5)では「老人の家で世話をする」のように「世話をする」という行為が行われる場所「家」に「で」が正しく後接されている。これらの例から、当該学習者は存在場所には「に」を、動作行為の場所には「で」を用いることは一応理解していると思われる。

鈴木(1978)によると、中級レベルの日本語学習者は動詞の動作性に着目し場所を表す「で」を用いるという。この指摘によれば、当該学習者も動詞の動作性に注目し、(5)の「世話をする」には動作性があるため「で」を、(6)の「いる」には動作性がないため「に」を用いたことになるだろう。しかし、それでは(3)の「に」→「で」を用いたのはなぜなのだろうか。初級レベルでは「～に～があるいる」より「～は～にあるいる」の方が定着度が低いという報告がある(市川 1988)⁵。そのため、(3)の誤用は存在場所を示す名詞と存在動詞の分離によって引き起こされたとも考えにくい。

一方、場所を表す名詞は、いくつかの異なる使われ方をすると指摘されている(国広 1997, p. 58)。例えば、「学校」について言えば、「岡の上に松林に囲まれて学校が建っている」の「学校」は「建築物」であり、「流感が猛烈にはやって、ほとんど学校全体がやられた」の「学校」は「学校の中の人間」である(国広 1997, p. 58)。(3)の「クラス」も、例えば、実際にその教室に行って生徒を目の前にしている場合の「クラス」は物理的な場所を指すが、単に出席簿を見て云々する場合の「クラス」は生徒を指していると理解される(丸山 1994, p. 144)。つまり、(3)は「留学生の集合体」として用いられている。(3)が(1)と異なるのはこの点である。(1)の「家」は物理的な場所を表しているのに対し、(3)の「クラス」は当該学習者にとって単なる場所ではなく「人の集合」と

⁵ 2.2.2.3 でも述べるが、(市川 1988)では「～は～にあるいる」の定着度が低いことについて「～に～があるいる」に比べて時間的に十分教えられなかったためであろうと解釈されている。他方、韓国語話者の格助詞の初期の習得過程を調べた森山(2005)では当該韓国語話者が使用した教科書に用いられている動詞の文に動作主を表すガ・ハ格が殆ど共起していないにもかかわらず、動作主を表すガ・ハ格の動詞に共起する割合が異常に高かったことが述べられている。森山(2005)と合わせて考えると、市川(1988)の「～は～にあるいる」の定着度が低いのは、「～に～があるいる」に比べて時間的に十分教えられなかったからとは言い難い。

解釈された可能性があるということである。そのような解釈は当該文に「2 人」「韓国人」といった人に言及する名詞が出現していることから予想される。

すなわち、(3)は留学生の集合体であるクラスを構成する人員の内 2 人が韓国人であることが述べられているのである。(3)を用いた日本語学習者は、範囲限定を表す「で」を理解しているが完全に理解していないため、範囲限定を表す文と類似⁶の概念を持つ存在文を混同し(3)の「に」→「で」を用いたのだと考える。それは(3)のように「人の集合」を表した存在文なのである。範囲限定を表す「で」とは、例えば「クラスで一番スペイン語ができるのは太郎だ」のように、「一番良い」というような特定の属性を有する範囲が「クラス」という学生の集合体である。この範囲限定を表す「で」の特定の属性を有する範囲である集合体と、集合体を構成する人員について述べる存在文が、日本語学習者にとって類似の概念であり混乱が引き起こされていると考えるのである。このことを確かめるためには、「*クラスで2人韓国人がいる」の「に」→「で」と範囲限定を表す「で」との関係を調べなければならない。

では、先に示した(4)の「*あの喫茶店にコーヒーを飲もう」は、初級レベルに現れる(2)の「*食堂にうどんを食べた」と同じ「で」→「に」の誤用だろうか。中級レベルの日本語学習者が(4)の「飲む」という動詞の動作性に着目し「で」を用いなかったのはなぜか。

前述したように、初級レベルに見られる(2)の「*食堂にうどんを食べた」は、存在場所を表す「に」の過剰使用と言われている(久保田 1994)。確かに「行く」や「来る」そして「着く」といった移動動詞と「に」が共に用いられる場合は、「に」を伴う名詞句がこれらの動詞の直前に置かれることが多いので、ひとつのユニットとして習得していることも考えられるであろう。それに対し、「飲む」や「食べる」といった動詞は「を格」を要求することが多い他動詞である。つまり、「飲む」や「食べる」といった動詞にとって場所を表す名詞は付加詞⁷(連用修飾語)に過ぎず、移動動詞にとっての「二格名詞」のように動詞とセットとなったユニットを形成するわけではない。一方、「食べる」にとっての「食堂」や「飲む」にとっての「喫茶店」は当該行為を行う主体がその行為を遂行する際に存在しそうな場所である。したがって、(4)の「で」→「に」の誤用は存在場所の「に」との混同と考えることもできるであろう。

しかし、(2)と(4)は以下の点が異なる。(2)は当該行為の主体が「食堂」に存在し「うどんを食べた」ことが表されているのに対し、(4)は「あの喫茶店」に当該行為の主体がまだ存在しておらずこれから移動することが含意されている。つまり、(2)と(4)の違いは、(2)では「食堂」への行為主体の移動が含意されないのに対し、(4)では「あの喫

⁶ 範囲限定を表す文と存在文の類似の概念については、2.1.3.7、2.1.3.8 及び 4.4.1 で後述する。

⁷ 2.1.3.3 で後述するが、「付加詞」とは「文」(p. 40)という概念を述語の意味の完結体として捉えた場合に不可欠ではないが余剰的に文に情報を足すことのできる成分のことである(長谷川 1999, p. 40)。

茶店」への行為主体の移動が含意される点にある。

そして、(4)の「あの喫茶店」が離れた場所を指すことから、当該行為の主体がこれから移動する先を表しているのではないかと考える。(4)の「で」→「に」は、当該文の表す事態の背後に移動が想定された文であるために生じた誤用なのではないかと考えるのである。すなわち、「あの喫茶店」の「あの」は指示対象である場所「喫茶店」が話し手の現在いる場所から離れた位置にあることを示す指示詞であることから、この学習者は当該文を「コーヒーを飲む」ために「あの喫茶店」へ「行く」という移動を含意したものと解釈した結果、その意味上の「移動先」となる「喫茶店」に「に」を付加してしまったと考えることができる。

しかし、例えば、「あの喫茶店」ではなく「この喫茶店」のように動作の場所が移動を伴わない場合はどうなるかが問題になるであろう。実際、(2)の場所部分のみが異なる「*この喫茶店にコーヒーを飲もう」は、「この喫茶店」の「この」が話し手の存在場所を示す指示詞であることから、「あの喫茶店」における「あの」と比べれば、移動は想定しにくい。つまり、「*この喫茶店にコーヒーを飲もう」における「に」の誤用は(4)「*あの喫茶店にコーヒーを飲もう」における「に」の誤用とは異なるものと考えることができるのである。

それでは、「*この喫茶店にコーヒーを飲もう」における「に」はどのような用法の「に」なのだろうか。本研究は、「*この喫茶店にコーヒーを飲もう」における「に」は存在場所を示す「に」と移動先を示す「に」の両方の解釈が可能だと考える。存在場所を示す「に」の解釈は前述のように「この」という指示詞が話し手の存在場所を示すことに因るもので、一方、移動先を示す「に」の解釈は当該の場所が話し手の眼前にはあるものの、話し手自身はまだその場所の中にはいないというやや特殊な状況下での解釈である。

(4)の「*あの喫茶店にコーヒーを飲もう」の「で」→「に」が当該行為の主体がこれから移動する先を表したための誤用であることを確かめるためには、この「で」→「に」の誤用と移動の到着点を表す「に」との関係を調べなければならない。

本研究では中国語を母語とする日本語学習者を対象として(4)のような誤用について調査し詳細に分析を行うが、本研究の後には、中国語以外の言語を母語とする日本語学習者に対しても同じように調査し分析することで、移動先を表す「に」の発達の1つの段階を示すことができると考える⁸。

他方、中級レベルでは、初級レベルで現れる(1)「*家でいる」と同様に、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同による誤用と思われる「に」→「で」も現れる。以下の(7)～(9)は、筆者が担当した作文の授業のときに(3)「*クラスで2人

⁸ 本研究の後に中国語以外の言語を母語とする日本語学習者に対し同じ調査を行い分析することを考えているという対象は、英語話者である。中国語の介詞「在」は、「あの喫茶店でコーヒーを飲む」の「で」に対応し、かつ、「在」は場所を表す「に」にも対応している。同じように、英語は「あの喫茶店でコーヒーを飲む」の「で」が「in」に対応し、かつ、「in」は場所を表す「に」にも対応しているからである。

韓国人がいる」ととは異なる中国語を母語とする中級レベルの日本語学習者が書いた文である。(9)では対比された 2 つの場所の一方に「で」が用いられている点に特徴がある。

(7)○さんとはソウルで生まれ育ちの若い女子大学生だ。

(8)周りに日本人の大学生がたくさんいるそうだ。

(9) *寮にいません、大学でいる。

(8)「周りに日本人の大学生がたくさんいるそうだ」と(9)「*寮にいません、大学でいる」は人の存在を表していると思われる。(9)は誤用であるが、(8)では「日本人の大学生」が存在する場所「まわり」に「に」が正しく後接されている。一方、(7)では「ソウルで生まれ育ち」のように「生まれ育った」という行為が行われる場所「ソウル」に「で」が正しく後接されている。これらの例から、当該日本語学習者は存在場所には「に」を、動作や行為の場所には「で」を用いることを一応理解していると見られる。先述した鈴木(1978)の中級レベルの日本語学習者が動詞の動作性に着目し場所を表す「で」を用いるという指摘によれば、当該日本語学習者も動詞の動作性の有無を基準にし、(7)の「生まれ育ち」には動作性があるため「で」、(8)の「いる」には動作性がないため「に」を用いたことになる。

ところで、(9)に「で」が用いられたのはなぜなのであろうか。当該学習者が書いた作文の内容について、筆者が「日本人の友達がたくさんいるんですか」と質問すると、その学習者は口頭で(9)の文を述べながら(9)の文を自身の作文に書き加えた。筆者が(9)で「で」を使った理由を尋ねると、その学習者は「友達がいるのが寮ではなく、大学だからだ。大学を強調している」と説明した。つまり、「寮」と「大学」という 2 つの場所を対比し、「友達がいる」のがそれらのうちの「大学」であることを「強調する」ために「で」を用いたというのである。その学習者と筆者の近くに座っていた日本語学習者も(9)の学習者に賛同し、2 つの場所の 1 つを「強調する」ために「で」を用いると言う。

そこで、筆者が(9)の文を板書し、クラスの 12 人全員にこの「で」を使うかどうか尋ねると数人が「使う」と答えた。理由を尋ねると「強調するためだ」ということであった。もちろん、強調するために「で」を用いるという学習者の主張する「強調」が何を意味するのかは不明である。理由は分からないが、当該学習者には何らかの基準があって 2 つの場所を対比させた場合の 1 つに誤って「で」を用いるのである。

初級レベルの日本語学習者に現れた(1)「*家でいる」と(9)「*寮にいません、大学でいる」の「に」→「で」の誤用が現れた状況は以下の点で異なる。先述したように、初級レベルの日本語学習者には存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同による誤用が現れる(久保田 1994、八木 1996 等)。すなわち、(1)は当該学習者が場所名詞と動詞との関係において存在場所を表す「に」を用いるのか動作場所を用いるのかという

判断ができずに誤用が生じた誤用である。それに対し、先に述べたように(7)「*〇さんとはソウルで生まれ育ちの若い女子大学生だ」の動作場所を表す「で」と(8)「周りに日本人の大学生がたくさんいるそうだ」の存在場所を表す「に」は正しく使い分けられているにもかかわらず生じた誤用なのである。

このことから、(9)は当該学習者が場所名詞と動詞との関係において存在場所を表す「に」を用いるのか動作場所を用いるのかの判断ができずに生じた誤用ではないことが推測される。とは言え、(9)の「に」→「で」が動作場所を表す「で」として用いられたものではないとは断定できない。そのため、(9)の「に」→「で」の誤用が動作場所を表す「で」と何ら関係がないことを示す必要がある。

同様に、一見、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同による誤用であると思われる「に」→「で」の誤用には(12)もある。(12)では、文頭に置かれた場所名詞句に「で」が用いられている点に特徴がある。(12)は(3)および(9)を書いた日本語学習者とは異なる中国語を母語とする中級レベルの学習者1名が書いた文である。この日本語学習者は、日本の盆踊りについて述べた後に以下の(10)～(13)の文を書いた。

(10)ところで、正月といえ、私の国では、正月の日は、家族の全員で一緒に料理を作って、水餃子を作って、「春節晩会」というテレビ番組を見る。

(11)・・・皆は一緒に踊ることがあまりない、中国で。

(12)*中国で、お盆のような日もある。

(13)でも、日本で、お盆の時、いろいろな所で盆踊が行われる。

この学習者は(10)の「私の国では」には主題を表す「は」を正しく用いている。(12)と(13)では主題を表す「は」を用いることができなかったが、(10)と同様に、(12)は「お盆のような日がある」が「中国」を話題にしていることを、(13)は「お盆の時、いろいろな所で盆踊が行われる」が「日本」を話題にしていることを作文の読み手に明確に伝えるために、場所を表す名詞句を文頭に置いているのである。どこの国を話題にしているのかを文頭に示さなかった場合には、(11)のように文末に場所名詞句を置いている。文中に場所名詞句を置いた場合は異なる解釈が生じる可能性もあるため、(11)のように置き忘れた場合は別として、文頭に場所名詞句を置きどこの国を話題にしているのかを示しているのであろう。

つまり、(12)は「主題-解説」⁹からなる文なのである。「主題」を表す際になぜ誤って「で」を用いるのかは分からないが、(12)はこの学習者が「で」を伴う場所名詞句を「主

⁹ もちろん当該学習者は「主題-解説」という用語を知らないであろうし、(12)が「主題-解説」からなる文であると認識しているか否かは不明である。しかし、当該学習者は作文の読み手が誤った解釈をしないように配慮し、「主題」が異なる文に、つまり、中国を話題にしている(11)と(12)には「中国で」を用い、日本を話題にしている(13)には「日本で」を用いるというように学習者なりの表現方法で明確に「主題」を示しているのである。

題」として文頭に置くことを存在文にまで多用したことによる「に」→「で」であると考えられる。

文頭に場所名詞句が置かれた「に」→「で」の誤用は中国語を母語とする日本語学習者だけではない。(14)～(17)はイタリア語を母語とする中級レベルの日本語学習者が書いた文である。(16)、(17)は学習者自身が育った家について書いた作文の中の文であり、家の様子を描写した後、家の外および庭について述べたものである。

(14)台所の隣に小さい自習室がある。

(15)一階の下に地下もある。ここで、洗濯し、・・・。

(16)*家の外でほかの親類の家もあるから、庭が同じだ、広い。

(17)*庭で、家の後に小さい家もある。

この学習者は家の中の描写については(14)、(15)のように正しく「に」を用いていることから、存在場所を表す「に」を用いることができることが分かる。(15)では「ここで、洗濯し」のように動作場所を表す「で」も正しく用いられている。(16)は「ほかの親類の家もある」が「家の外」を話題にしていることを、(17)は「家の後に小さい家もある」が「庭」を話題にしていることを作文の読み手に明確に伝えるために、場所を表す名詞句を文頭に置いていると思われる。つまり、(16)、(17)も「主題-解説」からなる文なのである。「主題」を表す際になぜ誤って「で」を用いるのかは分からないが、(16)、(17)もこの学習者が「で」を伴う場所名詞句を「主題」として文頭に置くことを存在文にまで多用したことによる「に」→「で」であると考えられる。

このように「で」を伴う場所名詞句を「主題」¹⁰として文頭に置くことが多用されたと思われる「に」→「で」は、動作場所を表す「で」との関係を分析しても両者の間に何ら関係は見られないであろうと考える。当該学習者は場所名詞句に後続する動詞との関係が分からずに「に」→「で」を用いたとは思えないからである。しかし、当該学習者が「主題」として文頭に場所名詞句を置いた場合に誤って「で」を用いてしまったのなら、文頭に置かれた「に」→「で」の誤用が文中に置かれた「に」→「で」の誤用より多いことが考えられる。したがって、文頭に置かれた存在場所「に」→「で」の誤用は、文中に置かれた存在場所「に」→「で」の誤用よりも多いかどうかを調べなければならない。その上で、文頭に置かれた存在場所「に」→「で」の誤用と動作場所「で」に何ら関係がないことを確認する必要があるだろう。

以上のように、中級レベルの日本語学習者に現れる(3)「*クラスで2人韓国人がいる」、(4)「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」、(9)「*寮にいません、大学でいる」、(12)「*中国で、お盆のような日もある」のような誤用は、初級レベルの日本語学習者に現れる誤用

¹⁰ 0本研究では日本語学習者が主題化された文及び対照文を正しく作ることができるか否かについては研究の対象としない。

とは異なり、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同によるものではないことが推測された。中級レベルの日本語学習者に現れたこれらの誤用が、どのような用法の「に」と「で」の用法を混同し起こった誤用であるのかを質的に明らかにすることができれば、場所を表す「に」の発達の1つの段階も明らかになると考える¹¹。

1.2 研究の目的

本研究は、場所を表す格助詞「に」の習得がどのようにして進むのかという発達の1つの段階を明らかにすることを目的としている。1.1 で述べたように、誤用の質的な違いを明らかにすることは重要であり、その違いを明らかにすることができれば、日本語学習者の場所を表す「に」の発達の1つの段階が明らかになると考える。

存在場所を表す「に」の発達段階は、2.2.2 で後述するように、日本語学習者の国籍、母語、年齢、日本語学習環境、日本語教授の方法、日本語学習に使用した教材などが異なっても、動作場所を表す「で」との混同が見られるため、動作場所を表す「で」との混同による誤用が現れるという段階があると言って良いと思われるが、次にどのような段階を辿るのかは分かっていない。そのため、次の段階とはどのような段階かを明らかにしなければならないのである。

可能であれば、縦断的研究として同一の日本語学習者の集団に調査協力を得て、初級レベルのときに用られた場所を表す「に」の正用と誤用を中級レベルのときに用いられた場所を表す「に」の正用と誤用を比較し分析することで、場所を表す「に」の発達段階を明らかにすべきであろう。しかし、現実的には初級レベルから中級レベルへと同一の日本語学習者の集団に調査の協力を依頼するのは困難である。したがって、本研究では、初級レベルの日本語学習者を対象とした久保田(1994)や八木(1996)などの先行研究によって明らかにされている、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同による誤用が現れる段階を発達の1つの段階として、次の段階を明らかにしようとするのである。

具体的には、(3)「*クラスで2人韓国人がいる」の「クラス」が「集合体」を表すような文における「に」→「で」の誤用を対象として、存在場所を表す「に」の習得を探る。(4)「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」のような「で」→「に」の誤用を対象として移動先を表す「に」の習得を探る。また、(9)「*寮にいません、大学でいる」のように場所名詞が「対比」された場合、および、(12)「*中国で、お盆のような日もある」のように場所名詞が「文頭」に置かれた場合の「に」→「で」の誤用を対象として、存在場所を表す「に」の習得を探る。すなわち、発達の1つの段階として、(3)、(4)、(9)、

¹¹ 初級レベルの日本語学習者を対象とした久保田(1993)や八木(1994)などでは「に」と「で」の誤用が存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同によると述べられているが、その誤用が本当に存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同によるものなのかという質的な分析はされていない。

(12)のような誤用が現れる段階があるかどうかを究明するのである。

1.3 本研究の対象

本研究は、場所を表す「に」の(3)「*クラスで2人韓国人がいる」のような「集合体」を表す文における「に」→「で」の誤用、および、(4)「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」のような「で」→「に」の誤用、そして、(9)「*寮にいません、大学でいる」のような場所名詞が対比された場合と(12)「*中国で、お盆のような日もある」のような場所名詞が文頭に置かれた場合の「に」→「で」の誤用を対象として、「に」と「で」の混同について調べるための調査を行う。調査は主に中国語を母語とする日本語能力が中級レベルの日本語学習者に協力を得る。

(3)「*クラスで2人韓国人がいる」のような「に」→「で」の誤用とは、(1)「*家でいる」と異なり、「場所」が単なる場所を表しているのではなく、「集合体」を表しているような文における誤用である。(3)のような文には「場所」と共に「2人」や「韓国人」といった語が用いられている点に特徴がある。(4)「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」のような誤用とは、これから行われる行為が離れた先での行為であるため、場所への移動を表すために用いられている可能性がある誤用を指す。(9)「*寮にいません、大学でいる」のような誤用とは、2つの場所名詞が対比された場合、(12)「*中国で、お盆のような日もある」のような誤用とは、場所名詞が文頭に置かれた場合の存在場所を表す「に」→「で」の誤用を指す。

1.3.1 中級レベルの日本語学習者を対象とする理由

日本語能力が中級レベル¹²の日本語学習者を対象とするのは、初級レベルにおいて見られる存在場所を表す「に」→「で」の誤用が、存在場所を表す「に」と動作や行為の場所を表す「で」の混同によるものであるのに対し(久保田 1994、八木 1996 等)、中級レベルにおいて見られる存在場所を表す「に」→「で」の誤用が、初級レベルと同じ混同によるものであるのかがまだ分かっていないからである。また、中級レベルにおける移動先を表す「に」の習得がどのように進むのかについても、明らかになっていない。1.2 で述べたが、可能であれば、縦断的研究として同一の日本語学習者の集団の初級レベルのときと中級レベルの場所を表す「に」の習得状況を分析し、場所を表す「に」の発達段階を明らかにすべきであると考えるが、現実的には困難である。そのため、初級レベルを対象とした先行研究を成果を踏まえ、本研究では中級レベルの日本語学習者に協力を得て調査を行うのである。初級レベルや中級レベルといった日本語レベルにつ

¹² 本研究では幅広い中級レベルのどこかに(3)や(4)のような誤用が現れる段階があると推測している。すなわち、その段階が幅広い中級レベルの全域にわたって存在するというわけではない。中級レベルについては 3.3.1 で詳細に述べる。

いての定義は 4.3 で述べる。

1.3.2 中国語話者に加え韓国語話者にも調査協力を依頼する理由

「に」と「で」の混同を調べるための調査は、主に中国語を母語とする日本語学習者に協力を得て行うが、一部の調査は、韓国語を母語とする日本語学習者にも協力を得る。中国語を母語とする日本語学習者を主な調査協力者とするのは、筆者の担当する日本語教育の現場では、(3)「*クラスで2人韓国人がいる」のような「に」→「で」の誤用および、(4)「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」のような「に」→「で」の誤用が、中国語を母語とする日本語学習者によく見られるからである。(3)(4)のような誤用が中国語を母語とする日本語学習者によく見られると感じられるのは、その日本語学習者数にも関係する。国内における出身地別日本語学習者数は中国が 64,687 人であり、全日本語学習者数 156,843 人の 41.2%を占めている(文化庁平成 25 年調べ)。また、海外における国別日本語学習者数でも中国が 1,046,490 人であり、全日本語学習者数 3,984,538 人に占める割合が最も高い(国際交流基金平成 24 年調べ)。そのため、中国を母語とする日本語学習者に協力を得る。

「に」と「で」の混同を調べる一部の調査について、韓国語を母語とする日本語学習者を調査協力者とするのは、中国語を母語とする日本語学習者を対象として調査を行って得られた結果が、同様に、韓国語を母語とする日本語学習者にも得られれば、それは日本語を学習する者に共通するものであるとして、将来的に一般化できる可能性も高まるからである。もちろん、両日本語学習者に対する調査によって何らかの結果が得られたとしても、それを日本語学習者一般の傾向を指すことになるとは言えないため、本調査で得られた結果が日本語学習者一般にもあてはまるかどうかは今後の課題とせざるを得ない。

1.4 用語の定義

本研究を遂行するにあたり必要となる用語の定義をしておく。1.2 で述べたように、本研究は存在場所を表す「に」と移動先を表す「に」の習得を探り、場所を表す「に」の発達の 1 つの段階を明らかにすることを目的としている。そのため日本語能力が中級レベルの日本語学習者に協力を得て調査を行う。中級レベルとは 4.3 で後述するが、迫田(2001)や蓮池(2004)などの先行研究を基に、日本語能力試験¹³の N1 にはまだ合格していないが、N4 以上のいずれかの試験に合格しているか合格すると見なされる日本語レベルとする。

¹³ 日本語能力試験とは、日本語を母語としない人の日本語能力を測定し認定する試験として、国際交流基金及び日本国際教育支援協会によって実施されているものであり、N1、N2、N3、N4、N5 の順に難しいレベルとなっている。

日本語学習者の場所を表す「に」の誤用は、主に「に」と「で」の間、「に」と「を」の間に起こる。そのため、日本語学習者が場所を表す「に」を習得するためには、「に」の用法を「で」、「を」の用法と区別しなければならない。したがって、第2章の先行研究を概観する際には、格助詞「に」だけではなく格助詞「で」と格助詞「を」の研究を概観し分析する。

以下、存在場所を表す「に」、移動先を表す「に」、動作場所を表す「で」、そして、範囲限定を表す「で」の用法について定義する。

存在場所を表す「に」とは、「父は東京にいる」、「庭に池がある」のような人や物の存在場所を表すものである(日本語教育学会編 1982, p. 393)。「クラスに2人韓国人がいる」のような「に」や、「寮にいないが、大学にいる」なども存在場所を表す「に」である。但し、本研究では、本動詞としての「いる」または「ある」と共に用られる「に」を指す。「テーブルにある花は昨日買った花だ」のように連体修飾節中の「ある」と共に用いられている「に」は含まない。

移動先を表す「に」とは、「大阪に行く」、「たなに本を載せる」のように、対象が移動を経た上で当該名詞の表す場所に存在することになることを示す「に」の用法である(日本語教育学会編 1982, p. 393)。寺村(1982, p. 120)を参考にし、移動を表す「行く」、「来る」、「帰る」などの動詞類、「入る」、「集まる」、「泊まる」などの動詞類、「入れる」などの動詞類と共に用いられる「に」とする。寺村(1982, p. 113)によると、「泊まる」、「浮く」、「座る」のような動詞類は、移動そのものではないものの、移動を前提とし、その結果の表れである事象を表している点で、「入る」、「乗る」、「届く」のような動詞に準ずるものと考えて良いとしている。そのため、本研究では「泊まる」、「浮く」、「座る」のような動詞類と共に用いられる「に」も移動先を表す「に」に含んでいる。

動作場所を表す「で」とは、「東京で彼に会った」のような当該事態が生起した場所を表す名詞と共に使われる「で」の用法を指す(日本語教育学会編 1982, p. 394)。つまり、1.1でも述べたように、動作場所を表す「で」は動作や行為を表す動詞と共に用いられる格助詞を指す。本研究が対象とする「で」と共に用いられる動詞は、「食堂でご飯を食べる」の「食べる」や「図書館で勉強する」の「勉強する」のように初級レベルの日本語学習用教材に提示されている動作や行為を表す動詞とする。以下に述べる範囲限定を表す「で」は動作場所を表す「で」には含まない。

範囲限定を表す「で」とは、間淵(2000)の「日本でいちばんよいまちだ」の「日本で」のように、「よいまちだ」と判断・決定する上での範囲・基準を定めている文で動詞文ではない文に現れ、限定を表すものとする。例えば、「日本でこの町が一番良い町だ」は、「一番良い」というような特定の属性を有するのが「この町」であり、それを選択する際の範囲が「日本」であることを示している。間淵(2000)の限定の用法には、時や期間、範囲の限定、基準を表すものがあるが、本研究の範囲限定を表す「で」は、時や期間を表す名詞に後接する「で」は含まない。

1.5 論文の構成

本章では、本研究の目的、調査の対象を述べた。第2章では、国語学および日本語学(以下、日本語学)における格助詞研究と日本語教育における格助詞習得研究の先行研究を概観することで本論の立場を示す。日本語学の先行研究では、現代日本語の格助詞「に」、「で」、「を」の研究を概観し、場所を表す「に」、「で」、「を」の異なる機能を示す。日本語教育の先行研究では、日本語学習者の場所を表す「に」の習得に関する研究を中心に日本語能力が初級レベル、中級レベル、上級レベルを対象とした研究をそれぞれ概観し、日本語学習者の場所を表す「に」の誤用と問題点を示す。

第3章では、3つの研究課題と課題を解明するための仮説および仮説検証項目を立て、研究方法を示す。

第4章では、第3章で示した、中級レベルには存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」の混同による「*クラスで2人韓国人がいる」のような誤用が現れる発達段階があるかという研究課題1について立てた仮説を検証する。(i)国内の日本語学習者(多国籍)、(ii)JFL環境の中国語を母語とする「中位レベル」の日本語学習者、JSL環境の中国語を母語とする「中位レベル」¹⁴の日本語学習者、(iii)韓国語を母語とする「中位レベル」の日本語学習者を対象とした格助詞選択式テストの調査を実施し、研究課題1に対する答えを導き出す。

第5章では、第3章で示した、中級レベルには移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同による「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」のような誤用が現れる発達段階があるかという研究課題2について立てた仮説を検証する。具体的には中国語を母語とする日本語学習者を対象とした2つの予備調査として翻訳の調査とアンケート調査を行い、本調査として格助詞選択式テストの調査とフォローアップインタビューを行う。これらの結果より研究課題2に対する答えを導き出す。

第6章では、第3章で示した、中級レベルには場所名詞が対比された場合と場所名詞が文頭に置かれた場合に動作場所を表す「で」とは無関係に存在場所を表す「に」→「で」の誤用が現れる発達段階があるかという研究課題3について仮説を検証する。具体的には中国語を母語とする日本語学習者および韓国語を母語とする日本語学習者を対象として調査を行う。場所名詞が対比された場合の「に」→「で」の誤用については格助詞選択式テストを行う。場所名詞が文頭に置かれた場合の「に」→「で」の誤用については中国語を母語とする日本語学習者を対象に予備調査として格助詞選択式テストの調査と翻訳の調査を行う。本調査では格助詞選択式テストの調査を実施する。これらの結

¹⁴ 中級レベルの中でも「中位レベル」を設定した。JFL環境の中国語を母語とする日本語学習者の格助詞選択式テストの結果、合計得点の平均値を中心にして設定した日本語レベルである。

果より研究課題 3 に対する答えを導き出す。

第 7 章では、本研究によって明らかになったことと今後の課題を示す。本論の構成は図 1-1 に示す通りである。

第1章 序論

- ・問題の所在・本研究の対象・本研究の目的



第2章 先行研究概観

- ・日本語学における格助詞の研究
- ・日本語教育における場所「に」の習得の研究(「に」と「で」「を」間の誤用も示す)



第3章 研究課題

- ・本研究の研究課題

研究課題1. 存在場所「に」と範囲限定「で」の混同による「に」→「で」の誤用が現れる発達段階があるか。

→仮説:「*クラスで2人韓国人がいる」の「に」→「で」の誤用は範囲限定「で」との混同によって起こる。

研究課題2. 移動先「に」と動作場所「で」の混同による「で」→「に」の誤用が現れる発達段階があるか。

→仮説:「*あの喫茶店にコーヒーを飲もう」の「で」→「に」の誤用は移動先「に」との混同によって起こる。

研究課題3. 場所名詞が対比された場合と場所名詞が文頭に置かれた場合に動作場所「で」とは無関係に存在場所を表す「に」→「で」の誤用が現れる発達段階があるか。

→仮説:「*寮にいません、大学でいる」と「*中国で、お盆のような日もある」の「に」→「で」の誤用は動作場所「で」とは無関係に起こる。

- ・研究の方法(主に格助詞選択式調査から得たデータを回帰分析)



第4章 研究課題1の仮説の検証

第5章 研究課題2の仮説の検証

第6章 研究課題3の仮説の検証



第7章 結論

- ・本研究の要約(日本語学習者の場所を表す「に」の発達の1つの段階の可能性)
- ・教育への示唆・今後の課題

図 1-1. 本論文の構成

第2章

先行研究概観

本研究が取り扱うのは現代日本語の格助詞「に」である。本章の目的の1つ目は、日本語学における格助詞「に」、「で」、「を」の研究を概観することで、本研究の立場を示すことである。格助詞「に」、「で」、「を」の研究は、伝統的な日本語文法としての研究および、生成文法と格文法の影響を受けた研究に分けて概観する。

本章の目的の2つ目は、日本語教育における先行研究を概観し、日本語学習者の場所を表す「に」の習得の状況を把握することである。まず、日本語学習者の格助詞の習得順序を把握する。次に、日本語学習者の日本語能力が初級レベル、中級レベル、上級レベルのそれぞれのレベルにおける場所を表す「に」の習得の状況を把握する。その際、認知言語学の観点を取り入れた研究も示す。最後に、日本語学習者が用いる場所を表す「に」が、正しく用いられているものと誤って用いられている例を把握し、問題となる点を挙げる。

2.1 日本語学における格助詞の研究

本研究は、日本語学習者の場所を表す「に」の発達の1つの段階を明らかにしようとするものである。その理論的裏付けには日本語学における格助詞研究を体系的に理解することが必要である。

まず、格助詞「に」、「へ」、「で」、「を」の歴史的変遷を示す。次に、伝統的な日本語文法としての研究は山田(1922) および橋本(1969)を中心に、生成文法および格文法の影響を受けた寺村(1982)を中心に概観する。そして、格助詞「で」の限定の表現については田中・松本(1997)および間淵(2000)、格助詞「に」を伴う存在表現の研究については西山(2003)および金水(2006)を示す。

山田(1922) および橋本(1969)などの研究と寺村(1982)などの研究を分けて概観するのは、後述するように格助詞の研究の方法がまったく異なるからである。山田(1922) および橋本(1969)は、格助詞を文中の名詞と動詞の関係において用例を挙げながら論じている。それに対し、寺村(1982)はチョムスキーの生成文法およびフィルモアの格文法の影響を受け、分類した動詞類と共に場所を表す格助詞を伴う名詞句を示しているからである。そのため、山田(1922) および橋本(1969)を中心とした研究を概観することで格助詞の用法が把握でき、寺村(1982)を中心とした研究を概観することで格助詞がどのような動詞と共に用いられるかが把握できる。しかし、生成文法や格文法の影響を受けた研究であったとしても、格助詞については文中の名詞と動詞の関係において論じられて

いる研究もある。したがって、山田(1922) および橋本(1969)のように格助詞が文中の名詞と動詞との関係において論じられている研究ならば山田(1922) および橋本(1969)の研究と共に示し、寺村(1982)のように格助詞がどのような動詞と共に用いられるかという観点により論じられている研究を生成文法および格文法の影響を受けた研究として寺村(1982)と共に示し概観することにする。

文中の名詞と動詞の関係によって格助詞を分析した中でも特に、山田(1922) および橋本(1969)を中心に格助詞の研究を概観するのは以下の理由による。山田(1908)は、江戸時代から明治初期までの古典の理解のための国語研究から進み、日本文法の体系を学問的に樹立したからである(北条 1957, pp. 37-42)。格助詞という名称も山田(1908)によって名付けられた。特に、山田(1922)は現代日本語の格助詞について記述しており、重要である。橋本(1934)は、日本の国語教育における文法の骨組みとなっているからである(宮地 1982, pp. 78-79)。つまり、日本人の格助詞の知識とは橋本(1934)の文法研究における格助詞なのである。特に、橋本(1969)は格助詞の研究であるため重要となる。2.1.2で述べるように、山田(1922)と橋本(1969)は異なる判断基準を用いて助詞を分けているが、格助詞については、格助詞が後接する名詞とそれに続く動詞との関係において論じられている点は同じである。したがって、山田(1922) および橋本(1969)を中心に概観することで、格助詞「に」、「で」、「を」がどのような用法であるのかを知ることができる。格助詞「に」、「で」、「を」について、山田(1922) および橋本(1969)に述べられていない点は、田中(1977)、佐久間(1983)などを示す。

他方、寺村(1982)は、生成文法および格文法の影響を受けており、格助詞研究の方法が山田(1922) および橋本(1969)とまったく異なっている。山田(1922) および橋本(1969)では、文中の名詞と動詞の関係において格助詞の用法がどのようなものが述べられているのに対し、寺村(1982)では格助詞を伴う名詞句によって動詞が分類され、分類された動詞類と共に格助詞が示されているのである。同じように動詞を中心にして動詞がどのような格助詞を伴う名詞句と共に用いられるかに着目し格助詞が示されている研究には仁田(1993、1997)、益岡(2000)などがある。特に寺村(1982)を中心に格助詞の研究を概観するのは、寺村(1982)が日本語教育に基づいた研究だからである。

また、格助詞「で」の限定の表現および格助詞「に」を伴う存在表現の研究を示すのは、日本語学習者の格助詞の発達段階を明らかにする上で重要だからである。田中・松本(1997)および間淵(2000)は、格助詞「で」の限定の表現について述べている。西山(2003)および金水(2006)は、存在表現の「に」の2つの解釈を述べている。この「に」の解釈によって、日本語学習者にとって存在場所を表す「に」の習得がなぜ困難であるかという点が解明され得る。

2.1.1 格助詞「に」、「へ」、「で」、「を」の歴史的変遷

日本語は本来「君恋ふる」などのように、必ずしも助詞を必要としていなかったと考えられている(山崎 2001, p. 216)。「が」や「を」といった助詞は用いられなくともその表現や理解に大きな支障を生じることはなく、文脈と語順によって主格や目的格が理解された(西田 1977)。こうした日本語の特質は、現代の日常語(「私行く」や「水飲む」)においても保たれている(西田 1977)。

「に」は、かなり早い時期から助詞として機能していたらしく、奈良時代(710 年～794 年頃)には既に多くの用法があった(西田 1977)。そして、「この岳になつます子」(p. 213)のように省略されることが極めて少ない重要な助詞であったという(西田 1977)。格助詞は文中の体言と用言との関係を表示するが、「が」が「主格」(p. 206)、「を」が「目的格」(p. 206)を示すのに対し、「に」のように「補格」(p. 206)を示す助詞は、本来、用言の叙述内容を補助する役割を持つものであり、その表現が省略されると、意味が理解できなくなる性質のものであるため、この種の助詞は早い時期から存在したものであるという(西田 1977, pp. 205-213)。主格、目的格、補格とは、文中の体言と用言との関係を表すもので、動作・作用・状態を表す用言に対して、体言が用言の働きの主体となる場合が主格(「が」、「の」)、体言が用言の目的物である場合が目的格(「を」)、体言が用言の叙述内容に対して、場所・時間・手段・方法・材料などを用言に先行して示す場合が補格であり(「に」、「へ」、「と」、「より」、「から」、「で」など)、その用言を補助的に修飾しているものである(西田 1977, pp. 205-206)。

橋本(1969, pp. 127-128)によると、「に」の色々な用法の内、最も原始的なものは、恐らくは「部屋に居る」(p. 120)のような所を表すものであり、それが、「今日六時頃に歸る」(p. 121)のような時を示すものに用いられ、また一方、「馬にのる」(p. 119)のような到着する場所を示すもの、「五十銭にまけた」(p. 119)のようなついに帰着する所のものを示し、それから、「友だちに聞いた」(p. 119)のような主語に対して相手となるものや、「親に似てゐる」(p. 119)や「期限に後れる」(p. 119)のように土台になるものや比較の標準になるもの、「借金に困つてゐる」(p. 120)のように原因となるものなども示し、また一方、「明らかに知る」(p. 121)のように副詞的なものを導くようになったのであろうと述べられている。「すべて助詞の類に於て、具體的の關係を示すものから、だんだん抽象的の關係を示すもの開展して行くのは、どこの國でも見られる現象であるからである」(橋本 1969, pp. 127-128)という。

橋本(1969)の「に」の用例では「馬にのる」と「五十銭にまけた」が「用言のあらはす動作作用の到着し歸着する所のものを示す」(p. 119)として一括りに示されているが、「馬にのる」が具体的な關係を示し「用言のあらはす動作作用の到着」(p. 119)する所のもので、「五十銭にまけた」が抽象的な關係を示し「用言のあらはす動作作用の歸着する所のもの」(p. 119)であるので、前者の方が後者よりも先に用いられていたことが分かる。「歸着する」とは、「五十銭にまけた」の例では、値引きの交渉が最終的に「五

十銭」という金額に落ち着いたという意味である。

佐久間(1983)では、橋本(1969, p. 127)の所を表すものから到着する場所への発展について、さらに詳しく述べられている。佐久間(1983)によると、「に」は、「学校は神田にある」や「毎朝六時にちゃんと起きるよ」のような物事の「ありか」(p. 150)や進行の時と所などを示す用法から、一転して、「とうとう東京驛についた」のように何程か離れて視線の向かうところ、「めあて」(p. 150)としての位置を占める趣がある(p. 150)という「目標」を示す方向へと発展したということである(p. 150)。

「へ」は、名詞「へ(辺)」から転成した助詞であり、名詞「へ(辺)」が中心から遠い端、末を意味するところから、現在いる地点から遠く離れた地点へ向かって進む場合に用いられていたという(西田 1977, p. 216)。「へ」は、奈良時代から平安時代中期頃までは、「行く」、「帰る」、「越ゆ」、「渡る」、「遣る」など現在の地点から離れていく場合の移動性の目標を示し、「ここ」、「こなた」を受けず、「来」、「来たる」にもかからなかった(青木 1956, pp. 110-113)。また、この時期には距離的に遠い場合だけではなく、「壱岐の島」から「新羅」の方が「壱岐の島」から「家」よりも距離的に近いにも関わらず、心理的に遠く感じられる「新羅」に「へ」が、「家」に「に」が用いられた短歌もあるように、「へ」と「に」の区別は心理的にも明確であったという(青木 1956, p. 110)。つまり、「移動性動作の目標を示し、言語主体の現在地点から遠く離れた地点へと向ってゆく、の意を担ってゐる」(青木 1956, p. 116)。院政期(1086 年～)は「ここ」、「こなた」をうけ、「来」、「来たる」にもかかるようになって進み近づく場合をも含めて「すべての移動性動作の目標」(p. 116)を示すことが可能となった(青木 1956, pp. 113-116)。

鎌倉時代(1192 年～1333 年)の初期には「着く」にもかかるようになり移動動作そのものではなく、それを前提とした「到着点」を示す用法が現れ、鎌倉時代の中期には「申す」などにもかかり「移動性を全くもたぬ動作に対しての目標」を示すに至る(青木 1956, p. 116)。以上次々と用法が発展し拡大したものの、すべて動作の目標を示すという点において一貫していたが、室町時代には、「他所へ移し植う」のように「動作の行はれる場所」を示す用法が現れた(青木 1956, p. 116)。「へ」と「に」の境界は次第にあいまいになっていったが(p. 216)、現在では、「へ」は動作の目標・対象あるいは到達点などを示すような動きのある動作・作用の場合に用いられ、「に」の広範な用法の中に含まれている(田中 1977, pp. 373-374)。そのため、本研究においては格助詞「へ」を格助詞「に」に含み、考察する。日本語学習者が「に」を習得するということは、「へ」に代えられない用法と「へ」に代えられる用法を習得しなければならないということである。

「で」は、奈良時代および平安時代中期まではなかった助詞であり、「にて」から生じたものである(橋本 1969, p. 163)。「にて」は、格助詞「に」に、接続助詞「て」のついたもので、奈良時代から見られるがあまり多くは用いられず、むしろ「にして」の方が多く用いられたという(橋本 1969, p. 163)。「にて」が古くからあったか否かは疑問であり、「にして」から転化して出て来たものではないかと述べられている(橋本 1969, p.

163)。院政時代から(1086年～)口語では「にて」を「で」ということがあったのであろうが、鎌倉時代(1192年～1333年頃)では次第に多く用いるようになったのであろうと述べられている(橋本 1969, p. 166)。「で」が「にて」に代わって用いられるようになったのは室町時代(1392年～1573年頃)であり、その半ば以降には口語ではもっぱら「で」が用いられ、その用法もほぼ今日のようになった(橋本 1969, p. 166)。「この丘になつます子」の「に」は今では「で」を用いるが、動作の行われる場所を指したものである(橋本 1969, p. 122)。「にて」は、西田(1977, p. 222)においても、格助詞に接続助詞が直接つくのは異例であり、奈良時代に多く用いられた[格助詞「に」+サ変連用形「し」+接続助詞「て」]という成り立ちの「にして」と用法がほぼ同じなので、この「にして」の省略形であることが考えられると述べられている。動作主を表す「で」(「奉行所でいうには」(p. 17))、原因を表す「で」(「大雨で川の水が増す」(p. 17))および限定を表す「で」(「日本で一番良い所だ」(p. 17))は、間淵(2000)によると、中世(室町時代頃)にはあまり見られず、近世(江戸時代 1603年～1867年頃)以降に発達した。すなわち、「で」は「に」から発展してきたということである。

「を」は、もともと間投助詞「を」と同じものであろうと考えられ、「舟わたせを」(p. 113)や「ぬれてを行かむ」(p. 113)のように、ただ感動的な意味を表したもので、どのような語にもつけて用いられたものである(橋本 1969)。そのため、「妹まつ」(p. 117)や「山越えて」(p. 117)のように、格助詞「を」の表すような関係は特別な助詞を必要としなかったという(橋本 1969)。奈良時代においても、「を」をつけないのが基本であり、特にその関係を強く、または明らかに表す時に限って加えられたものであろうと考えられるという(橋本 1969, pp. 113-117)。平安時代以後、次第に時代が下ると共に、これを用いることが徐々に多くなり、同時に「客語」(p. 118)以外の場合に用いることが徐々に少なくなって、今日では「客語」(p. 118)には一般に「を」を用いるようになったことが考えられるという(橋本 1969)。「客語」(p. 109)というのは、「用言が、動作(活動)をあらはし、その動作が他のものに到り及んで、之を左右する場合に、その動作を直接に受けるものをあらはすことばである。他動の對者をいふのである」(橋本 1969, p. 109)。現代語では、「年ごろを住みし所」(p. 338)や「いをね(寝ること)」(p. 338)、「香をにほふ(香を匂う)」(p. 338)のような表現はない(松尾 1969)。現代語ならば「に」を用いるべきところであるが「かぐや姫を逢はむ」(p. 339)や「大宮を仕え奉れば」(p. 339)のように古代語では「を」が用いられていたものもある(松尾 1969)。すなわち、「に」の代わりに「を」が用いられていたものがあるということである。

まとめ

格助詞「に」、「へ」、「で」、「を」の歴史的変遷を以下のようにまとめた。

・奈良時代(710 年～794 年頃)に用いられていたのは格助詞「に」と「へ」の用法であった(西田 1977)。但し、「へ」は「移動性動作の目標を示し、言語主体の現在地点から遠く離れた地点へと向ってゆく、の意を担ってゐる」(青木 1956, p. 116)。「を」は、つけないのが基本であった(橋本 1969, pp. 113-117)。「で」は見られず、「にて」は見られるがあまり多くは用いられず、むしろ「にして」の方が多く用いられた(橋本 1969, p. 163)。

・平安時代中期以前(1000 年頃¹⁵)までは、「へ」と「に」の区別は心理的にも明確であった(青木 1956, p. 110)。平安時代以後、次第に時代が下ると共に「を」が用いられるようになる(橋本 1969, p. 118)。

・院政時代から(1086 年～)口語では「にて」を「で」ということがあったと推測される(橋本 1969, p. 166)。「へ」は「すべての移動性動作の目標」(p. 116)を示すことが可能となった(青木 1956, pp. 113-116)。「へ」と「に」の境界は次第にあいまいになっていった(田中 1977, p. 216)。

・鎌倉時代(1192 年～1333 年頃)には「で」が次第に多く用いるようになったと推測される(橋本 1969, p. 166)。鎌倉時代の初期には「へ」は移動動作を前提とした「到着点」を示す用法が現れ、鎌倉時代の中期には「移動性を全くもたぬ動作に対しての目標」を示すに至る(青木 1956, p. 116)。

・室町時代(1392 年～1573 年頃)に「で」が「にて」に代わって用いられるようになる(橋本 1969, p. 166)。「へ」は「動作の行はれる場所」を示す用法が現れる(青木 1956, p. 116)。

・江戸時代以降(1603 年～1867 年)に動作主を表す「で」(「奉行所でいうには」(間淵 2000, p. 17))、原因を表す「で」(「大雨で川の水が増す」(間淵 2000, p. 17))および限定を表す「で」(「日本で一番良い所だ(間淵 2000, p. 17)」)が発達した。

・現在では、「へ」は動作の目標・対象あるいは到達点などを示すような動きのある動作・作用の場合に用いられ、「に」の用法の中に含まれている(田中 1977, pp. 373-374)。

¹⁵ 青木(1956)では平安時代中期以前が平安時代のいつ頃を指すのかは明確ではないが、源氏物語の例が挙げられている。源氏物語は 11 世紀初めに成立した(『角川必携国語辞典』, p. 418)

そのため、本研究においても「へ」の用法を「に」の用法に含み考察する。

2.1.2 伝統的な日本語文法としての格助詞「に」、「で」、「を」の分析

格助詞とは、山田(1908, p. 552)が名付けたもので「格」は西洋語の case の訳語である。山田(1908)は、これまで「てにをは」と呼ばれてきた助詞を文中において助詞がどのような機能を持っているかという働きによって下位分類し、その1つを格助詞と呼んだ。山田(1922)によると、格助詞とは「體言又は副詞に附属してそれが他の語に對して有する一定の關係を示すもの」(p. 143)である。

橋本(1969, p. 48)は、例えば「机」のような独立詞に伴って現れる「に」のような付属辞がついた「机に」という文節が、切れた感じがあるか、それとも続く感じがあるか、そして続くにはどのような種類の言葉に続くかということと、どのような種類の語に付属して分節を作るかということの二つを判断のよりどころとして助詞を分類した。その1つが格助詞である。助詞の分類の判断基準は、助詞を文中において助詞がどのような機能を持っているかという働きによって下位分類した山田(1908)とは異なるが、格助詞の用例の示し方は山田(1908, 1922)と同じであり、橋本(1969)もどのような種類の関係を表すかという観点から用例を分けて示している。橋本(1969)によると、格助詞とは「つゞく助詞で、體言又は之と同資格のことばのみつく。さうして、その體言が、どんな関係で、他のことばにつゞくかを區別して示すもの」(p. 54)である。橋本(1969, pp. 48-49)は、例えば「花」は体言であって、それ自身としては文が切れたり、他の体言や用言に続いたりといったことに関係しない語であるが、「花を」、「花の」、「花に」というように助詞を伴えば、必ず体言や用言などに続く文節となり、続くのは「てにをは」の力であるとして、このような点から助詞を観察している。

2.1.2.1 格助詞「に」の研究

伝統的な日本語文法としての格助詞「に」の研究は、2.1.2 で述べたように文中の名詞と動詞がどのような関係を示すかという観点によって論じられている。以下、山田(1908, 1922)、橋本(1969)を中心に西田(1977)、田中(1977)、佐久間(1983)を示す。

山田(1908, 1922)

格助詞「に」は、山田(1922)によると、体言に付属してそれが「静的目標」(p. 147)であることを示し、また副詞などに付属して用言の修飾格に立つことを明らかにするものであるという。「静的目標」(p. 147)とは、「を」の「動的目標」(p. 147)に対するものである。「を」のところでも述べるが、「を」の「動的目標」(p. 147)とは、動詞に対してその作用の影響を被る目標を示すものであり、その目標が作用を受けているか、そうでなければその「目標によって進み動く」(p. 147)ことを示すため「動的目標」(p. 147)

という一語によって表された(山田 1922)。「に」について静的あるいは静止的という表現が用いられているものには、此島(1966)、大野(1977)、佐久間(1983)などもある。

山田(1922, p. 148)は、格助詞「に」を2つに分けている。1つは、体言に付属する場合は下に動詞が来る場合のものが多く、また他の用言または体言が来ることもあると述べ、「甲」「乙」「丙」「丁」に分けて用例を示しており、もう1つは、「ありのままにいふ」や「美事に出来る」のような「副詞その他用言に対して修飾の地位に立つものに付属する場合」の用例を示している。

「甲」は、「動詞に対しての目標」として、(イ)～(チ)に分けて用例が示されている。(イ)は、「子が親に似る」のように「その動作作用の出自又は歸著する目標を示す」ものの、(ロ)は「母が子に泣かれる」のように「歸著する目標を示す」ものの、(ハ)は「教師が生徒に課業を受けさせる」のように「使役作用の歸着する目標を示す」ものの、(ニ)は「腹の痛いのに苦しむ」のように「動作作用の原因を示す」ものの、(ホ)は「病氣になる」のように「動作作用の結果を示す」ものの、(ヘ)「花見に出かける」のように「動作の目標を示す」もので「この場合には主として動詞の連用形を体言に準じたものにつく」ものであり、(ト)は「午後六時に神戸を立つた」のように「動作作用の存在又は行われる時を示す」ものの、そして、「東京に住む」のように「動作作用の存在又は落ち着く場所を示す」ものである。

「乙」は、「形容詞に対しての目標」として(イ)～(ハ)に分けて用例が示されている。(イ)は「山に近い」のように「場所を示す」ものの、(ロ)は「その顔は狐に近い」のように「対比の目標を示す」ものの、(ハ)は「甲は乙に等しい」のように「類同の目標を示す」ものである。

「丙」は、「存在詞に対しての目標」として(イ)と(ロ)が示されている。(イ)は「富士山は駿河國にある」のように「存在の場所を示す」ものの、(ロ)は「午前九時に卒業式があった」のように「存在の時を示す」ものである。そして、(丁)は「月に叢雲」のように「他の體言に對してある事物に他の事物の添はることを示す」ものが示されている。

この内、場所を表す「に」の用例は、「甲」の「動詞に対しての目標」の「その動作作用の出自又は歸著する目標を示す」ものとして「机に本をのせる」が挙げられており、「動作作用の存在又は落ち着く場所を示す」ものとして「東京に住む」と「三所に幕を張った」が挙げられている(山田 1922, pp. 148-149)。但し、「三所に幕を張った」(山田 1922)の「三所に」は「三カ所」の意味を表す名詞なのか、「三所」という地名を表す名詞なのかは明らかではない。ちなみに「机に本をのせる」は、場所を表す「に」ではない用例と共に、以下のように示されている(山田 1922 では縦書きである)。

甲、動詞に対しての目標

(イ)その動作作用の出自又は歸著する目標を示す。

子が親に [○] 似る。	牛は馬に [○] まさる。
人に物をやる。	机に [○] 本をのせる。
人に [○] 別れる。	教師に [○] 御時宜をする。

(山田 1922, p. 148 の横書きを改変し、抜粋)

「乙」の「形容詞に対しての目標」の「場所を示すもの」には、「山に近い」、「海に遠い」という用例が挙げられ、「丙」の「存在詞に対しての目標」の「存在の場所を示すもの」には、「富士山は駿河國にある」という用例が挙げられている(山田 1922, pp. 149-150)。

橋本(1969)

「に」は、「現代の標準語に於ては、用言又は同資格のものにつづくのが最普通の用法である。即連用的用法が最多い。其他體言につづくものは並立助詞となつてゐる」(p. 119)と述べられ、次の8つに分けて示されている。(一)、「馬に乗る」(p. 119)のように「用言のあらはす動作作用の到着し歸着する所のものを示す」(p. 119)もの、(二)、「友だちに聞いた」(p. 119)のように「用言の示す動作作用が行はれるについて、主語に対して相手となるものを示す」(p. 119)もの、(三)、「親に似てゐる」(p. 119)のように「用言のあらはす動作作用の行はれる土臺又は比較の標準を示す」(p. 119)もの、(四)、「お前にさう泣かれてはこまる」(p. 119)のように「用言が或動作をせられ、又はさせる事を示す場合に、その動作をするものを示す」(p. 119)もの、(五)、「お祝いのしるしに差し上げます」(p. 119)のように「用言のあらはす動作の、目的を示す」(p. 119)もの、(六)、「借金にこまつてゐる」(p. 119)のように「用言のあらはす動作作用又は状態を起す原因となるものを示す」(p. 119)もの、(七)、「心におもふ」(p. 119)のように「用言のあらはす動作の行はれ又は状態の存在する場所又は時を示す」(p. 119)ものである。(八)は、「明かに知る」(p. 119)のように「副詞の資格與へる」(p. 119)ものだが、「これは、むしろ、接尾辞として取り扱った方がよからう」(p. 119)とされている。また、「酒にびーるにさいだあがあります」(p. 119)のような並列助詞であるとされ、「體言につづくものは、對等の關係をあらはす」(p. 119)ものも示されている。

橋本(1969)においても、山田(1922)と同様に、場所を表す「に」は、(一)の「用言のあらはす動作作用の到着し歸着する所のものを示す」(p. 119)用例として、「馬にのる」と「溝にはまる」(p. 119)が、「五十錢にまけた」や「箱入娘に蟲がつく」(p. 119)などのように場所を表す「に」ではない用例と共に示されているものがある。(七)の「用言のあらはす動作の行はれ又は状態の存在する場所又は時を示す」(p. 119)には、「心におもう」、「部屋に居る」、「机の上にある」、「胸におぼえがある」(p. 119)が示されている。

西田(1977)

西田(1977, pp. 205-206)は、2.1.1 で述べたように、文中の体言と用言との関係は、動作・作用・状態を表す用言に対して、体言がその主体であるかその目的物であるか、その動作・作用の行われる場所・時間・手段・方法・材料などを表すものであるかの三種に大別されると述べている。体言が用言の叙述内容に対して、場所・時間・手段・方法・材料などを用言に先行して示す場合は、その用言を補助的に修飾しているのであって、その体言は用言に補格に立つ(p. 206)。「に」は補格助詞である。補格助詞は、下にくる用言の補助的關係に立つもので、体言と用言を緊密に結合させるために助詞が常に顕示される(p. 206)。「に」は、動作、作用の生起するところを示す語で、多くの用法があると述べられている(p. 213)。場所を表す「に」は、成立する場所を指定する用法(「この丘に菜摘ます兒」)、動作の帰着する場所・目標を示す用法(「行き行きて駿河の国にいたりぬ」)が示されている。

田中(1977)

田中(1977)は、「ニ」の特性が、「岬ニ燈台がある」「牧場ニ牛がいる」「心ニわだかまりが残る」のように事物・作用・状態について、その存在の場を示す点にあると述べている(p. 396)。そして、そこから、行為や動作の発動に伴って、その場に関係するもろもろの事象を示す機能を持つに至る(p. 369)。例えば、「子供ニ留守番を頼む」、「汽車ニ乗る」、「隣の娘ニ思いをかける」、「妹ニ看病をさせる」、「応援ニ来た」「人ニだまされる」のように、動作の向けられる対象、行為の目指す目的、あるいは作用の出所といったものがそれであり、こうしたものを導いてきて、「ニ」は行為・動作の表現を支える(p. 369)。これは、また、移動性ないしは経過性の動作・作用の場合も同じであり、そうした動作・作用の場を構成する諸要素、すなわち、「源をアルプスニ発する清流」、「無人島ニたどりつく」、「新学期は四月ニ始まる」、「知らないうちニ出航していた」、「決勝ニ勝ち進む」、「液体から気体ニ変わる」のように起点・帰着点あるいは、時期・期間・機会・成りゆき・結果などを示す(p. 369)。このように見てくると、「ニ」は、結局、行為・動作・作用の、いわば道具立てを整えるものであり、この種の機能をもつ句は、一般に、間接目的あるいは補語などとも呼ばれると述べている(p. 370)。

佐久間(1983)

佐久間(1983)は、「に」の用法は、「学校は神田にある」(p. 148)や「毎朝六時にちゃんと起きるよ」(p. 148)のような「時所的定位」(p. 148)のような定位の仕方が、まず本来の「に」の使命だと考えられるとしている(p. 149)。時所的定位のような定位とは、動作そのものの営まれる場合なり時なりに関しているもので、動作から遊離しておらず、いわば動作を裏付けるものであるという(p. 149)。「時所的定位」(p. 148)には、「空間的

な定位」(p. 148)と「時間的定位」(p. 149)がある。「空間的な定位」(p. 148)と「時所的定位」(p. 149)という表記は佐久間(1983)の表記の通りである。「定位」についての説明はないが以下のように理解される。「空間的な定位」とは「柿ならまだ木にたくさんなっている」や「すゑ風呂のわきにしやがんで水を呼び」のような(一)の「ありか・居どころ・動作の場所」(p. 148)を示すものである。これは存在および動作を言い表す動詞に伴われる(p. 148)「に」である。「時所的定位」(p. 149)とは「昭和元年一月一日に生まれた」のような「事の起り、續き、終わることをいう場合」(p. 149)の「に」である。つまり、「定位」とは「ありか・居どころ・動作の場所」(p. 148)であり、「事の起り、續き、終わることをいう場合」(p. 149)および、「定着点・動作のおちつく場所」(p. 145)を言う。

まとめ

以上のことから格助詞「に」は以下のようにまとめられる。格助詞「に」は、体言に付属してそれが静的目標であることを示すが、静的目標とは、「を」の動的目標に対するものである(山田 1922)。場所を表す「に」には、動詞に対してはその動作作用の出自または帰着する目標を示すもの、動作作用の存在または落ち着く場所を示すもの、形容詞に対する目標の場所を示すもの、存在詞に対する存在の場所を示すものがある(山田 1922)。その中でも、動詞に対しその動作作用の出自又は帰着する目標を示すものは、場所を表す「に」の用例が、場所を表す「に」ではない用例と共に示されている(山田 1922)。それは橋本(1969)においても同様に、用言の表す動作作用の到着し帰着する所のものを示すものには、場所を表す「に」ではない用例と共に場所を表す「に」の用例が示されていた。「に」は補格助詞であり(西田 1977)、「ニ」は、行為・動作・作用の、いわば道具立てを整えるものであり、間接目的あるいは補語などとも呼ばれる(田中 1977)。「に」の用法は、時所的定位のような定位の仕方がまず本来の「に」の使命であり、動作を裏付けるものである(佐久間 1983)。

2.1.2.2 格助詞「で」の研究

伝統的な日本語文法としての格助詞「で」の研究は、山田(1908、1922)、橋本(1969)を中心に田中(1977)、佐久間(1983)を示す。

山田(1922)

格助詞「で」は、山田(1922, pp. 157-158)によると、動詞に対してはその作用の行われる場所または時、あるいは、その作用の方便、材料、原因、由縁などを示し、説明存在詞(「である」の「ある」)およびこれに準ずるもの(「ござる」)に対しては、「陳述の賓位を示すもの」(p. 158)である。「陳述の賓位を示すもの」(p. 158)とは、山田(1922, p. 158)によれば「文学は人生の縮図である」や「男でござる」(p. 158)のように、説明存

在詞およびこれに準ずるものを伴って用いられる「で」である。動詞に対してその作用の行われる場所または時を示すものの例には、「東京で売捌く」「後で御話しいたしませう」(p. 157)などが挙げられている。動詞に対してその作用の行われる方便、材料を示すものの例には、「筆で書く」「汽車で行く」(p. 157)など、動詞に対してその作用の原因由縁を示すものの例には、「病氣で死んだ」「雨でぬれた」(p. 157)などが挙げられている。

すなわち、場所を表す「で」とは動詞に対してその作用の行われる場所のことであり、動詞と共に用いられ場所を表す名詞に後接する。場所を表す「で」が場所を表す「に」と違う点は、場所を表す「で」が、「東京で売捌く」のように動詞に対してその作用の行われる場所を示すのに対し、場所を表す「に」が、「机に本をのせる」のように動詞に対し動詞の動作作用の帰着する目標を示すこと、「三所に幕を張った」のように動作作用の存在または落ち着く場所を示すこと、「山に近い」のように形容詞に対し場所を示すこと、「富士山は駿河國にある」のように存在詞に対し存在の場所を示すことである(山田 1922, pp. 148-150)。

橋本(1969)

格助詞としての「で」は用言につづくのが常で次の如く用いられるとして以下の3つが示されている(p. 162)。1つ目は動作作用の行われる場所または時を表すもので「途中で出會った」「病院で生まれた」「あとで御話しませう」(p. 162)が用例として挙げられている。2つ目はある動作をする手段、材料などを示すもので「小刀で手をきる」「筆で字をかく」「紙でかべをはる」(p. 162)という用例、3つ目は動作の行われる原因や理由などを示すもので「病氣で死んだ」「御かげで、たすかりました」「試験でいそがしい」(p. 162)という用例が挙げられている。山田(1922, p. 158)の「陳述の賓位を示す」という「で」は示されていない。

場所を表す「で」は、「病院で生まれた」のように動作作用の行われる場所を表す。それに対し、場所を表す「に」は、「馬にのる」のように用言の表す動作作用の到着し帰着する所のものを示すもの、「心におもふ」や「部屋に居る」のように用言の表す動作の行われ、または状態の存在する場所を示すものである点が異なっている。

田中(1977)

田中(1977, p. 374)は、「デ」は、動作・作用の道具立て、背景を整え、その表現を支える助詞群であると述べている。これは、格助詞「に」のところで述べた、行為・動作・作用の道具立てを整えるものである「ニ」(田中 1977, p. 370)と同じである。「デ」は、「式は、体育館で行きます」や「三年で卒業する」のように動作・作用の場や、時・期間・期限などを示す(p. 374)。動作の場を示す「デ」につながるものとして、「こんな状態で勉強なんかできない」や「暗い気分で帰って来た」のように動作の行われる際の状

態・雰囲気・態度などを示す用法がある(pp. 374-375)。「デ」にはまた「右手デなぐる」や「酒は米デつくられる」のように手段・道具・材料など行為を成り立たせる要素を示す用法もあり、この用法から、「殺人罪デつかまる」「憲法デ保証された権利」、「最低点デ合格した」のように原因・理由・同期・論拠あるいは基準などを示す用法が出て来たと述べられている。「夜空が火の粉デ赤い」や「ホールが人デーばいだ」のように形容詞・形容動詞にもかかりうるものもある。

佐久間(1983)

佐久間(1983)では、山田(1922, p. 158)の「陳述の賓位を示すもの」とされた「文学は人生の縮図である」や「男でござる」(p. 158)のような「で」は、格助詞「で」の中には入らないとされている。佐久間(1983, pp. 188-189)によると、「これは熊の皮である」のような「である」は、「で」が「ある」という用言に続いているのではなく、「です」と同様に「だ」に相当する語であり「ある」を取り出してもそれだけでは無意味なものであるという。そのため、この「で」を格助詞の中へ入れるのが無理だと述べられている。「陳述の賓位を示す」(山田 1922, p. 158)「で」は、橋本(1969)においても格助詞「で」として示されておらず、次の田中(1977)にも示されていない。したがって、本研究でも格助詞「で」の用法に含めないこととする。

まとめ

以上のことから格助詞「で」は以下のようにまとめられる。動詞に対してはその作用の行われる場所または時、あるいは、その作用の方便、材料、原因、由縁などを示すもの(山田(1922, pp. 157-158)である。形容詞・形容動詞にかかるものもある。「で」は、動作・作用の道具立て、背景を整え、その表現を支える助詞群であり、「に」が行為・動作・作用の道具立てを整えるものであるのと同じである(田中 1977, p. 370)。「で」も「に」と同じく補格であり、場所・時間・手段・方法・材料などを用言に先行して示し、その用言を補助的に修飾しているものである(西田 1977, pp. 205-206)。場所を表す「で」は、動詞に対してその作用の行われる場所であるが、場所を表す「に」のように、動詞に対し動詞の動作作用の帰着する目標、動作作用の存在または落ち着く場所、形容詞に対する場所、存在詞に対する存在の場所を示すものではない(山田 1922, pp. 148-150)。

2.1.2.3 格助詞「を」の研究

伝統的な日本語文法としての格助詞「を」の研究についても格助詞「で」の研究と同じように、山田(1908、1922)、橋本(1969)を中心に田中(1977)、佐久間(1983)を示す。

山田(1922)

「を」は、山田(1922, p. 147)によると、「に」のところで述べたが、動詞に対してそ

の作用の影響を被る目標を示すものであり、その目標が作用を受けているか(「本を読む」)、そうでなければその「目標によって進み動く」(p. 147)ものであるから(「道を歩く」)、動的目标という一語でよくその意を表すことが出来るものであるという。場所を表す「を」は、山田(1922, p. 147)では、「自己が移動する作用に対してその行われる地点を示すものである」(p. 147)として、「路をあるく」、「門をすぎる」、「空を飛ぶ」、「國を去る」、「家を出る」という用例が1つにまとめて挙げられている。

場所を表す「を」が場所を表す「に」と違う点は、「を」が動的目标であるのに対し、「に」が静的目標であることである。すなわち、「を」が自身の移動する作用に対してその行われる地点を示すものであるのに対し(山田 1922, p. 147)、「に」が動詞に対し動詞の動作作用の帰着する目標を示し、動作作用の存在または落ち着く場所を示すことである(山田 1922, pp. 148-150)。「に」が形容詞に対し場所や存在詞に対し存在の場所を示すが(山田 1922, pp. 148-150)、「を」にはそのような用法がない点も異なる。場所を表す「を」が場所を表す「で」と違う点は、「で」が、動詞に対してその作用の行われる場所を示すのに対し(山田 1922, p. 162)、「を」が自身の移動する作用に対してその行われる地点を示すものである点である(山田 1922, p. 147)。

橋本(1969)

「を」は、橋本(1969)によると、常に用言につづきその用言に対する客語を示すという(「花を折る」)。客語というのは2.1.1でも示したが、橋本(1969, p. 109)によると、用言が動作や活動を表し、その動作が他のものに到り及んでこれを左右する場合に、その動作を直接に受けているものを表す言葉である。「花を折る」や「書をよむ」などが用例として挙げられている(橋本 1969, p. 109)。また、「道を通る」や「山をこえる」のように用言が経過する意味をもっている時、その経過する所を表す(橋本 1969, p. 109)。また、「家を離れる」、「國を出る」のように用言が離れるまたは去る意味を有する時、その離れる起点を表す(橋本 1969, p. 110)。場所を表す「を」の用例は、山田(1922)では1つにまとめて示されていたが、橋本(1969, pp. 109-110)では2つに分けて示されている。

田中(1977)

田中(1977, p. 368)は、場所を表す「を」について「から」および「で」の用例と比べている。「ヲ」は、「船が港ヲ出る」や「とんびが空ヲ舞う」のように移動性ないしは経過性の動作・作用について、その起点・場面などを示す(田中 1977, p. 368)。この内、動作の起点は「船が岸壁カラ離れる」と「船が岸壁ヲ離れる」、行為の場面は「粉雪が空デ舞う」と「粉雪が空ヲ舞う」という用例を挙げ、「カラ」「デ」は、それぞれ純粹に「起点」なり「場面」なりを示すものであるのに対し、「ヲ」の場合は、動作との結び付きの強い、動作中心の表現だと考えられると述べている(田中 1977, p. 368)。「米洗ふ

前ヲ(ニ・ヘ)蛸が二つ三つ」(p. 368)の句が「ヲ」の動作性の説明に用いられるのは、一つには、「ニ」や「ヘ」が、単に、動作の帰着点や方向を示すのに対して、「ヲ」が、行為の行われる場面を示す機能を持っているため、最も、ホタルの動きが生き生きと表現されるからであると解説している(田中 1977, pp. 368-369)。

まとめ

以上のことから格助詞「を」は以下のようにまとめられる。動詞に対してその作用の影響を被る目標を示すものであり、動的目标という一語でよくその意を表すことが出来るものである(山田 1922, p. 147)。場所を表す「を」は、用言が経過する意味をもっている時、その経由する所を表し、用言が離れるまたは去る意味を有する時、その離れる起点を表す(橋本 1969, p. 110)。場所を表す「から」や「で」がそれぞれ純粹に起点や場面を示すのに対し、場所を表す「を」は、動作との結びつきの強い、動作中心の表現であり(田中 1977, p. 368)、また、「に」や「へ」が単に、動作の帰着点や方向を示すのに対して、「を」が行為の行われる場面を示す機能を持っている(田中 1977, pp. 368-369)。

2.1.2.4 伝統的な日本語文法としての格助詞研究「に」、「で」、「を」のまとめ

以上のことから、伝統的な日本語文法としての格助詞「に」、「で」、「を」の研究は、格助詞が文中の名詞と動詞の関係において論じられていることを示した。中国語を母語とする日本語学習者にとって場所を表す「に」と「で」の使用は頭を痛める問題であると言われるため(顧 1983)、場所を表す「に」を理解するためには場所を表す「で」との違いを認識しなければならない。ところが、山田(1922)をはじめとして伝統的な日本語文法としての格助詞の研究では、格助詞「に」は、格助詞「で」との比較において論じられているのではなく、格助詞「を」との比較において論じられていた。特に、山田(1922)では「に」は静的目標であり、それは「を」の動的目标に対するものであることが述べられていた(山田 1922)。

「に」と「で」は、西田(1977)では「で」も「に」と同じく補格であり、場所・時間・手段・方法・材料などを用言に先行して示し、その用言を補助的に修飾しているものであると述べられていた(pp. 205-206)。格助詞「に」が格助詞「で」との違いにあまり焦点が当てられなかったのは、格助詞「で」が奈良時代および平安時代中期まではなかった助詞であり、「にて」から生じたものである(橋本 1969, p. 163)ためであると思われる。その後、チョムスキーの生成文法およびフィルモアの格文法の影響を受けた格助詞の研究では、「に」と「で」の違いが明確に示される研究が見られるようになる。

2.1.3 生成文法および格文法の影響を受けた格助詞「に」、「で」、「を」の分析

山田(1922) および橋本(1969)などの研究では、格助詞を文中の名詞と動詞の関係において用例を挙げながら論じられていた。それに対し、生成文法および格文法の影響を受けた格助詞の研究では、寺村(1982)などをはじめとしてどのような動詞がどのような場所を表す名詞句と共に用いられるかという点に焦点が当てられている。生成文法および格文法とはどのようなものかを示した後、それらの影響を受けた格助詞の研究を示す。

2.1.3.1 生成文法とは

生成文法とは 1950 年代の半ばにチョムスキーによって創始された言語理論である。チョムスキー(1970)の生成文法とは、「明示的な、そして、明確的に定義された、何らかの方式に従って、文に構造記述を付与する規則の体系」(p. 9)である。規則の体系は、「統語、音形、そして意味の生成文法の三つの主要部門」(チョムスキー1970, p. 18)に分けることができるという。チョムスキー(1970)によると、文法の「統語部門」(p. 19)は文について意味解釈を決定する「深層構造」(p. 19)と、音声解釈を決定する「表面構造」(p. 19)がある。表面構造は、『文法変形』と呼ばれる、ある形式的操作が、もっと基本的な対象物に反復適用されることによって、決定されるものである」という(チョムスキー1970, p. 19)。つまり、文には深層構造のレベルと表面構造のレベルがあり、その間で文法変形という操作が行われるということである。

チョムスキー(1970)の文法変形の操作は「枝分かれ図」(p. 97)を用いて示す。チョムスキー(1970)によると、枝分かれ図は平面ではなく階層を成しており、名詞を「N」、名詞句を「NP」、動詞句を「VP」、動詞を「V」と表し、名詞や動詞という範疇を表す記号の情報を含んでいる。さらに、範疇記号の「V」が他動詞的であって良いのか否かなどを決定する「下位範ちゅう化規則」もある(チョムスキー1970, p. 105)。チョムスキー(1970, pp. 118-120)は、動詞・前置詞句の構文において、動詞とそれに伴う前置詞句との間に、さまざまな度合の結合を区別することができ、「he worked at the office」(彼は事務所で働いた)のように明らかに一方では時間と場所の副詞的語句が種々の型の動詞と共に自由に生じ得るのに対し、「he worked at the job」(彼はその仕事に従事した)のように他方では多くの型の前置詞句が動詞と密接な構造を成して現れるという所見から、動詞は、時間や場所の副詞的語句が全述部句と結びついており下位範ちゅう化されないとし、多くの型の前置詞句に関しては下位範ちゅう化されるとしている。

奥津(1974, p. 3)は、チョムスキー(1970)が文に深層構造のレベルと表面構造のレベルの2つのレベルを認め、その間に「変形規則」(p. 3)を存在させたことが生成文法の基本的な特色の1つであると述べている。奥津(1974, p. 3)は、深層構造は現実の発話とは異なるものであるが、表面構造と結びつけて体系的な言語記述をするためには、深層から表層(表面)への変形の操作が必要になると述べ、日本語による例を示している。奥

津(1974, p. 4)によると、「私は水が飲みたい」という表層文は例えば「橋本文法」(p. 4)では「私ハ」「水ガ」「飲ミタイ」という3つの文節から成る「単文構造」(p. 4)として記述されるが、生成文法の立場では、その深層構造が「私ガ 水ヲ 飲ム」という補文が「私ガ S タイ」という主文の S のところに埋め込まれていて「述語補文構造」(p. 4)になっており、「橋本文法」(p. 4)では「タイ」は助動詞として、動詞の「飲ム」に従属して1文節を成すのに対し、生成文法の立場では、「飲ム」はまず「私」という主語、「水」という目的語と統合して補文を成すというような深層構造を立てるのが良いと述べられている。奥津(1974, pp. 4-7)は、このような「私ガ 水ヲ 飲ム」という補文が「私ガ S タイ」という主文の S のところに埋め込まれていて「述語補文構造」であるという深層構造は、いくつかの変形操作を経て「私は水が飲みたい」という表層文となるとしている。

2.1.3.2 格文法とは

フィルモア(1975)の格文法では、チョムスキー(1970)の深層構造に動詞が挿入される「格枠」(p. 78)という「格の特定な配列」(p. 79)が仮定されている。フィルモア(1975, p. 73)によると、文の「基底構造」(p. 73)が一つの動詞と一つまたはそれ以上の名詞句から成り立っており、動詞と結びついた個々の名詞句は特定の格関係に立つという。これは時制のない一組の関係から成る「命題」(P)と呼ばれるもので、その関係は動詞と名詞(および、もしあれば、埋め込まれた文)を含んでいるとされる(フィルモア 1975, p. 73)。「命題」(P)は、「 $S \rightarrow M + P$ 」(文 \rightarrow 法+命題)に示されているように、「否定(negation)」、「時制(tense)」、「叙法(mood)」、「相(aspect)」のような文全体にかかる「法」(M)構成素と呼ばれるものとは分離しているという(フィルモア 1975, p. 75)。

フィルモア(1975)の「格概念」(p. 76)とは「身のまわりで起こっている出来事について人間がくだすことができる判断、すなわち、出来事を誰が起こしたか、誰に起こったか、何が変化を受けたかというような事柄に対する判断の一定の型を表す、普遍的で、おそらく生得的な概念の集合から成る」(p. 76)ものであり、必要な格は以下の格が挙げられている。動作主格(Agentive, 略して A)(動詞の表す動作を引き起こす典型的に有生と認められる者を示す格)、道具格(Instrumental, 略して I)(動詞の表す動作や状態に偶然かかわる無生の力や事物を示す格)、与格(Dative, 略して D)(動詞の表す状態や動作の影響を受ける生物を示す格)、作為格(Factitive, 略して F)(動詞の表す行為や状態から結果的に生じる事物や存在を示す格)、場所格(Locative, 略して L)(動詞の表す状態や動作の場所もしくは空間上の方向づけを示す格)そして、対象格(Objective, 略して O)(動詞の表す動作や状態における役割が動詞自体の意味解釈によって認定されるような名詞が表しうるすべてを示す格)である(フィルモア 1975, pp. 76-77)。

格枠は、例えば、動詞「run」は[A]という枠に挿入され、「remove」や「open」などの動詞は[O+A]に挿入される(フィルモア 1975, p. 79)。動詞によっては、二つ以上

の異なる格環境で起こり得るものも多いという(フィルモア 1975, p. 79)。例えば、「open」という語が「The door opened」(戸が開いた)では[___O]で起こり得るが、「John opened the door」(ジョンは戸を開けた)では[___O+A]で、「The wind opened the door」(風で戸が開いた)では[___O+I]で、「John opened the door with a chisel」(ジョンはノミで戸を開けた)では[___O+I+A]で起こり得るとされる(フィルモア 1975, p. 79)。「open」のような動詞の「枠素性」(p. 79)を表示するには、「任意的な」(p. 79)要素を示すための()を用いて「+[___O(I)(A)]とすれば良いとされ、これと同じ素性を持つ他の動詞は、「turn, move, rotate, bend」などがあると述べられている(フィルモア 1975, p. 79)。

日本語の例では、井上(1989)において「開く」：+[___O(I)(A)]が示され、これは動詞や形容詞などの述語がどのような格をいくつ取るかを示す格の枠であると解説されている。井上(1989)は、「定刻に扉が開いた」と「定刻に係りが扉を開いた」に見られる自動詞と他動詞の対応が、「扉が」の[O]のみを選択した場合に「開く」という自動詞ということになり、「扉を」の[O]の他に「係りが」のような[A]または「風で」のような[I]を選べば他動詞ということになると説明している。

2.1.3.3 「項」と「付加詞」とは

生成文法および格文法の影響を受けた格助詞の研究では、後述するが、項あるいは必須補語および、付加詞あるいは非必須補語という語が用いられている。これは、生成文法を取り入れた日本語の研究では、「文」(p. 40)という概念を述語の意味の完結体として捉え、文中の要素には文に不可欠な「項」(p. 40)と不可欠ではないが余剰的に文に情報を足すことのできる「付加詞」(長谷川 1999, p. 40)と呼ぶからである。そのため、生成文法および格文法の影響を受けた寺村(1982)などでも用いられるのである。

生成文法を取り入れた日本語の研究では、一般に、「項」になり得るのは動作の主体(動作主)や記述される主体(対象)を表す「誰が/何が」にあたる「主語」と、動作により影響を受ける側(被動作主・対象)の「何を」に相当する「目的語」、それに「に」の格助詞を持ち動作の方向(着点)が向けられる「間接目的語」や「場所」である(長谷川 1999, p. 25)。それに対し、「時」、「理由」、「様態」、「手段」などを表す要素は「付加詞」である(長谷川 1999, p. 25)。「場所」に関しては注意が必要で「恭子は箱をその部屋に置いた」や「部屋に猫がいる」のような「場所」の「に」は「項」として働くが、「恭子は箱をその部屋で作った」のように「場所」の「で」は「付加詞」である(長谷川 1999, pp. 24-25)。但し、生成文法などの影響を受けた寺村(1982)と仁田(1933, 1977)では、項(長谷川 1999, p. 40)に当たる名詞句と付加詞(長谷川 1999, p. 40)に当たる名詞句の他にもう1つ名詞句の呼び名が設けられている。

寺村(1982)、仁田(1933, 1977)そして益田(2000)で用いられている用語を先に示しておく。項(長谷川 1999, p. 40)に当たる名詞句は、寺村(1982)では必須補語、仁田(1933, 1977)では主要共演成分、益田(2000)では項である。それらよりも必須度は落ちるが必

要な名詞句が寺村(1982)では準必須補語、仁田(1933、1977)では副次的共演成分と呼ばれている。そして、付加詞(長谷川 1999, p. 40)に当たる名詞句が、寺村(1982)では副次補語、仁田(1933、1977)では非共演成分(付加成分)、益田(2000)では付加語である。

以下、生成文法および格文法の影響を受けた日本語の格助詞研究では場所を表す用法の研究を中心に示す。

2.1.3.4 場所を表す「に」の研究

生成文法および格文法の影響を受けた日本語の格助詞「に」の研究は、寺村(1982)を中心に仁田(1993、1997)や益岡(2000)などを示す。

寺村(1982)

寺村(1982, p. 79)は、格助詞の使い方を主な手がかりとして「コト」(p. 85)を分類した。「コト」は、フィルモア(1975)の「S→M+P」(文→法+命題)の「P(命題)」(フィルモア 1975, p. 75)を取り入れたものである。コトとは「外界の様子、ものや人の状態や変化、働きを表わす『述語』と、その述語を中心として描かれる事象や心象に登場する人、物、概念などを表す『補語』から成る」とした(寺村 1982, p. 51)。寺村(1982)は、「あるコトの表現において、言い換えればある述語にとって、それがなければそのコトの描写が不完全であると感じられるような補語を、『必須補語』(primary complement)、そうでないものを『副次補語』(secondary complement)」(p. 82)と呼んだ。動詞にとって補語が必須か副次的かを分ける基準は明確ではないが、寺村(1982)の「ある述語にとって、それがなければコトの描写が不完全であると感じられるような」(p. 82)とは、「それを欠くと意味的に不完全と感じられるもの」(p. 103)で、「ゴミガ入ッタ」と言えば、「ドコニ？」という「反問を誘発する」(p. 103)。したがって、寺村(1982)は「キノウ河原町デ山田サンニ会ッタ」が「河原町デ」を取り去ってもその文が不完全な感じはせず、「ドコデ？」という反問は、聞き手が特に関心をもっている場合は別として、必ずしも誘発されないため、「～デ」が副次補語だとしている。場所を表す「を」のところで例を示すが、さらに、寺村(1982)は「はっきり必須の補語というべきものを必須補語、その度合いの比較的低いものを準必須補語」(p. 103)として、必須補語の下に準必須補語を設けた。必須補語は「～ガ」、「～ヲ」、「～ニ」という形をとるのが普通であるが、「～ヲ」、「～ニ」は述語の種類によって必須である場合と準必須補語である場合とがあるとしている(寺村 1982, p. 82)。

寺村(1982)は、日本語の述語(動詞)を、それがどういう種類の補語を必要とし、それぞれの補語がどういう格助詞をとるかという視点から分類した(p. 81)。寺村(1982)は、「およそ動作や出来事というものは、ある時間空間の中で起こるものだから、時や場所を限定する表現と共起するのが普通」(p. 102)であると述べ、動作・出来事の場所は「～デ」、存在の場所は「～ニ」で表されるため、動詞が動作・出来事の動詞と存在の動詞

とに分けられるとしている(pp. 102-104)。但し、「移動の動詞」(p. 102)は、「一般的な場所」(p. 102)ではなくて「特定化された」(p. 102)場所の表現と特に縁が深いという点で、他の動作・出来事一般と区別されるとしている(寺村 1982)。「一般的な場所」(p. 102)および「特定化された」場所(p. 102)の定義は書かれていないが、「(場所)ヲ」(出どころ)、「(場所)ヲ」(通り道)、「(場所)ニ」(到達点)が「特定化された場所」を表し、「(ドコ)デ」が「一般的な場所」を表す。寺村(1982)は、「(場所)ヲ」(出どころ)、「(場所)ヲ」(通り道)、「(場所)ニ」(到達点)が、動作や出来事の動詞のうち移動を表すものの下位類である「出ル」類、「通ル」類、「入ル」類のそれぞれと深く結びついているのに対し、「(場所)デ」が、動作や出来事の動詞すべてと広く浅く結びついていると述べている。「入ル」類の動詞については後述するが、「出ル」類、「通ル」類の動詞については格助詞「を」のところで示す。

「入ル」類とは、移動の動詞を 3 つに分けた内の 1 つの動詞類で「入ル、着ク；泊マル」類(寺村 1982, p. 112)である¹⁶。「入ル、着ク；泊マル」類は、さらに、「A」、「B」、「C」に分けられている。「A」と「B」は「部屋に入る」、「電車に乗る」、「札幌に着く」、「運動場に集まる」、「郵便物が先方に届いた」などの文中の動詞で、「X ガ Y ニ(または Y へ)」の「Y ニ」(到達点、Goal)が欠けると、コトの表現としては不完全なものと感じられるものである(寺村 1982, pp. 120-121)。その中でも「入る」や「着く」など移動の動作を表す典型的な種類の動詞が「A」だという(寺村 1982, pp. 120-121)。それに対し「C」は、「ヒマラヤの高地に住む」、「ホテルに泊まる」、「水面に浮く」、「あとに残る」、「椅子に座る」などの文中の動詞である。これは「移動そのものを表すのではなくて、移動した結果、変化した結果の状態を表している」(p. 113)動詞類である(寺村 1982)。「B」の「集まる」や「届く」のような種類の動詞は「A」と「C」の「中間」(寺村 1982, p. 121)であるという。「A」が「裏通りから家に入る」や「三番線の真中から電車に乗る」のように、出発点を補語として付け加えることができるのに対し、「C」は「普通それができない」(寺村 1982, p. 114)という点に違いがある。「C」の「泊マル、住ム、浮ク、残ル、座ル、立ツ」などの動詞は、「移動そのものではないものの、移動を前提とし、その結果の表われである事象を表している点で『入ル』類に準ずるものと考えてよい」(p. 113)とされている(寺村 1982)。寺村(1982)の「座る」や「立つ」などの動詞を「C」としてまとめたのは、「移動そのものを表すのではなくて、移動した結果、変化した結果の状態を表している」(p. 113)からであるが、この観点は井上(1989)においても同様である。

井上(1989)は、「椅子に座る」、「頂上に立つ」、「森の中にひそむ」の「座る」、「立つ」、「ひそむ」のような動詞は、「入る」、「乗る」、「着く」など、主体が A 地点から移動し

¹⁶ 「入ル、着ク；泊マル」の「；」は、「入る」と「着く」が同じ種類の動詞とされているのに対し、「泊まる」のような動詞が「入る」や「着く」とは多少異なる種類の動詞であることを表している(寺村 1982)。

て B 地点に達するというようなはっきりした移動ではないが、「～に」はやはりある動きの終わった結果その主体が存在する場所を表しているという点で、移動に準ずる動きを表すと述べている。但し、「住む」については、山田(1922)では、「住む」を用いた用例が「動作作用の存在又は落ち着く場所を示す」ものとして挙げられていた。そのため、寺村(1982)の「C」の移動に準ずる動きを表す動詞に含めず、別にした方が良くとも考える。以下、寺村(1982)を一部引用して示す。

○移動—3 「入ル、着ク；泊マル」類

述語：A. 入ル、乗ル、届ク、到着スル、上ガル、達スル、至ル、迫ル、降リルなど

B. 集マル、集中スル、近ヅク、沈ム、広マル、広ガル、落着ク、ハヤル

C. 泊マル、住ム、下宿スル、居候スル、浮ク、浮カブ、立ツ、座ルなど

補語：仕手(X)→Xガ

到達点(Y)→Yニ

出どころ(Z)→Zカラ(A 類, B 類の場合, 副次補語として現れることがある。C 類とは共起しない。)

(注)A 類は移動の動きを表わすものであるが、C 類は移動の動きは意識されず(どこからか移動してそこに至ったには違いないが)、その到達したときのさまを描くものである。B 類はその中間。

(寺村 1982, p. 120 の動詞の一部と図を省略し、抜粋)

例えば、「乗る」という動詞は、「入ル、着ク；泊マル」の中の「入る」のような動詞類の「A」(「入ル、乗ル、届ク、到着スル、上ガル、達スル、至ル、迫ル、降リルなど」(p. 120))に属す。「乗る」は、「仕手(主体)(X)→Xガ」(p. 120)と「到達点(Y)→Yニ」(p. 120)という補語を必須的に取り、「私が電車に乗る」という文になる(寺村 1982)。

山田(1922)および橋本(1969)では、「乗る」を用いた用例が場所を表す「に」ではない用例と共に動詞に対しその動作作用の出自または帰着する目標を示すものとして示されていたり(山田 1922)、用言の表す動作作用の到着し帰着する所のものを示すものとして挙げられていたりした(橋本 1969)。寺村(1982)では、「乗る」が「入る」「届く」「到着する」「上がる」などと共に「(場所)ニ」(到達点)と共に用いられる動詞として示されている。場所を表す「に」は、動詞に対しその動作作用の出自または帰着する目標を示すもの(山田 1922)、あるいは、用言の表す動作作用の到着し帰着する所のものを示すもの(橋本 1969)であるという用法であり、「乗る」「入る」「届く」「到着する」「上がる」などの動詞類と共に用いられるのである。

これらの動詞は自動詞であるが、寺村(1982)は、「入る」に対する「入れる」のように、形態的に対立する他動詞は別に示している。「入る」に対する「入れる」のように、形態的に対立する他動詞は、働きかけと移動の複合の「入レル」類(p. 123)とされ、補語にも、到達点の「に」を伴う名詞句が示されている。「入レル」類の動詞も 3 つに分

けられている。「A」が「入レル、乗セル、届ケル、着ツケル、上ゲル、落トス、置ク、敷ク」などであり、「B」が「集メル、沈メル、広メル、広ゲル」など、「C」が「泊メル、浮カベル、立テル、寝カス、倒ス、残ス、並ベル」などの動詞であり、「入ル、着ク；泊マル」類の動詞に形態的に対立する他動詞である。

また、「行ク」、「来ル」、「帰ル」、「戻ル」については、到達点の「へ/ニ」は、「行ク」にとっては必須補語であり、「来ル」、「帰ル」、「戻ル」にとっては副次補語であるとされている(寺村 1982, p. 116)。

存在を表す表現については、寺村(1982)は「ケサ、アノ交差点デ事故ガアッタ」のような出来事の発生を表す文の「交差点デ」は副次補語であり、「ココニ雪男ノ足跡ガアル」のような物理的存在を表す文の「ココニ」は準必須補語であるとしている。

寺村(1982)では、山田(1922, pp. 148-149)の「動作作用の存在又は落ち着く場所を示す」ものに挙げられていた「三所に幕を張った」の「張る」という動詞については示されていない。また、「バンコクに土地を買う」や「アメリカに家を建てる」の「に」と共に用いられる動詞についても述べられていない。

仁田 (1993、1997)

仁田(1993、1997)も寺村(1982)と同じく動詞を中心に格助詞が示されている。仁田(1997, p. 226)は、文の形成にあたって動詞がどのような共演成分の組み合わせを取るのが基本的に決まっていると述べている。そして、動詞が文の形成に必要な共演成分の組み合わせを選択的に要求する働きを「格支配」(p. 226)と呼んでいる。共演成分とは、仁田(1997, p. 225)によると、述語成分を構成する動詞が、文を形成するにあたって、自らの表す状態・状態・関係を実現・完成するために必須的・選択的に要求する成分である。仁田(1993、1997)は、動詞が文を形成するときに、動詞が必須的・選択的に要求する成分を共演成分と非必須・付加的な非共演成分(付加成分)に分け、さらに、共演成分を主要共演成分と副次的共演成分とに分けている。但しその分け方には、寺村(1982)と同様に明確な基準がない。仁田(1993)は例えば、「社長ガ女性ヲ一人秘書ニ雇ッタ」の「社長ガ」と「女性ヲ」が共演成分の中でも主要共演成分であり、「秘書ニ」が主要共演成分に比べれば「少し必須度・要求度の落ちる」(p. 11)副次的共演成分で「一人」が付加成分であるとしている(p. 11)。また、「父ハ額ヲ壁ニ掛ケタ」の「Nニ」は、動詞が必須的に要求する名詞句であるとされている。

益岡 (2000)

益岡(2000)は、「雷が落ちる(コト)」(p. 21)のような「客体的素材を表す部分」(p. 19)を「命題」(p. 19)と呼び、「雷が落ちた」という文のタイプの叙述を「事象叙述」(p. 21)と呼んでいる。事象叙述は、「その男」という対象と「優しい」という属性を結びつける内容の叙述である「属性叙述」(益岡 2000, p. 21)に対するものである。そして、益岡

(2000)は「雷が落ちる(コト)」というような命題は基本的には「述語・補足語構造」(すなわち「述語句」)(p. 25)の形式で表されるとしている。益岡(2000, pp. 102-104)は、述語に名詞句が現れるか否かは述語の内容によって決まるとし、「述語が項として要求する格の配列」(p. 103)の仕方を類型化している。例えば「太郎が次郎に車を貸した」の「ガ格」、「ニ格」、「ヲ格」のような名詞句は、述語を補足する名詞句、すなわち「項」とされ(益岡 2000, p. 102)、この場合、「貸した」という述語が「ガ格」、「ニ格」、「ヲ格」の3項取るというように表現されている(益岡 2000, pp. 103-104)。項の数の違いにより、動詞が1項述語、2項述語、3項述語のように区別されるとされ、格配列の類型が示されている(益岡 2000, pp. 103-104)。それによれば、1項述語が「ガ格型」で例には「働く」、「こわれる」が示されている(益岡 2000, p. 104)。2項述語は4通りが示されており、「ガ格・ヲ格型」(例)「こわす」、「感じる」、「ガ格・ニ格型」(例)「あこがれる」、「ある」、「ガ格・ト格型」(例)「結婚する」、「協力する」、「ガ格・カラ格型」(例)「去る」、「発生する」の4通りである(益岡 2000, p. 104)。3項述語は以下の3種類が重要であるとしており、「ガ格・ヲ格・ニ格型」(例)「見せる」、「乗せる」、「ガ格・ヲ格・ト格型」(例)「協議する」、「比べる」、「ガ格・ヲ格・カラ格型」(例)「奪う」、「出す」が示されている(益岡 2000, p. 104)。場所を表す「に」は、「ガ格・ニ格型」の「ある」と、「ガ格・ヲ格・ニ格型」の「乗せる」の2つが示されているのみである。

仁田(1993, 1997)および益岡(2000)においても、山田(1922, pp. 148-149)の「三所に幕を張った」の「張る」については述べられておらず、また、「バンコクに土地を買う」や「アメリカに家を建てる」の「に」と共に用いられる動詞についても述べられていなかった。それらは奥田(1983)に示されている。

奥田(1983)

奥田(1983, pp. 284-285)は、「つく」のような「くっつけ動詞」と「来る」のような移動動詞(いわゆる瞬間動詞)は、「ついている」や「来ている」のような「状態態のかたち」をとると「存在動詞の資格」となり、「雪丸のうしろにわかい男がたっている」、「義母はとうに福岡にかえっている」のように「に格」の名詞との組み合わせにおいて「存在の結びつきを作る」としている。つまり、寺村(1982)で見た到達点を表す「に」を伴う名詞句と共に用いられる名詞句移動を表す動詞が「～ている」の形を取ると、存在動詞の資格になるということである。奥田(1983, p. 288)では「もつ」、「かりる」、「かう」のような二、三の「所有動詞」についても、場所を示す「に格」の名詞と共に用いられるとこの「に格」の名詞が「所有物のありか」を示すと述べられている。また、奥田(1983, p. 289)では、認知活動を示す動詞の中でも「みえる」「きこえる」のような状態性の動詞と共に用いられる「に格」の名詞が「その状態のありか」を示していると述べられている。そして、奥田(1983, pp. 289-290)では「できる」、「はえる」のような「出現動詞」が「に格」と組み合わせると、その「に格」の名詞は「出現物のありか」を示

し、「つくる」、「たてる」などの「生産動詞」は「出現性」の意味を持っていると述べられている。

國廣(1980)

寺村(1982)、仁田(1993、1997)および益岡(2000)における、場所を表す「に」を伴う名詞句と共に用いられる動詞は、國廣(1980)の「存在の動詞」および「移動動詞」としてまとめられると思われる。また、奥田(1983)で見たように、「着いている」、「来ている」、「立っている」、「帰っている」、「持つ」、「借りる」、「買う」、「見える」、「聞こえる」、「できる」、「生える」、「作る」、「建てる」は、國廣(1980)の「状態の動詞」としてまとめられると思われる。

國廣(1980)は、「に」が「密着の対象」(p. 6)を示すとしている。「密着」の要素は、「に」が状態あるいは存在の動詞と共に用いられるときはその「場所」を指す働きをし、移動動詞と共に用いられるときは「移動の到着点(=密着点)」を指す働きをする。

まとめ

以上のことから、場所を表す「に」と共に用いられる動詞は以下のようにまとめられる。「に」が状態あるいは存在の動詞と共に用いられるときはその場所を指す働き、移動動詞と共に用いられるときは移動の到着点(=密着点)を指す働きをする(國廣 1980)。具体的には、移動動詞とは移動を表す動詞またはそれに準ずる動詞の「入ル、着ク；泊マル類」、「入レル類」、「行ク、来ル、帰ル、戻ル」であり、それらと共に用いられるのは到達点を表す「に」を伴う名詞句である(寺村 1982)。「住む」については、山田(1922)では、「住む」を用いた用例が「動作作用の存在又は落ち着く場所を示す」ものとして挙げられていたため、移動に準ずる動きを表す動詞(寺村 1982)に含めず、別にした方がよいと考える。但し、これらの動詞が「～ている」の形を取った複合動詞が場所を表す「に」と共に用いられるときは、「存在動詞の資格」(奥田 1983, p. 284)となる。すなわち、状態の動詞とは移動を表す動詞またはそれに準ずる動詞の「入ル、着ク；泊マル類」、「入レル類」、「行ク、来ル、帰ル、戻ル」が「～ている」の形を取り複合動詞となった動詞および、所有動詞の「持つ」、「借りる」、「買う」、認知活動を示す動詞の「見える」、「聞こえる」、出現動詞の「できる」、「生える」、生産動詞の「作る」、「建てる」(奥(1983, pp. 288-290)である。そして、存在の動詞とは「いる」、「ある」である。また、場所を表す「に」を伴う名詞句は文に不可欠な項である(長谷川 1999, p. 40)。

2.1.3.5 場所を表す「で」の研究

生成文法および格文法の影響を受けた日本語の格助詞「で」の研究についても、寺村(1982)を中心に仁田(1993、1997)、森田(1980)、益岡(2000)などを示す。

寺村(1982)

寺村(1982)は格助詞「に」のところでも見たように、「同じ場所の表現といっても、動詞の下位分類と『深く』関わるものとそうでないもの、いわば『浅く』関わるものがあることは、いろいろな言語でも見られることのようなのである」(p. 104)と述べた上で動詞を分類した。寺村(1982, pp. 103-104)は、場所を表す「で」を伴う名詞句の「(場所)デ」について、動作や出来事の動詞すべてと広く浅く結びついており、「(ドコ)デ」は「一般的な場所」を表すとしている。「一般的な場所」の定義は示されていないが、「一般的な場所」とは、格助詞「に」のところでも見た「特定化された場所」ではない場所のことである。移動を表す動詞類と共に用いられる「(場所)ヲ」(出どころ)、「(場所)ヲ」(通り道)、「(場所)ニ」(到達点)である「特定化された場所」に対する場所である(寺村 1982, pp. 103-104)。寺村(1982, pp. 103-104)は、チョムスキー(1970)を応用し、「特定化された場所」である「(場所)ヲ」(出どころ)、「(場所)ヲ」(通り道)、「(場所)ニ」(到達点)と、「一般的な場所」である「(場所)デ」は一つのコトの中で共起することができるとして以下の例を示している。先にチョムスキー(1970)を示す。

チョムスキー(1970, pp. 118-120)は、動詞・前置詞句の構文において、動詞とそれに伴う前置詞句との間に、さまざまな度合の結合を区別することができ、この点が「He decided on the boat」のような「he chose the boat」(彼はその船に決めた)の意味のこともあれば「he made his decision while on the boat」(その船に乗っている間に彼は決心した)の意味もあるというあいまいな構文によってはっきり説明することができるとしている。それは、両方の種類の句が現れた「he decided on the boat on the train」(列車に乗っている間に彼はその船に決めた)の文では、明らかに「on the train」という前置詞句は単なる副詞的語句であり、動詞とは特に関係がなく、実際は動詞句全体、あるいは文全体を修飾しているのであると述べられている(チョムスキー1970)。事実、「on the train」という前置詞句は文の前に置くことができるが、これに反し、「on the boat」は、構造上、動詞と密接に結びついており、文の前に出すことは不可能であると述べられている(チョムスキー1970)。さらに、同種の例は他にも多いとして、「he worked at the office」(彼は事務所で働いた)対「he worked at the job」(彼はその仕事に従事した)、「he laughed at ten o'clock」(彼は10時に笑った)対「he laughed at the clown」(彼はその道化師を見て笑った)、「he ran after dinner」(彼は夕食後に走った)対「he ran after John」(彼はジョンを追いかけた)のように、明らかに一方では時間と場所の副詞的語句が種々の型の動詞と共に自由に生じ得るのに対し、他方では多くの型の前置詞句が動詞と密接な構造を成して現れるという所見から、動詞は、時間や場所の副詞的語句が全述部句と結びついており下位範ちゅう化されないとし、多くの型の前置詞句に関しては下位範疇化されるとしている(チョムスキー1970)。

寺村(1982)は、チョムスキー(1970)と同じように、特定化された場所と一般的な場所が共起した例として「学校デ廊下ヲ走ッテハイケナイ」、「友ダチノ家デオフロニ入ッタ」

を示している。しかし、『(ドコソコ)デ』は、『廊下ヲ走ル』や『オフロニ入ル』などをいわば包む、より広い空間を表す(寺村 1982, p. 105)と述べている点はチョムスキー(1970)と異なる。チョムスキー(1970)では、「he decided on the boat on the train」(列車に乗っている間に彼はその船に決めた)の2つ目の「on the train」という前置詞句は単なる副詞的語句であり、動詞とは特に関係がなく、実際は動詞句全体、あるいは文全体を修飾しており、事実、「on the train」という前置詞句は文の前に置くことができると述べられている。すなわち、寺村(1982)の『(ドコソコ)デ』は、『廊下ヲ走ル』『オフロニ入ル』などをいわば包む、より広い空間を表す(p. 105)ではなく、「(ドコソコ)デ」が「動詞とは特に関係がなく、実際は、動詞句全体、あるいはことによると、文全体を修飾している」(チョムスキー1970, pp. 118-119)ということであり、「随意的に、文の前に置くことができる」(チョムスキー1970, p. 119)としなければならなかったのではないかと考える。寺村(1982)がなぜそうしなかったのかは分からないが、「学校デ廊下ヲ走ッテハイケナイ」の例では、「廊下」は「学校」の場所の一部であるため、「(ドコソコ)デ」が「廊下ヲ走ル」を包む広い空間を表すとしたのかもしれない。

しかし、「学校デ廊下ヲ走ッテ先生ニ叱ラレタ」(p. 110)の例では、「学校デ」を文中に置き、「廊下ヲ走ッテ学校デ先生ニ叱ラレタ」という文にすると、「廊下」が「学校の廊下」ではない解釈も成り立つ。そのため、「(ドコソコ)デ」が「随意的に、文の前に置くことができる」(チョムスキー1970, p. 119)、あるいは文頭に置かれるとすべきであったと考える。すなわち、寺村(1982)の『(ドコソコ)デ』は、『廊下ヲ走ル』『オフロニ入ル』などをいわば包む、より広い空間(p. 105)を表し、「(ドコソコ)デ」が文頭に置かれるといえる文は限定される。但し、以下に示す菅井(1997)の例のように、「(ドコソコ)デ」がそれに続く空間を包む広い空間ではない文もある。

また、寺村(1982, p. 103)では、「で」を伴う名詞句が動詞の「ある」、「起こる」、「発生する」と共に用いて出来事の発生を表すと述べられている。

菅井(1997, 2000)

菅井(1997, pp. 5-6)は、「花子がベランダで星を眺めていた」という例を挙げ、「ベランダ」にいと解釈されるのは主格の「花子」に限られるのであって、対格の「星」は「ベランダ」にあるとは言い難いとし、確実に場所の「デ格」に包含される要素は主格成分に限られると主張している。さらに、菅井(2000, p. 14)は、「デ格」が修飾できるのは主格 NP(名詞句)に限られるとしているのに対し、「に」は「太郎が望遠鏡で夜空に彗星を見た」のような他動詞構造の場合、「ニ格」が機能的に修飾するのは、主格 NP(名詞句)ではなく対格 NP(名詞句)に限られる点が異なると述べている。

仁田(1997)

仁田(1997, p. 50)は、「で」を伴う名詞句を格助詞「に」のところで述べたように、

動詞の非共演成分としている。つまり、付加詞(長谷川 1999, p. 40)である。仁田(1997, pp. 50-51)は、同一の動詞「殴る」の例を挙げ、「男を学校で殴る」の「学校で」が動きの成立場所を表し、「男を金の延べ棒で殴る」の「金の延べ棒で」が道具を表し、「男を金の延べ棒のことで殴る」の「金の延べ棒のことで」が原因を表し、「デ格」の意味が異なるのは、名詞(句)のタイプの異なりに外ならないと述べている。すなわち、名詞が「場所名詞」であることによって、「学校で」が動きの成立場所を実現し、「物名詞」であることによって、「金の延べ棒で」が道具を表し、「～ノコト」を伴うことによって、「事名詞」化することによって、「金の延べ棒のことで」が原因を実現することになるという仁田(1997, p. 50)。この内、場所を表す「で」は、「男を学校で殴る」である。仁田(1997)の「デ格」の意味が異なるのは名詞(句)のタイプの異なりに外ならないというのは、後に示すが森田(1980)では、「で」が後接する名詞が「限界点」(p. 318)あるいは「限界の範囲が何であるかによって『で』の意味が分かれる」(p. 318)と述べられている。

益田(2000)

益田(2000)は、「述語によってその存在が要求される従要素、すなわち、述語句中の必須成分となる従要素」(p. 82)が「補足語」(p. 82)であり、「述語句中の随意成分である従要素」(p. 82)である「付加語」(p. 82)があるとした。「先日、太郎が花子と外国で密かに結婚した」では「太郎が」と「花子と」が述語の「結婚する」にとって必須成分の補足語であり、「先日」、「外国で」、「密かに」という要素が述語の「結婚する」にとって不可欠な要素ではなく付加語で、省略しても述語句が不完全なものになるわけではないと述べられている(益田 2000, p. 85)。益田(2000)は補足語について、「太郎が」や「花子と」のように主要素の名詞と従要素の助詞が結びついて構成されるものを「項」(p. 85)と呼んでいる。なお、益田(2000)では、述語が項をいくつ伴うかを判定する基準は、今までのところ十分には明らかになっていないと述べられている。

寺村(1982)では必須補語と準必須補語、仁田(1993, 1997)でも主要共演成分と副次的共演成分とを分ける明確な基準が示されていなかった。それは、益田(2000)で述べられているように、述語が項をいくつ伴うかを判定する基準が十分には明らかになっていないからである。

森田(1980)

森田(1980)は、「で」は、数量(「10 個で作れる」)、時間(「30 分で読む」)、行為や作用の時(「今日で終わった」)、場所(「ここで発見した」)、人や事物(「兄弟で決める」「紙で人形をこしらえる」)などにおいて、「それ以外・それ以上ではない、それを対象範囲の限度とする」意を表すとしている。「そのベース内において」(p. 318)つまり、「限界点」(p. 318)であり、限界の範囲が何であるかによって「で」の意味が分かれる。場

所を表す「で」は、森田(1980)によると、場所をどこと限定する「で」とされている(p. 322)。「他にもいろいろ場所はあるが、それらあちこちにまたがらず、該当地点・地域はここ」と場面的範囲を限定する(p. 322)。存在を表す「に」は、その場所に定位するもしくは存在するという状態性の表現で、「で」のような行為の場所の限定意識がない(森田 1980, p. 374)。例えば、「日本では毎年台風がやって来て大きな被害を出す」の「日本で」のように、「他の国ではない日本のワク内で」(p. 322)と場所の範囲の限定として線引きをするのが「で」の限定意識であるとしている (p. 322)。先に述べたが、このことは仁田(1997)と同様のことを述べていると思われる。

また、森田(1980)は、後続する動詞について「で」によって限られた場面での行為や作用で、「に」のように他の場所からの移動や、単なる存在には使えない(p. 322)としている。「で」によって生ずる行為は、「二つの風が南方海上でぶつかりあって出来る不連続線」のような自然現象もあるが、多くは「プラットホームでかき込むそばの味はまた格別だ」のように意志的な人間行為である(p. 322)。しかも、動作主は「で」の場面内でその行為を行っているのであるから、「車の中で落とす」なら車中での行為となり、「車の中に落とす」なら車外から車中へ向けての行為となる(p. 322)。そして、「で」に導かれる動詞はふつう動作動詞であり、「ある」のような状態動詞も、存在ではなく動作・行為となってしまうと述べられている(p. 323)。

森田(1980)のように、生成文法および格文法の影響を受けた格助詞の研究においても、「に」と「で」の違いについては、伝統的な格助詞の研究と同様に、文中の名詞と動詞の関係がどのような関係であるかという観点により述べられている。また、國廣(1967、1980)を受けた山田(1981)および、山田(1981)などを受けた定延(2004)のような研究も見られるが、これらの研究においても文中の名詞と動詞の関係によって「に」と「で」の違いが述べられている。

山田(1981)

山田(1981)は、英語の「at」と日本語の「に」「で」について考察し、國廣(1967、1980)の「に」の「密着の対象」を受け、『at』は『接触』を表す(p. 61)と述べている。山田(1981, pp. 61-62)は、「に」と「で」が共に「接触」という意味特徴を持つと考えれば、「東京に住んでいる」と「東京で暮らしている」のように、「住んでいる」のも「暮らしている」のも同じ東京という場所に「接触」して行われることであり「に」の「接触」が「静的」であるのに対し、「で」の「接触」が「動的」だということになると述べている。ただし、山田(1981)は「静的」、「動的」という特徴は二次的であり、例えば「待つ」という行為は「動的」とは考えにくく、むしろ「静的」とさえ言えるので「で」が「こととの接触」(p. 62)を示すと考えれば自然な説明ができると述べている。つまり、「で」が「こととの接触」を示し、「に」は「ものとの接触」を示すということである(山

田 1981)。

定延 (2004)

定延(2004, pp. 181-182)は、松村(1957)の「に」が存在・状態などの場所を表すのに対して「で」が動作の行われる場所を表すことや、山田(1981)の「で」が「こととの接触」を示し、「に」は「ものとの接触」を示すということなどを受け、その上で、「に」は「モノの存在場所」を表すが(例「家の前に車を停めた」、「体育館に机がある」)、「で」は「デキゴトの存在場所」を表す(例「家の前で車を停めた」、「体育館で入学式がある」)と考えられるとしている。定延(2004, pp. 181-182)は、「に」が「モノの存在場所」を表し、「で」が「デキゴトの存在場所」を表すという表現は、松村(1957)や山田(1981)などの表現とは異なるが、「に」と「で」の概念は共通していると述べている。

まとめ

以上のことから、場所を表す「で」は以下のようにまとめられる。場所を表す「で」が「に」と最も異なる点が示された。生成文法および格文法を取り入れる前の格助詞の研究では、「で」は、動作・作用の道具立て、背景を整え、その表現を支える助詞群であり、「に」が行為・動作・作用の道具立てを整えるものであるのと同じであったし(田中 1977, p. 370)、「で」も「に」と同じく補格であり、場所・時間・手段・方法・材料などを用言に先行して示し、その用言を補助的に修飾しているものであることを見た(西田 1977, pp. 205-206)。それに対し、「文」(p. 40)という概念を述語の意味の完結体として捉えた場合、「場所」の「に」は文中の要素には文に不可欠な「項」(p. 40)であるのに対し、「場所」の「で」は不可欠ではないが余剰的に文に情報を足すことのできる「付加詞」(長谷川 1999, p. 40)である。つまり、述語(主に動詞)が要求するのが「場所」の「に」であり、要求はしないが存在を許すのが「場所」の「で」である(長谷川 1999, p. 40)。場所を表す「で」を伴う名詞句は、動作や出来事の動詞すべてと広く浅く結びついている(寺村 1982, pp. 103-104)。場所を表す「で」を伴う名詞句は文頭に置かれ、後ろに続く空間の出来事を包み込むより広い空間を表す(寺村 1982)。但し、寺村(1982)はすべての文に当てはまるのではない。「花子がベランダで星を眺めていた」のような文は確実に場所の「デ格」に包含される要素は主格成分に限られる(菅井 1997, pp. 5-6)。後続する動詞は、「で」によって限られた場面での行為や作用で、「に」のように他の場所からの移動や、単なる存在には使えない(森田 1980, p. 322)。「で」に導かれる動詞はふつう動作動詞である(森田 1980, p. 323)。「に」はモノの存在場所を表すが「で」はデキゴトの存在場所を表す(定延 2004)。

2.1.3.6 場所を表す「を」の研究

生成文法および格文法の影響を受けた日本語の格助詞「を」の研究についても、寺村

(1982)を中心に仁田(1993、1997)、森田(1980)、益岡(2000)などを示す。

寺村(1982)

寺村(1982, pp. 83-84)は、文を構成する動詞にとって「を」を伴う名詞句である対象を表す「を」は、例えば「人を殺す」や「物を壊す」の「殺す」、「壊す」のような動詞と共に用いる「人を」、「物を」が必須補語であると述べている。「(場所)ヲ」は、動詞にとって必須補語である場合と準必須補語である場合とがあるとしている(寺村 1982, pp. 108-110)。「(場所)ヲ」が必須補語である場合と準必須補語である場合とは、「道を通る」の「道を」のようなものが「通る」にとって「通り道」であるため必須補語であって、「道を歩く」の「道を」のようなものは「歩く」にとって「通り道」とも言い難いため、準必須補語であるという(寺村 1982, pp. 108-110)。寺村(1982)は、格助詞「に」のところでも示したが、「(場所)ヲ」(通り道)と共に用いられる動詞の「出ル」類、「通ル」類を示している。寺村(1982)は、「出ル」動きの述語には「出ル、卒業スル、出発スル、離レル、オリル、(トビ、這イ、逃ゲ、抜ケ、・・・)出ス、去ル」(p. 119)を挙げ、補語は「仕手(X)→Xガ」(p. 119)と「出どころ(Y)→Yヲ/Yカラ」(p. 119)である。寺村(1982)は、「通ル」動きの述語を2つに分けている。「A」は「通ル、経過スル、過ギル、経ル、渡ル、越ス」(p. 120)、「B」は「歩ク、走ル、駆ケル、這ウ、進ム、トブ」(p. 120)が挙げられ、補語は、「仕手(X)→Xガ」(p. 120)、「通りみち(Y)→Vヲ(A類にとっては必須補語、B類にとっては準必須補語)」(p. 120)、「出どころ(V)→Vカラ(副次補語)」(p. 120)、「到達点(あるいは目的地)(W)→Wへ/Wニ(副次補語)」(p. 120)である。また、寺村(1982, p. 117)は「行ク、来ル、帰ル、戻ル」は、「歩ク」などと同じように通過の動作と似通った意味で使われるとき「街道ヲ往ク」のように現れることがあると述べている。

仁田(1993)

仁田(1993)も寺村(1982)と同じ立場を取っている。仁田(1993, p. 12)によると、「子供達が吊り橋を渡った」の「吊り橋を」は主要共演成分であり、「子供達が運動場を走っている」の「運動場を」は副次的共演成分である。

久野(1973)

久野(1973, p. 58)は、運動を表す動詞と共に用いられる場所を表す「を」について、「に」および「で」との違いを示している。久野(1973, pp. 58-59)によると、「道ヲ歩ク」、「空ヲ飛ブ」、「廊下ヲ走ル」、「山ヲノボル」、「山ヲオリル」のように「名詞+ヲ」は、「動詞によって表される運動が、名詞によって表される距離又は空間の前範囲(或いはかなりの部分)にわたって続けて一方向に向かって行われることを示す」(p. 58)のものであり、「道ニ歩ク(例えば、家の庭から道にむかって歩く)」、「空ニ飛ブ(空にむかって

飛ぶ)」など「名詞＋ニ」は「名詞によって表される場所が、運動の目的地であることを示す」(p. 59)のものであり、そして、「道ヲ歩ク(路上で例えば、行ったり来たり、渡ったりして歩く)」、「空ヲ飛ブ(空の極く限られた空間で飛ぶ)」など「名詞＋デ」は「動詞によって表される運動が、名詞によって表される距離、又は、空間の極く一部分で、必ずしも連続的、一方向的ではなく行われることを示す」(p. 59)のものである。

奥津・沼田・杉本(1986)

奥津・沼田・杉本(1986, p. 282)においては、「を」を伴う「移動補語」は、移動に関わる場所を示すが、その関わり方は動詞により様々であると述べている。「太郎は遊歩道を歩いた」では移動の「経路」を示しているのに対し、「バスは駅前の交差点を過ぎた」では移動の「経由点」、「人口衛星は軌道を離れた」では移動の「起点」を示す。

加藤(2006)

「を」が示す「経路」について、加藤(2006, pp. 163-167)は、「経路」とは狭義には「通り道」のようなもので、移動の際に通る予定の線状の場所、あるいは、通った軌跡を典型的に指すと考えられると述べている。経路用法は大まかに通過点、移動経路、移動領域に下位区分でき、それらは、連続的な関係にあるという(加藤 2006)。通過点は、「有境界性」を持ち、点として存在するので他の用法に比べて客体化しやすいと考えられると述べられており、「筑波山上空を飛んだ」は、通過域とも移動領域とも解釈可能であり、「空を飛ぶ」は移動領域の解釈であると述べられている(加藤 2006)。

まとめ

以上のことから、「を」は以下のようにまとめられる。「を」を伴う名詞句は文において不可欠な項である(長谷川 1999, p. 40)。寺村(1982)および仁田(1993)では、「子供達が吊り橋を渡った」の「吊り橋を」は項(長谷川 1999, p. 40)であり、「子供達が運動場を走っている」の「運動場を」は項(長谷川 1999, p. 40)より必要度の落ちる名詞句であるとされた。

場所を表す「を」と共に用いられる動詞は以下のようにまとめられる。「通ル」動きの動詞類はAの「通ル, 経過スル, 過ギル, 経ル, 渡ル, 越ス」(p. 120)、Bの「歩ク, 走ル, 駆ケル, 這ウ, 進ム, トブ」(p. 120)であり、Aの動詞類と共に「場所(ヲ)(通り道)」が必須的に用いられる。Bの動詞類と共に「場所(ヲ)(通り道)」が準必須的に用いられる(寺村 1982)。また、「行ク, 来ル, 帰ル, 戻ル」は、「歩ク」などと同じように通過の動作と似通った意味で使われる動詞もある。「ノボル」、「オリル」、「飛ブ」、「歩ク」、「泳グ」、「走ル」、「渡ル」など運動を表す動詞と共に用いられる「名詞＋ヲ」は、「動詞によって表される運動が、名詞によって表される距離又は空間の前範囲(或いはかなりの部分)にわたって続けて一方向に向かって行われることを示す」(久野 1973, p. 58)。「を」

を伴う「移動補語」は、移動に関わる場所を示すが、その関わり方は動詞により、「経路」、「経由点」、「起点」を示す(奥津・沼田・杉本 1986, p. 282)。「を」が示す「経路」とは狭義には「通り道」のようなもので、移動の際に通る予定の線状の場所、あるいは、通った軌跡を典型的に指すと考えられ、経路用法は大まかに通過点、移動経路、移動領域に下位区分でき、それらは、連続的な関係にあるという(加藤 2006, pp. 163-167)。

次に、上記の先行研究では見られなかった格助詞「で」の限定の表現と、格助詞「に」の存在表現を以下に示す。格助詞「で」の限定の表現および格助詞「に」の存在表現は本研究の目的である日本語学習者の場所を表す「に」の発達の 1 つの段階を明らかにするために重要となる研究である。

2.1.3.7 格助詞「で」の限定の表現について

1.4 で範囲限定を表す「で」を定義したが、それは以下に示す寺村(1982)や間淵(2000)の「で」の限定を表す表現の概念を指す。限定という語は田中・松本(1997)や森田(1980、1989)などでも用いられているが、寺村(1982)や間淵(2000)のいう「で」の限定を表す表現とは異なる。以下に示すように、田中・松本(1997)では「で」を伴う名詞句には「限定化の作用」(田中・松本 1997, p. 45)が備わっており、その概念は限定が「で」の用法を説明する中心概念と見なす森田(1980、1989)と同じであるという。以下、「で」の限定の表現とはどのようなものか、田中・松本(1997)、森田(1980、1989)、仁田(1997)を示した後、寺村(1982)および間淵(2000)の順に示すことにする。

田中・松本(1997)

田中・松本(1997)は、「Xで」という場所名詞句と「Xに」という場所名詞句を動詞との関係で言うならば「Xで」が外在的關係(p. 47)を、「Xに」が内在的關係を取り結ぶ(p. 47)と述べている。「Xで」が外在的關係を取り結ぶ(pp. 44-47)とは、「で」を伴う場所名詞句が動詞との関係において、必須的な名詞句ではなく付加的な名詞句であるということであると思われる。つまり、「で」は付加詞なのであるということである。また、「藤沢でこの店が一番うまい」の「Xで」の機能は「Xを領域限定せよ」という内容のもので、Xを限定するとはある「事柄」の領域を限定的に設定(縁取り)するということであるとしている。このことは以下の森田(1980、1989)と同様の解釈である。例えば「京都で働く」の「京都で」だと「京都という場で何かが起こる」という動作が起こる場所を限定する作用が働くが、「藤沢でこの店が一番うまい」のように動作動詞を伴わない場合には「動作予期」を導入することには当然無理があるという(田中・松本 1997, pp. 44-47)。

すなわち、田中・松本(1997)の言う「限定」とは「付加詞」(長谷川 1999, p. 40)のことであり、「京都で働く」の「京都で」も「藤沢でこの店が一番うまい」の「藤沢で」

も共に付加詞なのである。しかし、動作動詞を述語としない「藤沢でこの店が一番うまい」の「藤沢で」は動作予期を導入することに無理があるため、「京都で働く」の「京都で」と異なるということなのであらうと思われる。

森田(1980, 1989)

森田(1980)は、2.1.3.6でも述べたが、「に」は行為や作用・状態の対象・相手・成立点を、いつ、どこ、どれ、だれ、何と指定するときに用いる助詞であり、その対象や相手・成立点のある特定なものにしばり定める場合、一点に限定する場合と、ある幅を持った範囲を漠然と指定する場合とがある(p. 372)。存在を表す「に」は、その場所に定位する、もしくは存在するという状態性の表現で、「で」のような行為の場所の限定意識がないとしている。「で」は数量、時間、行為や作用の時、場所、人や事物などにおいて、「それ以外・それ以上ではない、それを対象範囲の限度とする」(p. 318)意を表すとしている。「そのベース内において」(p. 318)つまり、「限界点」(p. 318)であり、限界の範囲が何であるかによって「で」の意味が分かれる。

限定という語は「に」では「一点に限定する場合」(森田 1980, p. 372)、「で」では「限界の範囲が何であるかによって『で』の意味が分かれる」(森田 1980, p. 318)と用いられており、限定の概念が「で」の中心概念であるが、語の定義は明確でない。森田(1980, 1989)のいう「で」の限定とは2.1.3.7でも述べたが、以下に示す仁田(1997)と同様の概念であると思われる。

仁田(1997)

仁田(1997)は、「デ」の意味として、動きや状態の成立場所、道具、材料、原因、そして様子といった様々なものが挙がっているが、デ格の意味の異なりの起因は、名詞(句)のタイプの異なりに外ならないと述べている。「デ」は文を構成する動詞にとって非共演成分であり、名詞が場所名詞であることによって、「男ヲ学校デ殴ル」の「学校デ」は動きの成立場所を実現し、物名詞であることによって、「男ヲ金ノ延べ棒ノコトデ殴ル」の「金ノ延べ棒デ」は道具を表し、「～ノコト」を伴い事名詞化することによって、「男ヲ金ノ延べ棒ノコトデ殴ル」の「金ノ延べ棒ノコトデ」は原因を実現することになると述べられている。つまり、「で」は「付加詞」(長谷川 1999, p. 40)なのである。すなわち、森田(1980)の「限界の範囲が何であるかによって『で』の意味が分かれる」(p. 318)とはこのことであり、森山(1980, 1989)のいう「で」の限定とは「で」が「付加詞」(長谷川 1999, p. 40)であることを指している。

以上のことから、「で」は文を構成する動詞にとって「で」は付加詞であるが(森田 1980, 1989、仁田 1997、田中・松本 1997)、田中・松本(1997)で見たように、動作動詞を伴わない「藤沢でこの店が一番うまい」の「藤沢で」は動作予期を導入することに無理があるため、「京都で働く」の「京都で」と異なる。寺村(1982)においても、動作動詞を

伴わない「藤沢でこの店が一番うまい」のような「で」が動作場所を表す「で」と区別しなければならないと述べられている。

寺村(1982)

寺村(1982)は、2.1.3.3 で述べたが、「で」を伴う名詞句は述語にとって必須ではなく、副次的であると述べている(p. 179)。つまり、動作場所を表す「駅で新聞を買う」の「駅で」、道具や手段を表す「電車で行く」の「電車で」などである。田中・松本(1997)の「藤沢でこの店が一番うまい」と同じ用法は、「コノ店ハコノ町で一番ウマイ」、「高見山ガ幕内で最モ重イ」であり、この「で」は「判断の及ぶ範囲：『空間の広がり、またはある集合』で」(p. 182)の用例として挙げられている。この「で」は比較、特に「最もどうこうだ」という言い方の述語の文に現れるとし、動的事象の場所的限定の「(場所)で」と区別しなければならないとしている(寺村 1982, p. 182)。

間淵(2000)

間淵(2000)は、「日本でいちばんよいまちだ」の「日本で」は、「よいまちだ」と判断・決定する上での範囲・基準を定める限定の表現であり、「で格」が動作や出来事を述べる動詞文に現れるのではないという点で、他の「で格」の用法と大きく異なっていると述べている。もちろん、「で格」の限定用法は間淵(2000)によると、「空間」を媒介とした場所格との類似性による拡張の結果、出来事の場合を規定する役割から、話題の場合を規定する役割へと変換したものである。つまり、「日本でいちばんよいまちだ」のような「で」の限定表現は、動作場所を表す「で」から拡張したということであるが、動作場所を表す「で」と大きく異なっているのである。

まとめ

格助詞「で」は動詞にとって付加詞であり(長谷川 1999, p. 40)、動作場所を表す「で」も限定の表現に用いられる「で」も共に付加詞である。そして、どちらの「で」も場所を表す名詞に後接する。2.1.3.7 で述べたように、動作場所を表す「で」を伴う名詞句は、動作や出来事の動詞すべてと広く浅く結びついており(寺村 1982, pp. 103-104)、「で」に導かれる動詞はふつう動作動詞である(森田 1989, p. 323)。2.2.3 で後述するが、日本語学習者が共に用いる動詞の動作性に着目し「で」を多用する(鈴木 1978)のは、動作場所を表す「で」が動作や出来事の動詞すべてと結びついており(寺村 1982)、ふつう動作動詞と共に用いられる(森田 1989)ことを理解しているからであろうと思われる。

それに対し、「藤沢でこの店が一番うまい」(田中・松本 1997)、「コノ店ハコノ町で一番ウマイ」、「高見山ガ幕内で最モ重イ」(寺村 1982)、そして「日本でいちばんよいまちだ」(間淵 2000)のような「で」は限定の表現であり、動作場所を表す「で」と大きく異なっており、動作動詞を伴わない。すなわち、動作行為が行われる場所を示すのが動作

場所を表す「で」であり、限定の表現に用いられる「で」は「日本でいちばんよいまちだ」の「いちばんよいまち」という属性を有するのが「日本」の範囲内であることを示しているのである。このことから本研究でも、両者の「で」を区別し、1.4 で述べたように、「日本でいちばんよいまちだ」(間淵 2000)のような「で」を範囲限定を表す「で」と定義しているのである。

2.1.3.8 格助詞「に」の存在表現の2つの解釈について

西山(2003)は、意味論および語用論の観点から、存在文が「机の上にバナナがある」のような「場所表現を伴う存在文」(p. 394)と「太郎の好きな食べ物がある」のような「場所表現を伴わない存在文」(p. 395)に大別できるとし、前者のタイプの存在文と後者のタイプの存在文には本質的な違いがあることを論じている。金水(2006)は、統語論および意味論を援用し、「子供が公園にいる/*ある」のような表現が物理的な空間と存在対象との結びつきを表す表現(「空間的存在文」)(p. 14)であるのに対し、「授業中に寝ている学生がいる/ある」のような表現が特定の集合における要素の有無を表す表現(「限量的存在文」)(p. 14)であるとして、空間的存在文と限量的存在文および「いる」および「ある」との対応関係について論じている。以下、西山(2003)および金水(2006)を示す。

西山(2003)

西山(2003)は、久野(1973)の「この世のなかには、米の嫌いなひとがいる」という文についての解釈を引用し、存在表現について分析した。

久野(1973, pp. 281-295)は、英語と日本語の存在文について述べており、日本語の存在文の基本的語順が「机ノ上ニ本ガアル」のような「何処々々ニ(L)何々ガ(S)アル(V)」の順であると述べた。その議論の過程で、久野(1973, pp. 281-295)は、存在文には場所辞(locative)が不可欠であり、「米の嫌いなひとがいる」という表面上場所を表す名詞句を欠く文であっても、「この世のなかに」と解釈しても良いし「どこかにに」あるいは「今話題となっている場所に」と解釈しても良く「仮定的文法形式」(p. 288)を認める必要があると主張した。久野(1973)に対し、西山(2003)は「米の嫌いなひとがいる」を言い替えた「この世のなかには、米の嫌いなひとがいる」の「この世のなかには」を「米の嫌いなひと」という指示対象が位置する場所辞と考えるならば、「米の嫌いなひとがいる」は「場所存在文」(p. 394)の一種となるが、実は場所存在文ではないとした。西山(2003)によると、「この世のなかには、米の嫌いなひとがいる」の「この世のなかには」は、「この世界を構成するメンバーのなかには」という意味であって「絶対存在文」(p. 395)である。「絶対存在文」(p. 395)の解釈については3.5 で詳細に述べる。

金水(2006)

金水(2006, p. 14)も、「子供が公園に {いる/*ある}。」が物理的な空間と存在対象(主語の指示対象)との結びつきを表す表現であるのに対し、「授業中に寝ている学生が {いる/ある}。」が特定の集合における要素の有無を表わす表現であると述べている。あるいは、「子供が公園に {いる/*ある}。」が物理的な時間、空間を対象が占有することを表す出来事の一つであるのに対し、「授業中に寝ている学生が {いる/ある}。」が話し手の立場から下す、世界についての判断の一つであるということもできると述べている(金水 2006, p. 14)。金水(2006)は前者を「空間的存在文」(p. 14)、後者を「限量的存在文」(p. 14)と呼んでいる。

先述したが、西山(2003)および金水(2006)の存在表現における 2 つの解釈の 1 つである「絶対存在文」(西山 2003, p. 395)あるいは「特定の集合における要素の有無を表わす表現」(金水 2006, p. 14)が、本研究の目的である場所を表す「に」の発達の 1 つの段階を明らかにするために重要な解釈である。

2.1.3.9 生成文法および格文法の影響を受けた格助詞研究「に」、「で」、「を」のまとめ

場所を表す「に」と「で」の最も異なる点が示された。生成文法および格文法を取り入れた格助詞の研究では、「文」(長谷川 1999, p. 40)という概念を述語の意味の完結体として捉えた場合、「場所」の「に」は文中の要素には文に不可欠な「項」であるのに対し(長谷川 1999, p. 40)、「場所」の「で」は不可欠ではないが余剰的に文に情報を足すことのできる「付加詞」であった(長谷川 1999, p. 40)。つまり、述語(主に動詞)が要求するのが「場所」の「に」であり、要求はしないが存在を許すのが「場所」の「で」である(長谷川 1999, p. 40)。また、寺村(1982)では場所を表す「で」が動作や出来事の動詞のすべてと結びついているのに対し、場所を表す「に」と「を」は共に用いられる動詞が示されていた。

2.1.4 日本語学における格助詞研究のまとめ

以上、日本語学の先行研究を概観した。伝統的な日本語文法としての格助詞研究では、文における格助詞「に」、「で」、「を」は、名詞に後接し動詞との関係においてさまざまな意味を示していた。また、生成文法および格文法の影響を受けた格助詞研究では、場所を表す「に」、「で」、「を」を伴う名詞句と共に用いられる動詞がどのような動詞であるのかを見た。これによって、日本語学習者が場所を表す「に」、「で」、「を」を習得するための「に」、「で」、「を」の用法および、共に用いられる動詞が示された。すなわち、日本語学習者が場所を表す「に」の用法を「で」または「を」と区別し習得するためには、文中における名詞と動詞の関係および、場所名詞句がどのような動詞と共に用いられるかという両者共理解しなければならないのである。また、「藤沢でこの店が一番うまい」(田中・松本 1997)や「日本でいちばんよいまちだ」(間淵 2000)のような文を範

囲限定を表す「で」として、動作場所を表す「で」の用法と区別して扱うことも述べた。

日本語学習者が格助詞「に」、「で」、「を」を習得するために必要な格助詞「に」、「で」、「を」の用法を表 2-1 にまとめておく。

表 2-1. 日本語学習者が格助詞「に」、「で」、「を」を習得するために必要な格助詞「に」、「で」、「を」の用法

格助詞「に」の用法	<ul style="list-style-type: none"> ・「に」は静的目標を示す。動詞に対しての目標はその動作作用の出自または帰着する目標、動作作用の存在または落ち着く場所を示し、形容詞に対しての目標は場所、存在詞に対しての目標は存在の場所を示す(山田 1922, pp. 147-150)。 ・モノの存在場所を表す(定延 2004, p. 181)。 ・「に」が状態あるいは存在の動詞と共に用いられるときはその場所を指す働き、移動動詞と共に用いられるときは移動の到着点(＝密着点)を指す働きをする(國廣 1980, p. 6)。 ・存在文の基本的語順は「何処々々ニ(L)何々ガ(S)アル(V)」(久野 1973, p. 265)。 ・場所表現を伴うタイプである「場所存在文」と場所表現を伴わないタイプである「絶対存在文」がある(西山 2003, pp. 394-395)、物理的な空間と存在対象との結びつきを表す表現である「空間的存在文」と特定の集合における要素の有無を表す表現である「限量的存在文」がある(金水 2006, pp. 13-14)。 ・存在を表す「に」はその場所に存在するという状態性の表現で、「で」のような行為の場所の限定意識がない(森田 1989, p. 374)。 ・「ありか」、「居どころ」、動作の場所のような空間的な定位を示し、「めあて」としての位置を占める行き着く場所、到着点を示す(佐久間 1983, pp. 143-150)。 ・移動を表す「入る」「集まる」「泊まる」などの動詞類、「卒業する」「離れる」などを除く「出る」動きの動詞類、「通る」動きの動詞類、「行く」「来る」などの動詞類、「入れる」などの動詞類と共に用いられる(寺村 1982, pp. 104-124)。 ・「立っている」「行っている」などの存在動詞と同様の働きとなる動詞と共に用いられると存在の状態を作り、「もつ」「かりる」「かう」などの所有動詞と共に用いられると所有物の「ありか」を示し、「みえる」などの認知活動を表す動詞と共に用いられるとその状態の「あり方」を示し、「できる」「はえる」などの出現動詞、「つく
-----------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

	<p>る」「たてる」などの出現性の意味を持つ生産動詞と共に用いられると出現物のありかを示す(奥田 1983, pp. 284-290)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「に」を伴う名詞句は文を構成する際に動詞にとって必須である(寺村 1982、仁田 1997、益岡 2000)。 ・「で」の動詞文ではない文に現れ限定を表現する用法(間淵 2000, p. 26)「で」の限定化の作用(田中・松本 1997, pp. 44-47)との区別。
格助詞「で」の用法	<ul style="list-style-type: none"> ・「で」は動詞に対してはその作用の行われる場所、あるいはその作用の方便、材料などを示す(山田 1922, pp. 157-159)。 ・デキゴトの存在場所を表す(定延 2004, p. 181)。 ・「で」を伴う名詞句は文頭に置かれ全体を包み込む(寺村 1982)。 ・場所の「で」に包含される要素は確実に主格成分に限られる(菅井 1997, p. 28)。「主体のありかを提示する」(浅間 2002, p. 88)。 ・「で」を伴う名詞句は文を構成する際に動詞にとって必須的ではない(寺村 1982、仁田 1997、益岡 2000)。 ・「で」に導かれる動詞はふつう動作動詞である(森田 1980, p. 323)。
格助詞「を」の用法	<ul style="list-style-type: none"> ・「を」は「動的目标」を示す。動作作用の影響を被る目標を示すもので、その目標が作用を受けているか、そうでなければその目標によって進み動くことを示す(山田 1922, pp. 146-147)。 ・運動を表す動詞と共起する名詞の距離または空間の全範囲にわたって続けて一方向に向かって行われることを示す(久野 1973, p. 58)。 ・動作との結びつきの強い動作中心の表現(田中 1977, p. 368)。 ・移動を表す「出る」などの動詞類と「通る」などの動詞類などと共起し、到達点には「に」を取るものもある(寺村 1982, pp. 119-120)。 ・「通る」などの動詞類と共に用いる名詞句は必須的、「歩く」などの動詞類と共に用いる名詞句は準必須的である(寺村 1982、仁田 1997)。 ・「経路」、「経由点」、「起点」を表す(奥津・沼田・杉本 1986, p. 282)。 ・「経路」を表す「を」の用例は通過点・移動経路・移動領域に分けられるが連続的である(加藤 2006, p. 164)。

2.2 日本語教育における場所を表す「に」の習得に関する研究

本研究は、日本語学習者の場所を表す「に」の発達の1つの段階のを示そうとするものであるが、それは、第2言語学習者の持つ中間言語(interlanguage)の存在が前提と

なる。

2.2.1 理論的背景

中間言語(interlanguage)とは、Selinker (1972)が名づけた用語で、第 2 言語学習者の用いる言語が母語の体系でもなく目標言語(target language=TL)の体系でもなく、第 2 言語学習者の母語の言語体系と目標言語の体系との中間に位置する体系的な言語である(Selinker 1972)。Selinker (1972, p. 214)は、第 2 言語学習者の発話とこれに相当する目標言語話者の発話は同一ではないから、第 2 言語習得の理論構築において、目標言語の体系とは異なる言語体系が第 2 言語学習者の中に存在すると仮定した。以下、Selinker (1972, p. 214)を引用して示す。

This set of utterances for *most* learners of a second language is not identical to the hypothesized corresponding set of utterances which would have been produced by a native speaker of the TL had he attempted to express the same meaning as the learner. Since we can observe that these two sets of utterances are not identical, then in the making of constructs relevant to a theory of second language learning, one would be completely justified in hypothesizing, perhaps even *compelled* to hypothesize, the existence of a separate linguistic system based on the observable output which results from a learner's attempted production of a TL norm. This linguistic system we will call 'interlanguage' (IL).

(Selinker 1972, p. 214 より転載)

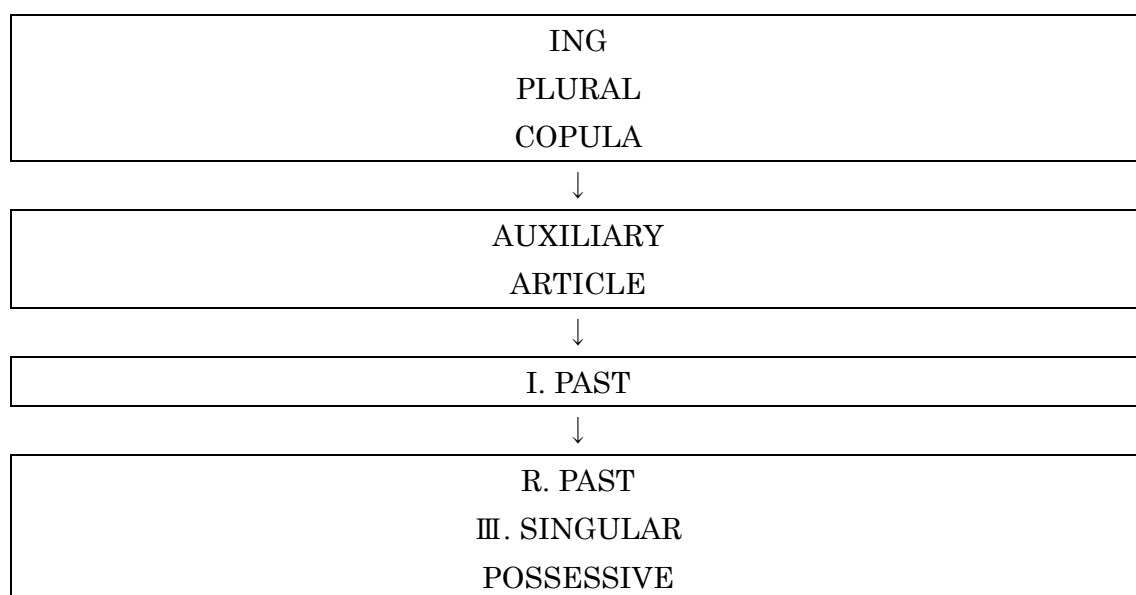
Selinker (1972, p. 214)は、中間言語には、(1)言語転移(language transfer)、(2)訓練の転移(transfer of training)、(3)第 2 言語の学習方略(strategies of second language learning)、(4)第 2 言語の伝達方略(strategies of second language communication)、(5)目標言語規則の過剰般化(overgeneralization of TL linguistic material)という 5 つの主要なプロセスが作用していると述べている。Selinker の中間言語の概念は、どちらかというと成人の第 2 言語習得が不完全なものに終わること、その原因が化石化にあることから端を発しているため、学習者言語の発達の過程よりは、到達した姿に関心が向けられ、学習者言語が母語でも目標言語でもない、その中間的な言語体系を持つことが強調されている(森山 2000, p. 100)。Selinker (1972)によって名づけられた中間言語という概念は、現在では、第 2 言語学習者の言語の総称であって、抽象的な概念である(白畑・若林・村野井 2010, p. 1)。学習者 1 人 1 人の習熟度はそれぞれ異なるため、中間言語の中身もそれぞれ異なることになり、また、同一の学習者でも 1 年前の状態と現在とでは習熟度が異なり、中間言語体系も変化しているのが一般的である(白畑・若林・

村野井 2010, p. 1)。これは中間言語の変異性(variability)と呼ばれるが、この概念が初期の中間言語の概念に欠けていた(山岡 1997, p. 75)。

中間言語の今日的概念は、山岡(1997, pp. 75-76)により、以下の 6 つにまとめることができる。(i)体系性：中間言語は体系性を持っている。(ii)浸透性：個々の中間言語の体系は、不完全で流動的なため母語からの転移や、目標言語から新しい言語形式や規則を取り入れる「浸透」を容易に受ける。(iii)遷移性：中間言語体系は浸透性の結果、たえず改訂され発達し、連続体を構成する。(iv)普遍性：中間言語体系は普遍的な言語規則に従う面が大きく、母語からの影響は少ない。しかしその可能性をすべて排除するものではない。(v)変異性：同一時点の中間言語が変異を示す。つまり同じ意味を表すのにある場合にはある規則が用いられ、別の場合には別の規則が用いられる。(vi)化石化：中間言語は目標言語に向けて発展するが、ある項目が発達を止めることがある。いったん化石化すると、改善が難しいことが多い。

第 2 言語学習者の中間言語の研究には、文法習得順序の研究と普遍的習得順序の研究がある。文法習得順序とは、第 2 言語習得において特定の文法素性が習得される順序を意味し、これらは学習者の第 1 言語、学習状況などの要素によって変化する(エリス 1995, p. 307)。普遍習得順序とは、第 1 言語などの要因の影響を受けない第 2 言語習得のプロセスの全体像を意味する(エリス 1995, p. 309)。日本語教育では迫田(2002)の「習得順序」(p. 73)および「発達順序」(p. 73)という語が用いられるため、本研究でも習得順序および発達順序という語を用いることにする。習得順序とは目標言語の複数の項目を取り上げ、それらがどの順番で習得させるのかを示した順序であり、発達順序とはある 1 つの項目を習得する場合に、必ず通る普遍的な習得の道筋、流れを言う(迫田 2002, pp. 73-74)。習得順序は、一般的には目標言語の長期的な観察によって使用の傾向や誤用の消滅などを分析しながら示されるが、目標言語の正用の割合を調べ、正用の割合が高いものは、その項目が習得されやすいことを示すため、正用順序を習得順序と見なす場合が多い(迫田 2002, p. 73)。

図 2-1 は、Krashen (1977)が示した英語を第 2 言語とする学習者である ESL の自然な習得順序である。英語の形態素習得順序の研究では、一部を除いて、中間言語の習得順序が共通していることを示す強力な証拠であるという(ラーセン・フリーマン&ロング 1995, p. 95)。



Proposed “Natural Order” for Second Language Acquisition and Agrammatics.

(No claims are made about ordering relations for morphemes in the same box)

(Krashen 1977, p. 149 より図の大きさを変えて、転載)

図 2-1. ESL の自然な習得順序

一番上のグループの形態素は「ING」(進行形)「PLURAL」(複数形)「COPULA」(連辞・be 動詞)であり、その下のグループは「AUXILIARY」(助動詞)「ARTICLE」(冠詞)、その下のグループは「I.PAST」は「Irregular Past」(不規則動詞の過去形)、一番下のグループは「R. PAST」は「Regular Past」(規則動詞の過去形)「III. SINGULAR」(3 人称単数現在の-s)「POSSESSIVE」(所有格-s)である。それぞれのグループ内の形態素は多かれ少なかれ同時に習得されるが、「ING・PLURAL・COPULA」→「AUXILIARY・ARTICLE」→「I. PAST」→「R. PAST・III. SINGULAR・POSSESSIVE」の順に習得が難しいという(Krashen 1977)。

発達段階についてよく知られているものには ESL の英語の否定構造と疑問構造がある。Lightbown & Spada (2006)は、Schumann (1979)が先行研究における英語の否定構造の発達段階について、スペイン語話者とその他の言語話者(日本語話者、フランス語話者、ドイツ語話者など)とを比べたものを、ESL の否定構造の発達順序としてまとめた。図 2-2 は Lightbown & Spada (1993)が示した ESL の否定構造の発達順序である。

Stage1

No bicycle. No have any sand. I not like it.

Stage2

He don't like it. I don't can sing

Stage3

You can't go there. He can't eat nothing. She don't like rice.

Stage4

It doesn't work. We didn't have supper.

I didn't went there. She doesn't wants to go.

(Lightbown & Spada 1993, p. 60 より一部抜粋して、転載)

図 2-2. ESL の否定構造の発達の順序

ESL の否定構造の発達順序は、発達段階 1(Stage1)、発達段階 2(Stage2)、発達段階 3(Stage3)、発達段階 4(Stage4)という発達段階が示されている。発達段階 1 では、たいてい「no」または「not」という否定を表す語を動詞の直前に於いて否定の表現が表される(Lightbown & Spada 1993)。発達段階 1 では「No this one」、「No you playing here」(p. 97)のような否定の表現も見られることから、「No」を文頭に置くあるいは文の外側に置く「外置」とも呼ばれている(ラーセン・フリーマン&ロング 1995)。次の発達段階 2 では、否定の表現が「don't」を用いて表されるが、「don't」が使えるだけであり、人称、数そして時制による変化形を使うことはできず、また、「don't」は「can」、「should」のような法助動詞の前にも置いて使われるという(Lightbown & Spada 1993)。このような否定の表現は文の中に置かれるため「内置」とも呼ばれている(ラーセン・フリーマン&ロング 1995)。そして、発達段階 3 では、「are」、「is」のような be 動詞、そして「can」のような法助動詞の後に否定の表現を置き始めるようになるが、この発達段階では「don't」はまだ十分に分析的ではない(Lightbown & Spada 1993)。「don't」がまだ十分に分析的ではないというのは、発達段階 2 と同じように、人称、数そして時制による変化形を使うことはできないという意味で「doesn't」の代わりに「don't」を使うということである。最終段階の発達段階 4 では、「doesn't」「didn't」が正しく使えるようになる(Lightbown & Spada 1993)。しかしながら、「I didn't went there」「She doesn't wants to go」のように助動詞と動詞の両方に時制、人称、そして数を使う人もいるという(Lightbown & Spada 1993)。

英語の疑問構造の発達順序は、エリス(1988)によると最初の段階は自発的に質問を発することはできないが、誰かの質問を反復する初期の「非伝達(non-communicative)」

段階で、最初の自発的な疑問は語順は平叙文のままで、文尾を上昇イントネーションで発するというイントネーション疑問の段階があるという(p. 72)。

e.g. I am coloring?
Sir plays football today?
I writing on this book?
What's this?

(Ellis 1985, p. 61 より転載)

次の発達段階は、自発的な「Wh-疑問」が出現し、「主語＋動詞」は倒置されず、助動詞が省略されることもある(エリス 1988, p. 72)。

e.g. What you are doing?
What 'tab' mean?
What the time?
Where you work?

(Ellis 1985, p. 61 より転載)

少し後になって、「Yes/No 疑問」と「Wh-疑問」との倒置が起こり、また be 動詞の倒置は do 動詞の倒置より先に起こる(エリス 1988, p. 72)。

e.g. Are you a nurse?
Where is the girl?
Do you work in the television?
What is she's doing here?

(Ellis 1985, p. 61 より転載)

発達段階の最後には倒置疑問が起こり、これらの疑問文では最初、通常の「Wh-疑問」のように主語と動詞が倒置される(エリス 1988, p. 72)。

e.g. I tell you what did happen.
I don't know where do you live.

(Ellis 1985, p. 61 より転載)

学習者はこれより少し後になって、通常の語順と倒置疑問をうまく区別するようになる(エリス 1988, p. 72)。

e.g. I don't know what he had.

(Ellis 1985, p. 61 より転載)

このような発達段階は明確に定められているわけではなく、通常部分的に重なり合っているという(エリス 1988, p. 71)。したがって、突然ある段階を飛び越えて習得されることはなく、後の段階のために初期の段階の規則が徐々に再調整されるということである(エリス 1988, p. 71)。

日本語の否定表現の発達段階を示したものは、家村(2001)が知られている。図 2-3 は家村(2001)が示した中国語話者の名詞・形容詞・動詞の否定形の発達順序である。発達段階は、名詞とナ形容詞の否定形では 2 つの段階、イ形容詞の否定形では 3 つの段階、そして動詞の否定形では 4 つの段階が示されている。

名詞、ナ形容詞の否定形の発達段階

じゃない

*ない → じゃない

*くない

イ形容詞の否定形の発達段階

くない(誤用を含む) くない(誤用を含む)

*じゃない → *じゃない → くない

*ない

動詞の否定形の発達段階

正用形

正用形

正用形

*活用混同型 → *活用混同型 → *活用混同型 → 正用形

*じゃない

*じゃない

*辞書形+ない

(家村 2001, p. 77 より転載)

図 2-3. 名詞・形容詞・動詞の否定形の発達順序

家村(2001)によると、基本的には初期では「*学生だない」「*学生がない」「*きれいくない」「*遠ない」「*飲むない」「*降るません」「*乗り換えりません」など多様な否定の形態が使用され、その中の誤用が徐々に消滅し正用形に移行するというもので、品詞間の否定形の習得順序は、名詞・ナ形容詞・動詞がイ形容詞より早い(家村 2001)。英語の否定構造の発達段階では、第 1 言語習得、第 2 言語習得ともに、「don't」や「can't」などが非分析的に用いられる段階が存在することが報告されているが、日本語においても、「じゃない」や「くない」を伴った「*安いじゃない」「*安くじゃない」「*安じゃない」「*食べじゃない」「*安いくない」「*きれいくない」のような誤用の形態が多く観察されている(家村 2001, p. 76)。

まとめ

本研究の目的は、1.2 で示した通り、場所を表す「に」の発達の 1 つの段階を明らかにしようとするものである。しかし、上で見た英語の否定文、疑問文の発達順序、また、

日本語の否定形の発達順序に関する先行研究がその形式的正用の習得のあり方を扱っていたのに対し、本研究が対象とするのは同一の形式「に」が持つ諸用法の習得がどのような発達順序で行われるのかを、特に、中級レベルの日本語学習者の観点から考察しようとするものである。

これまで格助詞「に」の誤用に関しては、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同によるものが指摘されてきたが、それは主に初級レベルの学習者の間に見られるものであり、本研究が対象とするような中級レベルの学習者が犯す格助詞「に」の誤用についての研究は管見の限りない。つまり、中級レベルの日本語学習者に現れる格助詞「に」の誤用をその諸用法の発達順序という観点から考察した先行研究はないということである。以下では、そのような観点から本研究を遂行するにあたり看過することのできない先行研究、すなわち、格助詞間の習得順序を扱った先行研究と同一の格助詞の諸用法の習得に関する先行研究を見ていく。

2.2.2 日本語能力が初級レベルの学習者を対象とした習得に関する研究

日本語の格助詞の習得研究や習得に関する研究には、「が」、「を」、「に」、「で」、「から」などの格助詞の習得がどのような順に習得されるかという格助詞間の習得順序に関する研究、1つの格助詞内の機能の習得順序に関する研究などがある。以下、格助詞間の習得順序に関する研究、格助詞内の機能の習得順序に関する研究、そして、場所を表す「に」習得上に見られる誤用を分析している研究の順に示す。

2.2.2.1 格助詞間の習得順序に関する研究

格助詞間の習得順序は「が」、「を」、「に」、「で」、「から」などの格助詞の正用数または正用率を示した松田・斎藤(1992)と八木(1996)を示す。松田・斎藤(1992)と八木(1996)はすべての格助詞を対象とした研究であるが、格助詞の習得順序研究ではなく初級レベルの日本語学習者の格助詞使用状況から格助詞の習得を分析した研究である。他にも一部の助詞を対象とした習得研究はあるが主に「は」、「が」、「を」を対象とした研究である(小森・坂野 1988、石田 1991、猪崎 1993 等)。本研究では「に」を研究の対象としているためここでは示さない。石田(1991)も一部の助詞を対象とした習得研究ではあるが、資料に格助詞「に」と「で」の正用と誤用が示されている。格助詞「に」と「で」の資料は貴重であるため、石田(1991)は「に」と「で」の資料とその解説部分を示しておく。

松田・斎藤(1992)

松田・斎藤(1992)は、韓国語を母語とする日本語学習者 2 人が 6 カ月間の日本語学習中に用いた格助詞を含む文を発話資料として分析した。日本語学習は 1 回 90 分で 17 回である。発話資料は初回の 1 回を除いた 16 回分である。日本語学習開始時点の 2 人

の日本語レベルは、平仮名の読み書きがようやくでき、挨拶ができる程度であったという。松田・斎藤(1992)は、単に格助詞間の習得順序を明らかにすることを目的とした研究ではないのだが、日本語学習者 2 人の発話の話題が異なるにもかかわらず、両者に似たような格助詞の使用傾向が見られたことから、初級レベルの日本語学習者の格助詞の使用傾向の特徴を知るためには貴重な資料である。松田・斎藤(1992)には、格助詞別の使用数、および全体に対する使用率の順位が示されている。松田・斎藤(1992)によると、格助詞別の全体に対する使用率の順位は、1 人が「が」、「の」、「を」、「に」、「で」、「へ」、「と」、「から」、「より」、「まで」であり、もう 1 人が「が」、「の」、「を」、「に」、「で」、「と」、「から」、「へ」、「まで」、「より」である。但し、この順位は、日本語学習者の格助詞の習得順序として示されたものではなく、あくまでも全体に対する使用率の順位として示されたものである。

八木(1996)

八木(1996)は、主にアセアン諸国の政府関係機関に所属している 17 人(タイ語、マレー語、インドネシア語、タガログ語のいずれかを母語とする 10 人のグループと 7 人のグループの 2 つのグループに分かれている。1 つのグループにどのような母語の日本語学習者が何人属するかという割合は明記されていない)を対象とし、作文資料から格助詞の習得状況を分析している。両グループの日本語学習の時期は異なる。両グループの作文はどちらも日本語学習が 100 時間経った時点で書かれている。八木(1996)によると、「助詞別正用階層」には、「[と]・[の]」という階層、「[を]・[から]」という階層、「[は]・[に]」という階層、「[で]・[が]」という階層の順に正用率が高いことが示されている。但し、「を」、「から」、「で」については、2 グループ間で正用率に開きがあったため、1 つの階層に特定はできないと述べられている。八木(1996)の場所を表す「に」と「で」については、「行き先」の「に」はグループ 1 が 86%、グループ 2 が 92.9%、「動作の場所」の「で」はグループ 1 が 60%、グループ 2 が 63.6%、「存在の場所」の「に」はグループ 1 もグループ 2 も 57.1%である。

石田(1991)

石田(1991)は、フランスにおけるフランス国立東洋言語・文化研究所で日本語を学ぶ 1 年生および 3 年生の「口頭表現クラス」の「会話」テスト(1 年生 2 回、3 年生 3 回)の発話を分析している。石田(1991)によると、「会話」テストは、1 年生の段階Ⅰ(会話クラス 50 分×約 30 回学習後)が自分の 1 日の生活について約 1 分間話すというもの、段階Ⅱ(会話クラス 50 分×約 50 回学習後)が絵を 1 枚任意に選びそれについて約 1 分間説明するというもの、3 年生の段階Ⅲ(会話クラス 50 分×約 20 回学習後)が任意に選んだ絵について 2 人で会話をするというもの、段階Ⅳ(会話クラス 50 分×約 40 回学習後)も第 1 回目と同じもの、段階Ⅴ(会話クラス 50 分×約 50 回学習後)が任意に選んだ絵に

ついて公の場で説明をするというものである。その結果、石田(1991)は、場所を表す「に」の使用は、段階Ⅱ以降は安定しているが、「で」は、段階ごとに正用と誤用の割合が変化していたと述べている。「主な助詞の正用と誤用」という資料によると、「に」は、正用が、段階Ⅰでは 30.8%、段階Ⅱでは 65.7%、段階Ⅲでは 79.7%、段階Ⅳでは 49.1%、段階Ⅴでは 68.4%であり、誤選択が、段階Ⅰでは 69.2%、段階Ⅱでは 28.6%、段階Ⅲでは 20.3%、段階Ⅳでは 45.5%、段階Ⅴでは 26.3%である。「で」は、正用が、段階Ⅰでは 66.7%、段階Ⅱでは 28.6%、段階Ⅲでは 51.9%、段階Ⅳでは 40.5%、段階Ⅴでは 53.8%であり、誤選択が、段階Ⅰでは 33.3%、段階Ⅱでは 71.4%、段階Ⅲでは 48.1%、段階Ⅳでは 59.5%、段階Ⅴでは 38.5%である(石田 1991)。

格助詞間の習得順序に関する研究のまとめ

格助詞間の習得順序に関する研究では、日本語学習者の用いる格助詞「に」、「で」、「を」は、格助詞「を」、「に」、「で」の順に多く用いられるということ、そして、「を」、「に」、「で」の順に正用率が高いということが分かる。このことから、日本語学習者の格助詞の習得は、必ずしもそうではない石田(1991)のデータもあるが、松田・斎藤(1992)と八木(1996)のデータより格助詞「を」、「に」、「で」の順に進むことが推測される。

2.2.2.2 格助詞内の機能の習得順序に関する研究

格助詞内の意味別習得順序には、八木(1996)、森山(2005、2008a、2008b)などがある。2.2.2.1 で述べたが、八木(1996)はアセアン諸国からの日本語学習者が書いた作文を資料として格助詞の習得について分析している。森山(2005、2008a、2008b)は韓国語話者が産出した動詞文における格助詞を分析しているが、市川(1988) は日本語学習者の母語についての記述はないが存在場所を表す「に」を伴う文型の習得順について述べている。

八木(1996)

八木(1996)は、格助詞「に」を「妹は京都にいる」のような「存在場所」を表すもの、「明日北海道に行く」のような「行き先、方向」を表すもの、「毎朝 6 時に起きる」のような「時」を表すもの、「田中さんにハンカチをあげた」のような「動作や態度が向けられる先や相手」を表すもの、「明日田中さんと食事に行く」のような「動作の目的」を表すものの 5 つに分けている。格助詞「で」は、「成田空港までタクシーで行った」のような「道具、方法、手段」を表すもの、「毎日図書館で勉強する」のような「動作場所」を表すもの、「田中さんは一人で神戸に行った」のような「主体の数量限定」を表すものの 3 つに分けている。格助詞「を」は、「今朝、コーヒーを飲んだ」のような「対象」を表すもの、「公園を散歩する」のような「場所」を表すものの 2 つに分けている。

八木(1996)は作文資料を分析した研究であり、石田(1991)は会話テストを分析した研究であり、日本語学習者の母語も日本語学習が行われた環境も異なるため、両研究の場所を表す「に」と「で」を単純に比較することはできないが、場所を表す「に」の正用率の方が場所を表す「で」の正用率よりも高いことは共通している。具体的には、石田(1991)では、段階Ⅰを除き、「場所」の「に」の正用が「場所」の「で」の正用よりも高い。八木(1996)では「場所」の「に」の機能が分かれているが、「行き先」の「に」の正用率(グループ1が86%、グループ2が92.9%)と、「存在の場所」の「に」の正用率(両グループとも57.1%)を合わせると、「動作の場所」の「で」の正用率(グループ1が60%、グループ2が63.6%)よりも高いであろう。

八木(1996)の「グループ1、グループ2の助詞別、助詞の機能別正用率」によると、「に」の正用率の高い順は、グループ1が「明日田中さんと食事に行く」のような「動作の目的」を表すもの(100%、サンプル数1)、「田中さんにハンカチをあげた」のような「動作や態度が向けられる先や相手」を表すもの(88.9%、サンプル数9)、「明日北海道に行く」のような移動先を表すもの(86.0%、サンプル数50)、「妹は京都にいる」のように存在場所を表すもの(57.1%、サンプル数7)、「毎朝6時に起きる」のような「時」を表すもの(50.0%、サンプル数20)である。グループ2が「明日田中さんと食事に行く」のような「動作の目的」を表すもの(100%、サンプル数4)、「明日北海道に行く」のような移動先を表すもの(92.9%、サンプル数28)、「田中さんにハンカチをあげた」のような「動作や態度が向けられる先や相手」を表すもの(90.9%、サンプル数11)、「妹は京都にいる」のように存在場所を表すもの(57.1%、サンプル数7)、「毎朝6時に起きる」のような「時」を表すもの(46.7%、サンプル数15)という順である。

つまり、「田中さんにハンカチをあげた」のような「動作や態度が向けられる先や相手」を表す「に」、および「明日北海道に行く」のような「行き先、方向」を表す「に」が、他の「に」の用法に比べて正しく用いられること、「妹は京都にいる」のような存在場所を表す「に」、および「毎朝6時に起きる」のような「時」を表す「に」は、ある程度正しく用いられるが、他の「に」の用法に比べて誤用が多いということである(八木1996)。

八木(1996)の「で」の正用率の高い順は、グループ1が「成田空港までタクシーで行った」のような「道具、方法、手段」を表すもの(100%、サンプル数4)、「毎日図書館で勉強する」のような動作場所を表すもの(60.0%、サンプル数15)、グループ2が「成田空港までタクシーで行った」のような「道具、方法、手段」を表すもの(100%、サンプル数5)と「田中さんは一人で神戸に行った」のような「主体の数量限定」を表すもの(100%、サンプル数2)、「毎日図書館で勉強する」のような動作場所を表すもの(63.6%、サンプル数11)という順である。「を」の正用率は、両グループともに「今朝、コーヒーを飲んだ」のような対象を表すものが高い(グループ1のサンプル数41で70.7%、グループ2のサンプル数が40で72.5%)。「公園を散歩する」のような場所を表すものは、

ほとんど用いられておらず、グループ 2 のサンプル数は 1 であった。だが、その 1 つは誤用であり、正用率は 0% である。

つまり、「で」については、両グループ共に「成田空港までタクシーで行った」のような「道具、方法、手段」を表す「で」は、サンプル数は少ないもののすべて正しく用いられること、「毎日図書館で勉強する」のような動作場所を表す「で」はある程度正しく用いられるが、「道具、方法、手段」を表す「で」の用法より誤用が多いということである。グループ 2 に関しては、「田中さんは一人で神戸に行った」のような「主体の数量限定」を表す「で」を、サンプル数が少ないもののすべて正しく用いられたということである。「を」については、両グループ共に、「今朝、コーヒーを飲んだ」のような対象を表すものが用いられていること、「公園を散歩する」のような場所を表すものは、ほとんど用いられていないということである(八木 1996)。

森山(2005、2008 a、2008b)

森山(2005、2008 a、2008b)は、認知言語学の観点により格助詞内の意味の習得プロセスおよび習得順序を明らかにしている(森山 2005)。森山(2008a、2008b)では、後述する森山(2005)の実証研究と「KY コーパス」における日本語学習者が用いた格助詞の集計に基づいた日本語学習者の格助詞「に」、「を」、「で」の習得順序が示されている。

「KY コーパス」とは OPI という日本語の「会話能力試験」(牧野他 2001, p. 10)の会話をスクリプトにしたものである。森山(2008a、2008b)は、日本語学習者の格助詞「に」、「を」、「で」の習得は、「に」が「移動先」、「存在の位置・時」、「動作の相手・経験主」という順序、「で」が「場所」、「道具」、「様態」、「原因」、「時間」という順序、「を」が「対格」、「場所」、「状況・時」という順序であるとし、これは、第 2 言語習得において、プロトタイプが先に習得されるという主張の妥当性を実証的に検討したものであると述べている。但し、プロトタイプを決定する要因である、想起のしやすさ、使用頻度、母語習得順序、通時的出現順序の間には、食い違いが生じる場合もあると述べられており(森山 2008a, p. 259)、習得は、学習の進展の中で徐々にプロトタイプが確立されていくこと、プロトタイプが形成されるまでは、使用頻度などの個々の要因が習得に影響を及ぼしているが、プロトタイプが確立されるに伴い、プロトタイプとしての役割が習得を進める要因となっているという(森山 2008a, p. 261)。

つまり、格助詞「に」は、「移動先」、「存在の位置・時」、「動作の相手・経験主」の順に習得が進むということである(森山 2008b)。「存在の位置・時」や「移動先」がどのような発達段階を経て習得されるのかについては示されていない。

市川(1988)

市川(1988)は格助詞の習得に焦点が当てられた研究ではないが、文型における存在場所を表す「に」の習得の順について述べている。市川(1988)は筑波大学の文部科学省研

究留学生のための6カ月間の日本語研修コースにおける日本語学習者28人の小テストとテストを分析した。日本語学習者の母語については記載がない。日本語学習用教材は45課からなる同大学留学生教育センター作成の『きそにほんごかいわ』で1日1課の速度で、約3カ月で終了する。その間、4課毎(約1週間に1度)小テストを行い、27課終了時および45課終了時にテストを行ったという。その結果、文型通りに出題された穴埋め問題は最初の段階から良くでき、また動詞と直接的な格関係を持つ助詞の定着も良いと述べられている。日本語学習開始後1週目の小テスト1では連体助詞「ノ」および対格「ヲ」の定着が良かった。2週目の小テスト2では「デ」、小テスト4では「～になる、～に会う」の「ニ」の定着が悪かったという。また、「～に～がある/いる」より「～は～にある/いる」の方が定着度が低いという報告がある(市川 1988)。「～は～にある/いる」の方が定着度が低いことについては、「～に～がある/いる」に比べて時間的に十分教えられなかったためであろうとされている。しかし、学習時間の長さや学習項目の定着度の高さとの関係については客観的な分析を行っているわけではない。

森山(2005)では、韓国語話者の格助詞の初期の習得過程について、当該韓国語話者が使用した教科書に用いられている動詞の文に動作主を表すガ・ハ格が殆ど共起していないにもかかわらず、動作主を表すガ・ハ格の動詞に共起する割合が異常に高かったことが述べられている。当該韓国語話者が使用した教科書に用いられている動詞の文に動作主を表すガ・ハ格が殆ど共起していないというのは、当該韓国語話者は動詞の文に動作主を表すガ・ハ格を殆ど学習していないのだと思われる。すなわち、市川(1988)の「～は～にある/いる」の方が定着度が低いのは、「～に～がある/いる」に比べて時間的に十分教えられなかったからとは言い難い。

格助詞内の機能の習得順序に関する研究まとめ

格助詞「に」は「移動先」、「存在の位置・時」、「動作の相手・経験主」という順に習得が進むということである(森山 2008a、2008b)。八木(1996)の「明日北海道に行く」のような「行き先、方向」を表す「に」が、「妹は京都にいる」のような存在場所を表す「に」よりも正しく用いられるという点は森山(2008a、2008b)と同じである。八木(1996)では「田中さんにハンカチをあげた」のような「動作や態度が向けられる先や相手」を表す「に」も「行き先、方向」を表す「に」と同様に、他の「に」の用法に比べて正しく用いられていた。また、「～に～がある/いる」より「～は～にある/いる」の方が定着度が低い(市川 1988)。

格助詞「で」は「場所」、「道具」、「様態」、「原因」、「時間」という順に習得が進むということである(森山 2008a、2008b)。八木(1996)では両グループ共に「成田空港までタクシーで行った」のような「道具、方法、手段」を表す「で」は、サンプル数は少ないもののすべて正しく用いられること、「毎日図書館で勉強する」のような動作場所を表す「で」はある程度正しく用いられるが、「道具、方法、手段」を表す「で」の用法

より誤用が多いということである。この点は、森山(2008a、2008b)の習得順と逆である。また、八木(1996)のグループ 2 に関しては、「田中さんは一人で神戸に行った」のような「主体の数量限定」を表す「で」がサンプル数が少ないもののすべて正しく用いられたということである。これは森山(2008a、2008b)の「様態」に当たる。

格助詞「を」は「対格」、「場所」、「状況・時」の順に習得が進むということである(森山 2008)。八木(1996)では両グループ共に「今朝、コーヒーを飲んだ」のような対象を表すものが用いられており、「公園を散歩する」のような場所を表すものはほとんど用いられていない(八木 1996)。このことについても森山(2008a、2008b)と同様である。

2.2.2.3 場所を表す「に」習得上に現れる誤用を分析している研究

場所を表す「に」の習得で、誤用について述べられている研究は、以下の通りである。先述したが、松田・斎藤(1992)および森山(2005)では韓国語話者、久保田(1994)では英語話者、八木(1996)ではアセアン諸国からの学習者、福間(1996)ではバングラデシュやネパールなど多国籍の学習者、松本(2000)では中国語話者の年少者のそれぞれの誤用について述べられている。

松田・斎藤(1992)

松田・斎藤(1992)は、韓国語を母語とする日本語学習者 2 人の発話資料に基づき、格助詞の習得について分析した。格助詞の観察は、実験者自身が日本語の指導を兼ねて行い、週に 1 回、約 90 分、6 カ月の日本語学習期間の間に計 16 回行っている。教材は『新日本語の基礎 I』が用いられ、具体的な観察場面は主に(1)学習項目などの学習場面と(2)自由会話場面によって構成されている。2 人は、観察開始時点においては平仮名の読み書きがようやくでき、会話力は挨拶ができる程度であったという。格助詞別の使用数および全体に対する使用率の順位は先に示した通りである。場所を表す「に」と「で」の使用に関して誤選択が多いのは、場所という実質的意味のみに着目する方略がとられていると解釈されている。特に、「で」の誤用については、「場所を表す指標+で」といった単位が想定されているとされている。場所を表す「を」は、「*公園に歩く」のように「に」の誤用が 3 例示されている。これについても、格と動詞の関係よりも名詞句の実質的な意味に着目していると解釈されている。

つまり、日本語学習者は、場所を表す「に」と「で」を「場所」という実質的な意味に着目し用いているということである(松田・斎藤 1992)。だが、松田・斎藤(1992)では、日本語学習者が「に」を用いる場合にその「場所」がどのような「場所」である場合に「に」を用いているのか、「で」を用いる場合にその「場所」がどのような「場所」である場合に「で」を用いているのかについては、述べられていない。

久保田(1994)

久保田(1994)は、英語を母語とする 2 人の日本語学習者を対象として、格助詞「に」は存在場所を表す用法と存在の場所以外の用法、格助詞「で」は行為の場所を表す用法、格助詞「を」は行為の対象を表す用法、「へ」は方向を表す用法について、日本語学習者の書いた資料と発話の資料を分析している。教材は、『An Introduction to Modern Japanese』が用いられている。資料収集は学習開始後 2 カ月、学習時間 24 時間が経過した時点から開始され、以後 1 年 10 カ月(学習時間 231 時間)に渡り、1 年 10 カ月をⅠ期(91 年 10 月～92 年 3 月)、Ⅱ期(92 年 4 月～8 月)、Ⅲ期(92 年 9 月～93 年 1 月)、Ⅳ期(92 年 2 月～7 月)に分けて集計されている。書いた資料は、穴埋めテスト、日記などから、発話資料は対話タスクやストーリー・テリングなどによって収集されている。

動作場所を表す「で」を用いるべきところに「に」の誤選択の傾向は(例：*食堂にうどんを食べます)、両日本語学習者に共通しており、存在場所を表す「に」の過剰使用の可能性が指摘されている。そうだとすれば、松田・斎藤(1992)で見られた「*道に歩く」のような「に」も存在場所を表す「に」の過剰使用であることが考えられる。「に」を使用すべき箇所での「で」の誤選択(例：*ここで本があります)という逆の傾向は、日本語学習者 B の発話資料Ⅳ期に見られるだけであったという。

「カナダへ帰る」のような「到達点・目的地」は誤選択がなかったのに対し、「プールへ泳ぎに行く」、「渋谷へ映画を見に行く」の文型中では「へ」の正用率が低く、「へ」は、「で」の誤選択の割合が A は 100%、B は 66.7%であったという。「映画を見に渋谷へ行く」の「へ」は正しく選択されていることから、「行く」と「場所」(「渋谷」)が近い場合には「へ」を正しく選択できるが、「行く」と「場所」の間に「見に」のような移動を示さない動詞が置かれることが「で」の誤選択となった可能性があることや、「I'll go shopping at Ginza」のような「at」を「で」に置き換える英語の干渉の可能性があると解釈されている。松田・斎藤(1992)と同様に、「場所を表す指標+で」といった単位を想定することによる誤用である可能性も考えられる。

「を」の正用率は「に」と同様に「で」、「へ」よりも高いが、日本語学習者の 1 人に「を」の脱落が目立っている。「を」の正用率は、日本語学習者 A の書き資料ではⅠ期が 95.3%、Ⅱ期が 100%、Ⅲ期が 95.2%、Ⅳ期が 97.6%であり、発話資料ではⅠ期が 94.4%、Ⅱ期が 94.2%、Ⅲ期が 89.2%、Ⅳ期が 94.1%である。日本語学習者 B の書き資料ではⅠ期が 84.0%、Ⅱ期が 85.4%、Ⅲ期が 81.8%、Ⅳ期が 73.4%であり、発話資料ではⅠ期が 84.3%、Ⅱ期が 67.8%、Ⅲ期が 80.8%、Ⅳ期が 43.3%である。日本語学習者 B の「を」正用率が低いのは「を」の脱落が目立つためである。「を」の脱落以外には「を」を用いるべきところに誤って用いられた「が」と「は」が目立つ。

また、「を」の正答率は文型の違いに影響を受けないことが報告されている。「*部屋を入る」の誤用については、動詞に他動性を感じ「を」を誤選択した英語の干渉が考えられるとされている。つまり、「*部屋を入る」の「を」は、「I enter the room」の「enter」

という動詞の影響であり、日本語学習者は「部屋」が「場所」であることを考慮できず、対象を表す「を」として用いたことが考えられる。先に見た八木(1996)においても、作文の中で場所を表す「を」が用いられておらず、用いられた1つについても誤用であったことからしても、「*部屋を入る」の「を」は、対象を表す「を」として用いられた可能性が高い。

久保田(1994)から、日本語学習者は存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」を混同するだけでなく、存在場所を表す「に」を過剰使用するということが分かる。だが、久保田(1994)においても、日本語学習者が誤って存在場所を表す「に」を過剰使用する場合にはその「場所」がどのような「場所」として用いられたのか、誤って「で」を用いる場合にはその「場所」がどのような「場所」として用いられたのかについては述べられていない。存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との関係については述べられていない。

八木(1996)

八木(1996)は、主にアセアン諸国の政府関係機関に所属している17人(タイ語、マレー語、インドネシア語、タガログ語の10人のグループと7人のグループ)が書いた作文資料に基づき、格助詞別、助詞の機能別、機能グループ別に正用率、正用順序を産出し格助詞の習得について分析している。教材は『Japanese for Busy People I』が用いられ、ほぼゼロレベルから日本語学習をはじめた日本語学習者である。2つのグループは異なる時期に日本語学習を受けた日本語学習者であるが、両グループとも日本語能力がゼロから日本語学習を始めた日本語学習者であり、日本語学習者の全員が主にアセアン諸国の政府関係機関に所属していることなど属性も似ているという。タイ語、マレー語、インドネシア語、タガログ語のいずれかを母語とする日本語学習者が、各グループにおいてどのような割合で存在したのかについては記述されていない。しかし、両グループの格助詞の正用率の相関分析では有意な相関が見られたという。作文資料が収集された時点までの日本語学習時間は100時間である。作文は「夏休みに何をしましたか。どんな夏休みでしたか」という題目で書かれた。日本語学習者の在籍する2年間の大学院コースでは、すべての授業は英語で行われ、日本語学習者は留学生寮に住んでいるため自ら積極的に外に出て行かなければ日本語に触れる機会はかなり少ない状況にあったという。久保田(1994)と同様に、八木(1996)でも、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」の間の誤選択について指摘されている。だが、存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との関係については述べられていない。

福間(1996)

福間(1996)は、九州大学の文部省研究留学生のための日本語研修コースで6ヶ月間行われた初級日本語学習者のための集中授業において、日本語学習をゼロからスタートし

た 19 名(バングラディッシュ、シリア、ネパール、スロバキア、コロンビア、フィジー、マレーシア、ブラジル、ジャマイカ、インド、スリランカ、ジンバブエ、ボリビア、アルゼンチン、ロシア、パナマ)の格助詞「に」の習得の調査を行ったものである。教材は『Situational Functional Japanese』であり、6 カ月で終了したという。Vol.1,L.1～J.8 を前半、Vol.2,L.9～L.16 を後半とした授業が行われ、クイズやテストとして行われた作文に現れた格助詞の「に」が分析された。

前半の「に」の正用の割合は 75%、誤用が 25%、後半の「に」の正用の割合は 77%、誤用が 23%であった。「に」の誤用の内、脱落の割合は前半が 26%、後半が 27%、他の助詞の不正使用は前半が 48%、後半が 31%、そして、「に」の不正使用は前半が 26%、後半が 42%であった。その内、他の助詞の不正使用の数は、前半が 31 で後半が 47 である。その数の内訳は、「到達点」では前半が 2(7%)、後半が 8(17%)であるのに対し、「人や物の存在場所」は前半が 23(74%)で後半が 19(41%)であったという。さらに、この内、「人や物の存在場所」では、作文中に見られた「場所を表す文型」における「に」の総数に対する「他の助詞の不正使用」の割合は、前半が正用数が 100 で不正使用数が 19(誤用率 16%)であり、後半が正用率が 86 で不正使用数が 14(誤用率 14%)であった。不正使用された助詞の総数は、前半が 23、後半が 17 であり、「人や物の存在場所」の「に」→「で」の誤用は、前半が 48%(不正使用の数 11)、後半が 41%(不正使用の数 7)であったという。存在場所を表す「に」と動作場所を表す「に」の混同、および「に」の過剰使用についても報告されている。但し、福間(1996)の「人や物の存在場所」の「に」とは、「寮に住んでいる」のように「住む」を述語とするものも含まれている。

八木(1996)と福間(1996)においても、日本語学習者には、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「に」の混同が見られるということであった。だが、久保田(1994)と同様に、誤って存在場所を表す「に」が過剰使用される場合、日本語学習にとって「場所」がどのような「場所」として用いられたのかは述べられていない。また、存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との関係についても述べられていない。

松本(2000)

松本(2000)は、中国を母語とする日本の公立小学校に在学する児童 1 名(9 才 4 カ月～11 才 3 カ月)を対象に、来日 2 週から 100 週において発話を採集した資料と作文の資料から抽出した助詞について報告している。場所を表す「に」、「で」、「を」の出現順序は、発話資料では、「に」は、「存在の場所」の「に」が来日 13 週、「到達場所」の「に」が 24 週の順であり、作文の資料では、「存在の場所」の「に」と「到達場所」の「に」が用いられた週が同じく 52 週であったという。発話資料による誤用については、「存在の場所」の「に」と「動作の場所」の「で」、「存在の場所」の「に」と「移動の範囲」の「を」、「動作の場所」の「で」と「移動の範囲」の「を」の混同が見られたことが報告されている。

つまり、児童であっても成人日本語学習者と同様に、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との間に混同が見られるということである(松本 2000)。また、存在場所を表す「に」と場所を表す「を」との間にも混同が見られる(松本 2000)。そうだとすれば、先述した松田・斎藤(1992)の「*公園に歩く」のような「を」→「に」の誤用も、場所を表す「を」と存在場所を表す「に」との混同によるものであることが考えられる。

森山(2005)

森山(2005)は、初めの2回は19人、10月以降は12人の韓国語を母語とする日本語学習者を対象として、動詞を習い始めた直後から5回(5月下旬、6月上旬、10月初旬、10月中旬、11月下旬)の調査を1名ずつ研究室に呼び実施した。被験者は、2000年度に韓国の世宗大学校で開講された「第二外国語(日本語)」科目、教材は世宗大学校出版部刊『大学日本語』を用いた授業の週3時間×間×週×学期の受講生のうち、それ以前の日本語学習経験が全くなく授業の欠席も少ない学生を被験者とされた。調査方法は、動詞絵カードの内、既習の動詞をあらかじめ選び出し、それを1枚ずつ見せながらその動詞を用いた文を口頭で表出してもらうという方法で、用いられた動詞は49種類である。毎回の調査後、調査者が助詞を中心に誤用を指摘し正用を示したという。その結果、他動詞文では対格「を」、主格「は」と「が」と習得が進むことが考えられると述べられている。自動詞文では主格「は」、場所格・時格・与格を表す「に」、主格「が」という順に進んでいくと言えると述べられている。

以上の先行研究から、場所を表す「に」の習得は日本語能力が初級レベルのときには、存在場所を表す「に」の正用率が50%台、移動先を表す「に」の正用率が85%以上であり(八木 1996)、移動先を表す「に」の習得の方が存在場所を表す「に」の習得よりも進んでいるように見える。但し、児童の発話資料では「存在の場所」の「に」が来日13週、「到達場所」の「に」が24週の順に出現している(松本 2000)。以下、先行研究から分かったことを以下にまとめる。まとめは存在場所を表す「に」、移動先を表す「に」、動作場所を表す「で」、そして場所を表す「を」、最後に問題となった点の順に示す。

初級レベルの習得で存在場所を表す「に」の誤用について分析している研究のまとめ

存在場所を表す「に」は、日本語学習者の国籍、母語、年齢、日本語学習環境、日本語教授の方法、日本語学習に使用した教材などが異なっても、動作場所を表す「で」との混同が見られることが分かる。但し、存在場所を表す「にあ」と範囲限定を表す「で」との関係については言及されていない。日本語学習者の存在場所を表す「に」はある程度正しく用いられるものの動作場所を表す「で」との混同されるという発達段階があり、「に」の過剰使用による「*食堂にうどんを食べる」の「で」→「に」が現れたり、「場所を表す指標+で」が想定されることによる「*家でいる」の「に」→「で」が現れた

りすると言える。

初級レベルの習得で移動先を表す「に」の誤用について分析している研究のまとめ

移動先を表す「に」は、存在場所を表す「に」の正用率よりも高いこと(八木 1996)、「カナダへ帰った」のような「へ(に)」は誤選択がないこと(久保田 1994)から、「行く」「帰る」のような動詞と共に用いられるものについては、習得が進んでいることが考えられた。但し、「場所」と「行く」の間に「見る」のような動詞が置かれた場合には「場所」に続く格助詞は「に」→「で」の誤答率が高い(久保田 1994)が、久保田(1994)では、移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同については言及されていない。松田・斎藤(1992)では、「*家で帰る」のような誤用も見られ、その「に」→「で」は日本語学習者が「場所を表す指標+で」という単位を想定していたことから、久保田(1994)においても移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」が混同された可能性もある。移動を表す動詞と共に用いられる「に」には、「*部屋を~~入~~る」のような誤用もあった(久保田 1996)。但し、この移動先を表す「に」は、場所を表す「を」との混同によるものではなく対象を表す「を」との混同による可能性が考えられる。

初級レベルの習得で動作場所を表す「で」の誤用について分析している研究のまとめ

動作場所を表す「で」は、正用率が 60%台であり、ある程度正しく用いることができるものの、「道具、手段、方法」や「行われ方」を表す「で」の正用率 100%(八木 1996)と比較すると習得が進んでいないことが考えられた。動作場所を表す「で」は、存在場所を表す「に」と混同される(久保田 1994、八木 1996 など)。「で」の誤用は、松田・斎藤(1992)では、日本語学習者が「場所を表す指標+で」といった単位を想定していることによることが指摘された。

初級レベルの習得で場所を表す「を」の誤用について分析している研究のまとめ

場所を表す「を」は、日本語学習者にはあまり用いられていないようであった。久保田(1994)では調査の対象ともなっておらず、八木(1996)ではサンプル数が 1 であり、しかも誤用である(八木 1996)。誤用には「*公園に歩く」、「*家に出る時」の「に」が見られた(松田・斎藤 1992)。それに対し、対象を表す「を」のサンプル数は 40 台と多く正用率も 70~80%台である(八木 1996)。久保田(1994)では、対象を表す「を」の正用率は日本語学習者の 1 人が I 期~IV 期までほぼ 90%以上であった。久保田(1994)のもう 1 人の日本語学習者の「を」の正用率は書き資料では I 期~IV 期まで 70~85%であったが発話資料では脱落が目立ち、脱落以外の誤用は「は」と「が」が目立っていた。また「を」は文型の違いに影響を受けないということであった(久保田 1994)。「*部屋を~~入~~る」(久保田 1996)は対象を表す「を」として用いられた可能性が高いことが考えられた。八木(1996)の「道具、手段、方法、行われ方」の「で」の正用率 100%も高かったことを

合わせると、「箸でご飯を食べる」のような物を表す名詞に後接する「を」と「で」を区別して用いることができると推測される。

初級レベルの習得に関する研究の問題点

問題となった点は、日本語学習者がどのような「場所」に正しく「に」と「で」を用い、どのような場所に誤って「に」と「で」を用いているのかということである。また、存在場所を表す「に」の発達段階を明らかにするためには、初級レベルで見られた「*家でいる」のような「に」→「で」、「*食堂にうどんを食べる」のような「で」→「に」といった誤用が中級レベルでは見られなくなっているかどうかを調べなければならない。なぜならば、もしも初級レベルで見られた誤用と同じ誤用が中級レベルでも見られるのであれば、日本語学習者の存在場所を表す「に」の習得は進んでいないことになるからである。「に」と「で」の誤用が本当に存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同によって現れているのかを検証しなければならない。また、範囲限定を表す「で」との関係も調べなければならないだろう。

2.2.3 日本語能力が中級レベルの学習者を対象とした習得に関する研究

中級レベルの日本語学習者を対象とした習得に関する研究は、本研究に関連が深い鈴木(1978)、顧(1983)、迫田(2001)、蓮池(2004)を中心に示す。特に、鈴木(1978)の示した誤用は、国際交流基金(1978)の『教師用日本語教育ハンドブック③文法 I 文法 I 助詞の諸問題 1』および日本語教育学会編(1982)の『日本語教育事典縮刷版』にも挙げられており、日本語教育においてよく知られている誤用である。また、場所を表す「に」と「で」の習得研究は、迫田(2001)のユニットストラテジーの多用による誤用の研究以降殆どの研究でそのストラテジーの有無が分析されたり検証されたりしている(蓮池 2004・2007・2012、益田 2001、坂本 2002、初・玉岡・早川 2013 等)。

鈴木(1978)

鈴木(1978)は、東アジアからの留学生を主とした作文資料をもとに誤用例から場所を表す「に」と「で」の混同を指摘し、混同され易い3つのケースを示している。日本語学習者の日本語レベルについては明記されていないが、「初期の段階での『に』と『で』の誤用はあまりあらわれないが、複雑になるにつれて、いろいろな形の混同が出てくる」(鈴木 1978, p. 5)と述べられた後に、さまざまな誤用が挙げられ誤用についての解釈があることから中級レベルであることが分かる。

1 つ目は「*食堂でわたしたちのいけた生け花があります」のように、物の存在を表す文に連体修飾句が入ったために、最寄りの動詞にひかれて係りと受けとの関係に混乱が生じるもの、2 つ目は「*私の父はバンコクの郊外で農園を持っています」のように、「農園」が存在する場所を表す「広義の所在文」も「に」を用いることの理解不足によ

るもので「持つ」、「借りる」、「つくる」、「さく」、「はえる」などを動作・作用と考え、意識的に「で」を用いてしまい、これらがモノの存在場所を表す「所在文の一種であること」を見落とすとしているもの、3 つ目は「*小鳥は木のえだでとまって、きれいな声で鳴いています」のように、「敷く」、「置く」、「すわる」、「とまる」、「植える」などの動詞が動作性の動詞であるために、動作・作用の行われる場所を示す「で」の用法に引かれてしまうものであるという。

つまり、日本語学習者は動詞の動作性に着目し、3 つのケースのすべてを「に」→「で」と誤用しているということである。但し、鈴木(1978)の 1 つ目のケースの「に」→「で」の誤用は、最寄りの動詞に引かれて混乱が生じたとされているが、「場所」と「いる」の間に置かれた「生けた」を伴う連体修飾句の文だからであるとされている。そうだとすれば、「場所」と「いる」の間に「生けた」がなければ正しく「に」が用いられるのかという疑問が生じる。このことは、「場所」と「いる」の間に「生けた」のような動詞が置かれた文における「に」→「で」の誤用が、「場所」と「いる」の間に動詞が置かれない文における「に」→「で」の誤用よりも多ければ、鈴木(1978)の解釈が正しいという裏付けになると考えるが、鈴木(1978)ではそれを確かめるような調査はされていない。

さらに、鈴木(1978)は、「場所」を表す「で」と「到達点・方向」を表す「に」「へ」と「経路」を表す「を」の混同の例を挙げている。「で」と「へ」および「に」の混同は「*9 時に中河原駅で集まりました」である。「集まる」は、「多くのものが一つ所に寄って来る」という意味であり、空間的な移動を表す動詞で、「行く」、「来る」などと同じグループに属するものであるが、それが普通の動詞と見られるのだろうが、はっきりした原因はつかめないと述べられている。「に」(「へ」)と「を」の混同は、「*右へまがって、坂へのぼります」、「で」と「を」の混同は、「*私は毎日プールを泳ぎます」、「*私たちは旅館の近くに散歩しました」、「*多摩川のそばで散歩します」などであるということである。なお、これらの格助詞の誤用の一部は、国際交流基金(1978)の『教師用日本語教育ハンドブック③文法 I 文法 I 助詞の諸問題 1』および日本語教育学会編(1982)の『日本語教育事典縮刷版』にも挙げられている。

このことから、日本語学習者は中級レベルになると、共に用いる動詞の動作性に着目し動作場所を表す「で」を用いるようになっていくことが分かる(鈴木 1978)。それは、日本語学習者が動詞に着目し共に用いる格助詞を判断しているということである。このことから、初級レベルのときに見られた「*家でいる」の誤用は消えていることが考えられる。動詞の「いる」は、存在を表す動詞であり動作性がないため、「で」が用いられることが考えられないからである。また、「*食堂にうどんを食べた」の誤用も消えていると考えられる。動詞の「食べる」は、動作や行為を表す動作性の動詞であるため「食べる」の動作性に着目して「で」を用いれば良いからである。問題となるのは、中級レベルでは存在場所を表す「に」の誤用は現れないのかということである。

他方、移動先を表す「に」については、どのようにして習得が進むのかも問題となる。共に用いられる動詞の動作性に着目し「に」→「で」が多用される中、移動先を表す「に」の習得はどのようにして進むのだろうか。

顧(1983)

顧(1983)は、中国語を母語とする日本語学習者の「『に』と『で』(場所)の誤用」として「*先生は黒板で字を書いている」、「*あの喫茶店にコーヒーを飲みましょう」を挙げている。鈴木(1978)では、動詞の動作性に着目して多くの「に」→「で」の誤用が見られた。そのような中、顧(1983)の「*あの喫茶店にコーヒーを飲みましょう」は何に着目して「で」→「に」が用いられたのか。顧(1983)も、日本語学習者の日本語レベルは明記されていない。顧(1983)では、示された誤用について「低学年にはよくみられるが、高学年にはあまりみられない」(p. 106)や「入門段階でみられる」(p. 111)のように書かれた箇所が数カ所ある。そのため、そのような記述がない誤用が中級レベルに見られる誤用であることが分かる。つまり、「*あの喫茶店にコーヒーを飲みましょう」は中級レベルに見られる誤用であるということである。顧(1983)によれば、場所を表す「に」も「で」も中国語に直すと、いずれも場所を表す名詞に前に置く介詞の「在」にあたるため、中国語を母語とする日本語学習者にとって「に」と「で」の使い分けは頭を痛める問題であるという。また、離れる場所を表す「を」についても、「『から』と『を』(移動)の混用」として「*私は去年北京大学から卒業した」や「*李さんは工場から退職してから居民委員会(町内会)で手伝っている」が挙げられている。これらも中級レベルに見られる誤用である。

問題となるのは、「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」のような「に」である。鈴木(1978)で見たように、日本語学習者は動詞の動作性に引かれ「で」を用いるので、「飲む」という動詞に着目し「で」を用いることができるはずである。もちろん、初・玉岡・早川(2013)で示すように、難易度の高い動詞が用いられる場合は誤用も多発する。だが、「飲む」は、「食べる」や「勉強する」などと同様に、初級日本語学習用教材の早い段階で学習される動詞であり、難易度は低い。初級レベルのときに見られた「*食堂にうどんを食べた」の「で」→「に」の誤用と「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」の「で」→「に」の誤用が同様なのであれば、日本語能力が中級レベルになっても、存在場所を表す「に」の習得は進んでいないということになる。だが、もしも「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」のような「で」→「に」の誤用が存在場所を表す「に」の過剰使用ではないとすれば、「で」→「に」の誤用がどのような用法の「に」なのかが問題となる。また、顧(1983)では、「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」という「飲む」を述語とする1例だけが示されていたが、「飲む」という動詞以外の動詞を述語とする文であっても、中級レベルの日本語学習者が「で」→「に」を用いるのであれば、それは日本語学習者にとって何らかの規則性があることも考えられる。

内山(1996)

内山(1996)は、中級レベルの韓国語話者 63 人と中国語母語話者 28 人を対象とし、正用文 1 つと誤用文 4 つの 5 つの文から正用の文を選ぶという格助詞テストを行ったが、レベルの差があったことから、最終的には韓国語話者 58 人のデータを用い分析している。その結果、「を」の正用順序は「対象」、「場所」、「起点」であり、「場所」、「起点」の用法は上級になっても習得されていない可能性もあること、「対象」の「を」はほぼ習得しているのに対し、「対象」の「に」は習得過程にあること、動詞が 2 つの名詞句と共に文を構成する「2 項動詞」の「に」では、「目標」、「場所」、「結果」・「対象」、「誘因」という正用順序であったことが示されている。これより、「に」の習得について日本語学習者はまず「に」を「物理的な着点」として理解し、それが移動の係らない「存在の場所」と「抽象的な着点」へと派生していく過程が読み取れると述べられている。問題文の例が示されていないため、具体的にどのような文における格助詞を対象としたのかは不明である。

迫田(2001)

迫田(2001)は、日本語学習者の用いた誤用から、日本語学習者には「中」などの位置を表す名詞と「に」、「建物」「地名」などの名詞と「で」をユニットにして用いるというストラテジーがあり、それを多用することによって誤用が産出するという仮説を立て調査を実施した。

調査対象となったのは、日本語学校あるいは大学で学習している中級レベルの日本語学習者である。中級レベルという日本語レベルについては、所属機関の教師と相談し日本語能力試験認定基準をもとに該当クラスが選定されているという記述があり、具体的な日本語能力については示されていない。日本語学習者の平均学習歴は、中国語話者が 1.49 年、韓国語話者が 1.46 年、その他の言語話者が 1.66 年であり、日本に滞在している平均年数は中国語話者が 1.26 年、韓国語話者が 1.38 年、その他の言語話者が 1.45 年であるという。中国語話者、韓国語話者、その他の言語話者(アメリカ 7 人、オーストラリア 2 人、タイ、シンガポール、カナダ、フィリピン、マレーシア、インドネシア、トルコ、イラン、スイス、オランダ、ペルー)の人数はそれぞれ 20 人で計 60 人である。

調査方法は、以下の a～d のように、「に」「で」「と」「を」から 1 つを選び()を埋めるという格助詞四肢選択形式で 33 文から成る 49 問の問題文である。問題文例とその種類は以下の a～d の通りである。

- a つくえの上()おいてあるりんご()もらってもいい? (「位置～+に」の問題例)
- b れいぞうこの中()きのう買ったパンがかたくなっている。(「位置～+で」の問題例)
- c 学生会館()アメリカからの留学生が 10 人とまりました。(「地名～+に」の問題例)

d 金さんは 12 才から東京()育ったので日本語が上手です。(「地名～＋で」の問題例)

分析の結果、仮説は支持され、日本語学習者には、「位置＋に」、「地名・建物＋で」のユニット形成のストラテジーがあり、ストラテジーを多用することが「に」と「で」の誤用につながっているという可能性があることが示されている。但し、日本語学習者は上記のストラテジーを用いることで、「に」と「で」のどのような用法を理解しようとしているのかについては考察されていない。

問題となるのは、調査票に用いられた問題文である。日本語学習者が位置を表す名詞には、「に」を後接し易いという傾向があるか否かを調べるためには、位置を表す名詞が「に」の選択を促しているか否かのみには焦点を当てた問題文を作成すべきであったと考える。例えば、a の問題文に対しては、「机()おいてあるリンゴもらってもいい?」、b の問題文に対しては、「冷蔵庫()昨日買ったパンが固くなっている」のように位置を表す名詞を伴わない問題文も作成すべきであった。c、d の問題文に対しては、反対に、c、d の問題文に位置を伴う問題文をも作成すべきであった。また、選択肢には、すべて場所を表す格助詞を用いるべきであったと考える。なぜなら、選択肢に含まれている「と」は、場所を表す格助詞の選択肢とはなにくく、正しい格助詞を選ぶ確率が 1/4 ではなく、実質 1/3 になっているからである。

蓮池(2004)

蓮池(2004)も、迫田(2001)の特定の名詞と「に」、「で」によるユニット形成ストラテジーの有無、場所を表す「に」の過剰使用について調べている。調査対象者は、中国語を母語とする日本語学習者が中級、上級レベル各 30 人、韓国語を母語とする日本語学習者が中級、上級レベル各 30 人の計 120 人である。中級レベルとは初級を終了し、日本語教育機関で『日本語中級 J301－基礎から中級へー』、『テーマ別中級で学ぶ日本語』、『日本語表現文型中級 I、II』、『現代日本語コース中級 I、II』を主教材とするクラスに在籍している日本語レベルである。上級レベルとは旧日本語能力試験の 1 級に合格しており、日本滞在歴が 7 年以内という日本語レベルである。日本語学習者が中級レベルであるとは、迫田(2001)と同様に初級レベルの日本語学習が終了しており、旧日本語能力試験の 1 級に合格していないという日本語レベルなのであり、後述する旧日本語能力試験の最も低いレベルである 4 級に合格しているという日本語レベルから、3 級あるいは 2 級に合格しているという日本語レベルまでが含まれており日本語レベルの幅がかなり広いことが分かる。

蓮池(2004)においても「に、で、を、と」からの格助詞選択穴埋め式テストの調査が行われている。問題文は、全 50 問から成り、「に」を正答とする問題文は「着点」が 11 問と「存在位置」が 4 問の計 15 問、「で」を正答とする問題文は「動作や出来事」が行われる場所」が 13 問、「範囲」が 2 問の計 15 問、「を」を正答とする問題文は「移

動の経路・動作の場所」が 10 問、「起点」が 5 問の計 15 問であり、「と」を正答とする問題文が 5 問である。

分析の結果、迫田(2001)に見られた「位置+に」のユニット形成の傾向は見られたが、「地名・建物+で」のユニット形成の傾向は見られなかったことが報告されている。また、中国語を母語とする中級レベルの日本語学習者が「に」の過剰使用が顕著であったと述べられている。「に」の過剰使用が見られた問題文は「来週、鈴木さんのうち(で)パーティーがあるそうです」、「これは私の家族の写真です。父の左(で)笑っているのは母です」、「入口(を)入ってすぐ右が、切符売り場だ」、「私の前(を)歩いているのは山田さんです」などが示されている。これらの「に」の過剰使用は、調査票の問題文中の動詞である「ある」、「住む」、「入る」、「乗る」、「勤める」などの特定の動詞が助詞選択のヒントになったとされている。蓮池(2004)は「に」の過剰使用の原因について、日本語学習用教材において「入ります(店に～)」「乗ります(～バスに)」のように「に」が「ある」、「住む」、「入る」、「乗る」、「勤める」などの動詞と共に提示されるため、日本語学習者が「にーある」「にー入る」のように「助詞+動詞」のかたまりで使用することが「に」の過剰使用につながっていると解釈している。

問題となるのは、以下の点である。日本語能力が初級レベルのときには存在場所を表す「に」の過剰使用が見られた。それは、日本語学習者が存在場所を表す「に」を理解しようとしていることが考えられた。だが、中級レベルでは日本語学習者が「に」を過剰使用することによって、「に」のどのような用法を理解しようとしているのかが考察されていない。また、調査票の問題文についても迫田(2001)と同様である。調査票の問題文の選択肢には、場所を表す格助詞の選択肢とはなりにくい「と」が用いられていることである。そのため、日本語学習者が正しい格助詞を選ぶ確率が 1/4 ではなく、実質 1/3 の確率となってしまう。

蓮池(2007)

蓮池(2007)では、L1 データと L2 データを比較することにより空間表現を表す「に」と「で」について L1 の転移の検証が行われた。「に」の過剰使用が韓国語母語話者にも見られたことが報告されている。調査対象者は L1 グループが日本語母語話者 34 人、韓国語母語話者 27 人、中国語母語話者 28 人、英語母語話者 26 人の計 115 人でそれぞれは日本、韓国、中国、アメリカに在住する大学生あるいは大学院生である。L2 グループが日本国内の日本語教育機関に通う日本語レベルが初級レベル～上級レベルの韓国語母語話者 32 人、中国語母語話者 32 人、英語母語話者 33 人の計 97 人である。L2 グループは、SPOT という小林(1998)の日本語テストによって 65 点満点中 30 点～47 点を下位群(初級後半～中級前半レベル)、48 点～65 点を上位群(中級後半～上級前半レベル)として分けられている。調査は、日本語学習者が建物の 1 階に人が 1 人、2 階に 2 人、3 階に 1 人、屋根の上に 1 人と猫が 1 匹、そして建物の前に人が 3 人いるという絵

を見ながら、絵の人物について場所を含めて詳しく描写するという筆記形式のタスクを用いたものである。その結果、蓮池(2004)の格助詞選択穴埋め式テストの調査では見られなかった韓国語母語話者の「に」の過剰使用が報告されている。

蓮池(2012)

蓮池(2012)では、蓮池(2007)の調査対象者と同じ日本語学習者に対し、格助詞選択穴埋め式テストの調査が行われている。それは、「で」が正答の問題が 10 問、「に」が正答の問題が 10 問、「を」が正答の問題が 10 問、ダミーとして「と」が正答の問題から成る計 37 問の調査票である。母語別についての結果は以下のようにまとめられている。1)韓国語話者は「に」の過剰使用や「に+ある」など形式重視による誤選択が少ない点で中国語話者や英語話者と明らかに異なっている。日本語との類似点が多い韓国語話者には負の転移も現れやすい。タスクのタイプの違いは L1 の転移の現れ方に影響を及ぼす。2)中国語話者には「に」の過剰使用の傾向が著しく、その結果「で」よりも「に」の問題が高い正答率を得ている。中国語話者は位置の名詞の存在の有無にかかわらず、「に」を過剰使用する傾向がある。特に日本語能力の低いグループでは問題文において動詞の対象が明示されている場合には、対象を持たない自動詞に比べ「で」を選択しやすい傾向がある。3)英語話者は、中国語話者よりも「で」の正答数が有意に高く、「に」の誤使用数が有意に低いという点で、韓国語話者と共通する傾向が見られた。下位群に動詞の動作性、状態性の区別や助詞と動詞のユニット形成による助詞選択法が定着していること、上位群ではユニット形成による誤用が非常に少なくなっている。

初・玉岡・早川(2013)

初・玉岡・早川(2013)においても、迫田(2001)の「場所+で」「位置+に」のユニット形成ストラテジーの多用による助詞の誤用があるかどうか、また、中国語の「在」の干渉があるかどうか調査されている。調査対象は、中国語を母語とする大学生 1 年生～3 年生の日本語学習者 201 人を対象に、16 点満点の読解テストから 13 点以上を上位群 62 名、10 点から 12 点を中位群 70 名、9 点以下を下位群 69 名の 3 つに分けられている。調査票は、「小鳥は木の上()鳴いている」の場合は、「へ、に、を、で」の中から、「引越しの時、昔のアルバムを実家()残してきた」の場合は、「で、に、を、が」の中から最も適当な 1 つを選ぶという方式の格助詞選択テスト形式の問題文 48 問から成る。調査は、(1)動詞の難易、(2)自他動詞、(3)格助詞の前に来る名詞の「場所」と「中」のような「位置」(4)格助詞の「で」と「に」、(5)読解力という 5 つの変数が設定され、格助詞の正誤を予測するという「分類木分析」が行われている。分析の結果、読解力が上がるほど場所を表す格助詞の正答率が上がっており、上位群では格助詞の前に来る名詞の「場所」と「位置」の影響が見られ、「場所」では動詞の難易、「位置」では「で」「に」が影響していたこと、中・下位群では、動詞の難易、動詞の自他が影響

していたという。ユニット形成は上位群の「位置」の場合にのみ見られ、「在」の干渉は見られなかったことが報告されている。

蓮池(2004、2007、2012)では、中国語を母語とする日本語学習者に「に」の過剰使用が見られること、タスクによっては韓国語を母語とする日本語学習者にも「に」の過剰使用が見られること、初・玉岡・早川(2013)では、動詞の難易度、動詞の自他が場所を表す「に」と「で」の選択に関わっているということである。

中級レベルの日本語学習者を対象とした習得に関する研究のまとめ

以上の先行研究から、中級レベルでは、動詞の動作性に着目した場所を表す「に」→「で」の誤用、場所を表す「を」→「で」の誤用が見られることが分かる(鈴木 1978)。特に「に」→「で」の誤用は、動作や行為の結果存在するモノを表す「に」を用いるべきところであっても、人やモノの移動先を表す「に」を用いるべきところであっても見られたのに対し(鈴木 1978)、存在場所を表す「に」→「で」の誤用について述べられているものは、見当たらなかった。また、「位置を表す名詞+に」や「建物・地名を表す名詞+で」のユニットの形成ストラテジーの多用によって誤用が現れること(迫田 2001)や「いる」、「ある」、「入る」などの特定の名詞を目当てに「に」の過剰使用があること(蓮池 2004)、動詞の難易度、動詞の自他が場所を表す「に」と「で」の選択に関わっていることが分かった(初・玉岡・早川 2013)。

中級レベルの日本語学習者を対象とした習得に関する研究の問題点

問題となるのは、中級レベルの日本語学習者は存在場所を表す「に」をどのように用いているのか、「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」のような「で」→「に」の誤用が、初級レベルに見られた存在場所を表す「に」の過剰使用による「で」→「に」の誤用と同じなのかという点である。そして、動詞の動作性に着目し「に」→「で」を多用する日本語学習者が、移動先を表す「に」をどのようにして身につけるのかについても問題となる。

2.2.4 日本語能力が上級レベルの学習者を対象とした習得に関する研究

日本語能力が上級レベルの学習者を対象とした習得に関する研究は、生田・久保田(1997)、杉山(2002)、坂本(2002)の順に示す。

生田・久保田(1997)

生田・久保田(1997)は、格助詞の誤用を把握し分析することを目的として調査を行っている。研修生の国籍は 17 カ国で職業は日本語教師である。調査の対象は国際交流基金日本語国際センターの研修生で上級レベルの 50 人である。上級レベルとは旧日本語能力試験の 1 級合格者もしくは研修中のテスト結果や同センターの専任講師 3 名以上の

判断によって旧日本語能力試験1級合格または旧日本語能力試験1級合格と同程度以上と判断された研修生である。

調査は、問題文合計 160 から成る「を」、「に」、「で」、「へ」、「と」、「から」、「より」、「まで」の中から最も適当な 1 つを選んで()に書き入れるという穴埋め式テストである。問題文の内訳は、「に」を正答とするものが 69 問、「で」を正答とするものが 23 問、「を」を正答とするものが 31 問、「から」を正答とするものが 16 問、「へ」を正答とするものが 1 問、「と」を正答とするものが 10 問、「より」を正答とするものが 4 問、「まで」を正答とするものが 6 問である。但し、このテストでは、「に」の到達点を表す機能、「へ」の方向、到達点を表す機能に関して両助詞が共起するという理由から、「到達点を表す機能」を問う問題文が除かれている。

分析の結果、正答率は「で」の「動作の場所」が 99.1%、「状況の場所」が 95%、「に」の「所在位置」が 91.2%、「を」の「対象」が 99.3%、「移動の経路・動作の場所」は 92.7%であったのに対し、「動作の起点」は 86%であったという。「を」の「動作の起点」の正答率が低かったのは「から」の誤選択によると述べられている。「に」→「で」の誤用は「できることなら、日本()住みたい」と「ビジネスホテル()泊まったんですが、ずいぶん高かったですね」という問題文がそれぞれ 50 人中 6 人であった。「で」→「に」の誤答は「日本()は握手はあまり一般的ではありません」が 59 人中 3 人であり、「すみませんが、ここ()たばこを吸わないでください」、「大阪()は『ありがとう』のことを『おおきに』といいます」という問題文がそれぞれ 50 人中 1 人であった。存在場所を表す「に」については、「あそこの木()赤い実がなっていますよ」「どこですか」という談話形式になった問題文の回答に当たるもので「ほら、あの建物の隣()ある木」という問題文が存在場所を表す「に」を正答とするが、「に」→「で」の誤用はなかった。

杉山(2002)

杉山(2002)は、日本語学習者の誤用の傾向を示すことを目的として調査を実施した。調査は、格助詞「が」、「を」、「に」、「で」を記入するという文章完成テスト、および、会話完成テストである。調査協力者は多国籍の日本語学習者 41 名(内、中国籍 32 名)であり、日本語学習時間 800 時間以上の旧日本語能力試験の 1 級に合格しているか、もしくはそれに相当する日本語レベルである。日本語レベルの判定は調査者と各日本語教育機関の日本語教員が判断したという。

その結果、日本語母語話者と日本語学習者が共に 80%以上が同一の回答をしたものの中に「高原は長野県にある」の場所を表す「に」が示されている。「着点」を表す「に」の正答率は低く「に」を選ぶべきところに「で」「を」が選ばれており、場所を表す「を」、「に」、「で」の使い分けは上級レベルの日本語学習者にとっても困難なようであると述べられているがその詳細は示されていない。

場所を表す「を」については、内山(1996)、生田・久保田(1997)とは反対に、離れる場所を表す「を」の正答率の方が通過場所を表す「を」の正答率よりも高いことが報告されている。それは、問題文の難易度が関係しているように見える。「起点」を表す「を」を正答とする問題文例は「長男は今年大学()卒業して・・・」のように初級レベルで学習する「大学を卒業する」の「を」が正答とされているのに対し、「通過場所」を表す「を」を正答とする問題文例は「坂道()転げ落ちるように妻の病状は悪化した」のように「坂道を転げ落ちる」は上級レベルの表現だからである。

坂本(2002)

坂本(2002)は、場所を表す「に」と「で」の間において「に」の過剰使用が見られるか、迫田(2001)のユニット形成ストラテジーの多用による誤用が見られるかなどを目的として、インタビューによる調査を行った。対象となったのは、大学または大学院に通っている旧日本語能力試験の1級に合格している中国語を母語とする4人の日本語学習者である。インタビューは30分程度であり、インタビューの実施者が1年10カ月の間に合計9回行ったという。インタビューの内容については記述がない。インタビュー後には、インタビュー実施者がインタビューの内容を1～2週間の間に文字化し、それを日本語学習者に見せ、「手がかりなしでその場で」日本語学習者が間違いだと気が付いた箇所を修正させたという。そして、日本語学習者が正しく修正できなかったものや見逃したものを誤用として分析したという。その結果、「に」の過剰使用は「あまり観察できなかった」が、「中+に」というユニット形成の多用による「で」→「に」の誤用が「多少見られた」という。「に」の過剰使用が「あまり観察できなかった」こと、ユニット形成の多用による「で」→「に」の誤用が「多少見られた」ことなど表現があいまいである。

上級レベルの日本語学習者を対象とした習得に関する研究まとめ

以上の先行研究から、杉山(2002)では「高原は長野県にある」の存在場所を表す「に」の回答が80%以上であったことから、上級レベルであっても存在場所を表す「に」を100%正しく用いることができないことが分かる。生田・久保田(1997)では、場所を表す「に」の正答率が90%であり、存在場所を表す「に」→「で」の誤用はないということが分かる。だが、存在場所を表す「に」の問題文が1問だけであったことから、正しい回答が偶然選ばれたことも否定できない。

場所を表す「で」は正答率が90%であり、「を」は「移動の経路・動作の場所」の正答率は92.7%であったのに対し、「動作の起点」は「から」との誤選択により正答率は86%であり「移動の経路・動作の場所」の正答率に比べて低かったということである(生田・久保田1997)。つまり、通過場所を表す「を」は日本語能力が中級レベルのときに習得が進んだことが考えられる。但し、問題文によっては、通過場所を表す「を」の正

答率と離れる場所を表す「を」の正答率が逆転すること(杉山 2002)が分かる。

2.2.5 日本語教育における格助詞研究のまとめ

以上、日本語学習者の場所を表す「に」、「で」、「を」の習得に関する先行研究を概観し、問題となる点を述べた。日本語学習者が初級レベルのときに現れる存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同による誤用が、中級レベルでは消えているのかどうかについて検証された研究は見当たらなかった。中級レベルに現れる「に」→「で」の誤用は、「*家でいる」(松田・斎藤 1992)のような存在文の「に」→「で」の誤用よりも、鈴木(1978)で見たように動詞の動作性に引かれ「で」が多用される誤用(「*私の父はバンコクの郊外で農園を持っている」や「*小鳥は木のえだでとまって、きれいな声で鳴いている」)の方が目立っていたからであろう。また、迫田(2001)以降の研究では、日本語学習者が「に」と「で」の使用に迷ったときに用いられるユニット形成ストラテジー(迫田 2001)の有無が検証されるようになったからでもある(蓮池 2004、2007、初・玉岡・早川 2003 等)。

本研究では、まず中級レベルの日本語学習者が存在場所を表す「に」をどのように用いているのかを調べなければならないと考える。その上で中級レベルに現れる「*クラスで2人韓国人がいる」、「*中国で、お盆のような日もある」、「*寮にいません、大学でいる」の誤用が初級レベルのときに現れる「*家でいる」の「に」→「で」の誤用と質的に同じであるか否かを明らかにする必要がある。また、初級レベルに現れた「*食堂にうどんを食べた」(久保田 1994)の「で」→「に」の誤用が中級レベルに現れる「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」(顧 1983)の「で」→「に」の誤用と質的に同じなのかも明らかにしなければならないであろう。

概観した日本語学習者の場所を表す格助詞の研究は、本研究に関係のあるものを抜粋し巻末の付録Ⅱに表 2-2 としてまとめて示す。また、2.2 の先行研究で示された日本語学習者の場所を表す「に」の誤用も、市川(1997)の『日本語誤用例文小辞典』における場所を表す「に」の誤用と共にまとめて巻末の付録Ⅱに表 2-3 として示す。

第 3 章

研究課題

第 2 章では日本語および日本語教育における格助詞の先行研究を分析した。本章の目的は研究課題を示すことである。第 2 章で見たように中級レベルの日本語学習者にはどのような存在場所を表す「に」→「で」の誤用が現れるのかが分かっていなかった。そのため、まず、中級レベルの日本語学習者に現れる存在場所を表す「に」→「で」の誤用を示す必要がある。次に、「*クラスで 2 人韓国人がいる」、「*あの喫茶店に コーヒーを飲む」、「*寮にいません、大学でいる」そして「*中国で、お盆のような日もある」の誤用がどのような「に」と「で」の混同によって現れるのか、第 2 章で見た先行研究と合わせて考察し研究課題を示す。また、研究課題を解明するための仮説を立て仮説を検証するための検証すべき項目と研究方法を示す。最後に調査協力者について述べる。

3.1 研究課題と仮説

第 2 章の先行研究では、初級レベルの日本語学習者には存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同による誤用が現れることを示した。上級レベルの日本語学習者にも存在場所を表す「に」→「で」の誤用が現れることが分った(杉山 2002)。中級レベルの日本語学習者は存在場所を表す「に」をどのように用いているのか。

3.1.1 中級レベルの日本語学習者が用いる存在場所を表す「に」

表 3-1 は、日本語能力が中級レベルの日本語学習者が書いた作文から場所を表す「に」と「で」が用いられている箇所を抜き出したものである。作文には、2.2.3 の日本語能力が中級レベルを対象とした先行研究では見られなかった「に」と「で」の用例があることに気がついたためデータとして活用した。その「に」と「で」の用例とは、「*クラスで 2 人韓国人がいる」、「*あの喫茶店に コーヒーを飲む」、「*寮にいません、大学でいる」そして「*中国で、お盆のような日もある」である。

作文は、筆者が担当した九州女子大学別科日本語研修課程の「中級クラス」に対し行われていた日本語の授業の 1 つである「作文」の中で書かれたものである。「中級クラス」の日本語学習者は、日本の大学への進学を目指す者、自国の大学で日本語および日本文化を学び半年間日本に滞在している短期留学生、配偶者の留学や仕事の関係で来日し滞在している聴講生などで構成されている。日本語能力の差も大きく、初級日本語学習用の教材を用いた日本語学習を終えたばかりの日本語レベルの者、旧日本語能力試験の 3 級または 2 級に合格している者、旧日本語能力試験の 2 級または 1 級受験予定の者、人数は最も少ないが旧日本語能力試験の 1 級に合格している者、自国の大学で日本

語および日本文化を1～2年間学んだという日本語レベルの者などである。作文は個人が特定されるような部分を省き、将来的に筆者が研究資料として用いても良いという了解を作文を書いた日本語学習者に得たものである。

表3-1に示した文は日本語学習者が書いた通りに抜き出しているため、日本語の文として正しいとは言えない表現や表記もあるがそのまま掲載した。作文は日本語学習者A～Eが2001年に、日本語学習者F～Mが2002年に書いたものである。作文は90分間の授業の中で約60分間使って書かれた。1回の作文の文字数は400字～600字でA4の用紙に横書きである。作文を書くときには辞書を用いても良く、筆者や他の日本語学習者と話しても良いという自由な雰囲気の中で書かれたものである。日本語学習者が書き終わった作文は筆者が日本語の表現を正してコピーを取った。作文の内容については、翌週の同じ曜日の同じ時限の作文の授業中に日本語学習者と筆者が1対1で10分程度、日本語学習者が自身の作文を見ながら筆者が作文のコピーを見ながら意味の取り違いのないことを確認した。

表3-1の左端の1行目1列の「名前」は、日本語学習者の名前をA～Mのアルファベットで表したものである。「名前」の()内の国名は日本語学習者の母語を示している。日本語学習者Lの母語が「英語・中国語」であるのはLの申告による。Lによれば、Lは中国で出生し何年後かに一家でカナダに移住した。Lの国籍はカナダでありLは中国語と英語をどちらが母語なのか分からない程両言語とも使いこなしているという。Lの両親の母語と国籍は不明である。

表3-1の1行目2列の「作文の題名」とは日本語学習者が書いた作文の題名を省略したものである。「こんな人」とは「○○さんってこんな人」という作文の題名の省略である。日本語学習者が2人1組または3人1組となり、出身地および来日前後の生活など自身のことをお互いに20～30分間話した後に、話をした相手について紹介するという課題の作文である。「子供の頃の家」とは「子供の頃住んでいた家」という題名の省略である。日本語学習者が2人1組または3人1組となり20～30分間子供の頃住んでいた家について話をした後に、日本語学習者自身が子供の頃住んでいた家について書いた作文である。「七色しか」も日本語学習者が2人1組または3人1組となり20～30分間、日本語学習者が知っている「昔話」について話した後に、書いた「昔話」である。「盆踊り」、「こどもの日」、「ねぶた」はそれぞれの日本語学習者が日本の年中行事が写されている写真(パネル)を見ながら書いた作文である。日本語学習者は自身が興味を持った1枚B4サイズの日本の年中行事の写真(パネル)を1枚選び、2人1組または3人1組となって写真について20～30分間話をした後、写真に写っている様子を描写するなどその年中行事について書いた作文である。「ねこ」、「人魚」、「かかし」、「ハッカー」、「オゾンホール」、「ホームヘルパー」は、日本語学習者が百科事典を作るつもりになって、それぞれについて100文字～150文字で書いた作文である。1行目3列の「番号」とは4列の2行目以下に示された日本語学習者が書いた文の番号を示すものである。

表 3-1 の 1 行目 4 列の場所を表す「に」、「で」とは、作文の中で用いられた「に」と「で」を抜き出したものである。「・・・」という表記は語の省略を表している。日本語学習者の実名が書かれていた部分は「○さん」と表記した。誤用には 1.1 と同じく文頭に「*」を付した。すなわち、問題となる格助詞に下線を施し、下線を施した格助詞が誤用である文には文頭に「*」を付しているということである¹⁷。以下、表 3-1 を示す。

表 3-1. 「中級クラス」の日本語学習者が書いた場所を表す「に」と「で」

名前	作文の題名	番号	場所を表す「に」「で」
A(中国)	こんな人	A-1	○さんとはソウル <u>で</u> 生まれ育ちの若い女子大学生だ。
		A-2	・・・お姉さんを離れて日本 <u>に</u> 来たそう。
		A-3	*今は学校の寮 <u>で</u> 住んでいる。
		A-4	まわり <u>に</u> 日本人の大学生がたくさんいるそう。
		A-5	東京の渋谷 <u>に</u> いて、・・・
B(中国)	こんな人	B-1	今、私のクラス <u>で</u> 一番やさしい人、ふとった人は誰？
		B-2	吉林省 <u>で</u> 生れた。
		B-3	*今の○さんは小倉 <u>で</u> 住んでいる。
		B-4	日本 <u>に</u> 初めて来た時の彼は・・・
		B-5	世の中 <u>で</u> 一番楽しかった時や思い出に残っていることを・・・
		B-6	託児所 <u>で</u> 子供たちと一緒に漢字の勉強だ。
		B-7	*大学の同じクラスの友達の誕生日パーティーの中 <u>に</u> 今の彼女と知りあった。
		B-8	・・・大学 <u>へ</u> 入るために勉強している。
B	盆踊り	B-9	お盆というのは、先祖の霊を迎えるために、公園など <u>に</u> 「やぐら」をたて、・・・ことだ。
		B-10	写真には、一人おとこの人は「やぐら」ていうところの上 <u>に</u> 立っていて、太鼓をしている。
		B-11	やぐらの上 <u>に</u> 、いろいろな白い紙をかけて、白い紙の上 <u>に</u> はたぶんこん回の祭のためにお金出した人の名前を書いている。
		B-12	*「やぐら」のまわり <u>に</u> 、いっぱいの人踊っている。

¹⁷ 誤用は、例えば M-9 の促音の表記のように、一方では「わらたり」(=「笑ったり」)の「っ」が抜けていたり、また一方では「深かった」と正しく表記されたりしているという場合もあるが日本語学習者が書いたものをそのまま示した。但し、このような誤用には誤用であることを示す「*」を付していない。

		B-13	ところで、・・・私の国 <u>で</u> は、正月の日は、家族の全員で一緒に料理を作って、・・・テレビを見る。
		B-14	近くの親戚の家 <u>に</u> 、おくり物を持って、札を言って行く。
		B-15	写真のように皆は一緒に踊ることがあまりない、中国 <u>で</u> 。
		B-16	*中国 <u>で</u> 、お盆のような日もある。
		B-17	でも、日本で、お盆の時、いろいろな所 <u>で</u> 盆踊が行われる。
B	七色しか	B-18	森の中 <u>に</u> 七色しかという神様がいました。
C(中国)	こんな人	C-1	*今年の十月に日本に来て今は「本村荘」というところ <u>で</u> 住んでいる。
		C-2	高校の時学校の寮 <u>に</u> 住んでみんなといっしょに遊んだりするときいちばんおもしろかったといった。
		C-3	大学に入 <u>って</u> 2年生になってからきれいな女を知り合って恋愛したといった。
D(韓国)	こんな人	D-1	*ほかの韓国人の中 <u>で</u> いた。
		D-2	今年の四月に日本 <u>に</u> 来た。
		D-3	*・・・、反面、心の中 <u>で</u> かちたいの勝負欲もある。
D	こどもの日	D-4	*古いそうな広いたたみま <u>で</u> いるから子供たちは生足でいる。
		D-5	うしろ <u>に</u> あるかいだん形の二三だんのだいの上 <u>に</u> 色々なものがおいてある。
E(モンゴル)	こんな人	E-1	*私は日本 <u>で</u> 留学している同級生について・・・
		E-2	*世界 <u>で</u> 美しい500の市として選ばれた・・・
		E-3	*ダイラン <u>に</u> 仕事をしながら、生活しているそう。
		E-4	お姉さんは日本 <u>に</u> 留学しているそう。
		E-5	*大学から歩いて5分のところ <u>で</u> 住んでいるそう。・
		E-6	・・・山の中 <u>で</u> 遊んでいたことだそう。
		E-7	山の中 <u>へ</u> 入って友達と一緒によく遊んでいたそう。
		E-8	○さんはおはかの山 <u>に</u> のぼって、・・・
		E-9	○さんは日本 <u>に</u> 日本語の勉強をしに来た。
		E-10	*将来は日本の大学 <u>で</u> 進学するつもりだそう。
F(中国)	こんな人	F-1	別科 <u>に</u> 入ってから・・・

		F-2	タイで生まれ、・・
		F-3	*学校に行かれてきた。
		F-4	・・日本に留学して来た。
		F-5	*日本に暮らすにつれて、
		F-6	日本に住みたいな、・・
		F-7	大学院に入りたいな
F	ねぶた	F-8	この祭りは・・青森県青森市で・・行われている・・。
		F-9	広い道路に集まり、・・
		F-10	普通のシャツをきている人も行列に入って、・・
		F-11	*その中で、サングラスをかけ、ねので頭をつつんで忍者のようにしている人もいる。
		F-12	巨大な人形の中に電気がつき、明るくて道を照らしている。
		F-13	道の両側にいる市民たちが長い首をして楽しみにしているようだ。
		F-14	*人形が道に行進し、・・
G(中国)	こんな人	G-1	*クラスで2人韓国人がいる。
		G-2	韓国のポハンで生れた。
		G-3	そこに住んでいたが、・・
		G-4	大学は大田で勉強した。
		G-5	*韓国の田舎みたい静かな所で主人と二人ですみたいから、・・
		G-6	ヨーロッパに旅行したくて、オーストラリアに留学したい。
		G-7	彼女はヨーロッパに旅行したくて、・・
		G-8	そのあと、韓国でホテルとか、空港とか、サービスの仕事をしたい。
G	ホームヘルパー	G-9	ホームヘルパーとは老人の家で世話をする人だ。
		G-10	ホームヘルパーはいえにいたら、子供たちもとても安心だ。
H(中国)	こんな人	H-1	*私のクラスの中で○というひとがいる。
		H-2	・・ふるいまちでうまれたそうだ。
		H-3	洛陽一番有名な高校にはいた。
		H-4	いい学校にはいたいとおもう。

		H-5	日本 <u>に</u> きって一番こまることは、・・
I(中国)	ねこ	I-1	いつもあたたかい <u>所</u> に <u>寝</u> ている。
	人魚	I-2	人魚は海 <u>に</u> いると言われていた。
		I-3	*始めの話は海 <u>で</u> のふねの人々を手伝ってあげた。
	かかし	I-4	かかしとは田園 <u>で</u> からすを追い出せるように作られた。
		I-5	かかしは田園 <u>に</u> あるのは本当の人間みたいなので、・・
	ハッカー	I-6	大きな会社のメインシステム <u>に</u> 入って・・
	オゾンホール	I-7	オゾンホールとは高い大気圏の中 <u>で</u> 大きいあながあるものだ。
J(イタリア)	子供の頃の家	J-1	この家はベルガモの田舎 <u>に</u> ある。
		J-2	だが、近く <u>に</u> 小山と野原がたくさんある。
		J-3	おじさんの家族は一階 <u>に</u> 住んでおり、私のは二階 <u>に</u> 住んでいる。
		J-4	玄関 <u>に</u> 入った後で、階段 <u>に</u> 上げなければならない。
		J-5	台所の隣に <u>小</u> い自習室がある。
		J-6	* <u>こ</u> こ <u>に</u> はたいてい私と父もパソコンを使ったり、電話をしたりする。
		J-7	一階の下 <u>に</u> 地下もある。
		J-8	ここ <u>で</u> 、洗濯し、
		J-9	*家の外 <u>で</u> ほかの種類の家もあるから、
		J-10	*庭 <u>で</u> 、家の後に <u>小</u> い家もある。
		J-11	家の前 <u>に</u> 父の会社の保管がある。
		J-12	そのビルと私の家と間 <u>に</u> サッカーをやる場所がある。
		J-13	ここ <u>で</u> 、小さい時、いつもいとこと一緒に遊んでいた。
		J-14	ヴェネチア <u>に</u> 住んでいる。
		J-15	あまり家 <u>に</u> 帰らないから、時々家 <u>に</u> 住んでいなくてさびしい。
K(中国)	子供の頃の家	K-1	私はシャンハイ <u>に</u> 住んでいる。
		K-2	*市中心 <u>に</u> バスで 20 分かかり、
		K-3	家はにぎやかなところ <u>に</u> すんでいる、・・
		K-4	ちかく <u>に</u> おおきいスーパーがあり、・・
		K-5	まわり <u>に</u> 2、30 ぐらいのマンションがあるのだ。

		k-6	マンションの中心に <u>に</u> 大きな花園があり、・・・
		K-7	ちかくに <u>に</u> 小学校があつて、・・・
		K-8	家の中 <u>で</u> 一番きにいったところの私のベッドだ。
		K-9	今日本に <u>に</u> 留学しているから、・・・
		K-10	中国に <u>に</u> かえるのきもちがだんだんつよくなるのだ。
		K-11	*6 階 <u>で</u> すんでいる私たちは、毎日かいだんをのぼらなければならないのだ。
L(英語・中国)	子供の頃の家	L-1	4つの家 <u>に</u> 住んでいたが、・・・
		L-2	その家 <u>に</u> 15 年ぐらい住んでいるから、・・・
		L-3	家族はまだその家 <u>に</u> 住んでいる。
		L-4	家の中 <u>で</u> も暗い：かべは木だから、・・・
		L-5	*駐車場は家につき、家の周り <u>で</u> にわがある。
		L-6	*きそ <u>で</u> 部屋と洗濯機部屋とれいぞうこもある。
		L-7	*父はだんろ <u>で</u> 火を点け、・・・
		L-8	私はいつもいま <u>に</u> いる。
		L-9	*オーストラリア <u>で</u> 留学し、・・・
M(中国)	子供の頃の家	M-1	ハルビンに <u>に</u> 住んでいた。
		M-2	家の近く <u>に</u> 商店がたくさんあつた、・・・
		M-3	小学校は家の後 <u>に</u> あつた、・・・
		M-4	学校 <u>へ</u> 行くのはかなり楽だ。
		M-5	*私と両親は二階 <u>で</u> 住んでいた。
		M-6	*この狭い部屋中 <u>に</u> いろいろな夢を持っていた。
		M-7	居間 <u>で</u> 御飯をたべたり、・・・
		M-8	アパートの前 <u>に</u> 公園があつた。
		M-9	あの部屋 <u>で</u> にこにこわたり、泣いたり、印象を深かった。

表 3-1 より、2.2.3 で示した鈴木(1978)で指摘されたように動詞の動作性に引かれたことによる「に」→「で」の誤用と思われる文があることが分かる。A-3 の「*今は学校の寮で住んでいる」、B-3 の「*今の○さんは小倉で住んでいる」、E-1 の「*私は日本で留学している同級生について」、E-11 の「*将来は日本の大学で進学するつもりだ」などである。

存在場所を表す「に」は以下のように正しく用いられている。A-4「まわりに日本人

の大学生がたくさんいるそうだ」、B-18「森の中に七色しかという神様がいました」、D-5「うしろにあるかいだん形の二三だんのだいの上に色々なものがおいてある」、F-13「道の両側にいる市民たちが長い首をして楽しみにしているようだ」、G-10の「ホームヘルパーはいえにいたら、子供たちもととても安心だ」、I-2「人魚は海にいると言われていた」、I-5「かかしは田園にあるのは本当の人間みたいなので」、J-1「この家はベルガモの田舎にある」（「ベルガモ」は「ペルガモ」の意味）などである。日本語学習者は、動詞の「いる」または「ある」との関係において、「日本人の大学生」、「七色しかという神様」、「市民たち」、「ホームヘルパー」、「人魚」、「かかし」、「この家」というさまざまな存在物が存在する「まわり」、「森の中」、「うしろ」、「道の両側」、「家」、「海」、「田園」というさまざまな場所に正しく存在場所を表す「に」を用いて表していることが分かる。

他方、動作場所を表す「で」→「に」の誤用も見られる。B-12「*『やぐら』のまわりに、いっぱいの人は踊っている」、E-4「*ダイランに仕事をしながら、生活しているそうだ」、F-5「*日本に暮らすにつれて、・・・」、J-6「*ここにはたいてい私と父もパソコンを使ったり、話をしたりする」などである。これらの誤用が初級レベルと中級レベルでは何が異なるのかを調べなければならないが、本研究では分析の対象としていないため、今後の課題となる。

存在場所を表す「に」→「で」の誤用は以下の誤用である。D-1「*ほかの韓国人の中でいた」、F-12「*その中で、サングラスをかけ、ねので頭をつつんで忍者のようにしている人もいる」、G-1「*クラスで 2 人韓国人がいる」、H-1「*私のクラスの中で〇というひとがいる」のように人の集合体を表す場合である。これらは本研究で明らかにしようとしている中級レベルの日本語学習者に現れる「に」→「で」の誤用である。

日本語学習者Bが書いた「*クラスでいるの？誰ですか？」と日本語学習者Aが書いた「*友達。寮で何人いますか」も人の集合体を表している。日本語学習者Bは、B-1の「今、私のクラスで一番やさしい人、ふとった人は誰？」について、筆者の「〇さんは太っていませんよ」（「〇さん」は日本語学習者の名前）という発話に対し、「太っていますよ」と言い、「*クラスでいるの？誰ですか？」と言いながら目の前に置いてある作文用紙の空いた箇所へ書き込んだ。日本語学習者Aは、A-3「*今は学校の寮で住んでいる」とA-4「*まわりに日本人の大学生がたくさんいるそうだ」について、筆者の「日本人の友達が寮にたくさんいるんですか」という質問に対し、「いいえ」と答え、「*友達。寮で何人いますか」「*寮にいません、大学でいる」と言いながら目の前に置いてある作文用紙の空いた箇所へ書き込んだ。

また、日本語学習者Aが書いた文の内、後者の「*寮にいません、大学でいる」の「に」→「で」のように、「寮」と「学校」という2つの場所が対比された存在文における誤用もある。日本語学習者Aが「*寮にいません、大学でいる」の「で」を用いた理由は、1.1で述べたように、日本人の友達がいるのが寮ではなく大学だからだ、大学を強調し

ているということであった。

このように日本語学習者は、人の集合体を示す場合に「に」→「で」を誤用したり、対比した場所の1つを強調する場合に「に」→「で」を誤用したりしているようである。さらに、B-16の「*中国で、お盆のような日もある」のように文頭に置かれた場所名詞句に「に」→「で」が誤用された文もある。日本語学習者Bは、日本のお盆について作文を書いたが、中国を話題にする際にはB-16のように「中国で」を文頭に置いている。日本の話題に戻る際にはB-17の「でも、日本で、お盆の時、いろいろな所で盆踊が行われる」と「日本で」を接続詞に続く文の文頭に置いている。他にも、J-10の「*庭で、家の後に小さい家もある」がある。日本語学習者Jは自身が育った家について作文を書いたが、家の様子を描写した後、庭を話題にする際には、J-10のように「庭で」を文頭に置いている。

3.1.2 存在場所「に」と範囲限定「で」の混同による「で」→「に」の誤用が現れる発達段階があるか

「*クラスで2人韓国人がいる」における「に」→「で」の誤用は、2.2の先行研究で見たように、中級レベルの日本語学習者を対象とした先行研究では誤用例として挙げられていなかったものである。この誤用は、3.1.1で示したように中級レベルの日本語学習者が書いた作文の中に現れたものである。

2.2の先行研究で示したように迫田(2001)、蓮池(2004)などでは、「に」と「で」の選択に迷った場合に、日本語学習者は次のようなストラテジーを用いることが主張されていた。

- ・ 「地名・建物を示す名詞+で」というユニットの形成と、「位置を示す名詞(例：中・前)+に」というユニットの形成のストラテジー(迫田 2001)。
- ・ 存在動詞「いる(ある)」を目当てに「に」を選ぶというストラテジー(頼 2002、蓮池 2004)。

だが、日本語学習者が単純にこれらのストラテジーを用いているならば、(1)のような誤用は現れないことが考えられる。

日本語学習者(中国語話者)

- (1)*クラスで2人韓国人がいる。
- (2) ホームヘルパーとは老人の家で世話をする人だ。
- (3) *ホームヘルパーはいえにいたら、子供たちもとても安心だ。

(1)、(2)、(3)は1人の日本語学習者が同じ時期に書いた文である。(1)の「*クラスで

2人韓国人がいる」と(3)「*ホームヘルパーはいえにいたら、子供たちもととても安心だ」は共に存在動詞「いる」を伴う文だが、日本語学習者は(3)では正しく存在場所を表す「に」を用い、(1)では誤って「で」を用いている。

これらの例はどちらも動詞が「いる」なので、単純に「いる」を目当てに「に」を選んでいるとは考えにくい。また、格助詞の前の名詞も「クラス」という名詞であり、地名または建物を表す名詞ではないので、名詞を判断の基準として格助詞を選んでいるとも考えにくい。さらに、(2)「ホームヘルパーとは老人の家で世話をする人だ」のように、動作場所を表す「で」が正しく用いられている文もあることから、日本語学習者 G は、動作場所には「で」を用いるということは一応理解していると推測される。

1.1 で述べたように、(1)の「に」→「で」を用いる日本語学習者は、「クラスで誰と仲がいい？」のような範囲限定を表す「で」を理解しているが、範囲限定を表す「で」を完全に習得しているというわけではないと思われる。そのため、範囲限定を表す「で」と類似の概念を持つ「クラスに2人韓国人がいる」の「に」が混同されてしまったことが考えられた。類似の概念とは以下のような概念である。2.1.3.11 で述べた格助詞「に」の存在表現の「絶対存在文」(西山 2003, pp. 394-395)、あるいは、「特定の集合における要素の有無を表す表現」である「限量的存在文」(金水 2006, pp. 13-14)における「に」と、2.1.3.10 で述べた格助詞「で」の限定の表現である(寺村 1982、間淵 2000)。

西山(2003)によると、「絶対存在文」(p. 395)とは場所表現を伴わない「太郎の好きな食べ物がある」のような文だが、例えば、「君たちのなかに、洋子を殺した人がいる」(p. 402)も「絶対存在文」(p. 395)であるという。「洋子を殺した人」という主語名詞句は「変項名詞句」(p. 402)であり、文全体はその変項の値の有無を述べているだけであって、その値がどこか空間的な一定の位置を占めていることを述べているわけではないからである(西山 2003, p. 402)。

久野(1973)は、存在文の基本的語順についての議論の過程であらゆる存在文には場所辞(locative)が不可欠であるし、例えば「米の嫌いなひとがいる」という表面上場所を表す名詞句を欠く文であっても、「この世のなかに」と解釈しても良く「仮定的文法形式」(p. 288)を認める必要があると主張した。

それに対し、西山(2003)は「米の嫌いなひとがいる」を言い替えた「この世のなかには、米の嫌いなひとがいる」の「この世のなかに」を「米の嫌いなひと」の指示対象が位置する場所辞と考えるならば、「米の嫌いなひとがいる」が「場所存在文」(p. 394)の一種となるが、「この世のなかには」は場所存在文ではなく、「この世界を構成するメンバーのなかには」という意味であって「絶対存在文」(p. 395)であるとしている。

また、西山(2003, p. 407)は存在文の曖昧性についても述べている。存在文「Aが存在する」は、Aを指示的名詞句と読むか、「変項名詞句」(p. 407)として読むかに応じて場所存在文と「絶対存在文」(p. 395)の解釈ができるという。例えば、「この村にフランス語を話すひとがいる」の「フランス語を話すひと」を「変項名詞句」ととり、全体を

「絶対存在文」(p. 395)と解釈すると、「この村の村民のなかに、フランス語を話すひとがいる」あるいは、「この村の村民のなかの誰かがフランス語を話す」と言い換え可能な読みになり、「この村に」が地理空間としての場所ではなく、「この村の共同体のメンバー」(p. 407)であって、「変項 x の走る領域を表す機能」(p. 407)をもつことになると述べている。

金水(2006)においても、「子供が公園にいる」は「物理的な空間と存在対象(主語の指示対象)との結びつきを表す表現」(金水 2006, pp. 13-14)であるのに対し、「授業中に寝ている学生がいる/ある(寺村 1982)」は「特定の集合における要素の有無を表す表現」(金水 2006, pp. 13-14)であると述べられている。

このように、存在文には「絶対存在文」(西山 2003, p. 395)あるいは「特定の集合における要素の有無を表す表現」(金水 2006, p. 14)という解釈があるために、この「に」と、範囲・基準を定める限定の表現(間淵 2000)の「で」は類似の概念であり、日本語学習者によって混同されるのだと考える。すなわち、「クラスに2人韓国人がいる」の「クラスに」は場所存在文(西山 2001, p. 395)ではなく、「クラスを構成するメンバーの中には」という意味であって「絶対存在文」(西山 2001, p. 395)と読める。それは特定の集合である「クラス」における「2人の韓国人」という要素が有ることを表す表現なのである。一方、第2章の「で」の限定の表現で見たように、「日本でいちばんよいまちだ」の「で」は範囲・基準を定める限定の表現である(間淵 2000)。「日本でいちばんよいまちだ」とは日本を構成するメンバーである町の中における一番良い町という属性を有することを表す表現なのである。

すなわち、両者に共通する類似の概念とは、「クラスに2人韓国人がいる」の「クラス」が「クラスを構成するメンバーの集合体」を表し、「日本でいちばんよいまちだ」の「日本」が「日本を構成するまちの集合体」を表しているという概念である。そのため、「クラスに2人韓国人がいる」が、「クラスで誰と仲がいい？」の「クラス」が「クラスの学生」という集合体の「誰と仲がいい？」と判断・決定する上での範囲・基準を定める限定の表現と混同されてしまうのである。

本研究では1.4で定義したように、「日本でいちばんよいまちだ」の「で」を範囲限定を表す「で」と呼んでいる。まずは、中級レベルの日本語学習者に見られた「*クラスで2人韓国人がいる」の「に」→「で」の誤用が、中級レベルの他の日本語学習者にも見られ、その誤用が範囲限定を表す「で」と関係があるか否かを調べるのが課題となる。もしも、中級レベルの他の日本語学習者にも「*クラスで2人韓国人がいる」の「に」→「で」の誤用が見られ、その誤用と範囲限定を表す「で」との間に何らかの関係があることが示唆されれば、次には、より多くの日本語学習者を対象にして調査し分析を行う必要がある。そして、より多くの中級レベルの日本語学習者に「*クラスで2人韓国人がいる」の「に」→「で」の誤用が見られ、その誤用が範囲限定を表す「で」との間に何らかの関係があること示されれば、中級レベルには存在場所を表す「に」と

範囲限定を表す「で」との混同によって「*クラスで2人韓国人がいる」の「に」→「で」の誤用が現れるという発達段階があることを示すことができるのではないだろうか。これが第一の研究課題となる。

研究課題 1.

中級レベルには存在場所「に」と範囲限定「で」との混同により「に」→「で」の誤用が現れる発達段階があるか。

この第1の研究課題を明らかにするために以下に示す仮説とその仮説検証項目Ⅰ～Ⅲを立てる。それぞれの項目を検証した結果が第1の研究課題の回答となる。以下、仮説とその検証すべき項目を示す。

仮説：「*クラスで2人韓国人がいる」の「に」→「で」の誤用は、存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との混同によるものである。

仮説検証項目Ⅰ：数量詞、「中」などと共に用いられた場所名詞が集合体を表すような文に、存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用が見られる。

なぜならば、日本語能力が中級レベルの日本語学習者には「*クラスで2人韓国人がいる」のような誤用が現れるからである。「*クラスで2人韓国人がいる」の「に」→「で」の誤用は「クラス」は当該学習者にとって単なる場所ではなく「人の集合」と解釈された可能性がある。そのような解釈は当該文に数量詞の「2人」、「韓国人」といった人に言及する名詞が出現していることから予想される。「クラス」が「人の集合」と解釈された可能性がある誤用文には「*私のクラスの中で○というひとがいる」もある。当該文は「中」、「○というひと」といった人に言及する名詞が出現していることから予想されるのである。

仮説検証項目Ⅱ：日本語を学習する環境が異なっても日本語レベルが同じであれば、数量詞、「中」などと共に用いられた場所名詞が集合体を表すような文に、存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用が見られる。

仮説検証項目Ⅲ：日本語を学習する母語が異なっても「中位レベル」であれば、数量詞、「中」などと共に用いられた場所名詞が集合体を表すような文に「で」を用いる誤用が見られる。

なぜならば、発達段階とはある1つの項目の習得において、同じ言語を学習する学習者

が辿る習得の道筋のことで、学習者の母語からの転移が習得の途上に出現することも分かっているが、学習者の母語や学習の方法などが異なっている、同じ言語を学習する学習者間に共通した発達段階が存在することも分かっているからである(Ellis, 1985, Towell & Hawkins, 1994, 白畑・若林・村野 2010)。

特に仮説検証項目Ⅲについては、○で見た日本語学習者の誤用例から分かるように、中国語話者に現れた「*クラスで 2 人韓国人がいる」の「に」→「で」の誤用と同様の誤用が中国語話者以外の学習者にも現れている。「*ほかの韓国人の中でいた」は韓国語話者に現れた「に」→「で」誤用である。「ほかの韓国人の中」は場所を表す名詞ではないが、人の集合を表す名詞句に「に」→「で」が誤用されていることから、韓国語話者にも「*クラスで 2 人韓国人がいる」の「に」→「で」の誤用が現れる可能性もあることが考えられる。

3.1.3 移動先「に」と動作場所「で」の混同による「で」→「に」の誤用が現れる発達段階があるか

1.1 で述べたように、初級レベルの日本語学習者には「家にいる」のような存在場所を表す「に」と「家で勉強する」のような動作場所を表す「で」の混同による誤用が見られることが知られている(久保田 1994、八木 1996 等)。以下の(4)は、存在場所を表す「に」の過剰使用による「で」→「に」の誤用であるという(久保田 1994)。

(4) *食堂にうどんを食べました(久保田 1994)。

一方、以下の(5)は中級レベルの日本語学習者の誤用である。

(5) *あの喫茶店にコーヒーを飲みましょう(顧 1983)。

(4)は当該行為の主体の場所への移動が含意されず、「食堂」に行為主体が存在しうどんを食べたことが表されているのに対し、(5)は「あの喫茶店」に行為主体がまだ存在しておらずこれから移動することが含意されている点に違いがある。学習者は(5)の文では、移動を表す動詞を用いることができなかったものの、「あの喫茶店に行って(移動して)コーヒーを飲もう」という文を想定していることが考えられる。すなわち、「あの喫茶店でコーヒーを飲む」に対応する中国語の翻訳は「在那个喫茶店飲咖啡」だが「在」の代わりに「去」(=「～に行く」)という移動を表す動詞を伴う文を想定していることが考えられる。1.1 では(4)と(5)の「で」→「に」の誤用の質的違いを明らかにすることができれば、日本語学習者の場所を表す「に」の発達段階の 1 つが明らかになると考えた。

まず、日本語能力が初級レベルの日本語学習者を対象とした、場所を表す「に」と「で」

の習得に関する研究について触れておく。2.2.3 で述べたが、久保田(1994)は、英語を母語とする日本語学習者 2 人の作文や発話を観察した結果、「横浜へ(に)買い物に行く」の文型では「へ(に)」を用いるべきところに「で」を用いる誤用が見られるものの、「カナダへ(に)帰った」の文型では、「へ(に)」→「で」の誤用が見られなかったこと、「*食堂にうどんを食べた」の「で」→「に」のように存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同による誤用が見られたことを報告している。久保田(1994)では、穴埋めテストの結果、「横浜に買い物へ行く」のような「に」が誤用とされているのは、「に」が移動先を表すものとして用いられたのではなく、「に」が存在場所を表すものとして用いられたからであることが確認されている。

また、久保田(1994)によれば、「映画を見に渋谷へ行く」の「へ」は正しく選択されていることから、「行く」と「場所」(「渋谷」)が近い場合には「へ」を正しく選択できるが、「行く」と「場所」の間に「見に」のような移動を示さない動詞が置かれることが「で」の誤選択となった可能性があることや、「I'll go shopping at Ginza」のような「at」を「で」に置き換える英語の干渉の可能性があると解釈されている。八木(1996)も、タイ語やマレー語などの母語の異なる初級レベルの日本語学習者 17 人の作文を分析した結果、「明日北海道に行く」や「田中さんにハンカチをあげた」のような「に」の正用率は高かったが、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との間の誤選択が「で」と「に」の正答率を低くしていたと報告している。

次に、日本語能力が中級レベルの日本語学習者を対象とした研究の中で、本研究に関連の深いものをあげる。鈴木(1978)は、東アジア出身の日本語学習者が書いた作文を分析した結果、「*部屋でテレビを置いたので、狭くなった」、「*9 時に中河原駅で集まった」のような「に」→「で」の誤用について、前者の誤用は、動詞の動作性に引かれたためであり、後者の誤用は、移動を表す動詞だが、普通の動詞と見られたためであろうと考察している。迫田(2001)は、中国語を母語とする日本語学習者 20 人など計 60 人に対して、「に、で、を、と」からの格助詞選択穴埋め式テストの調査を実施した結果、「中、前」などの位置を示す名詞+「に」、「建物、地名」などを表わす名詞+「で」というユニットを形成して用いるストラテジーを多用することが学習者の「に」、「で」の誤用を産み出している可能性がある」と述べている。

蓮池(2004)も中国語を母語とする日本語学習者 30 人など計 120 人に対して、「に、で、を、と」からの格助詞選択穴埋め式テストの調査を実施した。その結果、中国語を母語とする日本語学習者が「*鈴木さんのうち()パーティーがある」の()に「に」を誤用するのは「ある」という動詞と「に」を結び付けることにより引き起こされた「に」の過剰使用による可能性がある」と指摘している。このような「に」の過剰使用は「ある」の他にも「入る」や「着く」などの特定の動詞と結びつけられていたという。蓮池(2004)は「過剰一般化」を「過剰使用」の一種であるととらえ、学習者が特定の助詞を他の助詞より多用する現象を総称する用語として「過剰使用」を用いている。

また、同じく格助詞の選択穴埋めテスト分析を行った蓮池(2012)は、「～で本を読む」のようにその対象に対し「を格」を取る動詞文(以下、「他動詞文」)では動作の場所を表す「で」の正答率が81.3%であったのに対し、「～で遊ぶ」のように「を格」を取らない自動詞文(以下、「自動詞文」)のける動作の場所を表す「で」の正答率は68.8%と低かったことから、日本語学習者は動詞が対象物をもつかどうか、あるいは対象を示す「を」が文中に存在するかどうかを手がかりにして動作の場所を表す「で」を選択する可能性があるという指摘している。すなわち、「で」を正答とする他動詞文において正しく「で」を選ぶ頻度と自動詞文における同頻度とを比較すると、前者が後者より多いと報告されている。初・玉岡・早川(2013)においても、迫田(2001)の示した「位置+に」のユニット形成のストラテジー、動詞の難易度、動詞の自他が場所を表す「に」と「で」の選択に関わっていることが述べられている。

以上の先行研究をまとめると、初級レベルの日本語学習者は、「明日北海道に行く」や「田中さんにハンカチをあげた」のような「に」を正しく用いることができるが、文型によっては、「へ/に」を用いるべきところに誤って「で」や「に」を用いてしまうこと、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との間には、混同が見られることが分かる。特に、「横浜に買い物に行く」の例では「に」が移動先を表す「に」ではなく存在場所を示す「に」と混同されたという久保田(1994)の指摘は看過できない。なぜならば、この指摘は移動動詞文においても存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同が起こる可能性を示唆するものだからである。

一方、中級レベルの学習者においては、動詞の動作性の大小が「に」→「で」の誤用に関与すること、「位置を表す名詞+に」や「建物、地名などの名詞+で」のユニット形成ストラテジーの多用が「に」→「で」の誤用に関与すること、「ある」、「入る」、「着く」など特定の動詞と「に」との共起の頻出が「に」→「で」の誤用に影響するといったことが指摘されている。また、自動詞文では他動詞文よりも「で」正答率が低くなることから、「で」→「に」誤用の頻度が上昇することが推測される。このように「で」→「に」の誤用についてはこれまで異なるレベルの学習者を対象とした様々な研究が行われ、この誤用の実態について多くの有益なデータが提示されてきた。しかしながら、「で」→「に」という誤用が生じる原因、とりわけ、中級レベルの学習者におけるその原因および「で」「に」という格助詞の習得段階との関係を論じたものは見当たらない。

ところで、(5)「あの喫茶店にコーヒーを飲もう」といったタイプの「に」の誤用の原因は何であろうか。鈴木(1978)の指摘するように、学習者が動詞の動作性に注目して「に」と「で」の選択を行うのであれば、動作性を持つ動詞「飲む」が出現した(5)では正しく「で」が選択されるはずである。また、迫田(2001)が言うように、学習者の「建物、地名+で」というユニット形成が「に」と「で」の選択に影響を与えているのだとすれば、「喫茶店」という「建物」を示す名詞が出現した(5)では正しく「で」が選択されるはずである。しかし、実際には鈴木(1978)、迫田(2001)の予想とは反して、学習者

は「で」ではなく「に」を選択するという過ちを起こしている。このことは、「で」→「に」の誤用の背景には鈴木(1978)、迫田(2001)が指摘したものとは異なる要因が関与していることを示唆する。それでは、鈴木(1978)、迫田(2001)とは異なる観点からの研究はこの誤用を説明できるだろうか。蓮池(2004)は「ある」「入る」「着く」といった特定の動詞が「に」の過剰使用を引き起こすと指摘していたが、(5)の「飲む」は特別「に」と結び付く動詞とはいえない。また蓮池(2012)は、学習者は当該動詞が「を格」を取ることが手がかりにして「で」を選択すると指摘していたが、(5)では「コーヒーを飲む」のように「を格」が出現しているにも関わらず、「で」が選択されていない。つまり、これまで先行研究が提示してきた説明では(5)の誤用はうまく解釈されないということである。

以上の考察から、本研究は、(5)の「で」→「に」の誤用は従来先行研究が提示してきたものとは異なる原因、すなわち、(5)の誤用は動作場所を示す「で」と移動先を示す「に」の混同によって引き起こされたと考えるに至った。

日本語能力が中級レベルの学習者は、動詞の動作性に引かれ、「に」を用いるべき箇所に「で」を誤用する(鈴木 1978)。そのような学習者が、移動先を表す「に」を用いることができるようになるためには、移動先を表す「に」が動作場所を表す「で」とは異なるということを認識している必要がある。すなわち、移動動詞と共に用いられた「に」は「移動の到着点」を示すこと(國廣 1980)、つまり、「移動先」という概念の認識がポイントとなる。

先述したように、「移動の到着点」を表す「に」については、初級レベルの学習者でも「明日北海道に行く」や「田中さんにハンカチをあげた」といった文はある程度正しく用いることができるという報告がある(久保田 1994、八木 1996 等)。したがって、中級レベルの学習者は「に」と「移動先」という概念の関連付けをある程度獲得していると思われる。そのように考えるならば、(5)「あの喫茶店にコーヒーを飲もう」の誤用は動作場所を示す「で」と「移動先」を示す「に」との誤用と考えることは不可能ではない。というのも、「あの喫茶店」の「あの」は指示対象である場所「喫茶店」が話し手の現在いる場所から離れた位置にあることを示す指示詞であることから、学習者は当該文を「コーヒーを飲む」ために「あの喫茶店」へ「行く」という移動を含意したものと解釈した結果、その意味上の「移動先」となる「喫茶店」に「に」を付加してしまったと考えることができるからである。

しかし、上述のように考えるならば、例えば、「あの喫茶店」ではなく「この喫茶店」のように動作の場所が移動を伴わない場合はどうなるかが問題になるであろう。実際、(5)の場所部分のみが異なる「*この喫茶店にコーヒーを飲もう」は、「この喫茶店」の「この」が話し手の存在場所を示す指示詞であることから、「あの喫茶店」における「あの」と比べれば、移動は想定しにくい。つまり、「*この喫茶店にコーヒーを飲もう」における「に」の誤用は(5)「*あの喫茶店にコーヒーを飲もう」における「に」の誤用と

は異なるものと考えることができるのである。それでは、「*この喫茶店にコーヒーを飲もう」における「に」はどのような用法の「に」なのだろうか。本研究は、「*この喫茶店にコーヒーを飲もう」における「に」は存在場所を示す「に」と移動先を示す「に」の両方の解釈が可能だと考える。存在場所を示す「に」の解釈は前述のように「この」という指示詞が話し手の存在場所を示すことに因るもので、一方、移動先を示す「に」の解釈は、当該の場所が話し手の眼前にはあるものの、話し手自身はまだその場所の中にはいないというやや特殊な状況下での解釈である。

以上をまとめるならば、本研究は、中国語を母語とする中級レベルの日本語学習者に見られる(5)「*あの喫茶店にコーヒーを飲もう」における「で」→「に」の誤用は、これまで先行研究が指摘してきたような存在場所を表す「に」との混同ではなく、「あの喫茶店」が示す場所が「移動先」と解釈された結果生じたものと考ええるということである。これが第二の課題である。第二の課題を以下に示す。

研究課題 2.

中級レベルには移動先「に」と動作場所「で」との混同により「で」→「に」の誤用が現れる発達段階があるか。

この第2の研究課題を明らかにするために以下に示す仮説とその仮説検証項目ⅠとⅡを立てる。それぞれの項目を検証した結果が第2の研究課題の回答となる。以下、仮説とその検証すべき項目を示す。

仮説：「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」の「で」→「に」の誤用は、移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同によるものである。

仮説検証項目Ⅰ：「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」の「で」→「に」の誤用は、中級レベルの日本語学習者にとって場所への移動があると判断された場合に、意味的に場所への移動が含意される「ル形」の文において動作場所を表す「で」を、移動先を表す「に」と混同したことによるのであって、存在場所を表す「に」と混同したことによるのではない。

「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」は移動を表す動詞を伴わない文であるが、意味的には場所への移動が含意される文である。では、移動を表す動詞を伴う文の場合には日本語学習者は動詞が表す移動性と「に」をどの程度結びつけるだろうか。

以下の(6)～(10)は、中級レベルの日本語学習者の「に」と「で」の使用例である。(7)は、鈴木(1978)で「*9 時に中河原駅で集まりました」が誤用とされていたため本節でも誤用の印「*」をつけているが、「集まった」という動作行為を表すために「で」が用

いられたのであれば正しい。

- (6) *石で座る。
- (7) *駅で集まる。
- (8) *寮で住んでいる。
- (9) 教室に入る。
- (10) 京都に住んでいる。

(6)の「で」の誤用は、日本語学習者が「座る」という動詞の動作性に引かれたものであり、(7)の「で」の誤用の原因は不明であるという(鈴木 1978)。(8)の「で」の誤用は、「地名・建物＋で」というユニット形成ストラテジーを多用したことによって、起こったものであるという(迫田 2001)。一方、(9)と(10)の「に」の正用は、「入る」、「住む」など特定の動詞を目当てに「に」を選ぶというストラテジーがあることから(蓮池 2004)これを用いたとも考えられる。蓮池(2004)は、「入口を入ってすぐ右が、切符売り場です」の「を」を用いるべきところに誤って「に」が選択されるのは、「入る」を目当てに「に」を選択するという、「に」の過剰使用によるものであると考察している。

だが、「座る」、「集まる」、「住む」、「入る」と共に用いられる「に」が、どのような順に習得されるのかについては、まだ分かっていない。「に」の習得の様子を明らかにするためには、上記の「に」がどのような順に正しく用いることができるようになるのかを探る必要がある。

上記の動詞は、寺村 (1982)では「移動を表わす動詞」(p. 108)とされ、コト¹⁸の表現において必要不可欠な「動きの行きつくところに関係の深いもの」(p. 112)である「に」と共に用いとされている。

寺村(1982)は、移動を表す動詞で場所を表す「に」と共に用いられる動詞を「入ル、着ク；泊マル」類(p. 112)と呼んでいる。さらに、寺村(1982)は、「入ル、着ク；泊マル」類の動詞を「A」「B」「C」に分けている。「A」は「XガYニ(またはYへ)」の「Yニ」(到達点、Goal)が欠けると、コトの表現としては不完全なものと感じられるもので、「入る」や「着く」のような移動の動作を表す典型的な種類の動詞であるとされている(寺村 1982, pp. 120-121)。それに対し、「C」は「ヒマラヤの高地に住む」、「ホテルに泊まる」、「水面に浮く」のような文の動詞で、「移動そのものを表すのではなくて、移動した結果、変化した結果の状態を表している」とされている(寺村 1982, p. 113)。「C」の「泊まる」や「浮く」などの動詞は、「移動そのものではないものの、移動を前提とし、その結果の表われである事象を表している点で『入ル』類に準ずるものと考えてよい」

¹⁸ コトとは「外界の様子、ものや人の状態や変化、働きを表わす『述語』と、その述語を中心として描かれる事象や心象に登場する人、物、概念などを表す『補語』から成る」ものである(寺村 1982, p. 51)。

(p. 113)とされている(寺村 1982)。「A」が「裏通りから家に入る」や「三番線の真中から電車に乗る」のように、出発点を補語として付け加えることができるのに対し、「C」は「普通それができない」という点に違いがある(寺村 1982, p. 114)。「B」の「集まる」や「届く」のような種類の動詞は、「A」と「C」の「中間」である(寺村 1982, p. 121)。但し、「A」と「B」の違いについては記述されていない。

「住む」と「泊まる」を述語とする文は、益岡・田窪 (1987) では、「物や人が存在する場合には二を使う」(p. 52)という例として「東京に住む」(p. 52)や「私はこのホテルに泊まっている」(p. 52)が示され、存在を表す文とされている。本研究では寺村 (1982) にしたがって、「泊まる」や「住む」などの動詞を含め移動を表す動詞と呼んでいる。

2.2.3 の先行研究で見たように、初級レベルの日本語学習者を対象としたものには、久保田 (1994)、福岡(1996)、八木(1996) などがある。久保田(1994) は、英語を母語とする日本語学習者 2 人を対象として 1 年 10 カ月を 4 期に分け縦断的調査を実施し、書き資料および発話資料に現れた格助詞を分析した。その結果、「カナダ (へ/に) 帰った」のような文型では、「に (へ)」の誤用がなかったことを報告している。但し、場所を表す名詞と動詞の「行く」の間に「泳ぎに」が置かれた文型では「*プールで泳ぎに行く」の「に」→「で」の誤用が見られたという。また「*部屋を入る」のような誤用も見られるという。

福岡(1996) は、ネパール語、マレーシア語、ロシア語など母語の異なる日本語学習者 19 人を対象として、6 カ月間にクイズやテストとして行った計 8 回分の作文の格助詞「に」を調べた。8 回分の資料は前半と後半に分け分析している。前半の「に」の正用の割合は 75%、誤用が 25%、後半の「に」の正用の割合は 77%、誤用が 23%であった。「に」の誤用の内、他の助詞の不正使用は前半が 48%、後半が 31%であったという。他の助詞の不正使用の総数は、前半が 31 で後半が 47 である。総数の内訳は、「到達点」では前半が 2(7%)、後半が 8(17%)であるのに対し、「人や物の存在場所」は前半が 23(74%)で後半が 19(41%)であったと報告されている。つまり、「大学に行く」のような「到達点」の「に」に他の助詞が用いられた誤用は、「寮にいる」のような「人や物の存在場所」の「に」に他の助詞が用いられた誤用よりも、少ないということである。

八木(1996) は、タイ語、マレー語、インドネシア語、タガログ語のいずれかを母語とする日本語学習者の 2 つのグループ (10 人、7 人) が日本語学習をゼロから始めて 100 時間が経った時点で書いた作文を分析資料とし、正用率を調べたところ、両グループとも「明日北海道に行く」のような「に」は、それぞれ 86%、92.9%であり、正用率が高い (易しい) 階層であったことを示している。2 つのグループは異なる時期に日本語学習を受けた日本語学習者であるが、両グループとも日本語能力がゼロから日本語学習を始めた日本語学習者であり、日本語学習者は全員が主にアセアン諸国の政府関係機関に所属していることなど属性も似ているという。また、両グループの格助詞の正用

率を相関分析したところ有意な相関が見られたという。

中級レベルの日本語学習者を対象としたものには、鈴木(1978)、迫田(2001)、蓮池(2004)などがあった。鈴木(1978)は、タイなどの東アジアからの日本語学習者が書いた作文を分析資料とし、作文に現れていた「*道のそばにあった大きい石ですわって、持ってきたジュースを飲みました」、「*小鳥は木のえだでとまって、きれいな声で鳴いています」のような「で」の誤用が、「すわる」や「とまる」などの動詞の動作性に引かれたため、誤って用いられたのだろうと考察している。また、「*9時に中河原駅で集まりました」のような「で」の誤用については、はっきりした原因はつかめないと述べている。

迫田(2001)は、中国語を母語とする日本語学習者 20 人など計 60 人に対し、「に、で、を、と」から 1 つを選ぶ格助詞穴埋めテストから得たデータを分析した結果、日本語学習者の母語の違いによる影響は見られず、誤答にも正答にも同様の傾向が見られ、「学生会館で住んでいる」のような「で」の誤用は、「学生会館」+「で」のような「地名、建物 +で」というユニットを形成するストラテジーの多用により、起こった可能性がある」と述べている。

蓮池(2004)も、「に、で、を、と」からの格助詞選択穴埋めテストを実施している。その結果、計 120 人の内、中国語を母語とする日本語学習者 30 人には、「入る」、「住む」など特定の動詞を有力なヒントとして「に」を選ぶ、「に」の過剰使用の傾向が見られたという。それは、初級用日本語学習教材における「入る」や「乗る」のような動詞が、「入ります (店に～)」「乗ります (バスに～)」のように「に」と共に提示されていることが要因の一つであると考察している。

上記の先行研究の記述からすると、場所を表す名詞と「行く」との間に他の要素が置かれている文型では「に」→「で」の誤用も現れるが、移動を表す動詞と共に用いる「に」は、まずは「行く」、「帰る」と共に用いる場合に、正しく用いることができるようになることが分かる。では、その次には、どのような動詞と共に用いる場合に、日本語学習者は「に」を正しく用いることができるようになるかという点が問題となる。

「行く」、「帰る」と共に用いる「に」を、正しく用いることができるのは、それらの動詞が表す「移動」が他の動詞に比べて分かり易いからではないだろうか。すなわち、「に」の習得は、共に用いる動詞が表わす「移動」が、分かり易いものから順に進むことが考えられる。もしも、動詞が表す「移動」の分かり易さが、「に」の正答率の高さに関わるのであれば、先述した(17)～(21)の動詞は「入る」、「集まる」、「座る」および「住む」の順に、「に」の正答率が高くなると考える。なぜなら、「入る」などの動詞は移動の動きを表すもの、「住む」などの動詞は移動の動きが意識されず、その到達したときの様子を描くもの、「集まる」などの動詞はその中間にあたる(寺村 1982)からである。このことから動詞の表す「移動」の分かり易さが、共に用いる「に」の正答率の高さに関わっていると仮定し仮説検証項目Ⅱを立てる。

仮説検証項目Ⅱ：場所に下接する「に」を正しく選ぶ正答率は、「入る」などの動詞類と共に用いられる場合、「集まる」などの動詞類と共に用いられる場合、「泊まる」などの動詞類と共に用いられる場合の順に高い。

3.1.4 場所名詞が「対比」された場合と場所名詞が「文頭」に置かれた場合に存在場所「に」→「で」の誤用が動作場所「で」とは無関係に現れる発達段階があるか

1.1 で述べたように、場所名詞が対比された場合および場所名詞句が文頭に置かれた場合の存在場所を表す「に」→「で」の誤用は、先行研究では誤用例として挙げられていなかったものである。

初級レベルの日本語学習者には、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同による誤用が見られることが報告されている(久保田 1996、八木 1996 など)。中級レベルの日本語学習者の「に」と「で」の誤用について言及している研究には、鈴木(1978)、迫田(2001)、蓮池(2004)がある。

鈴木(1978)は、東アジア出身の日本語学習者が書いた作文に現れた格助詞の誤用を分析している。それによると、日本語学習者は動詞の動作性に着目し「に」→「で」を誤用することが述べられている。例えば、「*食堂で私たちの生けた花が飾ってある」の文のような「に」→「で」の誤用は「生けた」という動詞の動作性に引かれ「で」が誤って用いられたのだという。

迫田(2001)は、中国語を母語とする日本語学習者 20 人、韓国語を母語とする日本語学習者 20 人、その他の日本語学習者 20 人の計 60 人に対して、「に、で、を、と」から成る格助詞選択穴埋め式テストの調査を実施した結果、日本語学習者の母語の違いによる影響は見られず、正しい回答にも誤った回答にも同様の傾向があったと述べている。そして、日本語学習者が「に」と「で」の選択に迷った場合、「位置名詞+に」、「建物・地名+で」というユニットを形成して用いるストラテジーを多用すること、それが「に」と「で」の誤用を産み出す可能性があることが報告されている。

蓮池(2004)も中国語を母語とする日本語学習者 60 人、韓国語を母語とする日本語学習者 60 人の計 120 人に対して、「に、で、を、と」からの格助詞選択穴埋め式テストの調査を実施している。その結果、中国語を母語とする中級レベルの日本語学習者には、「いる」や「ある」などの特定の動詞と「に」を結びつける「に」の過剰使用が見られたことが報告されている。韓国語を母語とする日本語学習者には「に」の過剰使用は見られなかったという。蓮池(2004)では、迫田(2001)の「位置名詞+に」のユニット形成ストラテジーの傾向は見られたものも、「建物・地名+で」のユニット形成ストラテジーの多用による誤用は見られなかったことが報告されている。

以下の(11)～(13)は、1.1 で示したように中国語を母語とする中級レベルの日本語学習

者が書いた文である。(13)は対比された2つの場所名詞の一方に「で」が用いられている点に特徴がある。

(11)○さんとはソウルで生まれ育ちの若い女子大学生だ。

(12)周りに日本人の大学生がたくさんいるそうだ。

(13)*寮にいません、大学でいる。

(11)と(12)は人の存在を表していると思われる。(13)は誤用であるが、(12)では「日本人の大学生」が存在する場所「まわり」に「に」が正しく下接されている。一方、(11)では「ソウルで生まれ育ち」のように「生まれ育った」という行為が行われる場所「ソウル」に「で」が正しく下接されている。これらの例から、当該日本語学習者は存在場所には「に」を、動作場所には「で」を用いることを一応理解していると見られる。(13)を書いた学習者は、なぜ迫田(2001)の「建物・地名＋で」のユニットを形成したストラテジーや蓮池(2004)の「いる」と「に」を結びつける手段を取らなかったのか。

場所名詞句が文頭に置かれた場合の「に」→「で」の誤用を見てみよう。(16)は、(13)を書いた日本語学習者とは異なる中国語を母語とする中級レベルの学習者1名が書いた文である。この日本語学習者は、日本の盆踊りについて述べた後に、以下の(14)～(18)の文を書いた。(16)は、文頭に置かれた場所名詞句に「で」が用いられている点に特徴がある。

(14)ところで、正月といえ、私の国では、正月の日は、家族の全員で一緒に料理を作って、水餃子を作って、「春節晩会」というテレビ番組を見る。

(15)・・・皆は一緒に踊ることがあまりない、中国で。

(16)*中国で、お盆のような日もある。

(17)でも、日本で、お盆の時、いろいろな所で盆踊が行われる。

(18)森の中に七色しかという神様がいました。

(17)では「で」が2カ所に用いられており、2番目の「で」は「いろいろな所で盆踊りが行われる」のように「盆踊りが行われる」という行為が行われる場所「いろいろな所」に「で」が正しく下接されている。一方、(18)では「七色しか」が存在する場所「森の中」に「に」が正しく下接されている。これらの例から、当該日本語学習者も人の存在する場所には「に」を、動作や行為の場所には「で」を用いることを一応理解していると見られる。

文頭に場所名詞句が置かれた「に」→「で」の誤用は中国語を母語とする日本語学習者だけではない。(19)～(22)はイタリア語を母語とする中級レベルの日本語学習者が書いた文である。この学習者は学習者自身が育った家について家の様子を描写した後、家

の外および庭について(21)と(22)を書いた。

(19)台所の隣に小い自習室がある。

(20)一階の下に地下もある。ここで、洗濯し、・・・。

(21)*家の外でほかの親類の家もあるから、庭が同じだ、広い。

(22)*庭で、家の後に小い家もある。

この学習者は家の中の描写については(19)、(20)のように正しく「に」を用いていることから、存在場所を表す「に」を用いることができることが分かる。(20)では「ここで、洗濯し」のように動作場所を表す「で」も正しく用いられている。

では、(13)「*寮にいません、大学でいる」の学習者、(16)「*中国で、お盆のような日もある」の学習者、そして(21)と(22)の学習者は、なぜ迫田(2001)の「建物・地名+で」のユニットを形成したストラテジーや、蓮池(2004)の「いる」と「に」を結びつける手段を取らなかったのか。迫田(2001)は日本語学習者が「に」と「で」の選択に迷ったときに上記のようなストラテジーを用いることがあり、ストラテジーの多用が誤用を産み出すのではないかと考察している。それは、(13)、(16)そして(21)と(22)の学習者が「に」と「で」の選択に迷ったわけではないからであろう。そのため、ユニットを形成したストラテジーおよび「いる」と「に」を結びつけるという手段を取らなかったのだと考える。

1.1 で述べたように、当該中国語話者は(14)「*ところで、正月といえば、私の国では、・・・」の「私の国では」には主題を表す「は」を正しく用いている。(16)「*中国で、お盆のような日もある」と(17)「*でも、日本で、お盆の時、いろいろな所で盆踊が行われる」では主題を表す「は」を用いていないが、(14)と同様に、(16)は「お盆のような日がある」が「中国」を話題にしていることを、(17)は「お盆の時、いろいろな所で盆踊が行われる」が「日本」を話題にしていることを作文の読み手に明確に伝えるために、場所を表す名詞句を文頭に置いている。どこの国を話題にしているのかを文頭に示さなかった場合には、(15)「・・・皆は一緒に踊ることがあまりない、中国で」のように文末に場所名詞句を置いている。文中に場所名詞句を置いた場合は、異なる解釈が生じる可能性もあるため、(15)のように置き忘れた場合は別として、文頭に場所名詞句を置き、どこの国を話題にしているのかを示しているのである。つまり、(16)は「主題-解説」からなる文なのである。(16)は、この学習者が「で」を伴う場所名詞句を「主題」¹⁹として文頭に置くことを存在文にまで多用したことによる「に」→「で」であると考えられる。

¹⁹ もちろん、日本語学習者は主題という用語を知っているわけでもなく、話題にしていることを作文の読み手に明確に伝えるために場所名詞句を文頭に置いているため、括弧書きにして「主題」と表している。

また、イタリア語話者も同様に、(21)は「ほかの親類の家もある」が「家の外」を話題にしていることを、(22)は「家の後に小い家もある」が「庭」を話題にしていることを作文の読み手に明確に伝えるために、場所を表す名詞句を文頭に置いていると思われる。つまり、(21)、(22)も「主題-解説」からなる文なのである。(21)、(22)もこの学習者が「で」を伴う場所名詞句を「主題」として文頭に置くことを存在文にまで多用したことによる「に」→「で」と考えられる。日本語学習者は、文頭に場所名詞を置き「に」と「は」を下接させなければならなかったのである。

両学習者は存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」を一応理解しているつもりでも、(13)のように場所名詞が対比された場合、および、(16)「*中国で、お盆のような日もある」のように場所名詞が文頭に置かれた場合に、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同による「に」→「で」が現れるという可能性もあるため、調べなければならない。これが、第三の研究課題である。

研究課題 3.

中級レベルには場所名詞が対比された場合と、場所名詞が文頭に置かれた場合に動作場所「で」とは無関係に存在場所を表す「に」→「で」の誤用が現れる発達段階があるか。

この第2の研究課題を明らかにするために以下に示す仮説とその仮説検証項目Ⅰ～Ⅱを立てる。それぞれの項目を検証した結果が第2の研究課題の回答となる。以下、仮説とその検証すべき項目を示す。

仮説：「*寮にいません、大学でいる」と「*中国で、お盆のような日もある」の「に」→「で」の誤用は動作場所「で」とは無関係に起こる。

仮説検証項目Ⅰ：2つの存在文が2つの場所を対比させる形で用いられている場合に、存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用が見られる。

仮説検証項目Ⅱ：2つの存在文が2つの場所を対比させる形で用いられている場合の存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用は、存在場所「に」と動作場所「で」とを混同したものではない。

仮説検証項目Ⅲ：日本語を学習する母語が異なっても中級レベルの学習者に2つの存在文が2つの場所を対比させる形で用いられている場合に、存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用が見られる。

仮説検証項目Ⅳ：場所名詞が文頭に置かれた場合に、存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用が見られる。

仮説検証項目Ⅴ：場所名詞が文頭に置かれた場合の場所を表す名詞が「文頭」に置かれた場合の方が、「文中」に置かれた場合よりも多い。

仮説検証項目Ⅵ：場所名詞が「文頭」に置かれた場合の存在場所を表す「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用は、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」と混同したことによるものではない。

以下、研究課題とその仮説および検証すべき項目を再び示しておく。仮説を検証する方法については次の節に示す。

研究課題再掲

研究課題 1. 中級レベルには存在場所「に」と範囲限定「で」との混同により「に」→「で」の誤用が現れる発達段階があるか。

仮説：「*クラスで2人韓国人がいる」の「に」→「で」の誤用は、存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との混同によるものである。

仮説検証項目Ⅰ：数量詞、「中」などと共に用いられた場所名詞が集合体を表すような文に、存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用が見られる。

仮説検証項目Ⅱ：日本語を学習する環境が異なっても日本語レベルが同じであれば、数量詞、「中」などと共に用いられた場所名詞が集合体を表すような文に、存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用が見られる。

仮説検証項目Ⅲ：日本語を学習する母語が異なっても「中位レベル」であれば、数量詞、「中」などと共に用いられた場所名詞が集合体を表すような文に「で」を用いる誤用が見られる。

研究課題 2. 中級レベルには移動先「に」と動作場所「で」との混同により「で」→「に」の誤用が現れる発達段階があるか。

仮説：「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」の「で」→「に」の誤用は、移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同によるものである。

仮説検証項目Ⅰ：「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」の「で」→「に」の誤用は、中級レベルの日本語学習者にとって場所への移動があると判断された場合に、意味的に場所への移動が含意される「ル形」の文において動作場所を表す「で」を、移動先を表す「に」と混同したことによるのであって、存在場所を表す「に」と混同したことによるのではない。

仮説検証項目Ⅱ：場所に下接する「に」を正しく選ぶ正答率は、「入る」などの動詞類と共に用いられる場合、「集まる」などの動詞類と共に用いられる場合、「泊まる」などの動詞類と共に用いられる場合の順に高い。

研究課題 3. 中級レベルには場所名詞が対比された場合と場所名詞が文頭に置かれた場合に動作場所「で」とは無関係に存在場所を表す「に」→「で」の誤用が現れる発達段階があるか。

仮説：「*寮にいません、大学でいる」と「*中国で、お盆のような日もある」の存在場所を表す「に」→「で」の誤用は動作場所を表す「で」との混同とは無関係に現れる。

仮説検証項目Ⅰ：2つの存在文が2つの場所を対比させる形で用いられている場合に、存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用が見られる。

仮説検証項目Ⅱ：2つの存在文が2つの場所を対比させる形で用いられている場合の存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用は、存在場所「に」と動作場所「で」とを混同したものではない。

仮説検証項目Ⅲ：日本語を学習する母語が異なっても中級レベルの学習者に2つの存在文が2つの場所を対比させる形で用いられている場合に、存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用が見られる。

仮説検証項目Ⅳ：場所名詞が文頭に置かれた場合に、存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用が見られる。

仮説検証項目Ⅴ：場所名詞が文頭に置かれた場合の場所を表す名詞が「文頭」に置かれた場合の方が、「文中」に置かれた場合よりも多い。

仮説検証項目Ⅵ：場所名詞が「文頭」に置かれた場合の存在場所を表す「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用は、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」

と混同したことによるものではない。

研究課題として示した発達段階と 2.2 の先行研究で提示された日本語学習者のレベル別の格助詞の習得順序を参考にした上で予想される日本語学習者の場所を表す「に」の発達段階を示せば次のようになる。

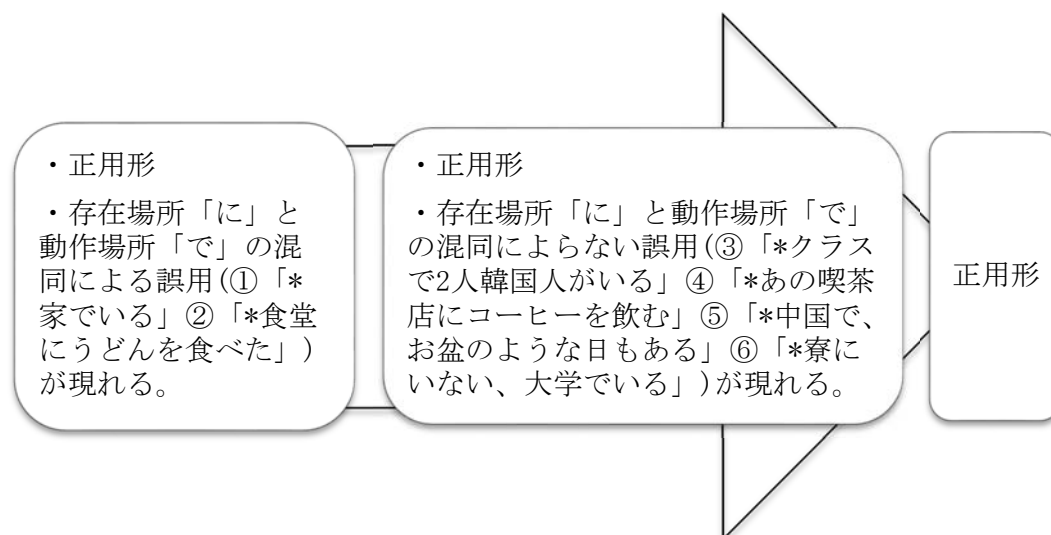


図 2-4. 予想される日本語学習者の場所を表す「に」の発達段階²⁰

3.2 研究方法

研究の方法は調査票から得られたデータを分析するという方法である。具体的には、仮説を検証するために格助詞選択式テストの調査票を作成し、得られたデータを主に統計処理ソフトを用いて分析する。必要に応じて予備調査や日本語学習者に対する簡単なフォローアップインタビューなども行う。

格助詞選択式テストを採用するのは、インタビューや作文といった方法では調査項目が日本語学習者にとって苦手な表現である場合に使用が回避される可能性があるからである(エリス 1988)。また、「*クラスで2人韓国人がいる」の「に」→「で」の誤用や「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」の「で」→「に」の誤用などがどのような「に」

²⁰ 初級レベルで現れる存在場所「に」と動作場所「で」の混同による誤用の①②が中級レベルでは消えているのか、また、初級レベルで現れる誤用の①②が消えた後に③～⑥の誤用が中級レベルで現れるのかについては予想できない。初級レベルでは移動先を表す「に」は存在場所を表す「に」の正用率よりも高く(八木 1996)、「カナダへ帰った」のような「へ(に)」は誤選択がない(久保田 1994)。「カナダへ帰った」のような「へ(に)」は図の「正用形」に含まれる。

と「で」の用法の混同によるものかを明らかにするための調査として最も適している。

先行研究において格助詞選択式テストの調査票が用いられた研究には、迫田(2001)、蓮池(2004)、生田・久保田(1997)、初・玉岡・早川(2013)などがある。調査票は仮説を検証するためのものであるため、問題文を慎重に作成しなければならない。そのため、先行研究において用いられた調査票の問題文について検証しておく必要がある。以下、先行研究における調査票の問題点を挙げる。

①問題文に関する問題点

迫田(2001)では調査票の問題文に「つくえの上()おいてあるりんご()もらってもいい？」のように「机の上に置いてあるりんご」という連体修飾節が埋め込まれた文が用いられている。連体修飾節が埋め込まれた文は単文に比べると複雑な構文である。また、文中に2つの動詞が用いられている。連体修飾節内の「置いてある」と、文末の「もらってもいい？」の「もらう」である。中級レベルの日本語学習者は、鈴木(1978)によれば動詞の動作性に着目し誤って「で」を用いることが報告されていた。そのため、「つくえの上()おいてあるりんご()もらってもいい？」の問題文には日本語学習者が誤って「で」を選択する可能性が高いと思われる。だが、「で」が選択された際、学習者が「置いてある」と「もらう」のどちらの動詞に着目して「で」を選択したのかについては調査者が判断できない。さらに、1問の問題文に()が2箇所設けられていることも問題点として挙げられる。もしも2箇所の()に異なる助詞が選択された場合、問題文中の要素のどの要素を手がかりに選択されたのかが判断できないからである。

以上の理由から、本研究の調査票の問題文は連体修飾節を含まず、動詞を1つ伴う単文であり、問題文1問に対して問う助詞は1つとする。

②選択肢に関する問題点

迫田(2001)および蓮池(2004)は、問題文に回答するための助詞の選択肢が「に」、「で」、「を」、「と」の4種類である。つまり、問題文の()の中に「に、で、を、と」という選択肢の中から最も適当な助詞を1つ選んで問題文中の()に書き込むのである。この場合、選択肢の1つである「と」に問題がある。「と」を正答とする問題文は、場所を表す名詞に下接する問題文ではない可能性が高いからである。しかし、「と」を除外すると、実質的には場所を表す名詞に下接する格助詞の選択肢が「に」、「で」、「を」からの3択であり、正しい回答が得られる確率が1/3の確率になってしまうことになる。正しい回答が得られる確率を1/4の確率²¹にするためには場所を表す名詞に下接する格助

²¹ 迫田(2001)及び蓮池(2004)では助詞の選択肢を4種類にしていたが実際には正しい回答が得られる確率が1/3であった。本研究も先行研究に習い助詞の選択肢を4種類にした。そして、1問の問題文に対し正答が選ばれる確率の偶然性をできるだけ排除できるように考慮し正しい回答の得られる確率を1/4にした。

詞を選択肢の1つとしなければならない。これは1問の問題文に対し正答が選ばれる確率の偶然性をできるだけ排除し、統計処理における信頼性を高めるためである。

以上の理由から、本研究の調査用の助詞の選択肢は「と」ではなく、場所を表す格助詞または場所を表す名詞に下接する格助詞の「から」を選択肢の1つとすることにした。

①と②から、本研究の調査票の問題文は連体修飾節などを含まずできるだけ単文とする。格助詞の選択肢はなるべく場所を表す名詞に下接する格助詞として「から」を選択肢の1つとする。具体的には本研究の調査票は、格助詞「に」、「で」、「を」、「から」から最も適当なもの1つを選んで問題文中の()に記入するか、または、問題文中に埋め込まれた格助詞「に、で、を、から」最も適当なもの1つを○で囲むという格助詞選択式テストを作成するということである。

また、それぞれの調査票における調査協力者数を100人前後と想定し、1種類の問題文を6問～7問作成することによって1問の問題文に対し正答が選ばれる確率の偶然性をできるだけ排除できるように考慮する。この点も統計処理上の信頼性を高めるためである。このようにして作成した問題文から得た1人1人の回答の誤答率は、各問題文の誤答の合計÷(調査対象者数×問題文)のように算出する。正答率も同様である。

分析は調査票から得られたデータを用いて統計処理を行う。研究課題1の仮説を検証するためには、まず、正答率や誤答率の傾向を見るために相関分析を用いる。日本国内の日本語学習者(多国籍)に協力を得て、まずは中級レベルの中でもどのような日本語レベルに条件付存在文における存在場所を表す「に」→「で」の誤用が見られるかを調べる²²。そのためには、中級レベルをさらに「中級の下」、「中級の中」、「中級の上」という日本語レベルに分け、条件付存在文における存在場所を表す「に」の正答率を比較する。また、条件付存在文における存在場所を表す「に」→「で」の誤答率と範囲限定を表す「で」の正答率を相関分析し、条件付存在文における存在場所を表す「に」→「で」の誤答率と範囲限定を表す「で」の正答率との間にどのような関係が見られるかを分析する。

研究課題1の仮説を検証するための分析には回帰分析を用いる。相関係数は2変数間の関係を記述することができるが、回帰分析では2変数以上の関係を記述することができるからである(林田 2013)。初めにJFLの中級レベルの中国語話者を対象として条件付存在文における存在場所を表す「に」→「で」の誤用が見られるか否かを調べる。「に」→「で」の誤用が見られれば、その存在場所を表す「に」→「で」の誤用が範囲限定を表す「で」と関係があるか否かを回帰分析する。回帰分析は、条件付存在場所を表す「に」→「で」の誤答率を目的変数に、範囲限定を表す「で」の正答率と動作場所を表す「で」

²² 次節でも述べるが、本研究の対象となる誤用は幅広い中級レベルのすべての日本語学習者に現れるというのではなく中級レベルの中でもある日本語レベルにおいて現れると考えられる。そのため、中級レベルにおけるあるレベルにその誤用が現れれば、本研究では初級レベルでもなく上級レベルでもない日本語レベルに現れたという意味で中級レベルに現れたと表記する。

の正答率を説明変数にして両者の関係を調べる。条件付存在場所を表す「に」→「で」の誤答率と範囲限定を表す「で」の正答率との間に何らかの関係が見られ、条件付存在場所を表す「に」→「で」の誤答率と動作場所を表す「に」の正答率との間に何らかの関係が見られなければ、上記の仮説の日本国内の日本語学習者(多国籍)と同じ日本語レベル²³であると解釈される。続いて JSL の中国語話者を対象に JFL の場合と同様の手順で分析する。また、第 2 章の初級レベルの学習者を対象とした格助詞の習得に関する先行研究で問題となった点について、初級レベルのデータを用いて分析する。すなわち、存在場所を表す「に」→「で」の誤用が動作場所を表す「で」との混同による誤用であるか否かを分析する。さらに、初級レベルの日本語学習者にも条件付存在場所を表す「に」→「で」の誤用が現れるか否か、現れるとすればそれは動作場所を表す「で」と範囲限定を表す「で」の内どちらの「で」との混同による誤用かについても検証する。最後に、韓国語話者に協力を得て中国語話者の場合と同様の手順で分析する。

研究課題 2 の仮説を検証するためにはまず、3 種類の予備調査を実施する。翻訳の調査および、文を構成する名詞と動詞の組み合わせが特定のものに限り「で」→「に」の誤用となっているのか、それとも、文を構成する名詞と動詞が特定の組み合わせではなく、日本語学習者の何らかの基準によって「で」→「に」を誤用しているのかを調べるものである。その後、格助詞選択式テストの調査を実施し、得られたデータから、「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」の「で」→「に」の誤答率を目的変数に、移動先を表す「に」の正答率と存在場所を表す「に」の正答率を説明変数にして回帰分析をする。フォローアップインタビューとして「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」の「で」→「に」を用いた日本語学習者数名に「に」を用いた理由を 1 人 1 人に尋ねる。

研究課題 3 の仮説を検証するためには以下のように分析を行う。場所名詞が対比された存在を表す文の調査では、中級レベルの中国語話者に協力を得て格助詞選択式テストの調査を実施し、場所名詞が対比された問題文の存在場所を表す「に」→「で」が見られるかどうかを調べる。場所名詞が対比された文の「に」→「で」の誤答率と動作場所を表す「で」の正答率の相関分析をする。仮説を検証するためには中国語話者に対して行った手順と同様に、韓国語話者に協力を得て格助詞選択式テストの調査を実施し、場所名詞が対比された文の存在場所を表す「に」→「で」が見られるかどうかを調べる。場所名詞が対比された文の存在場所を表す「に」→「で」の誤答率と動作場所を表す「で」の正答率の相関分析をする。

次に、場所名詞が文頭に置かれた存在を表す文の調査では、中国語話者に協力を得て予備調査の格助詞選択式テストの調査を実施した後に、翻訳の調査を行う。本調査は格助詞選択式テストの調査である。分析は場所を表す名詞が文頭に置かれた場合と文中に

²³ 中級レベルにおけるある日本語レベルを指す。注 22 と同じく、本研究では問題となる混同による誤用が中級レベルのすべての日本語学習者に現れなくとも、中級レベルのあるレベルに現れれば中級レベルに現れたと表記する。

置かれた場合の存在場所を表す「に」→「で」の誤答率に差があるかどうかを調べるために t 検定をする。場所名詞が文頭に置かれた場合の存在場所を表す「に」→「で」の誤答率の方が文中よりも高ければ、場所名詞が文頭に置かれた場合の存在場所を表す「に」→「で」の誤答率と動作場所を表す「で」の正答率の相関分析をする。同様に、韓国語話者に協力を得て格助詞選択式テストの調査を実施し、存在場所を表す「に」→「で」の誤答率が場所名詞を文頭に置いた場合と文中に置いた場合に差があるかどうかを調べるために t 検定する。場所名詞が文頭に置かれた場合の存在場所を表す「に」→「で」の誤答率の方が文中よりも高ければ、文頭に置かれた場合の存在場所を表す「に」→「で」の誤答率と動作場所を表す「で」の正答率を相関分析する。

すべての調査は筆者が日本語学習者に依頼し、依頼に応じてくれた日本語学習者に対し実施する。格助詞選択式テストの調査票を用いた調査は筆者が調査協力者に対し調査票別に一斉に実施する。調査票の記入時間は特に設けないが調査票 1 枚は 10～15 分間で記入できるものである。国内の調査では大学において筆者が担当する外国人留学生を対象とした日本語科目の授業の開始前か終了後に実施する。国外の調査では日本語科目の担当教員に事前に協力を依頼し、現地では担当教員の指示にしたがって授業の開始前、授業中、終了後のいずれかに実施する。調査実施の際には調査票を配布する前に、この調査が当該日本語の授業の成績とは全く関係ない調査であること、日本語学習者が用いる日本語を調査者が知りたいから調査すること、調査の結果は研究以外には使わないこと、調査協力者の個人情報漏らさないことなどを述べた上で日本語学習者に協力を依頼する。

以下、研究方法をまとめて示す。

研究課題 1.

存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との混同による「*クラスで 2 人韓国人がいる」の誤用が現れる発達段階があるかという課題に対する回答を得るためには以下の方法によって仮説を検証する。

仮説検証項目Ⅰ：国内の多国籍学習者に協力を得て格助詞穴埋め式テストを実施し、「*クラスで 2 人韓国人がいる」の「に」→「で」の誤用が見られるか否かを調べる。誤用が見られれば学習者の日本語レベルを「中級の下」、「中級の中」、「中級の上」に分けて分析する。「*クラスで 2 人韓国人がいる」の「に」→「で」の誤用と範囲限定を表す「で」との相関関係を調べる。

仮説検証項目Ⅱ：日本語学習者の母語を統一し、JFL(海外)と JSL(国内)の中国語話者に協力を得て仮説検証項目Ⅰと同じ格助詞選択式テストを実施する。「中位レベル」を設定しデータを回帰分析する。

仮説検証項目Ⅲ：異なる母語の日本語学習者である韓国語話者(JFL)に協力を得て仮説検証項目Ⅱと同じ格助詞選択式テストを実施する。中国語話者と同じ「中位レベル」

のデータを回帰分析する。

研究課題 2.

移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同による「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」の誤用が現れる発達段階があるかという課題に対する回答を得るためには以下の研究方法によって仮説の検証を行う。

仮説検証項目Ⅰ：翻訳調査を含む予備調査を3種類実施する。そして、本調査の格助詞選択式テストを実施し、データを回帰分析する。フォローアップインタビューも行う。

仮説検証項目Ⅱ：格助詞選択式テストを実施して、動詞が表す移動性の分かり易い動詞と「に」の正答率の高さの関係を調べるためにデータを分散分析する。2種類のアンケート調査も実施する。

研究課題 3.

場所名詞が対比された場合、および、場所名詞が文頭に置かれた場合に動作場所を表す「で」とは無関係に存在場所を表す「に」→「で」の誤用が現れる発達段階があるかという課題に対する回答を得るためには以下の研究方法によって仮説の検証を行う。

仮説検証項目Ⅰ～Ⅲ：場所名詞が対比された場合の存在場所を表す「に」→「で」の誤用と動作場所を表す「で」との関係について調べるためには、まず、中国語話者に協力を得て格助詞選択式テストを実施しデータを相関分析する。次に、韓国語話者に協力を得て格助詞選択式テストを実施しデータを相関分析する。

仮説検証項目Ⅳ～Ⅵ：場所名詞が文頭に置かれた場合の存在場所を表す「に」→「で」の誤用と動作場所を表す「で」との関係について調べるためには、まず中国語話者に協力を得て2種類の予備調査を実施する。そして、本調査としての格助詞選択式テストを実施しデータをt検定する。また相関分析も行う。次に、韓国語話者に協力を得て格助詞選択式テストを実施するしデータをt検定する。また相関分析も行う。

3.3 調査協力者

前節で示した研究課題である発達段階は中級レベルの日本語学習者に現れた誤用から推測されたものである。したがって、中級レベルの日本語学習者に協力を得て仮説を検証するための調査を実施する予定である。後述するが、中級レベルとは初級レベルでもなく上級レベルでもないという幅広い日本語レベルを指す。前節の研究課題で示した発達段階が存在するか否かはその幅広い中級レベルの全域にわたって存在するか否かを問うものではない。

本節ではまず中級レベルとはどのような日本語能力の日本語学習者を指すのかを定義する。次に本研究の調査協力者について述べる。

3.3.1 中級レベルの日本語学習者とは

先行研究を踏まえ、以下に示すような初級レベルではなく上級レベルでもない日本語学習者を中級レベルとする。

初級レベルとは、松田・斎藤(1992)は日本語学習者が平仮名の読み書きがようやくでき挨拶ができる程度の日本語力から日本語学習が開始され、週に1度の約90分の日本語授業を6カ月間行ったレベルを指している。久保田(1994)では日本語学習開始後2カ月で学習時間24時間が経過した時点から1年10カ月で学習時間231時間までのレベルである。八木(1996)では日本語能力がほぼゼロレベルから日本語学習が開始され、日本語学習時間が100時間経った時点のレベルである。すなわち、初級レベルの日本語の習得について分析したという場合の日本語学習時間は231時間以下の日本語学習者が対象とされている。231時間の日本語学習を終えた日本語学習者が日本語能力試験を受験するとすれば、旧日本語能力試験では4級ということになる。4級とは「認定基準」である日本語を150時間程度学習したレベルだからである。現在の日本語能力試験ではN5に相当する。しかし、日本語学習時間が231時間であっても4級またはN5に合格できるか否かは分からない。先行研究にも初級レベルの日本語学習者が日本語能力試験のどのレベルであるのかといった記述はない。

したがって、本研究では、初級レベルとは日本語学習をほぼゼロから開始し、231時間程度までの日本語学習時間であり、初級日本語学習用教材を用いた学習を行っているレベルとするのが良いと考える。日本語能力試験については、4級またはN5に合格するレベルも初級レベルとすることにする。

上級レベルとは、生田・久保田(1997)では旧日本語能力試験の1級合格者もしくは日本語専任講師3人以上の判断で旧日本語能力試験の1級合格と同程度以上と判断されたレベルを指している。杉山(2002)、蓮池(2004)も生田・久保田(1997)と同様である。杉山(2002)では日本語学習時間800時間以上の旧日本語能力試験の1級に合格しているか、もしくは旧日本語能力試験の1級に合格していると調査者と日本語教員によって判断された日本語レベルである。蓮池(2004)では旧日本語能力試験の1級に合格しており、日本滞在歴が7年以内という日本語レベルである。蓮池(2007)、初・玉岡・早川(2013)では生田・久保田(1997)と異なっている。

また、日本語能力試験による日本語レベル分けをしていない研究もある。蓮池(2007)では、SPOTという小林(1998)の日本語テストによって65点満点中30点～47点を下位群(初級後半～中級前半レベル)、48点～65点を上位群(中級後半～上級前半レベル)のように分けられている。初・玉岡・早川(2013)では中国語を母語とする大学生1年生～3年生の日本語学習者201人を対象に、16点満点の読解テストから13点以上を上位群62名、10点から12点を中位群70名、9点以下を下位群69名の3つに分けられている。すなわち、蓮池(2007)の上位群には上級前半レベルという日本語レベルが含まれているが日本語能力試験のN1に合格しているレベルなのかどうかは不明である。初・

玉岡・早川(2013)の上位群についても同様に日本語能力試験の N1 に合格しているレベルなのかどうかは不明である。

したがって、上級レベルとは旧日本語能力試験の 1 級または現在の日本語能力試験の N1 に合格しているか、もしくは日本語教員によって旧日本語能力試験の 1 級あるいは現在の日本語能力試験の N1 合格レベルであると見なされたレベルであるとする。

以上のことから、本研究の中級レベルとは上記の初級レベルではなく上級レベルではないという日本語レベルとする。すなわち、以下の日本語レベルのいずれかに該当する日本語レベルである。旧日本語能力試験の 3 級か 2 級に合格しているが 1 級には合格していない日本語レベル、日本語学習者の日本語学習を担当した日本語教員によって旧日本語能力試験の 3 級か 2 級に合格すると見なされる日本語レベル、または現在の日本語能力試験の N4 以上のいずれかの試験に合格しているが N1 には合格していない日本語レベル、日本語学習者の日本語学習を担当した日本語教員によって日本語能力試験の N4 以上のいずれかの試験に合格すると見なされる日本語レベルの日本語学習者である。

本研究では上記のように幅広い日本語レベルを中級レベルとする。日本語学習者は中級レベルのときに、初級レベルの学習者に現れる存在場所「に」と動作場所「で」との混同とは異なる (3)「*クラスで 2 人韓国人がいる」や(4)「*あの喫茶店に コーヒーを飲む」の誤用が現れる発達の 1 つの段階を経ると考えている。しかし、日本語学習者が中級レベルの中でもどのような日本語レベルのときにその段階を経るのかは分からない。そのため、本研究は中級レベルの日本語学習者を対象として調査を行うが、中級レベルのすべての日本語学習者がその段階にあるか否かを調べるものではない。例えば、本調査票の得点の平均と標準偏差から計算し中ほどに位置する得点を獲得した者のデータを用いる場合もある。また、日本語能力試験の N3 合格レベルの学習者よりも N2 合格レベルの学習者の方が、格助詞の使い分けの基準が明確な場合には N2 合格者レベルのデータを用いる場合もある。このようにして中級レベルにおけるある集団が 3.1 の研究課題で示した発達段階にあるかどうかを調べていくのである。そして、3.1 で立てた仮説が支持されれば、初級レベルでもなく上級レベルでもないという意味で中級レベルに 3.1 で示した研究課題の発達段階があると言って良いと考えるのである。

3.3.2 調査協力者

第 1 の研究課題を明らかにするための仮説を検証するための項目 I では 4.1 で格助詞穴埋め式テストの調査を実施する。4.1 の調査協力者は国内の日本語学習者 61 人で多国籍である。61 人は旧日本語能力試験の 3 級以上のいずれかの試験に合格しているか、合格すると見なされるレベルである。日本語学習者の国籍はさまざまで母語は統一しない。

第 1 の研究課題を明らかにするための仮説を検証するための項目 II では 4.2 で格助詞選択式テストの調査を実施する。4.2 の調査協力者は中国語を母語とする日本語学習者

で、中国の大連の大学に在籍している JFL の日本語学習者 179 人と日本の大学に在籍している JSL の日本語学習者 80 人である。JFL の日本語学習者および JSL の日本語学習者の日本語学習時間は 1～4 年間であり、初級用日本語学習教材および中級日本語学習用教材を用いた学習歴がある。日本語能力試験の N4 以上のいずれかの試験に合格しているか、合格すると見なされるレベルである。

第 1 の研究課題を明らかにするための仮説を検証するための項目Ⅲでは 4.3 で格助詞選択式テストの調査を実施する。4.3 の調査協力者は韓国の釜山の大学に在籍している韓国語を母語とする日本語学習者 90 人である。日本語学習者の日本語学習時間は 1～4 年であり、初級用日本語学習教材および中級日本語学習用教材を用いた学習歴がある。日本語能力試験の N4 以上のいずれかの試験に合格しているか、合格すると見なされるレベルである。

第 2 の研究課題を明らかにするための仮説を検証するための項目Ⅰでは 5.1 で 3 種類の予備調査および格助詞選択式テストの本調査を実施する。3 種類の予備調査および本調査の調査協力者はすべて異なる。ここでは本調査の調査協力者について述べておく。5.1 の本調査の調査協力者は、福岡の大学に在籍している日本語能力試験の N1 にはまだ合格していないが N2 に合格している中国語を母語とする日本語学習者 49 人である。

第 2 の研究課題を明らかにするための仮説を検証するための項目Ⅱでは 5.2 で格助詞選択式テストの調査を実施する。5.2 の調査協力者も福岡の大学に在籍している中国語を母語とする日本語学習者 83 人で日本語能力試験の N1 にはまだ合格していないが、N4 以上のいずれかの試験に合格すると見なされる日本語レベルである。

第 3 の研究課題を明らかにするための仮説を検証するための項目Ⅰ～Ⅲでは 6.3.1 で格助詞選択式テストの調査を実施する。6.3 の調査協力者は中国語を母語とする日本語学習者と韓国語を母語とする日本語学習者であり、第 1 の研究課題を明らかにするための仮説検証項目Ⅱ、Ⅲの調査協力者と同じである。

第 3 の研究課題を明らかにするための仮説を検証するための項目Ⅳ～Ⅵでは 6.3.2 で 2 種類の予備調査と本調査を実施する。ここでは本調査の調査協力者について述べておく。本調査の調査協力者は福岡の大学に在籍している 40 人である。韓国語を母語とする日本語学習者は韓国の釜山の大学に在籍している 84 人である。日本語学習者の日本語学習時間は 1～4 年であり、初級用日本語学習教材および中級日本語学習用教材を用いた学習歴がある。日本語能力試験の N4 以上のいずれかの試験に合格しているか、合格すると見なされるレベルである。

以上、本研究の調査協力者について述べた。いずれも本研究の調査に協力してくれることを了解した日本語学習者に協力を依頼するものである。なお、「中国語を母語とする日本語学習者」と「中国語話者」とは表記が異なるが同じであり、他の言語を母語とする日本語学習者の表記についても同様である(「韓国語を母語とする日本語学習者」＝「韓国語話者」)。

第4章

仮説「存在場所『に』と範囲限定『で』の混同による『に』→『で』

の誤用」の検証

本章では第1の研究課題を明らかにするために立てた仮説を検証する。すなわち、「*クラスで2人韓国人がいる」の「に」→「で」の誤用が存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との混同による誤用であるか否かを調べる。

4.1 国内の日本語学習者(多国籍)を対象とした調査

この調査は研究課題1を明らかにするために立てた仮説の項目Iを検証するためのものである。研究課題1を再び示しておく。

研究課題1.

中級レベルには存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との混同による「に」→「で」の誤用が現れる発達段階があるか。

4.1.1 仮説の検証

中級レベルの日本語学習者には以下の(1)のような誤用が見られる。(1)の「に」→「で」の誤用が範囲限定を表す「で」と混同されて起こったものなのかを調査し、得られた回答を分析する。

日本語学習者(母語：中国語)

- (1)*クラスで2人韓国人がいる。
- (2)ホームヘルパーとは老人の家で世話をする人だ。
- (3)ホームヘルパーはいえにいたら、子供たちもとても安心だ。

仮説と仮説を検証するための項目を再び示しておく。

仮説：「*クラスで2人韓国人がいる」の「に」→「で」の誤用は、存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との混同によるものである。

仮説検証項目I：数量詞、「中」などと共に用いられた場所名詞が集合体を表すような文に、存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用が見られる。

以下、(1)のように「2人」、「韓国人」などを伴い「クラス」が集合体を表す文を「条件付存在文」あるいは、「存在場所+条件付」と呼ぶことにする。本節では、議論の第一段階として、上記の仮説検証項目Ⅰが成立するかどうか、すなわち条件付存在文における存在場所「に」と範囲限定「で」との間に何らかの関係が見られるかどうかに関心を当てて考察する。

4.1.2 調査票作成の留意点

仮説を検証し、存在場所を表す「に」の習得の様子を探るために、本節では、国内の日本語学習者を対象に、「に、で、を、から」の四択穴埋めテスト形式の調査を行う。「を」と「から」を加えたのは、「に」と「で」の二者択一による偶然に起こる正答の確率をできるだけ排除するためである。

本調査では、動詞「いる(ある)」が存在を表すものについてだけを問題にしているの、物の存在を表すものではなく「会議」のような出来事の生起を表す「会議がある」については対象としない。また、動作や行為を表す動詞には初級日本語学習用教材の早い段階で学習される「食べる」を使う。場所を表す名詞も1つに限定すべきだったが自然な問題文を作るために「中国、韓国、日本、食堂、寮、大学、東京、あそこ」を使う。なお位置を表す名詞については、「中、前、外」を使って問題文を作ることにする。

調査票は以下のような6種類の文からなり、統計処理上、全体で42問の穴埋め問題とする。1つの種類につき問題文を3～7問とするのは偶然による正しい回答が得られる確率を避けるためである。以下に示す問題文の番号は調査票の番号の順とは一致しない。つまり、問題文の順が回答に影響を与えないように実際の調査票には以下の問題文を順不同に並べる。問題文の並べ方は1通りである。なお、調査票に用いる語は日本語学習者が既に学習済み、あるいは既に知っている語であることを確認している。問題文には仮名を振っている。実際の調査票は付録に載せることとして、以下、問題文の一部を示す。

(a)「存在場所」文の「に」、「動作場所」文の「で」：存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」を正答とする問題文で6問である。

存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」を選ぶ問題である。「に」と共に用いる存在動詞「いる(ある)」文3問、動作動詞の「食べる」を含んだ文3問である。後者には補助動詞「いる」を用いた文も含めた。これは、「いる」という形式に引かれて「に」が誤って選ばれるということがあるので補助動詞「いる」を伴う文を避け「で」の正答率を上げようとするものではないことを示すため加えている。「存在場所」文は、文中に「2人」や「中」という名詞を伴って「集合体」における人や物の存在を表すようにも解釈され得る文ではないという点で後に示す(c)と異なる。本問の問題文数が他の問題

文数に比べて少ないのは、1.1 で述べたように、中級レベルの日本語学習者が「食堂(に) 彼がいる」のような存在場所を表す「に」と「食堂(で) ご飯を食べる」のような動作場所を表す「で」については一応習得していると考えられたからである。実際の調査票は付録につけることとして、以下、問題文の一部を示す。

- (4) 食堂()彼がいます。
- (5) 中国()おば(さん)がいません。
- (6) 食堂()ご飯を食べます。
- (7) 食堂()ご飯を食べています。

(b)「範囲限定」文の「で」: 範囲限定を表す「で」を正答とする問題文で7問である。本問は日本語学習者が条件付存在文との混同が起り易いと考えられる文であり、仮説を検証するための問題文である。以下に問題文の一部を示す。

- (8) 韓国()有名な人は誰ですか。
- (9) 中国()有名なところはどこですか。
- (10) 大学の中()だれが一番テニスが上手ですか。
- (11) あの店の中()何がほしいですか。

(c)「存在場所+条件付」文の「に」: 存在場所を表す「に」を正答とする問題文で8問である。本問は日本語学習者が範囲限定を表す文との混同が起り易いと考えられる文である。2.1.4 で示したが、中級レベルの日本語学習者には「*クラスで2人韓国人がいる」、「*私のクラスの中で○というひとがいる」、「*寮で何人いますか」の「に」→「で」の誤用が現れていた。これらを参考にして作成した問題文である。すなわち、文中に「2人」、「韓国人」、「中」などの名詞を伴い、「クラス」が「集合体」を表すとも解釈される文である。この点で(a)と異なる。また、(b)との違いは本問が人や物の存在を表す文であることである。また、「集合体」が表されていれば、「人の集合体」だけでなく「物の集合体」であっても「に」→「で」の誤用が現れる可能性もあるため「物の集合体」を表すとも解釈される文も問題文としている。例えば以下の(12)は「寮」が「寮に存在するもの」の集合体を表し、(14)は「寮」が「寮に住んでいる留学生」の集合体を表す。本問のような文を「食堂に田中さんがいる」という単純な存在文と区別するため、「条件付存在文」あるいは「存在場所+条件付」文と呼んでいる。以下、問題文の一部を示す。

- (12) この寮()入口が三つありますか。
- (13) きのう、みんなは日本料理を食べました。私もその中()いました。

- (14) 寮()5人メキシコの人があります。
(15) 中国の人は大学()何人いますか。

(d)ダミー文：「存在場所+場所対比」文の「に」。存在場所を表す「に」を正答とする問題文で7問である。本問には場所の対比が含まれており、その点に(a)との違いがある。2つの存在文が人または物が存在する2つの場所を対比させる形で用いられている問題文である。本問は6.3の研究課題3で分析の対象となる問題文である。以下に問題文の一部を示す。

- (16) 寮の中()みんないます。寮の外()リーさんがいます。
(17) 韓国()父がいます。日本()母と兄と妹がいます。
(18) 日本()ボーリング場があります。中国()ボーリング場はありません。
(19) 食堂の前()イさんがいます。食堂の中()誰もいません。

(e)ダミー文の「を」：場所を表す「を」を正答とする問題文で7問である。以下、問題文の一部を示す。

- (20) 小さな橋()渡りました。
(21) あした朝早く、家()出なければなりません。
(22) 電車()降りてから、歩いて行きました。
(23) 帰るとき、公園()通りました。

(f)ダミー文の「から」：場所を表す「から」を正答とする問題文で7問である。以下、問題文の一部を示す。

- (24) 大学()図書館まで自転車でいきます。
(25) ベッド()落ちたので、体が痛いです。
(26) 家()歩いて10分かかります。
(27) どろぼうが家の2階()入りました。

4.1.3 調査協力者

調査の協力者の詳細は以下の通りである。九州女子大学旧別科日本語研修課程で2004年度か2005年度に日本語を学習した61人である。日本語レベルは以下のような4つのレベルに分けた。4つのレベルに分けたのは、中級レベルの中でもどの程度の日本語レベルに条件を伴う存在を表す文と範囲限定を表す文との間に混同が見られるかを特定するためである。中級レベルとは3.3.1で述べたようにならかなり幅広く、旧日本語

能力試験の3級以上の試験には合格しているが1級には合格していない日本語レベルである。両年度の調査協力者に対しては、レベル別に同じ日本語学習用の教材および副教材を用い、同じ時間数の日本語学習を行っており、同じテストを実施している。また彼らの学習背景、日本滞在日数などの属性も似ている。これらのことから 2004 年度と 2005 年度の調査協力者の調査結果を合わせて用いることに問題はないと判断した。

- ・ 中級の下(17 人) 旧日本語能力試験 3 級に合格している日本語学習者と、九州女子大学旧別科日本語研修課程の 2004 年度と 2005 年度に筆者の担当する日本語の授業で旧日本語能力試験 3 級の過去問題をした結果、旧日本語能力試験 3 級に合格するとみなされた日本語学習者である。
- ・ 中級の中(17 人) 旧日本語能力試験 2 級受験準備中の日本語学習者である。それは、九州女子大学旧別科日本語研修課程の 2004 年度と 2005 年度に筆者の担当する日本語の授業で旧日本語能力試験 2、3 級の過去問題をした結果、旧日本語能力試験 3 級には合格するが、旧日本語能力試験 2 級には 2 割前後点数不足で不合格となった日本語学習者である。
- ・ 中級の上(20 人) 旧日本語能力試験 2 級に合格している日本語学習者と、九州女子大学旧別科日本語研修課程の 2004 年度と 2005 年度に筆者の担当する日本語の授業で旧日本語能力試験 2 級の過去問題をした結果、旧日本語能力試験 2 級に合格するとみなされた日本語学習者である。
- ・ 上級(7 人) 旧日本語能力試験 1 級に合格している日本語学習者と、九州女子大学旧別科日本語研修課程の 2004 年度と 2005 年度に筆者の担当する日本語の授業で旧日本語能力試験 1 級の過去問題をした結果、旧日本語能力試験 1 級に合格するとみなされた日本語学習者である。

日本語レベルが「中級の下」の日本語学習者は初級日本語学習用教材(『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ本冊』スリーエーネットワーク)の学習を終えており、日本語レベルが「中級の下・中・上」「上級」の日本語学習者は初級日本語学習用教材を用いた授業を終えた後、中級日本語学習用教材を使って学習している。

調査は筆者が担当する日本語授業の終了後一斉に行った。本調査は当該日本語授業としての試験ではなく成績には影響しないこと、留学生が使う助詞を知りたいので教えてほしいこと、辞書を使ったり人に答えを聞いたりせずに回答してほしいこと、調査票は A4 用紙 1 枚で裏表であること、10 分程で回答できるが時間制限はないこと、必ず全て記入してほしいこと、この調査で得た個人情報は漏らさないこと、学術調査のために使

うこと、この調査に基づく研究内容が知りたければ筆者に言ってほしいことを述べた後に実施した。

4.1.4 結果と考察

表 4-1 は、日本語学習者の日本語レベルと、それぞれの問を正しく回答した場合の正答率(各問題文の正答の合計÷(調査対象者数×問題数)：表 4-1 の括弧内)の関係を見たものである。表 4-1 を図に表したものが図 4-1 である。

表 4-1. 日本語レベルと (b)、(c) を正しく回答した場合の正答率との関係

	日本語レベル			
	中級の下	中級の中	中級の上	上級
(b)「範囲限定」文の「で」を正しく回答した場合の正答率	63.9(76/119)	66.4(79/119)	81.4(97/119)	81.6(40/49)
(c)「存在場所+条件付」文の「に」を正しく回答した場合の正答率	72.1(98/136)	55.1(75/136)	73.8(100/136)	89.3(50/56)

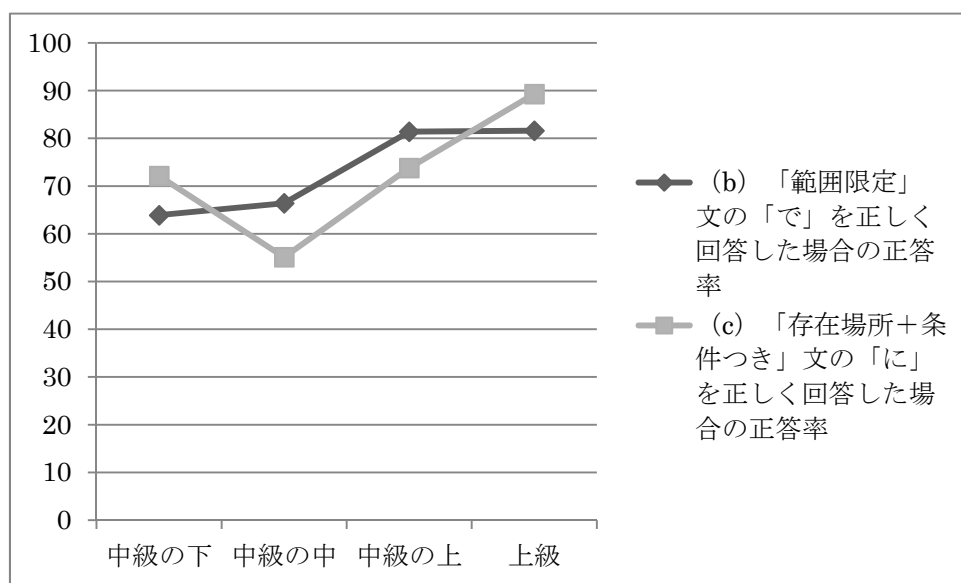


図 4-1. 日本語レベルと (b)、(c) を正しく回答した場合の正答率との関係

まず、(b)「範囲限定」文では、日本語レベルが上がるとともに、(b)を正しく回答した場合の正答率(範囲限定「で」)も直線的に上がっている。だが、(c)「存在場所+条件付」文では、「中級の下」から「中級の中」にかけて問(c)を正しく回答した場合の正答率(存在場所「に」)がいったん下がり((c) : 72.1→55.1)、その後再び上がるという「U

字型発達」の現象が現れている。「U字型発達」の現象とは、第2言語学習者の習得プロセスはU字形のカーブを描くという考えで(迫田 2002)、Kellerman の命名による。

ただし、日本語レベルが同じであっても、日本語学習者によって正答率にかなりのばらつきがあるので、それぞれの間の正答率の違いに有意差があるかどうかを見るために、t 検定を行った。その結果が表 4-2 と表 4-3 である。表 4-2、表 4-3 では「いったん下がって再び上がる」という U 字型の発達をより明確にするために、日本語レベルを「中級の下」「中級の中」「中級の上・上級」の3段階に分けている。

表 4-2. 日本語レベル「中級の下」と「中級の中」で問(c)を正しく回答した場合の正答率の差の検定

	日本語 レベル	標本数 (学習者数)	全体の正答率 (正答率平均)	t 値	p 値
(c)「存在場所+条件付」文の「に」を正しく回答した場合の正答率	中級の下	17	72.1	2.06	0.047*
	中級の中	17	55.1		

注: * $p<.05$. ** $p<.01$.

表 4-3. 日本語レベル「中級の中」と「中級の上・上級」で(c)を正しく回答した場合の正答率の差の検定

	日本語 レベル	標本数 (学習者数)	全体の正答率 (正答率平均)	t 値	p 値
(c)「存在場所+条件付」文を正しく回答した場合の「に」正答率	中級の中	17	55.1	-3.05	0.005**
	中級の上・上級	27	77.8		

注: * $p<.05$. ** $p<.01$.

表 4-2、表 4-3 に見られるように、日本語レベル「中級の下」と「中級の中」の間、および日本語レベル「中級の上」と「中級の上・上級」の間で、(c)を正しく回答した場合の正答率に差があることは、5%の有意水準で支持される。以上のことから、存在場所「に」を正答とする(c)「存在場所+条件付」文を正しく回答した場合の正答率は、いったん下がり、その後再び上がるという U 字型発達を示していることがわかった。次に仮説を検証する。

表 4-1 と図 4-1 のところで述べたように、(c)「存在場所+条件付」文を正しく回答した場合の正答率(存在場所「に」)は、日本語レベル「中級の下」ではいったん低くなり、その後再び高くなっていた。このことは範囲限定「で」の習得と関係があると考えられる。実際、日本語レベル「中級の中」では、(c)を正しく回答した場合の正答率は下がっ

ているが、(b)を正しく回答した場合の正答率は逆に上がっている。

そこで、(b)の正答率(範囲限定「で」)と、(c)(存在場所「に」)を「で」とした誤答率(以下「『で』誤答率」)との間の相関関係を見た。表 4-4 はその検定結果を示したものである。

表 4-4. 日本語レベル間で (b) を正しく回答した場合の正答率と (c) を誤って回答した場合の誤答率との相関係数

		(c)「存在場所+条件付」文の「に」	
(b)「範囲限定」文の「で」を正しく回答した場合の正答率		正答率	誤答率
	(初級)	(0.301)	(-0.301)
	中級の下	-0.412	0.399
	中級の中	0.006	0.139
	中級の上	0.433	-0.437
	上級	0.353	-0.353

注：本来ならば正答率の相関係数は、誤答率のそれと数値は等しくなり、＋の符号が逆になるはずである。だが、欠損数(誤った回答である「に」以外の助詞((例「の」「から」など))の数)を除いているため、数値が等しいものとそうでないものがある。

(b)の正答率(範囲限定「で」)と(c)の「で」誤答率の相関は、日本語レベル「中級の下」、「中級の中」、「中級の上」、「上級」でそれぞれ 0.399、0.139、-0.437、-0.353 となっており、「中級の中」で特に正の相関は見られない。しかし、新たに「初級」(日本語能力試験 4 級は合格するが 3 級は不合格の日本語学習者数 4 を加えると、(b)の正答率(範囲限定「で」)と(c)の「で」誤答率の相関は-0.301、0.399、0.139、-0.437、-0.353 となり、「中級の下」、「中級の注」では正の相関が見られることがわかる。このことは、日本語レベル「中級の下」、「中級の中」の日本語学習者が「存在場所+条件付」を含む(c)に回答する際に、(b)の正答である範囲限定「で」から何らかの影響を受け、存在場所「に」を選ぶべきところで、範囲限定「で」を選んでしまったことを示唆している。

4.1.5 まとめ

本節では、存在場所「に」の習得の様子を探るため、日本語学習者を対象とした穴埋めテスト形式の調査を行った。その結果、日本語レベルが「中級の下」、「中級の中」の日本語学習者が「条件付」の(c)に回答する際に、(b)の正答である範囲限定「で」から何らかの影響を受け、存在場所「に」を選ぶべきところで範囲限定「で」を選んでしまったことが示唆された。すなわち、「条件付」の存在場所「に」を用いるべきところに誤って「で」を用いてしまうのは「条件付」の存在場所「に」と範囲限定「で」との混

同により生じている可能性があることが示唆された。そして、「条件付」の存在場所「に」の習得は「U 字型発達」を示すことが分かった。

確かに、「範囲限定」文の「で」を正しく回答した場合の正答率と「存在場所+条件付」文の「に」→「で」の誤答率の相関係数の符号が他のレベルでは負であったのに対し「中級の下」「中級の中」では正であった。しかし、この結果のみを以て、条件付存在文における存在場所を表す「に」を「で」とする誤用が範囲限定「で」との混同により生じているとは断定し難く、あくまでも条件を伴う存在場所を表す「に」を「で」とする誤用が範囲限定「で」との混同により生じている可能性が示唆されたのみに留まる。

4.2 日本語学習環境の異なる中国語話者を対象とした調査(JFL と JSL)

この調査も研究課題 1 を明らかにするために立てた仮説項目Ⅱを検証するための調査である。4.1 の調査では条件付存在文における存在場所を表す「に」を用いるべきところに「で」が用いられる誤用が、存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との混同によるものである可能性が示唆された。ところが、調査協力者は多国籍であり母語が中国語、韓国語、イタリア語などの多種の言語であったために、上記混同にどの程度この母語の多様性の影響が現れているのか明らかではない。

本節では、調査協力者である日本語学習者の母語を統一し、中国語を母語とする日本語学習者に限って調査を実施する。その際、母語が同じ日本語学習者であれば、日本語学習環境が異なっても同じように上記誤用による誤用が現れるのかという点が問題になる。この問題は、第 2 言語が周りで話されている環境で習得していくのか、第 2 言語が話されていない環境で習得していくのかという問題である。両者におけるインプット量は明らかに異なるため、これら 2 つの異なる状況における習得プロセスが同じであるか否かは未解決の問題である。

4.2.1 仮説の検証

本節では、中国在住の中国語を母語とする中級レベルの日本語学習者と日本在住の中国語を母語とする中級レベルの日本語学習者を調査対象として、日本語レベルが同じであれば、条件付存在文における存在場所を表す「に」→「で」の誤用が見られ、その誤用が存在場所を表す「に」、範囲限定「で」と混同することに起因しているという仮説を検証するために調査を行い、分析する。仮説検証項目Ⅱを再び示しておく。

仮説検証項目Ⅱ：日本語を学習する環境が異なっても日本語レベルが同じであれば、数量詞、「中」などと共に用いられた場所名詞が集合体を表すような文に、存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用が見られる。

1.1 でも述べたように、日本語学習者に見られる存在場所を表す「に」を用いるべきところに誤って用いられる「で」は、初級レベルでは存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同によるものである。4.1.4 の日本語レベルが「中級の下」、「中級の中」というレベル、つまり、中級レベルにおけるある日本語レベルでは、条件付存在文の存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との混同が示唆された。では本当に中級レベルでは条件付存在文の存在場所を表す「に」は、動作場所を表す「で」との混同が見られず、範囲限定を表す「で」との混同だけが見られるのか。中級レベルにおいて、もしも条件付存在文の存在場所を表す「に」→「で」が、動作場所を表す「で」との間に何ら関係が見られず、範囲限定を表す「で」との間に何らかの関係が見られるならば、日本語学習者の存在場所を表す「に」の習得には動作場所を表す「で」との混同が見られる段階があり、次には範囲限定を表す「で」との混同が見られる段階があると考えて良いか。つまり、範囲限定を表す「で」との混同が見られる段階が存在場所を表す「に」の習得における発達の1つの段階であるならば、日本語学習者の学習環境の違いにかかわらず、共通して見られるはずである。ここでいう学習環境の違いとは、母語が同じである日本語学習者で、JFL(=Japanese as a foreign language)環境と、JSL(=Japanese as a second language)環境の違いをいう。

4.2.2 調査票の修正

調査票は、4.1.2 の国内の日本語学習者に対し実施した調査票の問題文に多少修正を加えたものである。4.1.2 で調査票の問題文が6種類から成っていたのは、中級レベルの日本語学習者が「食堂(に)彼がいる」のような存在場所を表す「に」と「食堂(で)ご飯を食べる」のような動作場所を表す「で」については一応習得していると考えられたからであった。本来ならば4.1に対してもこのタイプのテストを行うべきであった。そのため、本節では、4.1の(a)を分け、(a-1)に存在場所を表す「に」、(a-2)に動作場所を表す「で」という2つの項目を立てた。2つの項目を立てて分析することにより、「に」が動作場所を表す「で」と範囲限定を表す「で」のどちらの「で」の影響を受けるのかを明確に分析することができるようになった。

調査票は「に、で、を、から」の中から、もっとも適当なものを1つ選び、○で囲む形式である。修正前の問題文は、「に、で、を、から」の中から適当な格助詞を1つ選んで()に書き入れる形式であったが、日本語学習者の負担を軽くすることを目的に○で囲む方式に変更した。調査票の問題文の並べ方は3通り作成した。3通りの調査票は付録に示すこととし、修正を加えた問題文を以下に示す。

(a-1)「存在場所」文の「に」：存在場所を表す「に」を正答とする単純な問題文 3 問である。問(3)の存在を表す文中に数量詞や集合体を表す名詞などを伴う文に比べると単純であるため、以下、「単純存在ニ」と呼ぶことにする。以下、問題文を 1 問例として示す。

(28) 食堂(に、で、を、から)彼がいます。

(a-2)、「動作場所」文の「で」：動作場所を表す「で」を正答とする問題文 3 問である(以下、「動作デ」と呼ぶことにする)。以下、問題文を 1 問例として示す。

(29) 食堂(に、で、を、から)ご飯を食べます。

(b)「範囲限定」文の「で」：範囲限定を表す「で」を正答とする問題文 7 問である。以下、「範囲デ」と呼ぶことにする。修正した問題文は以下の 1 問である。

(30) この店の中のもの(に、で、を、から)何がほしいですか。

(c)「存在場所+条件付」文の「に」：存在場所を表す「に」を正答とする問題 8 問である。本問は「*クラスで 2 人韓国人がいる」のように文中に「2 人」、「韓国人」、「中」などの名詞を伴い、「クラス」が「集合体」を表すとも解釈される文を参考にして作成した問題文である。この点で(a)と異なる。また、(b)との違いは本問が人や物の存在を表す文であることである。以下、「条件付存在ニ」と呼ぶことにする。修正を加えたのは以下の 3 問である。

(31) この家(に、で、を、から)入口が三つありますか。

(32) きのう、カラオケパーティーがありました。私もその中(に、で、を、から)いました。

(33) 留学生は大連外国語大学(に、で、を、から)何人いますか。

(d)ダミーの問題文：「存在場所+場所対比」文の「に」：存在場所を表す「に」を正答とする問題文 7 問である。本問には場所の対比が含まれており、その点に問(a-1)との違いがある。2 つの存在文が、人または物が存在する 2 つの場所が対比された問題文である。以下、「対比存在ニ」と呼ぶことにする。修正した問題文の一部を示す。

(34) 寮の中(に、で、を、から)みんないますが、リーさんは寮の外(に、で、を、から)います。

- (35) 父は韓国(に、で、を、から)いますが、母と兄は日本(に、で、を、から)います。
(36) 日本(に、で、を、から)ボーリング場がたくさんあります。中国(に、で、を、から)ボーリング場はあまりありません。
(37) 食堂の前(に、で、を、から)はイさんがいます。食堂の中(に、で、を、から)は誰もいません。

(e)「を」を正答とするダミーの問題文で 7 問である。修正をした問題文は以下の 2 問である。

- (38) 来年、家(に、で、を、から)建てます。
(39) 飛行機が空(に、で、を、から)飛んでいます。

(f)「から」を正答とするダミーの問題文で 7 問である。修正をした問題文は以下の 2 問である。

- (40) 家(に、で、を、から)大学まで歩いて 10 分かかります。
(41) 去年、福岡(に、で、を、から)東京へ行きました。

まず、JFL 環境の中国語を母語とする日本語学習者を対象として調査を行った。

4.2.3 JFL環境の「中位レベル」の中国語話者を対象とした調査

調査は、JFL 環境にある中国の大連外国語学院日本語学科に在籍している日本語学習者 179 人に協力を得て 2011 年 6 月に実施した。日本語学習者の日本語能力は日本語能力試験の N4 以上に合格するレベルである。調査は、当該大学の日本語授業の開始前、日本語授業の開始後、日本語授業の終了後のいずれかに筆者が一斉に行った。

調査開始前には、当該日本語授業の担当教員が同席する教室で、筆者が以下のように日本語で調査に関する説明を行った。調査は、当該日本語授業の日本語のテストではなく成績にも影響しないこと、留学生が使う助詞を知りたいので教えてほしいこと、辞書を使ったり人に答えを聞いたりせずに回答してほしいこと、必ず全て記入してほしいこと、調査票は A4 用紙 1 枚で裏表であること、10 分程で回答できるが時間制限はないこと、この調査で得た個人情報漏らさないこと、学術調査のために使うこと、そして、この調査に基づく研究内容が知りたいければ筆者にそのことを言ってほしいことを述べて実施した。調査に要した時間は 10 分前後であった。

表 4-5 は、「単純存在ニ」、「動作デ」、「範囲デ」、「条件付存在ニ」の正答率を示したものである。それぞれの問を正しく回答した場合の正答率(各問題文の正答の合計÷(調査対象者数×問題文))である。問題数 42 問を各 1 点とし、合計得点は 42 点である。3

通りの調査票の合計得点には差が見られなかったので調査票のすべての回答を分析対象として用いた。

表 4-5. JFL の「単純存在ニ」「動作デ」「範囲デ」「条件付存在ニ」の正答率

	単純存在ニ	動作デ	範囲デ	条件付存在ニ
正答率	68.5%	89.5%	79.6%	61.0%

$n=179$.

日本語学習者は、日本語能力試験の N4 以上に合格するレベルである。日本語学習を担当した教員によると、最も低い日本語レベルの日本語学習者は N3 の合格レベルを目指して日本語学習を行うクラスに所属する。但し、N3 に合格するか否かは受験してみなければ分からないということであった。そうだとすれば、日本語学習者は日本語レベルが N4 に合格するか、あるいは N5 に合格するレベルの者もいるかもしれない。つまり、日本語学習者の日本語レベルは、N5 に合格するレベルか N4 に合格するレベル、N3 に合格するレベル、N2 に合格するレベルなど幅広い。そこで「中位レベル」を設定することにした。

レベルについては、正答数の平均から標準偏差を引いた得点以下を下位レベル、正答数の平均に標準偏差を加えた得点以上を上位レベルとした。そして、「中位レベル」は、日本語能力試験の N1 に合格しておらず、下位レベルの得点以上であり上位レベルの得点未満のレベルとした。

被調査者ごとの正答数の平均は 31.11、標準偏差は 6.048 であった。調査票の合計点の平均から標準偏差を引いた得点の 25 点以下が下位レベル($31.11-6.048=25.062$)、合計点の平均に標準偏差を加えた得点の 38 点以上が上位レベル($31.11+6.048=37.158$)である。したがって、「中位レベル」は日本語能力試験の N1 に合格しておらず、合計得点が 26 点以上 37 点以下で合計人数は 104 人である。

表 4-6 に「中位レベル」の「単純存在ニ」、「動作デ」、「範囲デ」、「条件付存在ニ」の正答率を示す。被調査者ごとの正答数の平均は 31.78、標準偏差は 3.26 であった。

表 4-6. JFL の「中位レベル」の「単純存在ニ」「動作デ」「範囲デ」「条件付存在ニ」の正答率

	単純存在ニ	動作デ	範囲デ	条件付存在ニ
正答率	72.4%	91.0%	80.2%	62.5%

$n=104$.

存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」および、範囲限定を表す「で」との関係を見るために、「条件付存在ニ」の「に」に誤って「で」を選んだ誤答率(以下、「条件付存在ニ→デ誤答率」)を目的変数として、「動作デ」の正答率および「範囲デ」の正答率を説明変数に投入し、重回帰分析を行う。

表 4-7 は、JFL の重回帰分析の結果で目的変数「条件付存在ニ→デ誤答率」と説明変数「動作デ」「範囲デ」正答率との関係を表したものである。

表 4-7. JFL の目的変数「条件付存在ニ→デ誤答率」と説明変数「動作デ」正答率および「範囲デ」正答率の重回帰分析の結果

JFL			
決定係数	説明変数	β	p
$R^2=.193$	動作デ	-0.04	0.657
	範囲デ	0.435	0.000**
$n=104.$		注: * $p<.05$. ** $p<.01$.	

「条件付存在ニ→デ誤答率」を目的変数にした回帰式の係数は、「動作デ」が有意ではないのに対し、「範囲デ」が 0.435 で p 値は 0.000 であり 1%の有意水準で有意である。すなわち、「条件付存在ニ→デ誤答率」と「範囲デ」の正答率との間にそれぞれ正の相関が見られる。このことは、「範囲デ」の正答率が上がると、「条件付存在ニ→デ誤答率」も上がることを意味している。一見、奇妙に見えるこの現象は、4.1 で詳しく分析し、「範囲デ」にかかる係数の符号が、日本語能力が「初級」、「中級の下」「中級の中」、「中級の上」「上級」レベルにおいて、それぞれ、負、正、負に変化することから、この現象は、日本語能力が中級レベルの中でも「中級の下」、「中級の中」の日本語学習者が、存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」とを混同することに起因していると指摘した。検定統計量が有意であり、帰無仮説が棄却されていれば、決定係数が小さくとも弱い「関連」があることを意味している(林田 2013)。したがって、「中位レベル」は 4.1.4 の「中級の下」、「中級の下」レベルと同様であると解釈する。

ところで、このような混同は無条件に起こっているわけではない。興味深いことに、この混同は表 4-7 に見られるように、「条件付存在ニ」の場合だけである。これを確認するために、「単純存在ニ」、すなわち、「数量詞」「集合体」などを伴わないという意味で単純な存在場所を表す「に」を「で」とする誤答率(以下、「単純存在ニ→デ誤答率」)と「動作デ」「範囲デ」の正答率との関係を見てみよう。表 4-8 にその結果を掲げる。

表 4-8. JFL の目的変数「単純存在ニ→デ誤答率」と説明変数「動作デ」正答率および「範囲デ」正答率の重回帰分析の結果

JFL			
決定係数	説明変数	β	p
$R^2=.080$	動作デ	-0.144	0.136
	範囲デ	-0.256	0.009**
$n=104.$		注: * $p<.05$. ** $p<.01$.	

「単純存在ニ→デ誤答率」を目的変数にした回帰式の係数は、「動作デ」が-0.144 で p 値は 0.136、「範囲デ」が-0.256 で p 値は 0.009 であり、1%の有意水準で有意である。すなわち、「単純存在ニ→デ誤答率」と「動作デ」正答率、「範囲デ」正答率との間にそれぞれ負の相関が見られる。このことは、「動作デ」と「範囲デ」の正答率が上がると、「単純存在ニ→デ誤答率」が下がることを意味している。「動作デ」「範囲デ」を正しく用いるようになると「単純存在ニ」に「で」を用いる誤用が減るのは、「中位レベル」としては、当然の結果であろう。これに対して、表 4-7 の「条件付存在ニ→デ誤答率」は「動作デ」とは無関係であり、「範囲デ」正答率上昇とともに増大している。これらは対照的な結果である。

以上のことから、中国語を母語とする JFL の「中位レベル」は、「動作デ」との混同ではなく、「範囲デ」との混同により「条件付存在ニ」の「に」に誤って「で」を用いることが強く示唆される。次に国内(JSL)の中国語を母語とする日本語学習者に協力を得て調査を行う。

4.2.4 JSL環境の「中位レベル」の中国語話者を対象とした調査

本節は、JFL 環境の「中位レベル」に見られた存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「に」との混同が JSL 環境の「中位レベル」でも見られるか否かを調べる。すなわち、「中位レベル」では、JSL 環境にある日本語学習者も、条件存在文における「に」→「で」の誤用が見られ、その「に」→「で」は動作場所を表す「で」との混同ではなく、範囲限定を表す「で」と混同によるものであるかを調べる調査である。

調査は、JSL 環境にある福岡の九州産業大学に在籍している日本語学習者 80 人に協力を得て 2011 年 7 月に実施した。日本語学習者の日本語能力は日本語能力試験の N4 以上に合格するレベルである。調査は、筆者が担当する日本語授業の終了後に一斉に行った。調査開始前には、筆者が以下のように日本語で調査に関する説明を行った。調査は当該日本語授業の日本語テストではなく成績にも影響しないこと、留学生が使う助詞を知りたいので教えてほしいこと、辞書を使ったり人に答えを聞いたりせずに回答してほしいこと、必ず全て記入してほしいこと、調査票は A4 用紙 1 枚で裏表であること、

10 分程で回答できるが時間制限はないこと、この調査で得た個人情報は漏らさないこと、学術調査のために使うこと、そして、この調査に基づく研究内容が知りたければ筆者にそのことを言ってほしいことを述べた。調査に要した時間は 10 分前後であった。

調査の結果は次の通りである。表 4-9 に「単純存在ニ」、「動作デ」、「範囲デ」、「条件付存在ニ」の正答率を示す。

表 4-9. JSL の「単純存在ニ」「動作デ」「範囲デ」「条件付存在ニ」の正答率

	単純存在ニ	動作デ	範囲デ	条件付存在ニ
正答率	69.1%	88.7%	69.4%	62.1%

$n=80$.

「中位レベル」として、日本語能力試験の N1 に合格しておらず、調査票の合計得点が 26 点以上 37 点以下の日本語学習者を選定した。合計人数は 37 人である。

表 4-10 は JSL の「中位レベル」の「単純存在ニ」、「動作デ」、「範囲デ」、「条件付存在ニ」の正答率である。被調査者ごとの正答数の平均は 31.72、標準偏差は 3.167 であった。「動作デ」の正答率は 96.4%、「範囲デ」の正答率は 66.8%で、正答率の高さからすれば、JFL の「中位レベル」と同じく、「動作デ」の方が「範囲デ」よりも習得が進んでいるようである。

表 4-10. JSL の「中位レベル」の「単純存在ニ」「動作デ」「範囲デ」「条件付存在ニ」の正答率

	単純存在ニ	動作デ	範囲デ	条件付存在ニ
正答率	84.6%	96.4%	66.8%	71.9%

$n=37$.

表 4-11 は JSL の「条件付存在ニ→デ誤答率」を目的変数に、「動作デ」「範囲デ」正答率を説明変数にした重回帰分析を行った結果である。

表 4-11. JSL の目的変数「条件付存在ニ→デ誤答率」と説明変数「動作デ」「範囲デ」正答率の重回帰分析の結果

JSL			
決定係数	説明変数	β	p
$R^2=.120$	動作デ	0.045	0.781
	範囲デ	0.345	0.039*

$n=37$.

注: * $p<.05$. ** $p<.01$.

表 4-11 によると、まず、「動作デ」にかかる係数は有意ではない。つまり、「動作デ」の正答率が上昇しても「条件付存在ニ→デ誤答率」には影響を及ぼさない。このことは、「条件付存在ニ」の「に」を「で」とする誤用は「動作デ」との混同ではないことを示唆する。

次に、「範囲デ」にかかる係数は正に有意である。このことは、「範囲デ」の正答率が上がると、「条件付存在ニ」を「で」とした誤答率も上がることを意味している。この一見奇妙に見える現象は表 4-7 の JFL の結果にも現れていた。そして、この奇妙な現象こそ、「条件付存在ニ」の「に」を「で」とする誤用が、「範囲デ」との混同によるものであるという推論の根拠であった。この推論の正しさを傍証するために、日本語能力が初級レベルの日本語学習者がその母語にかかわらず、存在場所を表す「に」が動作場所を表す「で」と混同され、「に」と「で」の誤用が見られるという事実が(久保田 1994、八木 1996、高見沢・ハント・蔭山・池田・伊藤・宇佐美・西川 2008、野田・迫田・渋谷・小林 2001 など)表 5-11 のような回帰分析ではどのような結果になるのかを調べたい。しかし、JFL と JSL の調査協力者には初級レベルの日本語学習者が含まれていない。そこで、筆者がグアム大学とコロラド州の大学で行った同じような調査から初級レベルを選別し、回帰分析を行った。

4.2.5 初級レベルの日本語学習者のデータによる回帰分析

グアム大学およびコロラド州の大学の初級レベルの日本語学習者は、日本語の学習をゼロから始めて 3 カ月以下という日本語学習歴である。客観的な日本語能力を測る日本語能力試験の合格レベルについては、日本語の授業を担当した教員によると両日本語学習者共に日本語能力試験の N5 に合格しないというレベルである。

グアム大学で使用された日本語学習用教材は『げんき』であり、コロラド州の大学で使用された日本語学習用教材は『ようこそ』である。存在場所を表す「に」、動作場所を表す「で」、範囲限定を表す「で」については両学習者共に学習済みであった。グアム大学の日本語学習者は主に英語を用いるという生活でチャモロ語も用いる。コロラド州の大学の日本語学習者は英語を母語とする学習者である。大学における日本語の授業としての日本語学習は日本語を母語とする日本語教員によって英語を媒介語とせず日本語による直接法で行われている。また、日本語の授業以外にも大学内での日本語教員との会話は基本的に日本語で行われている。

調査票

初級レベルの日本語学習者に対する調査票は 4.2.2 で示した中級レベルの日本語学習者に対する調査票と同じものである。但し、初級レベルの日本語学習者が学習していない語は削除し、学習者がすでに学習した語を用いた問題文となっている(例：食堂→カ

フェテリア)。実際の調査票は巻末に示すこととして問題文例を以下に示す。

- ・「単純存在ニ」：存在場所を表す「に」を正答とする問題文 6 問(「田中さんがカフェテリア(に・で・を・から)います」)。
- ・「動作デ」：動作場所を表す「で」を正答とする問題文 6 問(「佐藤さんはカフェテリア(に・で・を・から)ご飯を食べます」)
- ・「範囲デ」：範囲限定を表す「で」を正答とする問題文 7 問(「韓国(に・で・を・から)有名な人は誰ですか」)
- ・「条件付存在ニ」：存在場所を表す「に」を正答とする問題文 8 問(「寮(に・で・を・から)アメリカ人がいますか」)。
- ・ダミーの問題文：「存在場所+場所対比」文の「に」：存在場所を表す「に」を正答とする問題文 7 問である。
- ・「を」を正答とするダミーの問題文で 7 問である。
- ・「から」を正答とするダミーの問題文で 7 問である。

以下、表 4-12 に記述統計の結果を示す。

表 4-12. 初級レベルの日本語学習者の「単純存在ニ」「動作デ」「範囲デ」「条件付存在ニ」の正答率

	単純存在ニ	動作デ	範囲デ	条件付存在ニ
正答率	48.6%	46.7%	47.8%	45.4%

$n=46$.

初級レベルの日本語学習者の「単純存在ニ」つまり存在場所を表す「に」の正答率は 48.6%である。これは、2.2.2 の初級レベルの日本語学習者を対象とした習得に関する先行研究で見た八木(1996)の結果と大きな差はないと思われる。八木(1994)では存在場所を表す「に」の正用率が 50%台であったが、この割合は日本語学習者が作文中に正しく用いた「に」の割合であった。それに対し、表 4-12 は格助詞選択式テストにおける「に」と「で」の正答率である。調査の方法が異なるため、八木(1994)正用率と表 4-12 の正答率を比較することはできないが、両者とも同程度であると言って良いのではないと思われる。すなわち、グアム大学とコロラド州の大学の初級レベルの日本語学習者は先行研究で見た初級レベルの日本語学習者と同じような割合での存在場所を表す「に」を正しく用いることができるということである。

表 4-13 は目的変数に「単純存在ニ→デ誤答率」、説明変数に「動作デ」の正答率と「範囲デ」の正答率とした回帰分析の結果を示したものである。

表 4-13. 日本語能力が初級レベルの日本語学習者の目的変数「単純存在ニ→デ誤答率」と説明変数「動作デ」「範囲デ」正答率の重回帰分析の結果

初級レベルの日本語学習者			
決定係数	説明変数	β	p
$R^2=.239$	動作デ	0.393	0.012*
	範囲デ	0.163	0.280

$n=46$.

注: * $p<.05$. ** $p<.01$.

表 4-13 によれば、「動作デ」の正答率が上昇すれば、「単純存在ニ→デ誤答率」が同様に上昇するという奇妙な現象が起きている。つまり、「単純存在ニ」の「に」→「で」の誤用が「動作デ」との混同によるものである場合、「動作デ」の正答率の上昇とともに、「単純存在ニ」の「に」→「で」の誤用も増えていくのである。

これを表 4-7、表 4-11 に適応すると、「範囲デ」の正答率が上昇すると、「条件付存在ニ」の「に」→「で」の誤用も増加しているので、「条件付存在ニ」の「に」→「で」の誤用が、「範囲デ」との混同によるものであると推論できることになる。

表 4-13 に示されたような現象は JSL の「単純存在ニ→デ」誤答率を目的変数とした同様の回帰分析で、見ることができるだろうか。それを確認するための回帰分析の結果が表 4-14 である。

表 4-14. JSL の目的変数「単純存在ニ→デ誤答率」と説明変数「動作デ」「範囲デ」正答率の重回帰分析の結果

JFL			
決定係数	説明変数	β	p
$R^2=.109$	動作デ	-0.288	0.084*
	範囲デ	0.156	0.341

$n=37$.

注: * $p<.1$.

表 4-14 によると、「範囲デ」正答率にかかる係数は有意でなくなり、「動作デ」正答率にかかる係数は負に有意となった。「範囲デ」正答率にかかる係数が有意でなくなったことは、「単純存在ニ」の「に」を「で」とする誤用は「範囲デ」との混同によるものではないことが示唆される。また、「動作デ」正答率にかかる係数が負に有意となったので、「動作デ」を正しく用いるようになると「単純存在ニ」を「で」とする誤用が少なくなるという通常の関係が再現されたと言えよう。

表 4-8 の JFL の結果と表 4-14 とを比較すると、「動作デ」正答率にかかる係数が負になったことは共通している。他方、表 4-14 では、「範囲デ」正答率にかかる係数が単に有意にならなかったのに対して、表 4-8 では、負に有意となっている。その理由については不明である。もしかすると、表 4-6 で見たように、JFL の「範囲デ」の正答率が 80.2% と高いのに対し、表 4-10 の JSL の「範囲デ」の正答率が 10% 以上も低く、66.8% であることと関係があるのかもしれない。

JFL と JSL との比較を行いながら、以上の結果をまとめておきたい。表 4-7 より、JFL では、「条件付存在ニ」に「で」を用いる誤用は、「動作デ」ではなく「範囲デ」との混同によるものであることが示唆された。そこでは、「範囲デ」を正しく用いるようになると、「条件付存在ニ」に「で」→「で」と誤用するという特徴的な現象が見られた。一方、「単純存在ニ」においては、表 5-8 より、「範囲デ」を正しく用いるようになると、「で」を誤用するという特徴的な現象は見られなかった。その代わり、「動作デ」「範囲デ」の正答率が上昇すれば、「で」の誤用が減少するという自然な結果が得られた。したがって、「単純存在ニ」における「で」の誤用は、「動作デ」「範囲デ」との混同に起因すると考えられる。

他方、JSL においては、JFL の表 4-7 に対応する、表 4-11 がほぼ同じような結果となった。したがって、JSL においても JFL 同様に、「条件付存在ニ」に「で」を用いる誤用は、「動作デ」ではなく「範囲デ」との混同によるものであると考えられる。「単純存在ニ」においては、表 4-14 より、「範囲デ」との混同は否定的であり、もっぱら「動作デ」との混同に起因していることが示唆される。

以上のことから、全体としては、JSL の結果はおおむね JFL と同じであると結論して良いであろう。すなわち、「中位レベル」では、「動作デ」との混同ではなく、「範囲デ」との混同により、「条件付存在ニ」の「に」に誤って「で」を用いていることが示唆される。したがって、条件付存在文における存在場所を表す「に」について、動作場所を表す「で」との混同が見られず、範囲限定を表す「で」との混同が見られるこの段階は、中国語を母語とする日本語学習者においては、存在場所を表す「に」の習得における発達の 1 つの段階である可能性があると言って良いのではないだろうか。

ところで、初級レベルの日本語学習者に「*クラスで 2 人韓国人がいる」の「に」→「で」の誤用は現れるだろうか。これは 2.2.2 の先行研究における問題点として示した問題である。「*クラスで 2 人韓国人がいる」の「に」→「で」の誤用が現れた場合、それは動作場所を表す「で」との混同による誤用なのか。それとも、中級レベルの日本語学習者と同様に範囲限定を表す「で」との混同による誤用なのかを確認しておかなければならないであろう。

表 4-15 は目的変数に「単純存在ニ→デ誤答率」、説明変数に「動作デ」の正答率と「範囲デ」の正答率とした回帰分析の結果を示したものである。

表 4-15. 日本語能力が初級レベルの日本語学習者の目的変数「条件付存在ニ→デ誤答率」と説明変数「動作デ」「範囲デ」正答率の重回帰分析の結果

初級レベルの日本語学習者			
決定係数	説明変数	β	p
$R^2=.360$	動作デ	0.227	0.105
	範囲デ	0.463	0.002*
$n=46.$		注: * $p<.05$. ** $p<.01$.	

表 4-15 によれば、「範囲デ」の正答率が上昇すれば「条件付存在ニ→デ誤答率」が同様に上昇するという現象が起きている。つまり、「条件付存在ニ」の「に」→「で」の誤用が「範囲デ」との混同によるものである場合、「範囲デ」の正答率の上昇とともに、「条件付存在ニ」の「に」→「で」の誤用も増えていくということである。「動作デ」にかかる係数は有意ではない。「動作デ」の正答率が上昇しても「条件付存在ニ→デ誤答率」には影響を及ぼさないということである。このことは、「条件付存在ニ」の「に」を「で」とする誤用は「動作デ」との混同ではないことを示唆しており、「中位レベル」の中国語話者と同じ現象である。

初級レベルの日本語学習者の結果と「中位レベル」の中国語話者の結果とを合わせて考えると日本語学習者の存在場所を表す「に」の習得は以下のように進むのではないかと考えられる。日本語学習者は初級レベルのときに存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同により「*家でいる」のような誤用が現れる。また、条件付の存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との混同により「*クラスで 2 人韓国人がいる」の誤用も現れる。そして、日本語能力が向上し初級レベルから中級レベルのある日本語レベル(本研究の「中位レベル」)になると、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同により「*家でいる」の誤用は消える。だが、条件付の存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との混同により「*クラスで 2 人韓国人がいる」の誤用は残る。

4.2.6 まとめ

本節では、存在場所を表す「に」の習得の段階を探るため、JSL 環境にある中国語を母語とする日本語学習者を対象とした格助詞選択テスト形式の調査を行った。その結果、JSL の「中位レベル」にある日本語学習者には、条件付存在文の存在場所を表す「に」を「で」とする誤用は、動作場所を表す「で」との間には何ら関係が見られず、範囲限定を表す「で」との間に有意な関係が見られた。この分析の結果は、JFL 環境にある中国語を母語とする「中位レベル」の日本語学習者のデータと同じ分析の結果であった。このことから、中国語を母語とする日本語学習者については、「集合体」を表す存在文

における存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との混同が見られる発達段階が中級レベルのどこかに存在する可能性があることが分った。JFL 環境にある初級レベルの日本語学習者のデータの分析結果と合わせると、上記混同による誤用は初級レベルのあるレベルからすでに現れていることになる。そのため、2.2.1 で予想された場所を表す「に」の発達段階は修正が必要になる。

また、本節の「中位レベル」は中国語を母語とする中級レベルの日本語学習者である。日本語学習者の母語が異なれば、異なる発達を辿ると考えざるを得ない(白畑・若林・村野 2010)。母語の異なる日本語学習者が、どの部分が同じ発達の段階を辿り、どの部分が異なるのかについての調査は、次の 4.3 で行う。

4.3 韓国語母語話者を対象とした調査

研究課題 1 を明らかにするために立てた仮説検証項目Ⅲを検証するための調査である。本節は、韓国語を母語とする日本語学習者を対象として調査を行う。中国語を母語とする日本語母語話者にとっては、日本語の「に」、「で」の区別に対応する文法形式を持たないため、両者の使い分けは難しいと考えられており、韓国語を母語とする日本語学習者にとっては、存在場所を表す「に」、動作場所を表す「で」とほぼ重なる用法である「e」、「eso」を持つため、両者の使い分けは中国語話者に比べて容易であると考えられている(蓮池 2004)。したがって、韓国語を母語とする日本語学習者にも中国語を母語とする日本語学習者と同様の結果が得られたなら、それは日本語学習者が通る発達の 1 つ段階である可能性が高まる。

4.3.1 仮説の検証

本節は、韓国語を母語とする日本語学習者についても、「中位レベル」という日本語レベルが同じであれば、中国語を母語とする日本語学習者のデータと同じ分析結果が得られるかを調べるものである。以下に仮説検証項目Ⅲを再び示しておく。

仮説検証項目Ⅲ：日本語を学習する母語が異なっても「中位レベル」であれば、数量詞、「中」などと共に用いられた場所名詞が集合体を表すような文に「で」を用いる誤用が見られる。

4.3.2 分析の方法および調査票の修正

ここで、分析の方法について説明しておくことにする。4.1 の日本国内の日本語学習者を対象として行った調査では、「条件付存在ニ」の正答率が U 字型を示し、U 字型の底に当たる「中級の下」「中級の中」のレベルには、「範囲デ」正答率が上がると「条件付存在ニ」の「に」→「で」誤答率も上がるという正の相関が見られた。その他のレベ

ルには、負の相関が見られた。一般に、言語の習得は混同され易い2つの文法項目があっても、一方を正しく用いることができるようになると、もう一方も正しく用いることができるようになると言われている。すなわち、「に」と「で」が混同され易いものであっても、「で」を正しく用いることができるようになると、「に」も正しく用いることができるようになり、「で」の正答率が上がれば「に」→「で」の誤答率は下がるので、負の相関が見られる(=「一般的な関係」)。5.1の「中級の下」「中級の中」のレベルに見られたのは、「一般的な関係と逆の関係」である。

4.2の日本語学習環境の異なる中国語を母語とする日本語学習者を対象として行った調査では、「中位レベル」の日本語学習者に「範囲デ」正答率が上がると「条件付存在ニ」の「に」→「で」誤答率も上がるという「一般的な関係と逆の関係」が見られたため、それはU字型の底に当たるレベルであると解釈し分析をした。

調査票の修正については後述するが、4.2の調査票は以下のような構成であった。

- (a-1)「単純存在ニ」(cとdに比べて単純な存在場所を表す「に」を正答とする文)
- (a-2)「動作デ」(動作場所を表す「で」を正答とする文)
- (b)「範囲デ」(範囲限定を表す「で」を正答とする文)
- (c)「条件付存在ニ」(数量詞などを伴う存在場所を表す「に」を正答とする文)
- (d)ダミー文(「対比存在ニ」2つの場所が対比された文の存在場所を表す「に」を正答とする文)
- (e)(f)ダミー文(「を」あるいは「から」を正答とする文)

分析の方法は、以下の通りである。まず、1人1人の調査協力者における、(a-2)の問題文の「動作デ」の正答率、(b)の問題文の「範囲デ」の正答率を計算し平均する。次に、同じように、1人1人の調査協力者における、(c)の「条件付存在ニ」の問題文に誤って「で」とした誤答率(以下、「条件付存在ニ→デ誤答率」)、および、(a-1)の「単純存在ニ」の問題文に誤って「で」とした誤答率(以下、「単純存在ニ→デ誤答率」)を計算し平均する。最後に、これらの変数を用いて回帰分析をする。回帰分析に用いる変数を以下に示す。

- (i)目的変数「条件付存在ニ→デ誤答率」、説明変数「範囲デ」正答率と「動作デ」正答率
- (ii)目的変数「単純存在ニ→デ誤答率」、説明変数「範囲デ」正答率と「動作デ」正答率

(i)では、回帰式の「範囲デ」正答率にかかる係数が正に有意となり(「一般的な関係と逆の関係」)、「動作デ」正答率にかかる係数が有意とならないことが期待される。そして、(ii)では、回帰式の「範囲デ」正答率にかかる係数も、「動作デ」正答率にかかる係数も、有意とならなければ、「範囲デ」および「動作デ」の習得と無関係な誤用で

あると考えられる。

調査票は、統計処理における信頼性を高めるため、後述するが合計 42 問であった問題文を合計 48 問とした。4.1 では、条件付存在文における存在場所を表す「に」→「で」の誤用が範囲限定を表す「で」と関係があるか否かに焦点を当て分析した。「食堂(に)彼がいる」のような存在場所を表す「に」と「食堂(で)ご飯を食べる」のような動作場所を表す「で」の問題文はそれぞれ 3 問ずつであった。それは中級レベルの日本語学習者が「食堂(に)彼がいる」のような存在場所を表す「に」と「食堂(で)ご飯を食べる」のような動作場所を表す「で」については一応理解していると考えられたからである。本節では、(a-1)の単純な存在場所を表す「に」と(a-2)の動作場所を表す「で」の問題文を 3 問ずつ追加することにした。3 問追加することによって 1 問の問題文に対し正答が選ばれる確率の偶然性をよりいっそう排除できる。調査票の問題文は 3 通りの並べ方である。3 通りの調査票は付録に示すこととし、以下、追加した問題文を示す。

(a-1)「単純存在ニ」：存在場所を表す「に」を正答とする問題文である。追加した 3 問は以下の通りである。

(42)山田さんは大学(に、で、を、から)います。

(43)母はアメリカ(に、で、を、から)います。

(44)富士山は日本(に、で、を、から)あります。

(a-2)「動作デ」：動作場所を表す「で」を正答とする問題文である。追加した 3 問は以下の通りである。

(45)食堂(に、で、を、から)ご飯を食べています。

(46)山田さんは今、大学(に、で、を、から)働いています。

(47)山田さんは今、寮(に、で、を、から)遊んでいます。

4.3.3 調査協力者

調査協力者は、釜山の釜慶大学と東義大学のいずれかに在籍している 1 年生～3 年生の 90 人の日本語学習者である。日本語学習者は初級日本語学習用教材および中級日本語学習用教材を用いた学習歴がある。日本語能力試験の N4 以上のいずれかの試験に合格しているか、合格すると見なされるレベルである。

4.3.4 調査の結果と考察

調査は、2013 年 9 月に実施した。調査票を配布する前に調査に関する注意書きが書かれた用紙を配布した。調査に関する注意書きは日本語で書かれたものと韓国語で書か

れたものを準備し、日本語学習者の日本語レベルに応じて配布した。調査に関する注意書きは付録につける。調査票の記入時間は特に設けなかったが、中国語を母語とする日本語学習者と殆ど同じであり、日本語学習者は数名を除き、10～15 分の間に調査票の記入を終えた。3 通りの調査票の合計得点には差が見られなかったので、すべての回答を分析対象として用いた。比較のためには、4.2 の JFL 環境における中国語を母語とする日本語学習者のデータを用いる。表 4-16 に日本語学習者全体の「単純存在ニ」、「動作デ」、「範囲デ」、「条件付存在ニ」のそれぞれの正答率を示す。

表 4-16. 韓国語を母語とする日本語学習者の「単純存在ニ」「動作デ」「範囲デ」「条件付存在ニ」の正答率

	単純存在ニ	動作デ	範囲デ	条件付存在ニ
正答率	81.48%	81.30%	75.08%	67.78%

$n=90$.

表 4-17 は 4.2.3 で表 4-5 として示したものをここで再び表 4-17 として示したものである。表 4-17 に中国語を母語とする日本語学習者の「単純存在ニ」、「動作デ」、「範囲デ」、「条件付存在ニ」のそれぞれの正答率を示す。

表 4-17(=表 4-5). 中国語を母語とする日本語学習者の「単純存在ニ」「動作デ」「範囲デ」「条件付存在ニ」の正答率

	単純存在ニ	動作デ	範囲デ	条件付存在ニ
正答率	68.5%	89.5%	79.6%	61.0%

$n=179$.

「中位レベル」は、中国語を母語とする日本語学習者より設定したもので、日本語能力試験の N1 にまだ合格しておらず、合計得点が 26 点以上 37 点以下であるという日本語レベルであった。したがって、韓国語を母語とする日本語学習者も「中位レベル」を対象として分析した。ところが、韓国語を母語とする「中位レベル」の日本語学習者には、「範囲デ」正答率と「条件付存在ニ→デ誤答率」との間に有意な相関関係が見られなかった。このことは、日本語と類似した格助詞の体系を持つ韓国語を母語とする日本語学習者が、「に」、「で」の区別に対応する文法形式を持たない中国語を母語とする日本語学習者に比べると、助詞使用における混乱が少ない(蓮池 2004)ことが関係していると考えられた。

そこで、韓国語を母語とする日本語学習者の日本語レベルを平均値と標準偏差より 2

つに分け、分析することにした。すなわち、調査票の合計得点の 22 点以上 32 点以下のレベル(平均値 32.22－標準偏差 9.90=22.32)および、合計得点の 32 点以上 42 点以下のレベル(平均値 32.22＋標準偏差 9.90=42.12)を分析の対象とした。すると、韓国語を母語とする日本語学習者には合計得点が 32 点以上 42 点以下のレベルに、中国語を母語とする日本語学習者と同様の結果が見られた。結果は後で示すが、「中位レベル」の中でも高い日本語レベルに「範囲デ」正答率と「条件付存在ニ→デ誤答率」との間に有意な関係が見られたということである。

合計得点が 32 点以上 42 点以下のレベルの韓国語を母語とする日本語学習者の「条件付存在ニ→デ誤答率」を目的変数に、「動作デ」正答率と「範囲デ」正答率を説明変数にした回帰分析の結果は強制投入法では p 値が 0.05 であったため、本節ではステップワイズ法²⁴による p 値の値である 0.048 を表示する。表 4-18 にステップワイズ法による回帰分析の結果を示す。

表 4-18. 韓国語話者で合計得点が 32 点以上 42 点以下の目的変数「条件付存在ニ→デ誤答率」と説明変数「動作デ」「範囲デ」正答率の重回帰分析の結果

決定係数	説明変数	β	p
$R^2=.120$ (ステップ 1)	範囲デ	0.346	0.048*
$n=33$.		注: * $p<.05$. ** $p<.01$.	
・除外された変数:「動作デ」			

「条件付存在ニ→デ誤答率」を目的変数にした回帰式の係数は、「範囲デ」正答率が 0.346 で、 p 値は 0.048 であり、5 %の有意水準で有意である(5.3.2 に示した回帰式(i))。

²⁴ 統計処理の結果は、変数間の関係が 5%の有意水準で有意であれば「 $p<.05$.」と表記される。日本語教育の学会誌でも「 $p<.05$.」と表記されるが、 p 値の値が 0.05 を下回る数値の場合である。日本語教育の学会誌では、 p 値の値が 0.05 の場合に「 $p<.05$.」と表記すると、変数間の関係が有意であることが受け入れられないおそれがある。4.2 の回帰分析の結果とは強制投入法によるものである。spss による回帰分析の強制投入法とステップワイズ法は以下の点が異なる。重回帰分析は例えば「条件付存在ニ→デ誤答率」を目的変数に「範囲デ」と「動作デ」を説明変数にした場合、「条件付存在ニ→デ誤答率」と「範囲デ」と「動作デ」との組み合わせを変化させ重回帰分析が繰り返される(米川・山崎 2010)。強制投入法では、「範囲デ」と「動作デ」が強制的に取り入れられ、「条件付存在ニ→デ誤答率」と関係がある説明変数が「範囲デ」と「動作デ」から選択される(米川・山崎 2010)。分析の結果は、目的変数と有意な関係にある説明変数も有意な関係にない説明変数もすべて表内に表示される。ステップワイズ法では、「範囲デ」と「動作デ」が含まれた重回帰モデルから出発し、「範囲デ」の「動作デ」どちらかの変数が順次減少され重回帰分析が繰り返される(米川・山崎 2010)。分析の結果は、目的変数と有意な関係にある説明変数が表内に表示され、有意な関係にない説明変数は表 4-18 のように「除外された変数」として表外に表示される。

すなわち、「条件付存在ニ→デ誤答率」と「範囲デ」正答率との間に正の相関が見られる(「一般的な関係と逆の関係」)。これは、「範囲デ」正答率が上がると、「条件付存在ニ」の「に」を誤って「で」とした誤答率が上がるということを意味している。つまり、「範囲デ」を正しく用いるようになると、「条件付存在ニ」の文に「で」を選ぶ誤用も増加するということである。一方、「動作デ」正答率にかかる係数は有意ではなかった。このことは、「動作デ」の正答率が上がっても、「条件付存在ニ」の誤答率には影響が見られないことを意味している。

目的変数に「存在ニ→デ誤答率」、説明変数に「範囲デ」正答率および「動作デ」正答率とした回帰分析の結果については、何ら関係は見られなかった(4.3.2 に示した回帰式(ii))。

このことから、合計得点が 32 点以上 42 点未満の韓国語を母語とする日本語学習者に見られた、条件付存在文における「に」→「で」の誤用は、動作場所「で」との混同ではなく、範囲限定「で」との混同による誤用による可能性が考えられた。

「中位レベル」とは 4.2.3 で中国語を母語とする日本語学習者の調査結果の合計得点の平均と標準偏差から設定した日本語レベルであった。つまり「中位レベル」とは日本語能力試験の N1 に合格しておらず、調査票の合計得点が 26 点以上 37 点以下というレベルである。しかし、条件付存在文の存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」の混同による誤用が、韓国語を母語とする日本語学習者には合計得点が 32 点以上 42 点以下に見られたのに対し、中国語を母語とする日本語学習者には合計得点が 26 点以上 37 点以下に見られたのも奇妙である。なぜなら、上記の混同による誤用が、中国語を母語とする日本語学習者の方が韓国語を母語とする日本語学習者よりも先に見られなくなるということを意味するからである。韓国語を母語とする日本語学習者は日本語と類似した格助詞の体系を持つため、「に」、「で」の区別に対応する文法形式を持たない中国語を母語とする日本語学習者に比べると、助詞の使用における混乱が少ない(蓮池 2004)はずである。中国語を母語とする日本語学習者も調査票の合計得点が 38 点以上のレベルであっても、上記の混同が見られる可能性も考えられる。そうだとすれば、「中位レベル」とは日本語能力試験の N1 に合格しておらず、調査票の合計得点が 26 点以上のレベルであると修正した方が良いことも考えられる。

そこで、中国語を母語とする日本語学習者の合計得点が 38 点以上のデータを加えて分析してみることにした。表 4-19 は、中国語を母語とする日本語学習者の「中位レベル」に合計得点が 38 点以上のレベルを加えた回帰分析の結果を示したものである。つまり、日本語能力試験の N1 に合格しておらず、調査票の合計得点が 26 点以上の「中位レベル」の中国語を母語とする日本語学習者の回帰分析の結果である。

表 4-19. 中国語話者で合計得点が 26 点以上の目的変数「条件付存在ニ→デ誤答率」と説明変数「動作デ」「範囲デ」正答率の重回帰分析の結果

		JFL	
決定係数	説明変数	β	p
$R^2=.086$	動作デ	-0.009	0.923
	範囲デ	0.292	0.001**
$n=124.$		注: * $p<.05$. ** $p<.01$.	

回帰分析の結果、4.3.2 に示した回帰式(i)は、「範囲デ」正答率にかかる係数が正に有意([一般的な関係と逆の関係])であり、「動作デ」正答率にかかる係数が有意とならなかったこと、回帰式(ii)は、「範囲デ」正答率にかかる係数も、「動作デ」正答率にかかる係数も、有意とならなかったことが分かる。

調査票の問題文数は、韓国語を母語とする日本語学習者に用いられたものは合計 48 問で、中国語を母語とする日本語学習者に用いられたものは合計 42 問であった。問題文数は異なるが、韓国語を母語とする日本語学習者は 42 点を獲得した者であっても、上記の混同による誤用が見られ、43 点以上満点の 48 点を獲得したレベルには上記混同による誤用が見られなかった。それに対し、中国語を母語とする日本語学習者は満点の 42 点を獲得した者はいなかった。そのため、中国語を母語とする日本語学習者が 42 点を獲得することができるか否かについては不明である。

以上の事実をあわせて考慮すると「条件付存在ニ」において、「で」と誤る現象は、「範囲デ」との混同によることが考えられる。朴(1997)によると、「彼は家にいる」のような「に」が「e」に対応し、「太郎が図書館で勉強する」のような「で」が「eso」であり、場所を表す「に」「で」に当たる韓国語の「e」「eso」の使い分けは日本語と並行的である。また、範囲限定を表す「この店がソウルで一番有名な食堂だ」の「で」は「eso」に対応する。ところが、場所を表す「で」以外の「電車で行く」のような手段・方法・道具を表す「で」、「紙で作る」のような材料・原料を表す「で」、「風邪で休む」のような原因・理由を表す「で」、「外国人で横綱に昇進した曙は・・・」のような身分・資格を表す「で」、「裸足で走って優勝した」のような様態を表す「で」、「5 時で閉店です」のような数量的限定・基準を表す「で」は、「から」にも対応している「uro/ro」に対応するという(朴 1997)。特に数量的限定・基準を表す「で」は「uro/ro」に対応に対応するだけでなく、「一個 100 ウォンで売る」や「三時間で走る」の「で」は「e」に対応している(朴 1997)。また、「uro/ro」は、「魚を捕りに海へ行こうか」の「へ」のような方向を表す「へ」、「このバスは鐘路を通って行く」のような経路を表す「を」にも対応している(朴 1997)。

すなわち、場所を表す「に」と「で」以外の「に」と「で」の用法に対応する韓国語

は、「e」「eso」が並行的に対応しているのではなく複雑である。そのため、韓国語を母語とする日本語学習者は、日本語の場所を表す「に」と「で」以外の「に」と「で」の用法を使い分けるときに1つ1つ韓国語に対応させながら「に」と「で」を用いていないと考える。韓国語を母語とする日本語学習者が条件付存在文における存在場所を表す「に」→「で」を誤用するのも、条件付存在文における存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との混同によって起こるのであろう。

4.3.5 まとめ

韓国語を母語とする日本語学習者には、本調査票の合計得点が32点以上42点以下の日本語学習者に「範囲デ」正答率と「条件付存在ニ→デ誤答率」との間に有意な正の関係(「一般的な関係と逆の関係」)が見られ、「動作デ」正答率との間には有意な関係が見られなかった。また、「範囲デ」正答率と「単純存在ニ→デ誤答率」との間にも何ら関係が見られなかった。このことから、韓国語を母語とする日本語学習者にも、存在場所を表す「に」の習得において、範囲限定を表す「で」との混同による条件を伴う存在場所を表す「に」→「で」の誤用が現れる段階がある可能性があることが考えられた。

4.2.5の初級レベルの日本語学習者のデータの分析結果と合わせると日本語学習者の存在場所を表す「に」の発達段階は以下のように考えられる。4.2.5の初級レベルの日本語学習者は英語話者であったが、松田・斎藤(1992)の報告と合わせると、韓国語母語話者の「*家でいる」の「に」→「で」の誤用も存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同によるものであることが推測される。そして、4.2.5で示したように初級レベルのあるレベルのときには存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との混同による条件付存在場所を表す「に」→「で」の誤用も現れることが推測される。しかし、本調査票の合計得点が32点未満のレベルでは、韓国語を母語とする日本語学習者に存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との混同による条件付存在場所を表す「に」→「で」の誤用が見られなかったことから、初級レベルのあるレベルに現れた条件付存在場所を表す「に」→「で」の誤用が消え、再び、32点以上のレベルになって条件付存在場所を表す「に」→「で」の誤用が現れると推測される。

中国語を母語とする日本語学習者と韓国語を母語とする日本語学習者に対する調査の分析結果を合わせて考えると、中級レベルの日本語学習者には存在場所を表す「に」の習得において、動作場所を表す「で」との混同による存在場所を表す「に」→「で」の誤用は消えているが、初級レベルのあるときから現れた範囲限定を表す「で」との混同による条件付存在場所を表す「に」→「で」の誤用が残っているという発達の1つの段階があることが考えられる。但し、韓国語を母語とする日本語学習者については、初級レベルのあるときから現れた範囲限定を表す「で」との混同による条件付存在場所を表す「に」→「で」の誤用はいったん現れなくなり、その後また現れる可能性もある。

第5章

仮説「移動先『に』と動作場所『で』の混同による『で』→『に』 の誤用」の検証

本章では研究課題2を解明するために立てた仮説が支持されるか否かを検証する。本研究課題2は以下に再び示しておく。

研究課題2.

中級レベルには移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同による「で」→「に」の誤用が現れる発達段階があるか。

5.1 移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同

2.2.3で述べたように、場所を表す「に」と「で」の2つの格助詞は中国語では場所を表す名詞の前に置かれる介詞「在」に対応しているため、「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」の誤用が現れるという(顧 1983)。

5.1.1 仮説の検証

3.1.3で述べたように「*あの喫茶店にコーヒーを飲もう」における「で」→「に」の誤用は、これまで先行研究が指摘してきたような存在場所の「に」との混同ではなく、「あの喫茶店」が示す場所が「移動先」と解釈された結果生じたものではないかと考えられた。以下、再び仮説と検証項目を示しておく。

仮説：「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」の「で」→「に」の誤用は、移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同によるものである。

仮説検証項目Ⅰ：「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」の「で」→「に」の誤用は、中級レベルの日本語学習者にとって場所への移動があると判断された場合に、意味的に場所への移動が含意される「ル形」の文において動作場所を表す「で」を、移動先を表す「に」と混同したことによるのであって、存在場所を表す「に」と混同したことによるのではない。

5.1.2 調査の概要

仮説を検証するため、3種類の予備調査および、本調査とフォローアップインタビューを実施した。このうち3種類の予備調査は、(1)翻訳の調査、(2)「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」の「で」→「に」の誤用が場所への移動が想定された結果であるかを判断する調査、(3)「*この喫茶店()コーヒーを飲もう」という文末が非過去の「ル形」であり移動が想定されない文を翻訳する調査から成る。日本語レベルについては後で詳述するが、日本語能力試験の N1 にはまだ合格していない中級レベルの学習者である。なお、3つの予備調査および本調査の調査協力者はそれぞれ異なっている。調査の流れは以下の通りである。

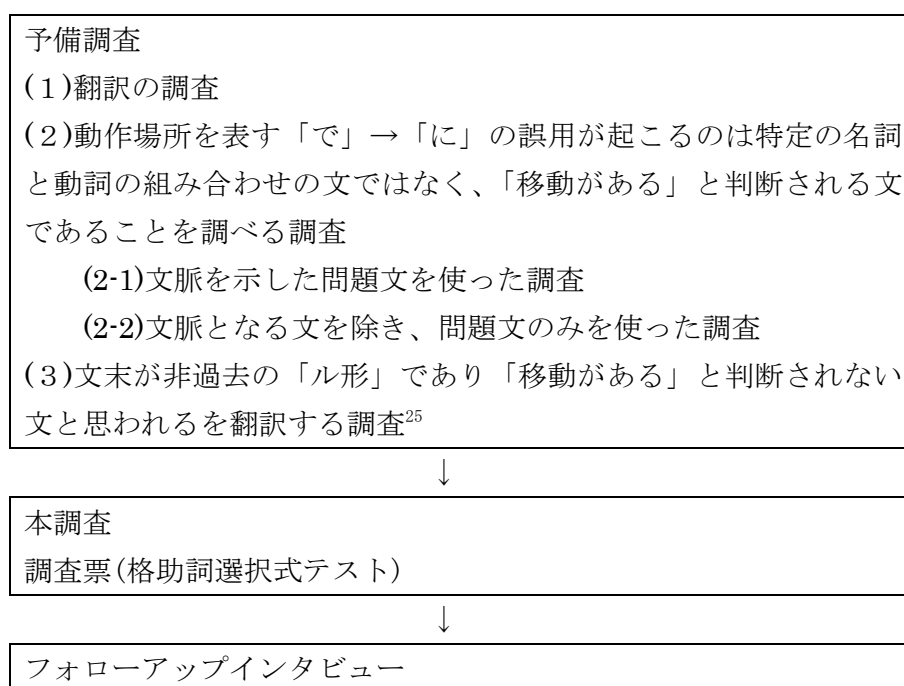


図 5-1. 調査の流れ

5.1.3 予備調査とその結果

第一の予備調査(以下、予備調査(1))は、以下の日本語(a)(b)をそれに対応する中国語にするという調査である。(b)を問題文としたのは、(a)の「あの」という離れた場所を表す表現が用いられていなくとも、物理的な距離感を表す表現が用いられていれば、学習者にとって場所への移動が想起され易いのではないかと考えたからである。(a)(b)の

²⁵ 本来ならば文末に過去の「タ形」を用いた「あの喫茶店()コーヒーを飲んだ」の問題文を調査する必要があるだろう。しかしこの問題文の()に「で」→「に」が誤用された場合、「あの喫茶店」への移動後に「あの喫茶店に存在した」という出来事を表すことになり、翻訳文はすべて「在」を伴う文によって表されることが考えられる。そのため、問題文としては文末が非過去の「ル形」を用いた文の方が適当であると考えた。

問題文に正しい格助詞の「で」を用いたのは、学習者が「あの喫茶店でコーヒーを飲もう」に対応する中国語の文において、場所を表す名詞の前に置く介詞「在」を用いた「在喫茶店」ではなく「行く」に対応する中国語の動詞「去」を用いた「去喫茶店」を思い描いていると考えたからである。もし、動作場所を表す「で」を「去」と翻訳する傾向が明白であれば、(a)(b)のような文における「で」を空白にして正しい格助詞を選択させる問題に直面した場合、意識しようとしまいと「去」の意味ととらえ、それを日本語に翻訳して「に」と答える可能性が出てくると考えた。実際の予備調査(1)の問題文は12問あり、その内の2問が以下の図5-2の(a)(b)である。実際の予備調査(1)は付録で示すこととして、以下、予備調査(1)の問題文(a)(b)を示す。

自分の国のことばに翻訳してみよう。	
(a)あのレストランで食べよう。→	_____
(b)遠くで食事する。→	_____

図 5-2. 予備調査(1)

調査協力者は、福岡市の九州産業大学に在籍しており、図5-2の(a)または(b)の「で」の箇所に「に」を用いるという25人である。25人は、10人が日本語能力試験のN2に合格している日本語レベルであり、15人が日本語能力試験のN2の合格得点には10点前後不足し、不合格となった日本語レベルである。調査は調査協力者の空き時間に行った。表5-1に予備調査(1)の(a)と(b)に対応する中国語の翻訳の調査結果を示す。

表 5-1. 予備調査(1)の(a)(b)に対応する中国語文に「去」「在」が用いられた数

	「去」	「在」	その他	計
N2 合格者	8	1	1	10
N2 未合格者	9	6		15
計	17	7	1	25

N2 合格者 $n=10$ 。・N2 未合格者 $n=15$ 。

表5-1は、予備調査(1)の翻訳の調査結果を示したものである。N2合格者の10人は、(a)または(b)に対応する中国語の文に「去」(=「～に行く」)を用いた人が8人であり(例：「去那个餐厅吃吧」)、場所を表す名詞の前に置かれる介詞「在」を用いた人が1人であった(例：「在那家餐厅吃饭吧」)。それに対し、N2にまだ合格していない15人は、(a)または(b)に対応する中国語の文に「去」(=「～に行く」)を用いた人が9人であり、

場所を表す名詞の前に置かれる介詞「在」を用いた人が6人であった。

総合すると、(a)または(b)の「で」の箇所に「に」を用いるという25人の内、対応する中国語の文に「去」(=「～に行く」)を用いるという人は、17人であり約半数であり、介詞「在」を用いた人は7人であった。このことから、学習者は「あのレストランで食べよう」の「で」を「去」と翻訳することがあることがあり、学習者は「で」を移動を表すと認識している可能性があることが類推される。このような文は、当該事態が発話時において未成立であること、発話時において当該行為の主体が当該場所にいないことの2つを満たし移動が想起される文である。これに類する文で例えば「在那个教室讀書(あの教室で本を読む)」を中国語から日本語に翻訳しようとする時にも、彼らは「去」(～に行く)の意味だと捉え、「に」を誤用するであろうと思われる。

本来ならば、日本語能力試験N2に合格している学習者よりも、N2にまだ合格していない学習者の方が、「で」→「に」の誤用が多いので、もう1つの予備調査および本調査は、N2にまだ合格していない学習者に協力を得て実施した方が良いであろう。しかし、(a)または(b)の「で」の箇所に「に」を用いるという、N2合格者の数は少ないものの、「で」→「に」を用いる際に、何らかの基準をもって、「去」に対応する「～に行く」として「に」を用いているように見える。すなわち、N2にまだ合格していない学習者は、明確な基準をもたずに「で」→「に」を用いているように思われるのである。そこで、もう1つの予備調査および本調査は、N2に合格している学習者に協力を得て実施することにした。

もう1つの予備調査は、「あの喫茶店にコーヒーを飲む」という文を産出する学習者が、この「に」をどのような意図で用いているのかを知るための調査である。学習者が、文を構成する「あの喫茶店」と「飲む」という特定の名詞と動詞の組み合わせではなく、以下の予備調査(2-1)の[例c]の「に」を「～に行く」の「に」として用いるか否かを調べた。

調査協力者は、「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」や「*来年、会社に働く」の「に」を用いるというN2に合格している学習者で予備調査(1)とは異なる16人である。例cおよび例dの「に」について、「～に行く」の「に」として用いるか、「～にいる」の「に」として用いるのか、それとも、その他の「に」として用いるのかを聞いた。例cが5問、例dが5問の計10問である。(c-1)のBの「来年」を伴う文を加えたのは、学習者にとっては、物理的な場所への移動だけでなく、心理的にも場所への移動が想起され易いのではないかと考えたからである。例cのBは、場所に行行為者がまだ存在しておらず、場所への移動が含意される文であり、例dのBは、場所における行為者の存在を表す文である。以下に例cおよび例dの問題文の一部を示す。実際の予備調査(2-1)の漢字にはすべて平仮名を振っている。

・下線の「に」は、「～に行く」の「に」として使いますか、「～にいる」の「に」として使いますか。それとも、その他の「に」として使いますか。()に○を書いてください。

[例 c] : (c-1) A : 来年、働きますか。 () 「～に行く」の「に」
B : ええ。来年、車の会社に働きます。 () 「～にいる」の「に」
() その他_____

(c-2) A : おなかがすきましたね。 () 「～に行く」の「に」
B : うん。じゃあ、あの食堂に食事しよう。() 「～にいる」の「に」
() その他_____

[例 d] : (d-1) A : 働いたことがありますか。 () 「～に行く」の「に」
B : 3年間、車の会社に働きました。 () 「～にいる」の「に」
() その他_____

(d-2) A : キムさんは？ () 「～に行く」の「に」
B : 今、食堂に食事してるよ。() 「～にいる」の「に」
() その他_____

図 5-3. 予備調査(2-1)

調査は筆者が担当する日本語授業と日本語授業の間の 15 分間の休憩時間を使って行った。調査協力者は予備調査(2-1)の回答の仕方を理解した後、記入した。調査に要した時間は 5 分程度であった。以下、表 6-2 に予備調査(2-1)の結果を示す。

表 5-2. 予備調査(2-1)の[例 c][例 d]の「に」が「～に行く」または「～にいる」として用いられた数

	「～に行く」	「～にいる」
[例 c](c-1)	15	1
[例 c](c-2)	16	0
[例 d](d-1)	2	14
[例 d](d-2)	2	14

$n=16$.

表 5-2 は、予備調査(2-1)の結果である。学習者には、何らかの基準があり、「で」→「に」を用いる際「～に行く」の「に」として用いたり、「～にいる」の「に」として用いたりしているようである。つまり、学習者にとって、[例 c]の文が場所への移動があると判断され易い文であり、[例 d]の文が、場所への移動ではなく人が存在していると判断され易い文なのであることが推測される。但し、[例 c]、[例 d]の「で」→「に」は、談話形式の問題文であるため、談話形式でなければ、[例 c]の B の文の「で」→「に」

は、「～に行く」の「に」として用いられないのかもしれないとも考えられる。

予備調査(2-2)も「に」をどのような意図で用いているのかを知るための調査である。予備調査(2-1)が談話形式の問題文であったのに対し、予備調査(2-2)は談話形式の問題文ではなく、1文を問題文としたものである。つまり、文脈が与えられていなくとも、特定の名詞と動詞の組み合わせによって「に」が誤用され易いのではなく、予備調査(2-2)のc類の「に」が「移動する場所」として用いられるか、予備調査(2-2)のd類の「に」が「存在する場所」として用いられるかを調べるためのものである。c類の問題文が5問、d類の問題文が5問で計10問であり、予備調査(2-1)で用いられたBの問題文とほぼ同じ問題文である。

調査の協力は、「あの食堂にご飯を食べる」、「来年大学に勉強する」の「に」を用いるという日本語能力試験のN2に合格している学習者に依頼した。予備調査(1)および予備調査(2-1)と異なる6人である。調査協力者が6人であるのは、「*あの食堂にご飯を食べる」の「に」を用いる日本語能力試験のN2に合格している日本語学習者を探すのが困難であったためである。予備調査(2-2)を予備調査(2-1)の調査協力者に依頼しなかったのは、予備調査(2-1)の談話形式の問題文を覚えていて予備調査(2-2)の回答に影響を与えるおそれがあるからである。調査は筆者が担当する日本語授業と日本語授業の間の15分間の休憩時間を使って行った。予備調査(2-2)の用紙の記入に要した時間は上記の説明を除き3分程度であった。実際の予備調査(2-2)は付録につけることとし、以下に予備調査(2-2)の用紙の一部を示す。表5-3は予備調査(2-2)の結果である。

・下線の「に」は、「移動する場所」として使いますか、「存在する場所」として使いますか。それとも、その他の場所として使いますか。教えてください。

・(c-3)あの食堂に食事する。

()移動する場所

()存在する場所

()その他_____

・(d-3)食堂にご飯を食べている。

()移動する場所

()存在する場所

()その他_____

図 5-4. 予備調査(2-2)

表 5-3. 予備調査(2-2)の回答で「に」が「移動する場所」として用いられた数と「存在する場所」として用いられた数

	問題文	移動する場所	存在する場所
c-3	*あの食堂に食事する。	6	0
c-4	*あの教室に読書する。	6	0
c-5	*来年、大学に勉強する。	6	0
c-6	*来年、事務所に働く。	6	0
c-7	*来年、銀行にお金を換える。	6	0
d-3	*食堂にご飯を食べている。	0	6
d-4	*教室に読書している。	0	6
d-5	*今、大学に勉強している。	0	6
d-6	*今、事務所に働いている。	0	6
d-7	*今、銀行にお金を換えている。	0	6

$n=6$.

表 5-3 によると、(c-3)～(c-7)の「に」は「移動する場所」として用いられており、(d-3)～(d-7)の「に」は「存在する場所」として用いられていることが分かる。予備調査(2-2)より、学習者は文脈がなくとも「に」を「移動する場所」および「存在する場所」として使い分けて用いる可能性があることが分かる。また、「あの喫茶店にコーヒーを飲む」が「あの喫茶店」と「飲む」という特定の名詞と動詞の組み合わせであるため「に」が用いられているのではなく、「あの喫茶店」が「移動する場所」として「に」が後接されている可能性があることも分かる。

予備調査の結果から、学習者は、特定の名詞と動詞の組み合わせによって「に」を用いているのではなく、場所への移動があると判断した場合に「に」を「移動する場所」として用いていることが推察される。その際、学習者は、日本語の文に対応する中国語の文として「在」ではなく「去」を伴う文を頭に描いている可能性がある。特に中級レベルの中でも、日本語能力試験の N2 に合格している学習者は、文脈が明示されていなくとも、文を構成するすべての要素から、場所への移動があると感じる文と移動がなく人が存在していると感じる文の区別がはっきりしていることが分かる。学習者は形式的には同じ「に」を用いるが、「移動する場所」と「存在する場所」を使い分けていることが推察される。但し、どのような名詞と動詞の組み合わせであっても場所への移動が喚起されるかについては予備調査(2-2)では分からない。

予備調査(3)は、文末が非過去の「ル形」であり「移動がある」と判断されない文を翻訳する調査である。調査の協力者は予備調査(1)(2)とは異なる中国語を母語とする日本語学習者で日本語能力試験の N2 に合格している 9 人に依頼した。実際の予備調査(2)

の問題文は 9 問あり、その内の 2 問が以下の図 5-5 の(e)(f)である。実際の調査票の問題文には仮名を振っている。実際の予備調査(3)は付録で示すこととして、以下、予備調査(3)の問題文(e)(f)を示す。

・()に最も適当な助詞を書いてください。そして自分の国のことばに翻訳してください。
e この食堂()ご飯を食べましょう。→
f 来年もこの大学()勉強する。→

図 5-5. 予備調査(3)

表 5-4. 予備調査(3)の回答で()に「に」と「で」が用いられた数および、翻訳文に「在」または「去」が用いられた数

		e		f	
		「に」	「で」	「に」	「で」
e	「在」	1	4		
	「去」	1	3		
f	「在」			1	8
	「去」			0	0

$n=9$.

表 5-4 によると、e の()に最も適当な助詞として「で」を選択した人は 7 人である。7 人の内 4 人は e に対応する中国語の文には「在」を伴うと回答しており、残り 3 人は「去」を伴うと回答している。その 3 人に「この食堂」と「ご飯を食べる」という行為の主体との位置関係について聞くと、「この食堂」は「あの食堂」よりも遠くなく当該行為主体の眼前あるいは近くに位置するということであった。つまり、当該行為主体の「この食堂」への移動があると判断できるということである。「この食堂」に当該行為主体が存在する場合の e であれば、「去」ではなく「在」を伴う翻訳が正しいということであった。すなわち、e のように文末が非過去の「ル形」であっても、「移動がある」と判断されない文には、移動を表す動詞「去」が想定されないことが分かる。f の()に最も適当な助詞として「で」を選択し、f に対応する中国語の文には「在」を伴うと回答した人は 8 人であった。e では場所と当該行為主体の位置関係の解釈が 2 通り見られたのに対し、f では場所における当該行為主体の存在を表す文であるという解釈が一致していたのは、8 人が来年度も調査が行われた大学に引き続き在籍する予定であるからであると思われる。すなわち、f の文末が非過去の「ル形」であっても、「移動がある」

と判断されない文には、移動を表す動詞「去」が想定されないことが分かった。

5.1.4 本調査とその結果

本調査は、格助詞選択式テストの調査票およびフォローアップインタビューである。格助詞選択式テストの調査票から得られたデータの分析は回帰分析²⁶を行う。動作場所を表す「で」を、移動先を表す「に」と混同して「で」を「に」と誤るのであれば(仮説)、移動先を表す「に」を正しく用いるようになるにつれ、「で」を「に」と誤る「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」のような例は見られなくなるはずである。同様に、「で」を「に」と誤る理由が、単に、存在場所を表す「に」の誤用であれば、存在場所を表す「に」を正しく用いるようになるにつれて、「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」のような誤用は見られなくなるであろう。しかし、もし、「で」を「に」と誤る理由が、存在場所を表す「に」の誤用とは無関係であれば、存在場所を表す「に」の正答率が上昇しても、「で」→「に」の誤答率には影響を与えまい。したがって、動作場所を表す「で」を「に」と誤る誤答率を目的変数とし、移動先を表す「に」の正答率、および、存在場所を表す「に」の正答率を説明変数とする回帰分析を行い、移動先を表す「に」の正答率にかかる係数が負に有意となり、存在場所を表す「に」の正答率にかかる係数が有意とならなければ、動作場所を表す「で」を「に」と混同する原因が、移動先を表す「に」との混同であることの直接的な証拠になり得る。そこで、調査票では、まず、動作場所を表す「で」を「に」と誤る誤答率を観測しなければならない。同時に、移動先を表す「に」の正答率、および、存在場所を表す「に」の正答率も知る必要がある。この点を、本調査を作成する際の基本に据える。

調査票の問題文は、「あの食堂(に、で、を、から)ご飯を食べる」のように、「に、で、を、から」の中から最も適当なものの1つを○で囲むというものである。調査を2回に分けたのは、問題数が98問になることで日本語学習者に負担がかかり、格助詞の選択が正しい加減になってしまうのを避けるためである(白畑・坂内 2006)。調査票の問題文は1枚が50問、もう1枚が48問であり、「に」、「で」、「を」、「から」を正答とするそれぞれの問題文数ができるだけ近い数になるように配分する。問題文の漢字にはすべて平仮名を振る。

以下に示した調査票の(g)の「動作デ」の問題文において、日本語学習者が「に」を

²⁶ 本調査のデータの分析にパス解析やSEMなどの分析を使わず、回帰分析を用いる理由を述べておく。回帰分析を用いたのは、相関分析、パス解析、SEMといった分析では、仮説の検証にそぐわないからである。具体的には、相関分析では2変数の間の関係しか見ることができないのに対し、回帰分析では3変数の間の関係を見ることができる(林田 2014)。また、パス解析、SEMは変数間の相互依存関係を描写したり、変数間の相互依存関係をモデルで示す際の適合度を評価したりできる利点はあるものの、本節におけるような、「で」→「に」の誤答の原因が「移動先ニ」あるいは「存在ニ」にあるのか否かを問う問題意識からすれば、相互依存関係を描写しモデルで示す必要がないからである(林田 2013)。

選んだ誤答率を目的変数とし、説明変数には、(h)の「移動先ニ」の正答率および(i)の「存在ニ」の正答率を用いる。実際の調査票は付録に示すこととするが、以下、分析の対象となる問題文の例を示す。

(g)「動作デ」：動作場所を表す「で」の問題文である。「で」を正答とする。6.2.1に示した(1)「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」のような「で」→「に」の誤用が移動先を表す「に」と関係があるのか、存在場所を表す「に」と関係があるのかを調べるための問題文で 12 問である。初級レベルの日本語学習者に見られる(2)「*食堂にうどんを食べた」の「で」→「に」の誤用は存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同による「に」の過剰使用であった(久保田 1994)。そのため、本問の回答に「で」→「に」の誤用が見られた場合、移動先を表す「に」(以下の(h))と存在場所を表す「に」(以下の(i))のどちらと関係があるのかを調べるのである。自動詞文が 6 問であり、他動詞文が 6 問である。以下、問題文の一部を示す。

- (3) あの教室(に、で、を、から)読書する。
- (4) あの教室(に、で、を、から)本を読む。
- (5) あのレストラン(に、で、を、から)ご飯を食べる。
- (6) あのレストラン(に、で、を、から)食事する。
- (7) 来年、大学(に、で、を、から)勉強する。
- (8) 来年、大学(に、で、を、から)日本語を学ぶ。

(h)「移動先ニ」：移動先を表す「に」の問題文である 12 問である。「に」を正答とする。人やモノの移動を表す文である。問題文に用いた動詞は寺村(1982)を参考にした。なお、「あなたは今、九産大の教室です」のように学習者が現在存在する場所を示しているのは、「から」を正答としないためである。これについては、調査実施の直前に「(あなたは今、九産大の教室です)東京(に、で、を、から)行く。」という文をパワーポイントのスライドに示すなどして、「みなさんは今この教室です。という意味です」と口頭で説明する。口頭による説明の際には、回答のヒントとなり得る「に」を使わないように注意を払う。以下、「移動先ニ」の問題文の一部を示す。

- (9) (あなたは今九産大の教室です)中国(に、で、を、から)手紙を送る。
- (10) 妹(に、で、を、から)辞書をやる。

(i)「存在ニ」：人や物の存在場所を表す「に」の問題文で 12 問である。「に」を正答とする。学会で発表したときにこの調査票についてコメントがあった。それは存在場所を表す「に」の問題文は、「いる」と「ある」という文末だけではなく、「置いてある」

のような文末の問題も用いた方が良いというものであった。これを受け、「いる」または「ある」を文末とする問題文を 6 問、「置いてある」のような「Vてある」を文末とする問題文を 6 問作成した。以下、問題文の一部を以下に示す。

- (11) 棚(に、で、を、から)マンガがある。
- (12) 机(に、で、を、から)カバンが置いてある。

(j) 「ヲ」: 「を」を正答とする 12 問のダミーの問題文である。問題文の一部を以下に示す。

- (13) 橋(に、で、を、から)渡る。
- (14) 道(に、で、を、から)歩く。

(k) 「カラ」: 「から」を正答とする 12 問のダミーの問題文である。問題文の一部を以下に示す。

- (15) 駅(に、で、を、から)ここまで歩く。
- (16) 教室(に、で、を、から)山が見える。

調査協力者は、日本語能力試験の N2 合格者の 49 人である。調査は、2012 年 6 月と 7 月に筆者が担当する日本語授業の終了後に 49 人一斉に実施した。調査票の記入時間は特に設けなかったが、日本語学習者が記入に要した時間は約 10 分であった。

回帰分析の前に、まず、「で」→「に」の誤答の原因が他動詞文か自動詞文かに依存していると指摘する先行研究を受けて(蓮池 2004)、他動詞文における誤答率と自動詞文における誤答率との間に差があるか否かについて検定を行った。本節の調査票により、(e)の他動詞文に対する「に」の誤答率と、自動詞文に対する「に」の誤答率を観測することができる。そこで、この 2 つの誤答率に有意差があるかどうかを見るために、対応のある t 検定を行ったところ、誤答率に有意差はなかった。したがって、誤答率の算出において、他動詞文と自動詞文の区別を行わず、両者の誤答率を合わせて「動作デ」の問題文の「で」を「に」とした誤答率(以下、「動作デ」の「デ→ニ」誤答率)とした。

次に、(i)「存在ニ」の問題文の 2 種類の回答で「に」の正答率に差がないかどうかを t 検定した。2 種類の問題文とは、(11)の「棚(に、で、を、から)マンガがある」のような述語が「ある」の問題文と(12)「机(に、で、を、から)カバンが置いてある」のような述語が「Vてある」の問題文である。つまり、述語が「ある」または「いる」の問題文における「に」の正答率と述語が「Vてある」の問題文における「に」の正答率との間に差があるか否かについて、対応のある t 検定を行ったところ、述語が「ある」または「いる」の問題文における「に」の正答率の方が、述語が「Vてある」の問題文における「に」の正答率の方よりも有意に高かった。述語が「Vてある」の問題文にお

る「に」の正答率が低いのは、鈴木(1978)で報告されている動詞の動作性に引かれ「に」→「で」の誤答率が高いためであることが推測される。そのため、以下、(i)「存在ニ」の問題文で(11)の「棚(に、で、を、から)マンガがある」のように述語が「ある」の問題文 6 問における「に」の正答率のみを分析の対象にすることにした。

また、(h)「移動先ニ」の問題文で、(10)の「妹(に、で、を、から)辞書をやる」のような問題文は、「移動先ニ」の「に」の正答率には含めないことにした。理由は、本節の研究結果を論文として投稿した学会誌の査読者から以下のような指摘を受けたからである。「妹に辞書をやる」のような文は、「辞書」の移動先が「人」であり、「大学に行く」のような「場所」への移動とは異なるという指摘である。そのため、「妹(に、で、を、から)辞書をやる」のような問題文を分析の対象から外すことにした。

「動作デ」の「デ→ニ」誤答率は、10.37%であった。誤答率は、各問題文の誤答の合計÷(調査対象者数×問題文)と算出した。正答率も同様である。この「動作デ」の「デ→ニ」誤答率が、「移動先ニ」の「に」正答率(以下、「移動先ニ」正答率)と関係があるのか、「存在ニ」の「に」正答率(以下、「存在ニ」正答率)と関係があるのかが問題となる。表 5-5 に「動作デ」正答率、「移動先ニ」正答率、「存在ニ」正答率および「ヲ」の正答率と「カラ」の正答率を示す。()内の標準偏差は本節を論文として投稿した先の査読者からの要請による。

表 5-5. 「動作デ」「移動先ニ」「存在ニ」「ヲ」「カラ」の正答率と(標準偏差)

	正答率(%)	(標準偏差)
「動作デ」	85.2	(0.173)
「移動先ニ」	73.5	(0.179)
「存在ニ」	89.1	(0.205)
「ヲ」	64.1	(0.193)
「カラ」	79.4	(0.139)

n=49.

49 人の 1 人 1 人の「動作デ」の「デ→ニ」誤答率を目的変数とし、同じく 49 人の 1 人 1 人の「移動先ニ」正答率および「存在ニ」正答率を説明変数とする回帰分析を行った。「移動先ニ」正答率にかかる係数が負に有意となり、「存在ニ」正答率にかかる係数が有意にならなければ、仮説は支持されたと考えて良いであろう。表 5-6 はその結果である。但し、回帰直線が横軸と交わる点を示す定数項については省略した。

表 5-6. 目的変数「動作デ」の「デ→ニ」誤答率、説明変数「移動先ニ」正答率および「存在ニ」正答率の重回帰分析の結果

決定係数	説明変数	β	p
$R^2=.136$	移動先ニ	-0.277	0.029*
	存在ニ	0.007	0.950
$n=49.$		注: * $p<.05$. ** $p<.01$.	

「動作デ」の「デ→ニ」誤答率を目的変数にした回帰式の係数は、「移動先ニ」正答率が-0.277で、 p 値は0.029であり、5%の有意水準で有意である。すなわち、「動作デ」の「デ→ニ」誤答率と「移動先ニ」正答率との間に負の相関が見られる。これは、「移動先ニ」正答率が上がると、「動作デ」の「で」を誤って「に」とした誤答率が下がるということを意味している。つまり、「移動先ニ」を正しく用いるようになると、「動作デ」に「に」を選ぶ誤用も減少し、正しく「で」を用いることができるようになるということである。

一方、「存在ニ」正答率にかかる係数は有意ではなかった。このことは、「存在ニ」を正しく用いるようになっても、「動作デ」の誤答率には影響が見られないことを意味している。以上の2つの事実をあわせて考慮すると「動作デ」において、「に」と誤る現象は、「移動先ニ」との混同によることを示唆している。

以上のような結論の傍証を得るために、「*食堂に食べる」という文を使うという10人に個別にフォローアップインタビューを行い、「に」を用いる理由を尋ねた。10人は、上記調査協力者49人の中の10人である。この10人の内8人は、「*食堂に食べる」は、「ご飯を食べるために、『食堂に行く』から『に』を選ぶ」、「あそこに行く」のように回答した。回答する際のジェスチャーは「食堂に行く」、「あそこ、行く」と言いつつ、人さし指を立て曲げていた腕を伸ばし離れている場所を指すというのが最も多かった。また、「まだ、行っていない。今から行く」、「目的はご飯を食べる。そのために食堂へ行くから」という回答もあった。そして、「食堂でご飯を食べる」などの文から「移動」のイメージを受けるどうかを尋ねたところ、「移動のイメージを受ける」と回答した日本語学習者が9人であった。つまり、日本語学習者は、「食堂」や「食べる」など文を構成する個々の要素を目当てに助詞を選んでいるのではなく、「文」を構成する「食堂」や「食べる」というすべての要素から、「その場所へ移動して行く」と感じた場合に、「に」を用いていることが考えられた。

5.1.5 まとめ

中国語を母語とする中級レベルの日本語学習者が「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」のように、誤って「に」を選ぶのは、移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」との

混同により生じている可能性があることが分かった。日本語学習者は、文を構成している個々の要素ではなく、すべての要素から、何らかの「移動」のイメージが喚起され、場所への移動があると判断すれば、誤って「に」を選んでしまうと考えた。

日本語学習者の場所を表す格助詞の習得は、まずは、初級レベルにおいて、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」が混同される。「*家でいる」のような誤用が見られるのは、「場所を表す指標+で」といった単位が想定されることによることが考えられ(松田・斎藤 2002)、これは、場所を表す「で」を理解しようとしていることが推測される。他方、「*食堂にうどんを食べた」のように存在場所を表す「に」を過剰使用することで(久保田 994)、存在場所を表す「に」を理解しようとしていることが推測される。

その後、中級レベルでは、「*駅で集まった」「*部屋でテレビを置いた」のように、共に用いる動詞の動作性に引かれ「に」→「で」が用いられる(鈴木 1978)。これは、日本語学習者が場所を表す「で」を理解しようとしていることが推測される。他方、「入る」のような特定の動詞を手がかりに「に」を過剰使用も見られる(蓮池 2004)。また、「場所への移動がある」と判断された場合に、移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同により、「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」などが用いられる。これらは、日本語学習者が移動先を表す「に」を理解しようとしていることが推測される。初級レベルでは、「*横浜に遊びへ行く」の「に」は、存在場所を表す「に」として誤用されたものであった(久保田 1994)。この時点では日本語学習者は、この「に」が移動先を表すことを知らなかったか、意識できなかったと思われる。もちろん日本語母語話者であっても「に」が存在場所を表すのか移動先を表すのかを意識して用いているわけではない。だが、翻訳の予備調査で見たように、中級レベルの日本語学習者は「に」を「去」(=「～に行く」)や「在」として明確に区別していた。このことから、日本語学習者の「に」の習得においては、それらの区別が不可欠なのではないか、あるいは、それらの区別が不可欠な段階があるのではないかと考えられる。すなわち、初級レベルのときには、「に」が移動先を表すものであっても存在場所を表す「に」として用いられ、日本語レベルが向上するにつれ、使い分けの基準は明確ではないものの、いつの間にか「に」が「存在の場所」と「移動の場所」として用いられるようになり、日本語能力試験の N2 に合格した日本語レベルになると、何らかの明確な基準をもって「に」が「存在の場所」と「移動の場所」として用いられるようになるのではないか。

このような段階を経て、日本語学習者が「場所への移動がある」と判断したとしても、文に移動を表す動詞を伴わない場合には「で」を用いることができるようになり、文に移動を表す動詞を伴う場合には「に」を用いることができるようになるのではないかと考えられる。

5.2 動詞が表す「移動」の分かり易さと移動先を表す「に」の正答率との関係

5.1 では中級レベルの日本語学習者が「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」の誤用が場所への移動があると判断された場合に動作場所を表す「で」と移動先を表す「に」とを混同して現れることが分かった。本節では動詞が表す移動性の分かり易さが共に用いられる移動先を表す「に」の習得のし易さと関係があるかを調べる調査である。3.1 で立てた仮説を検証し、さらに、3 つの動詞類のそれぞれに特徴的な「助詞選択のパターン」があるかどうかを調べることによって、場所を表す「に」の習得の様子を探る。

5.2.1 仮説の検証

初級レベルの日本語学習者が「行く」、「帰る」と共に用いる「に」を、正しく用いることができるのは、それらの動詞が表す「移動」が他の動詞に比べて分かり易いからではないかと思われた。すなわち、「に」の習得は、共に用いる動詞が表わす「移動」が、分かり易いものから順に進むことが考えられる。もしも、動詞が表す「移動」の分かり易さが、「に」の正答率の高さに関わるのであれば、以下の(17)～(21)は、「入る」、「集まる」、「座る」および「住む」の順に、「に」の正答率が高くなると考えられる。なぜなら、「入る」などの動詞は移動の動きを表すもの、「住む」などの動詞は移動の動きが意識されず、その到達したときの様子を描くもの、「集まる」などの動詞はその中間にあたる(寺村 1982)からである。

(17) *石で座る。

(18) *駅で集まる。

(19) *寮で住んでいる。

(20) 教室に入る。

(21) 京都に住んでいる。

ここから動詞の表す「移動」の分かり易さが、共に用いる「に」の正答率の高さに関わっていると仮定し仮説を立てた。以下、仮説検証項目Ⅱを再び示しておく。

仮説検証項目Ⅱ：場所に下接する「に」を正しく選ぶ正答率は、「入る」などの動詞類と共に用いられる場合、「集まる」などの動詞類と共に用いられる場合、「泊まる」などの動詞類と共に用いられる場合の順に高い。

また、上記の3つの「入る」類、「集まる」類、「泊まる」類の動詞を用いた文に「に」、「で」、「を」、「から」が選択される割合は、同じか異なっているか。異なっているとすれば、どのように異なっているか。また、例えば、ある動詞が用いられている文には「に」、「で」、「を」、「から」の順に多く用いられるが、ある動詞が用いられている文には「に」、

「を」、「で」、「から」の順に多く用いられる、というような何らかの特徴的な「助詞選択のパターン」というようなものがあるかについても調べる。

5.2.2 調査の概要

格助詞選択式テストの調査票とアンケート調査を実施する。アンケート調査は、以下の2点について調べるものである。1点は、格助詞選択式テストの調査票に用いた「に」を正答とする問題文に対し文が表す内容に人や物の移動が感じられるかどうかを調べるもので、もう1点は、格助詞選択式テストの調査票に用いた「に」を正答とする22の問題文の中で文が表す人や物の移動が最も分かり易い文を調べるものである。調査の流れは以下の通りである。

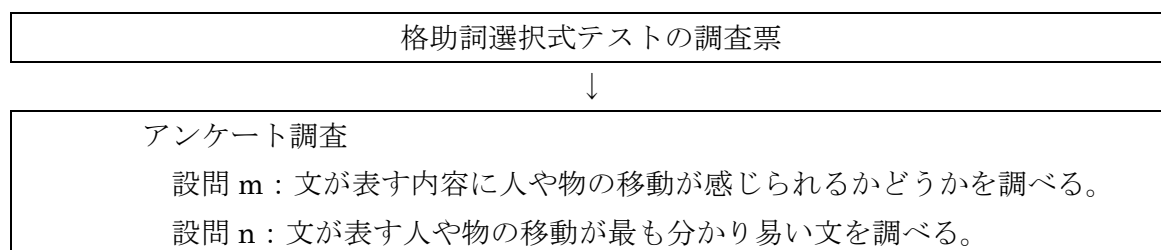


図 5-6. 調査の流れ

格助詞選択式テストの調査票は、問題文中に示した「に、で、を、から」の最も適なもの1つを○で囲むという選択式テストで（例：「公園(に、で、を、から)遊ぶ」)96問から成る。格助詞選択式テストの調査は調査協力者の空き時間に2回に分けて実施する。調査を2回に分けて実施するのは、問題文数が増えることで日本語学習者に負担がかかり助詞の選択が正しい加減になってしまうことを避けるためである。

仮説を検証するためには、3つの動詞類の問題文の「に」正答率を計算し、spssに取り込んで分散分析をした後、多重比較を行う。多重比較はボンフェローニ(Bonferrone)を用いる²⁷。

²⁷ 例えば、1組、2組、3組の3つのクラスで行った同一の100点満点のテストの成績を比較する場合に、1組の平均点が99点、2組が50点、3組が49点だったとすると、1組の点数が一番高いという分には問題ないが、2組と3組に差があったと言って良いかということ为解决するためには、多重比較が行われる(米川・山崎 2010, pp. 31-34)。多重比較の検定には「チューキー(Tukey)のHSD」、「ボンフェローニ(Bonferrone)」、「シェフェ(Scheffe)」などがある(平井 2012, p. 58)。平井(2012, pp. 59-66)には、多重比較の検定を行ったデータの例とその分析方法が示されている。本調査では、日本語学習者数が83であり、同じ日本語学習者の3つの動詞類の回答を比較する。平井(2012, pp. 59-66)の多重比較の検定を行ったデータの例の1つに、90人の参加者から取ったという3回のデータが用いられ、ボンフェローニ(Bonferrone)が用いられている。つまり、本調査と同じような人数から取ったデータで、3つの変数を比較するという例である。そのため、本調査も平井(2012, pp. 59-66)に習い、ボンフェローニ(Bonferrone)を用いるのである。

また、3つの動詞類の問題文に対する、日本語学習者の助詞選択のパターンを探るためには、問題文の1問1問について、「に」、「で」、「を」、「から」が選択されたそれぞれの回答数を集計し、1問の回答数83に占める4つの助詞のそれぞれの回答数の割合を計算する。1問に選択された「に」、「で」、「を」、「から」の割合を「助詞選択のパターン」として、1問1問を比較する。考察の際には、中国語の介詞「在」が「に」と「で」の選択に与える影響の有無を考慮に入れる。6.1.2で述べたように、中国語の場所を表す名詞の前に置かれる介詞「在」は、「彼は家でご飯を食べている」に対応する中国語の文は「他在家里吃飯」であり、「彼は黒板に字を書いている」に対応する中国語の文は「他在黑板上写字」のように、場所を表す「に」や「で」に対応している(顧 1983)。そのため、問題文に対応する中国語の文に介詞の「在」を伴う場合には、「に」と「で」の選択に混乱が生じる可能性があるからである。

アンケート調査は格助詞選択式テストの調査を実施した後に日を改めて実施する。アンケート調査は格助詞選択式テストの調査票で用いた「に」を正答とする問題文について調べるものである。図 5-6 に示した 2 つの設問は A4 の用紙 1 枚に記載したものを配布し、筆者がアンケートの問題の意味と回答の仕方を説明した後で日本語学習者に記入してもらう。

調査協力者は、福岡市の九州産業大学に在籍している中国語を母語とする中級レベルの日本語学習者 83 人である。中級レベルは日本語能力試験の N1 にはまだ合格していないが、N4 以上に合格すると見なされるレベルである。

5.2.3 「に」と共に用いられる移動を表す動詞

3.3.2 で見たように、寺村(1982)では、「入る」、「乗る」、「着く」のような移動を表す動詞は『到達点(入りどころ)』(Goal)と縁の深いもの」(p. 103)であるということであった。それらの動詞は、さらに「A」、「B」、「C」に分けられていた。「A」の動詞は、「入る、乗る、着く、届く」などで移動の動きを表すもの、「C」の動詞は、「泊まる、住む、立つ、座る」などで移動の動きは意識されず、その到達したときの様子を描くもの、「B」は、「A」と「C」の中間で「集まる、近づく、沈む、広まる」などである(寺村 1982, pp. 120-121)。「A」と「B」の動詞は、起点を表す「から」と共に用いることができるのに対し、「C」は「普通それができない」ということであつた(寺村 1982, pp. 114-121)。「A」と「B」の動詞の違いについては記述がない。

調査票の問題文は、寺村(1982)の「A」を「入る」類、「B」を「集まる」類、「C」を「泊まる」類と呼ぶことにし、この3つの動詞類を用いて作成する。

5.2.4 調査票

格助詞選択式テストの調査票は、移動を表す動詞と共に用いられる「に」の習得の様子を探るためのものである。「に」を正答とする問題文は、寺村(1982)の中から初級日

本語学習用教材に提示されている動詞（例えば、「入る」や「乗る」などは提示されているが、「迫る」や「退く」などは提示されていない）を中心に用い作成する。「で」を正答とする問題文は、森田(1980)の「で」の用法を参考にした。そのため、「で」の用法別に問題文を作成したが、分析の際には「で」を正答とするものとして正答率を計算し分析する。比較のため、存在を表す動詞「いる」、「ある」(以下、「いる」類)を伴う問題文を加えている。「に」、「で」、「を」、「から」のそれぞれを正答とする問題文は、24問であり合計96問である。1枚の調査票には、4つのそれぞれの助詞を正答とする問題数を同数配分した。調査票は問題文を順不同に並べものが1通りである。問題文には仮名を振った(例:「寮^{りょう}(に、で、を、から)着^ついた。」)。問題文の種類を以下に示し、すべての問題文の種類および調査票は付録に示す。

(o)「に」を正答とする24問の問題文である。以下、問題文の種類を示す。

(o)-1 「入る」類:「入る」などを述語動詞とする問題文である。

(例:「教室(に、で、を、から)入った」)

(o)-2 「集まる」類:「集まる」などを述語動詞とする問題文である。

(例:「体育館(に、で、を、から)集まった」)

(o)-3 「泊まる」類:「泊まる」などを述語動詞とする問題文である。

(例:「京都(に、で、を、から)泊まった」)

(o)-4 「いる」類:存在を表わす問題文である。

(例:「教室(に、で、を、から)留学生がいる」)

(p)「で」を正答とする24問の問題文である。以下、問題文の種類を示す。

(p)-1 「動作デ」:動作や行為を表す問題文である。

(例:「公園(に、で、を、から)遊ぶ」)

(p)-2 数量を表す名詞に後接する「で」を伴う問題文である。

(例:「古本を500円(に、で、を、から)買った」)

(p)-3 事物を表す名詞に後接する「で」を伴う問題文である。

(例:「ペン(に、で、を、から)書く」)

(p)-4 時点を表す名詞に後接する「で」を伴う問題文である。

(例:「定期試験は今日(に、で、を、から)終わった」)

(p)-5 人を表す名詞に後接する「で」を伴う問題文である。

(例:「みんな(に、で、を、から)決める」)

(q)「を」を正答とする24問のダミーの問題文である。「渡る」「通る」「走る」などを述語動詞とする問題文である。

(例:「橋(に、で、を、から)渡る」)

(r)「から」を正答とする 24 問のダミーの問題文である。「出る」「出す」「落ちる」などを述語動詞とする問題文である。

(例：「2 階の窓(に、で、を、から)出る」)

アンケート調査は、上記に示した格助詞選択式テストの調査票の(o)に当たる問題文について、次の 2 点について問うものである。問題文は「入る」類、「集まる」類、「泊まる」類、「いる」類の問題文とほぼ同じ文で全 22 文である。1 点は、日本語学習者にとって問題文が表す内容が「移動」と「動作や動き」のどちらがより強く感じられるかを問う。もう 1 点は、問題文の中で日本語学習者自身が人や物の「移動」が最も分かり易いものとはどの動詞が用いられた文なのかを問う。

1 点目の問いは図 6-5 のアンケート調査用紙の設問 t に当たる。設問 t の問題文を読んで、文が表す m-①人の「動作や動き」と m-②人や物の「移動」とでは、どちらがより強く感じられるか強く感じられる方に○を記してもらおう。「動作や動き」もなく「移動」もないと感じられる場合は m-④「動作や動きも移動もなし」に、m-①m-②m-④以外の何らかの動きが感じられる場合には m-③「その他」に書いてもらおう。なお、このアンケート調査実施直前には、筆者がパワーポイントなどを用いて例文を示し、文が表す人や物の「移動」や「動作や動き」とはどういう意味なのかを実際に動いて見せながら説明する。日本語学習者の全員にこのアンケート調査の記入方法が理解できたことを筆者が確認した後は、同アンケート調査用紙の設問 n の説明をする。

2 点目の問いは図 5-6 のアンケート調査用紙の設問 n に当たる。設問 n は、22 の問題文の中で、日本語学習者自身にとって文が表す内容で人や物の「移動」が最も分かり易いと思う 3 つの文の番号を○で囲んでもらうというものである。文の番号とは図 6-7 に示す問題文の左に書かれた番号である。文を 3 つに絞れない場合は○をいくつ囲っても良いとした。実際のアンケート調査用紙は付録に示し、図 5-7 はアンケート調査用紙の 1 部を示す。

t. 以下の文には、m-①人の動作や物の動きと、m-②人や物の移動のどちらが強く感じられますか。強く感じられるほうに○を書いてください。他に感じられることがあれば m-③その他に書いてください。但し、動作や動きも移動もないと感じられるものは、④に○を書いてください。

1. 教室に入る。
(m-①動作や動き、m-②移動、m-③その他_____、m-④動作や動き・移動なし)

2. 寮に着く。
(m-①動作や動き、m-②移動、m-③その他_____、m-④動作や動き・移動なし)

n. 1～22の文の中で、人や物の「移動」が分かりやすい文はどれですか。「移動」が分かりやすいすべての文の番号(1～22)を○で囲んでください。

図 5-7. 格助詞選択式テストの「に」を正答とする o の問題文に対し「移動」が感じられるかどうかを調べるためのアンケート調査用紙

5.2.5 分析の結果と考察

格助詞選択式テストの調査は 2013 年 4 月 8 日と 2013 年 2013 年 6 月 18 日に筆者が担当する日本語授業の終了後に日本語学習者 83 人に対し一斉に実施した。調査票を配布した後、「家(に、で、を、から)荷物が届いた」の問題文を見てもらい、問題文の「家」とは日本語学習者の国の家ではなく、今住んでいる日本の家であることを述べた。

調査票の回答には制限時間を設けなかったが、日本語学習者が要した時間はそれぞれ 10 分程度であった。アンケート調査は、2013 年 10 月に格助詞選択式テストの調査協力者 83 人の内 56 人に協力を得て筆者が担当する日本語授業の終了後に日本語学習者 56 人に対し一斉に実施した。

仮説を検証するためには、日本語学習者全体の「入る」類、「集まる」類、「泊まる」類のそれぞれの問題文に正しく「に」と回答した正答率を比較すれば良い。日本語学習者全体の「入る」類、「集まる」類、「泊まる」類のそれぞれの「に」正答率は、63.8%、47.9%、55.8%であった。表 5-7 に分散分析の結果を示す。

表 5-7. 「入る」類「集まる」類「泊まる」類の正答率の分散分析の結果

移動を表す動詞類	平均値	標準偏差	F
「入る」類	63.8	27.02	15.44**
「集まる」類	47.9	23.15	
「泊まる」類	55.8	24.88	

** $p < .01$

$n = 83.$

「に」正答率を比較するために1要因被験者内分散分析を行った結果、 $F(2, 164) = 15.44$, $p < .01$ となり、移動を表す動詞類の主効果が認められた。ボンフェローニ法による多重比較の結果、「入る」類の正答率は「泊まる」類の正答率に対し有意に高く ($p < .01$)、「泊まる」類の正答率は「集まる」類の正答率に対し有意に高い ($p < .01$) ことが認められた。つまり、「入る」類、「泊まる」類、「集まる」類の順に正答率が高いことが分かった。このことから、先の仮説は、「入る」類の正答率が最も高いという点のみ支持されるという結果となった。では、「集まる」類の正答率が「泊まる」類の正答率より、低いのはなぜなのだろうか。「集まる」類は、日本語学習者にとって動詞が表す移動の概念が分かりにくい動詞なのか。

表 5-8 と表 5-9 にアンケート調査の結果をまとめた。表 5-8 も表 5-9 も「その他」が選択された回答は殆どなかった。表 5-8 に「入る」類、「集まる」類、「泊まる」類のそれぞれに①『「動作や動き」が最も強く感じられる』、②『「移動」が最も強く感じられる』、④『「移動も動作や動きもない」と感じられる』という日本語学習者の回答の割合を示す。

表 5-8. 「入る」類「集まる」類「泊まる」類に「移動」が感じられる回答の割合

	「入る」類	「集まる」類	「泊まる」類	「いる」類
① 「動作や動き」が最も強く感じられる	32%	24%	45%	8%
② 「移動」が最も強く感じられる	62%	55%	19%	7%
④ 「移動も動作や動きもない」と感じられる	4%	17%	29%	77%

複数回答あり

$n = 56$.

「集まる」類の正答率が「泊まる」類の正答率より低いのはなぜか、何か要因があるのかに焦点を当て、アンケート調査の結果を見ていく。表 5-18 によると、②の「移動が最も強く感じられる」という回答の割合は、「入る」類が 62%、「集まる」類が 55%、「泊まる」類が 19%である。すなわち、「集まる」類は「入る」類と比べて、②の「移動が最も強く感じられる」という回答の割合が低いわけでもないことが分かる。しかも、①の「動作や動きが最も強く感じられる」という回答の割合は、「入る」類が 32%であり「集まる」類が 24%と低い。つまり、「入る」類の方が「集まる」類よりも、「動作や動きが最も強く感じられる」日本語学習者が多い。「入る」類と「集まる」類の最も異なる点は、④の「移動も動作や動きもないと感じられる」という回答が「入る」類で

はわずか4%であるのに対し「集まる」類では高く17%であるという点である。
次に「入る」類、「集まる」類の問題文1問1問のどの文が、日本語学習者にとって人や物の移動が分かり易いかを見てみよう。表5-9に「人や物の移動が分かり易い」という文を日本語学習者が多く選んだ順に示す。

表 5-9. 日本語学習者が「人や物の移動が分かり易い」と思う文の順位

順位	人数	「人や物の移動が分かり易い」と思う文	動詞類
1	32 人	・2 階の部屋に上がる。	「入る」類
2	26 人	・教室に入る。	「入る」類
3	26 人	・体育館に集まる。	「集まる」類
4	21 人	・海に近づく。	「集まる」類
5	18 人	・家に荷物が届く。	「入る」類
6	15 人	・イスに座る。	「泊まる」類
7	13 人	・新幹線に乗る。	「入る」類
8	12 人	・海に沈む。	「集まる」類
9	10 人	・パン屋に並ぶ。	「泊まる」類
10	7 人	・京都に泊まる。	「泊まる」類
11	6 人	・ニュースが全国に広がる。	「集まる」類
12	5 人	・いつもの場所に立つ。	「泊まる」類
13	3 人	・東京に住む。	「泊まる」類
14	2 人	・寮に着く。	「入る」類
15	2 人	・道に雪が残っている。	「泊まる」類

複数回答あり

$n=56$.

表 5-9 によると、「人や物の移動が分かり易いと思う文」の上位 5 位は、「入る」類の「2 階の部屋に上がる」、「教室に入る」、「家に荷物が届く」、「集まる」類の「体育館に集まる」、「海に近づく」である。上位 5 に「入る」類と「集まる」類の問題文が入っていることから、「集まる」類は日本語学習者にとって人や物の移動が分かり易いということが分かる。

表 5-8 および表 5-9 から、日本語学習者にとって、「集まる」類が移動の概念が分かりにくい動詞ではないことが分かった。「集まる」類の移動の概念が分かり易いにもかかわらず、表 1 の「に」正答率が上がらなかったのはなぜだろうか。中国語の介詞「在」との関係を見てみよう。

表 5-9 の上位であった、「入る」類の「2 階の部屋に上がる」、「教室に入る」、「家に荷物が届く」の文に対応する中国語の文には、介詞「在」を伴わない。それに対し、「集

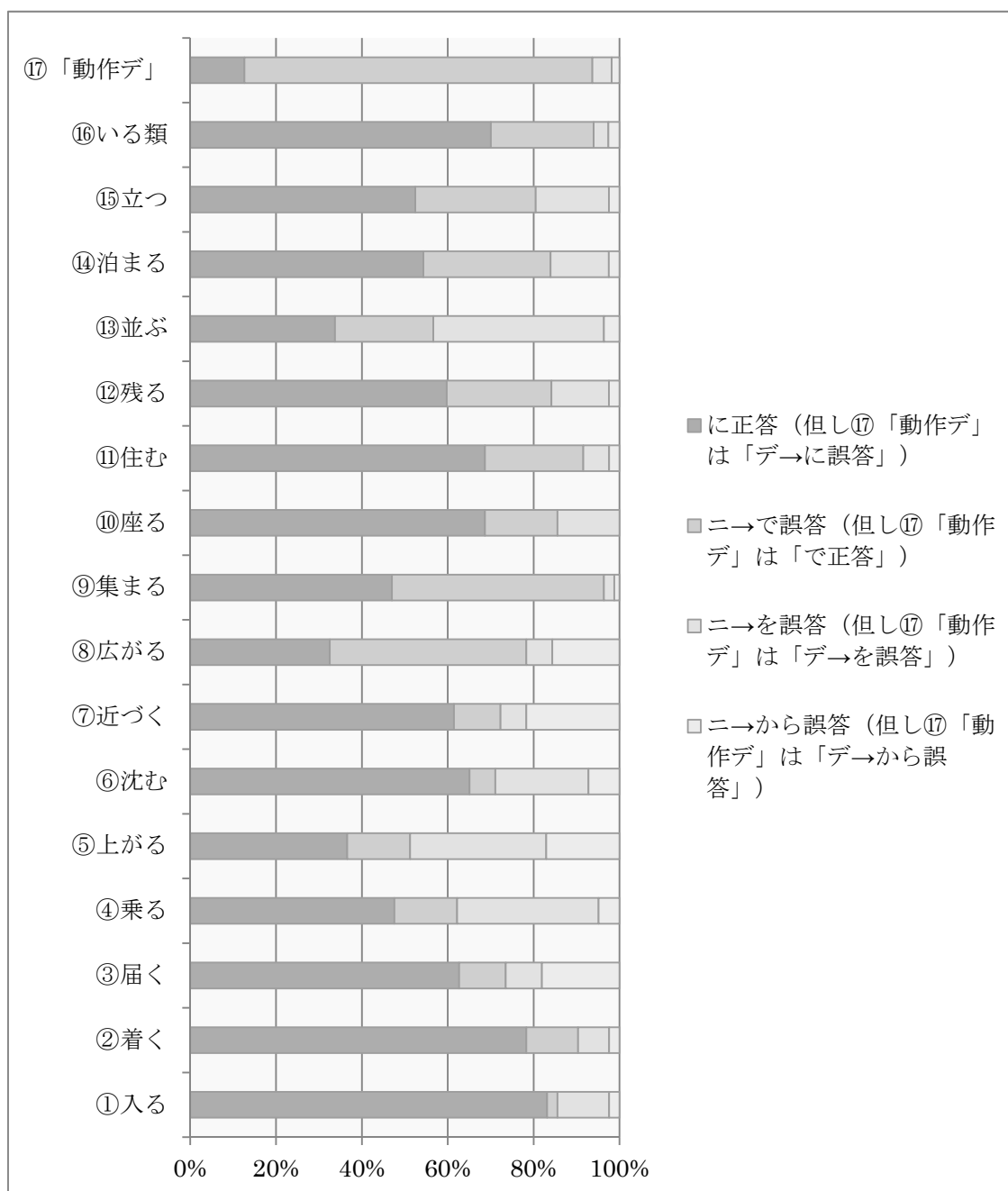
まる」類の「体育館に集まる」、「ニュースが全国に広がる」に対応する中国語の文には、介詞「在」を伴う。すなわち、「集まる」類は、中国語の介詞「在」の影響を受け、「に」の正答率が上がらなかった可能性がある。

ところが、対応する中国語の文に介詞の「在」を伴うにもかかわらず、「泊まる」類は、「に」正答率が「集まる」類よりも高い。しかも、対応する中国語の文に介詞の「在」を伴う問題文の数は、「泊まる」類の方が「集まる」類よりも多い。「集まる」類が 5 問中 3 問であるのに対し、「泊まる」類が 6 問中 5 問である。「に」の正答率を下げた原因が、介詞「在」の影響によるものであるならば、「集まる」類よりも「泊まる」類の方が、「に」正答率が低くなったはずであろう。「泊まる」類の、「に」正答率が高くなったのはなぜか。

表 5-8 によると、④の「『移動も動作や動きもない』と感じられる」という回答は、「入る」類が 4%、「集まる」類が 17%、「泊まる」類が 29%であり、「泊まる」類が最も高い。また、存在を表す「いる」類は 77%である。つまり、「泊まる」類は日本語学習者にとって「移動が感じられる」動詞であるというよりは、「『移動も動作や動きもない』と感じられる」動詞に近いもので、存在を表す表現に近いと感じているのかもしれない。そもそも、「泊まる」類の動詞は、移動の動きが意識されず、その到達したときの様子を描くもの（寺村 1982）であり、益岡・田窪(1987)など研究者によっては、「泊まる」類を述語とする文を、存在を表す文として分類されている。

これらのことから、日本語学習者は、「集まる」類に対し、動詞が表わす移動の概念が分かりにくい動詞であるとは感じていないことが分かった。また、対応する中国語の文に伴う介詞「在」の影響を受け、「に」正答率が下がったとも思われなかった。

最後に、3つの動詞類に特徴的な「助詞選択のパターン」があるかどうか、あるとすれば、それはどのようなものを調べる。日本語学習者が「泊まる」類について、存在を表す表現に近いと感じているならば、「泊まる」類の助詞選択のパターンは、「いる」類と似たような助詞選択のパターンになることが推測される。図 5-8 に、「入る」類（①～⑤）、「集まる」類（⑥～⑨）、「泊まる」類（⑩～⑮）のそれぞれの問題文に選択された「に」、「で」、「を」、「から」の割合（助詞選択のパターン）を示す。



・「に正答」＝正しく回答された「に」の割合、「に→で誤答」＝誤って回答された「で」の割合、「に→を誤答」＝誤って回答された「を」の割合、「に→から誤答」＝誤って回答された「から」の割合

図 5-8. 「入る」類「集まる」類「泊まる」類「いる」類「動作デ」の問題文における助詞選択のパターン

「に」を正しく選択した割合を「に正答」、「に」を選択すべきところに誤って「で」を選択した割合を「に→で誤答」、同様に、誤って「を」を選択した割合を「に→を誤答」

答」、誤って「から」を選択した割合を「ニ→から誤答」と表記している。なお、比較のため、⑯に「いる」類、⑰に調査票(2)-1「動作デ」（動作や行為を表す文）を示した。

「入る」類は、①が「入る」、②が「着く」、③が「届く」、④が「乗る」、⑤が「上がる」をそれぞれ述語とした問題文、「集まる」類は、⑥が「沈む」、⑦が「近づく」、⑧が「広がる」、⑨が「集まる」をそれぞれ述語とした問題文、「泊まる」類は、⑩が「座る」、⑪が「住む」、⑫が「残る」、⑬が「並ぶ」、⑭が「泊まる」、⑮が「立つ」をそれぞれ述語とした問題文である。

まず、3つの動詞類のそれぞれに、特徴的な助詞選択のパターンがあるかどうかを見た。特徴的な助詞選択のパターンが見られたのは、「泊まる」類である。図2より、⑩～⑮の「泊まる」類の助詞選択のパターンは、⑬（「並ぶ」）を除き、似ていることが分かる。すなわち、「に正答」が全体の半分以上を占め、「ニ→で誤答」の割合が約1/4、残り2つは、「ニ→を誤答」の方が「ニ→から誤答」より高い、という助詞選択のパターンである。また、先に推測した通り、「泊まる」類は、⑬（「並ぶ」）を除き、「いる」類の助詞選択のパターンに似ている。

「入る」類と「集まる」類には、特徴的な助詞選択のパターンは見られなかった。「入る」類は、①（「入る」）と②（「着く」）の「に正答」が高いが、次いで高いのは、①（「入る」）が「ニ→を誤答」であり、②（「着く」）が「ニ→で誤答」であるので、パターンが異なる。③（「届く」）は、「に正答」に次いで「ニ→から誤答」が高く、④（「乗る」）は、「に正答」に次いで「ニ→を誤答」が高いので、異なるパターンである。⑤（「上がる」）は、「に正答」と「ニ→を誤答」がほぼ同じである。このように、「入る」類は、「泊まる」類に比べると、①～⑤に共通する特徴的な助詞選択のパターンがあるとは言いがたい。

「集まる」類も、⑥（「沈む」）は「に正答」に次いで「ニ→を誤答」、⑦（「近づく」）は「に正答」に次いで「ニ→から誤答」が高く、⑧（「広がる」）と⑨（「集まる」）は「ニ→で誤答」が「に正答」よりも高い。したがって、「集まる」類も、⑥～⑧に共通する特徴的な助詞選択のパターンがあるとは言えない。

次に、表6-9で日本語学習者が「移動の概念が分かり易い」と感じた上位5位の文を見た。つまり、「入る」類の①（「入る」）、③（「届く」）、⑤（「上がる」）、「集まる」類の⑧（「広がる」）、⑨（「集まる」）である。だが、これらにも、共通する助詞選択のパターンが見られない。そこで、①～⑰の1つ1つの助詞選択のパターンを比較することにした。

①（「入る」）の助詞選択のパターンは、②（「着く」）と似ているように見えるが、①（「入る」）の「ニ→を誤答」が、「ニ→で誤答」および「ニ→から誤答」よりも高い点からすると、「集まる」類の⑥（「沈む」）の助詞選択パターンと似ている。同様に、助詞選択のパターンを比較すると、②（「着く」）は、どちらかと言えば、「泊まる」類の⑪（「住む」）と似ている。

③（「届く」）は、「集まる」類の⑦（「近づく」）の助詞選択パターンと似ており、「ニ→から誤答」が目立つ。これは、日本語学習者が起点を表わす「から」を選択したことによる。③（「届く」）の問題文は、「家に荷物が届く」であり、荷物の到着する場所を表す「に」が正答となる。だが、一部の日本語学習者は、「（中国の）家から荷物が届く」のように、中国を起点とした「から」を選択していた。調査票の問題文に「から」を選択した日本語学習者に理由を尋ねると、「中国の家」を想定した起点を表わす「から」の用法を選択したということであった。調査票を配布した際の「家に荷物が届く」の「家」が「今住んでいる日本の家」であるという筆者の説明を聞いていなかったと思われる。⑤（「上がる」）と⑧（「広がる」）の「ニ→から誤答」も、同様の理由によるものである。

「届く」「上がる」「集まる」「広がる」は、「入る」類と「集まる」類の動詞であり、「泊まる」類ではない。「入る」類「集まる」類と「泊まる」類の異なる点は、「入る」類と「集まる」類の動詞には「から」を伴う名詞句を用いることができるのに対し、「泊まる」類の動詞には「普通それができない」という点であった（寺村 1982, pp. 114-211）。そのため、「泊まる」は、「中国の両親の家から今留学生が住んでいる日本の家に荷物が届く」のように起点を表す「から」と共に用いることができる。「上がる」も、「2階の部屋から屋上に上がる」のように「から」と用いられる。そのため、「上がる」という動作の主体が1階にいるとして回答するようにとすべきであった。また、「集まる」類も「近づく」が「海に近づく」と「海から他の場所に近づく」、「広がる」が「全国に広がる」と「全国から世界に広がる」のように「に」も「から」も用いることができる。そのため、「近づく」は、「近づく」という動作の主体が自宅にいるとして、「広がる」は「広がる」という動きの主体が福岡県にあるとして回答するようにとすべきであった。つまり、問題文に用いられた「場所」がどこであるか、動詞が表す動作や動きの「主体の存在場所」がどこであるかを明確に示すべきであった。それを明確に固定しなかったことにより、日本語学習者は問題文の「場所」や「主体の存在場所」を自由に解釈し「から」を選択した。

④（「乗る」）は、①（「入る」）と同様に、初級日本語学習教材において、「に」と共に提示されている動詞であるが、「に正答」が①（「入る」）に比べるとかなり低く、助詞選択のパターンも異なる。④（「乗る」）の助詞選択のパターンは、「泊まる」類の⑬（「並ぶ」）に似ている。④（「乗る」）、⑬（「並ぶ」）ともに、「ニ→を誤答」が全体の1/3以上を占めている理由は分からなかった。

⑧（「広がる」）と⑨（「集まる」）は、「ニ→で誤答」が高く、全体の1/2を占めているが、助詞選択のパターンは似ていない。「ニ→で誤答」が高いのは、対応する中国語の文に伴う介詞の「在」の影響かと思われる。だが、同じく、対応する中国語の文に介詞の「在」を伴う「泊まる」類の「ニ→で誤答」が全体の約1/4を占める程度であるため、⑧（「広がる」）と⑨（「集まる」）の「ニ→で誤答」の高さが、母語の干渉に

よるとも考えにくい。鈴木(1978)の動詞が表わす動作性による影響だろうか。

⑨（「集まる」）の問題文は「体育館に集まる」であり、「集まる」の動作主は「人」である。そのため、その動作性に引かれ「で」を選択した可能性もある。また、⑧（「広がる」）の問題文は「ニュースが全国に広がる」であり、「広がる」のは「ニュース」であって、「人」ではないが、人を介してニュースが広がるというような動的な動きに引かれ「で」を選択したのかもしれない。動的な動きを表わす⑪（「動作デ」）は、「で」を正答とするが、その正答率が高い。すなわち、⑧（「広がる」）と⑨（「集まる」）の「ニ→で誤答」が高いのは、動詞の動作性に引かれ、⑪（「動作デ」）と同じように「で」を選んでしまった可能性が考えられる。

これらのことをまとめると以下のようになる。

1.「泊まる」類は、⑬（「並ぶ」）を除き、「いる」類の助詞選択のパターンに似た助詞選択のパターンが見られた。それに対し、「入る」類、「集まる」類は、それぞれの動詞類に特徴的な助詞選択のパターンが見られなかった。

2.それぞれの動詞では、①（「入る」）と⑥（「沈む」）、②（「着く」）と⑪（「住む」）、③（「届く」）と⑦（「近づく」）、④（「乗る」）と⑬（「並ぶ」）がそれぞれ似ている助詞選択のパターンであった。⑤（「上がる」）、⑧（「広がる」）、⑨（「集まる」）は、似ている助詞選択のパターンがなかった。

3.「ニ→から誤答」が目立つものは、③（「届く」）、⑤（「上がる」）、⑦（「近づく」）、⑧（「広がる」）であった。但し、この場合、「から」が選択された回答は誤用とは言えなかった。このような動詞は、「場所」がどこであるか、動詞が表す動作や動きの「主体の存在場所」がどこであるかが明確に示されなければ、「から」が選択されてしまう。

4.「ニ→で誤答」が目立って多いものは、⑧（「広がる」）と⑨（「集まる」）であった。動的な動きが他の動詞より強く感じられ「で」の誤答となってしまうことが考えられた。

5.初級用日本語学習教材に「に」と共に提示されている「入る」、「乗る」を述語とする「入る」類の①（「入る」）、④（「乗る」）には、異なる助詞選択のパターンが見られた。

5.2.6 まとめ

本研究は、移動を表す動詞と共起する「に」の習得を探るため、「に」の正答率が「入る」類、「集まる」類、「泊まる」類の順に高いという仮説を立て、調査票に基づく分析

を行った。その結果、仮説を支持する結果は得られなかった。すなわち、本調査票の結果からは、動詞の表す移動の概念の分かり易さが、「に」の正答率の高さに関係しているとは言えないことが分かった。

また、3つの動詞類に選択された助詞のパターンは、3つの動詞類のそれぞれに特徴が見られるというよりも、「入る」と「沈む」を述語とする動詞、「届く」と「近づく」を述語とする動詞、「乗る」と「並ぶ」を述語とする動詞に、それぞれ似たような助詞選択のパターンが見られた。さらに、「に」を用いるべきところに誤って「で」が選択され易い動詞、「に」を用いるべきところに誤って「を」が選択され易い動詞、「に」を用いるべきところに誤って「から」が選択され易い動詞などがあることが分かった。但し、「泊まる」類には「並ぶ」を除き、「いる」類に似た助詞選択のパターンが見られた。

5.2 では、「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」のような「で」→「に」は、日本語学習者が離れた場所での行為を表す場合に「場所への移動がある」と判断し、移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」を混同し用いるのではないかということが考えられた。本節では、移動先を表す「に」の正答率の高さは、移動性の分かり易いと思われる動詞の「入る」類、「集まる」類、「泊まる」類の順に高くはなかった。すなわち、移動の概念がある程度制限されるということであろう。また、表 5-9 からすると、「入る」類の動詞も「集まる」類の動詞も、日本語学習者にとって、人や物の移動が分かりにくい動詞というわけではなかった。日本語学習者は「*駅で集まる」のように「で」を用いるのは(鈴木 1978)、「集まる」の移動性が分からないのではなく、「集まる」が動作や行為を表す動詞であるからこそ「で」を用いるのである。

以上のことから、移動先を表す「に」の習得は移動を表す動詞と共に用いられる際には動詞が表す移動の概念がある程度制限されるものの、意味的に場所への移動が含意される場合に移動先を表す「に」が用いられて進むことが推測される。

第 6 章

仮説「場所名詞が『対比』された場合と場所名詞が『文頭』に置かれた場合に動作場所『で』とは無関係に起こる存在場所『に』→『で』の誤用」の検証

本章では研究課題 3 を解明するために立てた仮説が支持されるか否かを検証する。本研究課題 3 は以下に再び示しておく。

研究課題 3.

中級レベルには、場所名詞が対比された場合および場所名詞が文頭に置かれた場合に動作場所を表す「で」とは無関係に存在場所を表す「に」→「で」の誤用が現れる発達段階があるか。

調査の協力は、中国語を母語とする日本語学習者に依頼した後、韓国語を母語とする日本語調査に依頼する。

6.1 場所名詞が対比された場合の存在場所「に」→「で」の誤用

存在場所を表す「に」→「で」の誤用が現れたのは、場所名詞句が対比された場合であった。以下の(1)～(3)は中国語を母語とする日本語学習者 A が書いた文である。3.2 でも述べたが、「家」には友達がいないが「大学」には友達がいることを表しているということであった。以下用例を再び示しておく。

日本語学習者の用例(母語：中国語)

- (1) ○さんとはソウルで生まれ育ちの若い女子大学生だ。
- (2) 周りに日本人の大学生がたくさんいるそうだ。
- (3) *寮にいません、大学でいる。

6.1.1 中国語話者を対象とした調査

調査は、中国の大連外国語学院日本語学科に在籍している日本語学習者 179 人に協力を得て 2011 年 6 月に実施した。日本語学習者の日本語能力は日本語能力試験の N4 以上に合格するレベルである。

6.1.2 仮説の検証

3.1.4 で述べたように当該学習者は普段、動詞との関係において存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」を使い分けていると思われる。ところが、場所名詞を対比させ「は」を用いて表すという作業が当該学習者にとって複雑である。そのため、対照を表す場合に簡略化を行い、簡略化を行った場所名詞には学習者独自の何らかの基準によって「に」→「で」を誤用してしまうのではないかと考えられた。

以下、仮説と検証項目を再び示しておく。

仮説：「*寮にいません、大学でいる」と「*中国で、お盆のような日もある」の存在場所を表す「に」→「で」の誤用は動作場所を表す「で」との混同とは無関係に現れる。

仮説検証項目Ⅰ：2つの存在文が2つの場所を対比させる形で用いられている場合に、存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用が見られる。

仮説検証項目Ⅱ：2つの存在文が2つの場所を対比させる形で用いられている場合の存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用は、存在場所「に」と動作場所「で」とを混同したものではない。

中国語を母語とする中級レベルの日本語学習者が用いる対比された存在場所を表す「に」→「で」の誤用が、初級レベルの日本語学習者と「に」→「で」の誤用と同じく存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同による「に」→「で」の誤用であるかに焦点を当て調査を行う。

6.1.3 調査票

仮説を検証し、存在場所を表す「に」の習得の様子を探るために、本節では、中国語を母語とする日本語学習者および韓国語を母語とする日本語学習者を対象に、「に、で、を、から」の四択選択テスト形式の調査を行う。調査票は5.2.2で作成したのと同じもので6種類の文からなり全体で42問である。以下、2つの場所が対比された文における存在場所を表す「に」を、「対比」「対比存在」あるいは「存在場所+場所対比」と呼ぶことにする。

分析には、この「存在場所+場所対比」の「に」を用いるべきところに誤って用いられた「で」の誤答率と以下の(t)、「動作場所」文の「で」の正答率の相関分析を行う。調査票の問題文は3通りの並べ方である。以下、問題文の一部を示す。

(s)「存在場所」文の「に」：存在場所を表す「に」を正答とする単純な問題文 3 問である。(v)の「存在場所+場所対比」文に比べると単純であるため、以下、「単純存在ニ」と呼ぶことにする。[問題文例：食堂(に、で、を、から)彼がいます。]

(t)、「動作場所」文の「で」：動作場所を表す「で」を正答とする問題文 3 問である(以下、「動作デ」と呼ぶことにする)。[問題文例：食堂(に、で、を、から)ご飯を食べます。]

(u)「動作デ」ではない「で」：範囲限定を表す「で」を正答とする問題文 7 問である。以下、「範囲デ」と呼ぶ。[問題文例：この店の中のもの(に、で、を、から)何がほしいですか。]

(v)「存在場所+場所対比」文の「に」：存在場所を表す「に」を正答とする問題文 7 問である。本問には場所の対比が含まれておりその点に問(a-1)との違いがある。2 つの存在文が、人または物が存在する 2 つの場所が対比された問題文である。[問題文例：寮の中(に、で、を、から)みんないますが、リーさんは寮の外(に、で、を、から)います。]

(w)ダミー文：「存在場所+条件付」文の「に」：存在場所を表す「に」を正答とする問題 8 問である。本問は数量詞、位置を表す名詞、疑問詞、集合体を表す名詞を含み、その点で問(a-1)と異なる。また、(b)との違いは範囲を限定する文ではないこと、(c)との違いは場所の対比がないことである。[問題文例：この家(に、で、を、から)入口が三つありますか。]

(x)「を」を正答とするダミーの問題文で 7 問である。以下、例として問題文を 1 問示す。[問題文例：飛行機が空(に、で、を、から)飛んでいます。]

(y)「から」を正答とするダミーの問題文で 7 問である。以下、例として問題文を 1 問示す。[問題文例：家(に、で、を、から)大学まで歩いて 10 分かかります。]

6.1.4 調査とその結果

調査は、当該大学の日本語授業の開始前、日本語授業の開始後、日本語授業の終了後のいずれかに筆者が一斉に行った。調査開始前には、当該日本語授業の担当教員が同席する教室で、筆者が以下のように日本語で調査に関する説明を行った。調査は、当該日本語授業の日本語のテストではなく成績にも影響しないこと、留学生が使う助詞を知りたいので教えてほしいこと、辞書を使ったり人に答えを聞いたりせずに回答してほしいこと、必ず全て記入してほしいこと、調査票は A4 用紙に 1 枚で裏表であること、10 分程で回答できるが時間制限はないこと、この調査で得た個人情報は漏らさないこと、

学術調査のために使うこと、そして、この調査に基づく研究内容が知りたければ筆者にそのことを言ってほしいことを述べて実施した。調査に要した時間は 10 分前後であった。

表 6-1 は、「単純存在ニ」、「動作デ」、「範囲デ」、「対比存在ニ」の正答率を示したものである。それぞれの問を正しく回答した場合の正答率(各問題文の正答の合計÷(調査対象者数×問題文))である。問題数 42 問を各 1 点とし、合計得点は 42 点である。3 通りの調査票の合計得点には差が見られなかったので調査票のすべての回答を分析対象として用いた。

表 6-1. 中国語話者の「単純存在ニ」「動作デ」「範囲デ」「対比存在ニ」の正答率

	単純存在ニ	動作デ	範囲デ	対比存在ニ
正答率	68.5%	89.5%	79.6%	61.6%

$n=179$.

日本語学習者は、日本語能力試験の N4 以上に合格すると見なされる中級レベルである。日本語学習を担当した教員によると、最も低い日本語レベルの日本語学習者は N3 の合格レベルを目指して日本語学習を行うクラスに所属する。但し、N3 に合格するかどうかは受験してみなければ分からないということであった。そうだとすれば、日本語学習者は日本語レベルが N4 に合格するか、あるいは N5 に合格するレベルの者もいるかもしれない。つまり、日本語学習者の日本語レベルは、N5 に合格するレベルか N4 に合格するレベル、N3 に合格するレベル、N2 に合格するレベルなど幅広い。そこで「中位レベル」を設定することにした。本調査票の正答数の平均から標準偏差を引いた得点以下を下位レベル、正答数の平均に標準偏差を加えた得点以上を上位レベルとした。「中位レベル」は、日本語能力試験の N1 に合格しておらず、下位レベルの得点以上であり上位レベルの得点未満のレベルとした。

被調査者ごとの正答数の平均は 31.11、標準偏差は 6.048 であった。調査票の合計点の平均から標準偏差を引いた得点の 25 点以下が下位レベル($31.11-6.048=25.062$)、合計点の平均に標準偏差を加えた得点の 38 点以上が上位レベル($31.11+6.048=37.158$)である。したがって、「中位レベル」は日本語能力試験の N1 に合格しておらず、合計得点が 26 点以上 37 点以下で合計人数は 104 人である。

存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との関係を見るために、「対比存在ニ」の「に」に誤って「で」を選んだ誤答率(以下、「対比存在ニ→デ誤答率」と「動作デ」の正答率の相関分析を行った。その結果、「対比存在ニ→デ誤答率」と「動作デ」の正答率の間には有意な相関関係が見られなかった。

以上のことから、中国語を母語とする「中位レベル」の日本語学習者の「対比存在ニ」

の「に」に誤って「で」を用いるのは、「動作デ」との混同によるものではない可能性があることが分かった。

6.1.5 韓国語話者を対象とした調査

本節は、韓国語を母語とする日本語学習者を対象として調査を行う。中国語を母語とする日本語母語話者にとっては、日本語の「に」、「で」の区別に対応する文法形式を持たないため、「に」、「で」の使い分けは難しいと考えられており、韓国語を母語とする日本語学習者にとっては、存在場所を表す「に」、動作場所を表す「で」とほぼ重なる用法である「e」、「eso」を持つため、「に」、「で」の使い分けは中国語話者に比べて容易であると考えられている(蓮池 2004)。もしも、韓国語を母語とする日本語学習者にも、中国語を母語とする日本語学習者と同様の結果が得られたなら、それは日本語学習者が通る発達の 1 つの段階である可能性が高まる。

調査協力者は、釜山の釜慶大学と東義大学のいずれかに在籍している 1 年生～3 年生の 90 人の日本語学習者である。日本語学習者は初級日本語学習用教材および中級日本語学習用教材を用いた学習歴がある。日本語能力試験の N4 以上のいずれかの試験に合格しているか、合格すると見なされるレベルである。

6.1.6 仮説の検証

以下、仮説と検証項目を再び示しておく。

仮説：「*寮にいません、大学でいる」と「*中国で、お盆のような日もある」の存在場所を表す「に」→「で」の誤用は動作場所を表す「で」との混同とは無関係に現れる。

仮説検証項目Ⅲ：日本語を学習する母語が異なっても中級レベルの学習者に 2 つの存在文が 2 つの場所を対比させる形で用いられている場合に、存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用が見られる。

6.1.7 調査票

調査票は、統計処理における信頼性を高めるため、合計 42 問であった問題文を合計 48 問とした 4.3 で用いたものと同じ調査票である。追加した 6 問は、(a-1)の存在場所を表す「に」と(a-2)の動作場所を表す「で」の問題文を 3 問ずつである。3 問追加することによって 1 問の問題文に対し正答が選ばれる確率の偶然性をよりいっそう排除できる。以下、2 つの場所が対比された文における存在場所を表す「に」を、「対比」「対比存在」あるいは「存在場所+場所対比」と呼ぶことにする。

分析には、この「存在場所+場所対比」の「に」を用いるべきところに誤って用いら

れた「で」の誤答率と、以下の(a-2)、「動作場所」文の「で」の正答率の相関分析を行う。調査票の問題文は3通りの並べ方である。以下、追加した問題文の一部を示す。

(a-1)「単純存在ニ」：存在場所を表す「に」を正答とする問題文である。[問題文例：山田さんは大学(に、で、を、から)います。]

(a-2)「動作デ」：動作場所を表す「で」を正答とする問題文である。[問題文例：食堂(に、で、を、から)ご飯を食べています。]

6.1.8 調査の結果と考察

調査は、2013年9月に実施した。調査票を配布する前に調査に関する注意書きが書かれた用紙を配布した。調査に関する注意書きは日本語で書かれたものと韓国語で書かれたものを準備し、日本語学習者の日本語レベルに応じて配布した。調査に関する注意書きは付録につける。調査票の記入時間は特に設けなかったが、中国語を母語とする日本語学習者と殆ど同じであり、日本語学習者は数名を除き、10～15分の間に調査票の記入を終えた。3通りの調査票の合計得点には差が見られなかったので、すべての回答を分析対象として用いた。

表6-2に日本語学習者全体の「単純存在ニ」、「動作デ」、「範囲デ」、「対比存在ニ」のそれぞれの正答率を示す。

表6-2. 韓国語話者の「単純存在ニ」「動作デ」「範囲デ」「対比存在ニ」の正答率

	単純存在ニ	動作デ	範囲デ	対比存在ニ
正答率	81.48%	81.30%	75.08%	68.10%

n=90.

韓国語を母語とする日本語学習者も「中位レベル」を対象として分析した。「中位レベル」は、中国語を母語とする日本語学習者より設定したもので、日本語能力試験のN1にまだ合格しておらず、本調査票の合計得点が26点以上37点以下であるという日本語レベルである。相関分析の結果、韓国語を母語とする「中位レベル」の日本語学習者にも、「対比存在ニ→デ誤答率」と「動作デ」正答率との間に有意な相関関係は見られなかった。

このことから、韓国語を母語とする日本語学習者にも、人や物の存在する場所が対比された文における「に」→「で」の誤用が見られたが、この誤用は動作場所「で」との混同ではないことが考えられた。

では、なぜ韓国語を母語とする日本語学習者にも場所名詞が対比された場合の存在場所を表す「に」→「で」の誤用が見られたのか。5.2.5で述べたように、場所を表す「に」

と「で」は韓国語の「e」と「eso」に並行的に対応している(朴 1997)。一方、場所を表す「に」と「で」以外の「に」と「で」の用法は韓国語の「e」「eso」が並行的に対応しているのではない(朴 1997)。そのため、韓国語を母語とする日本語学習者が、場所を表す「に」と「で」以外の「に」と「で」の用法を使い分けるときには、韓国語に1つ1つを対応させずに「に」と「で」を用いており、その結果、範囲限定を表す「で」と類似の概念を持つと思われる条件付存在文の「に」を「で」とする誤用が現れることが考えられた。ところが、本調査の結果から、場所名詞が対比された場合にも韓国語を母語とする日本語学習者は韓国語に1つ1つを対応させずに「に」と「で」を用いたが、何らかの要因によって「に」を「で」とする誤用が現れたと思われる。

6.1.9 まとめ

韓国語を母語とする日本語学習者にも、人や物の存在する場所が対比された文における「に」→「で」の誤用が見られたが、「単純存在ニ→デ誤答率」と「動作デ」正答率との間に有意な相関関係は見られなかった。このことから、韓国語を母語とする日本語学習者にも、存在場所を表す「に」の習得において、動作場所を表す「で」との混同ではないが、対比された場所名詞句に存在場所を表す「に」→「で」の誤用が現れる段階がある可能性があることが考えられた。

中国語を母語とする日本語学習者と韓国語を母語とする日本語学習者に対する調査の分析結果を合わせて考えると、日本語学習者には、存在場所を表す「に」の習得において、動作場所を表す「で」との混同によらないが、場所名詞が対比された文における存在場所を表す「に」を「で」とする誤用が現れる現れるという発達の1つの段階がある可能性が高いと言って良いのではないかと考えられる。しかし、場所名詞が対比された文における存在場所を表す「に」を「で」とする誤用が、どのような「で」との混同によるものであるかは分からなかった。これについては今後の課題とする。

6.2 場所名詞が文頭に置かれた場合の存在場所「に」→「で」の誤用

本節では中国語を母語とする中級レベル日本語学習者に協力を得て予備調査を行い、その後本調査を実施した後、韓国語を母語とする中級レベルの日本語学習者に協力を得て本調査を実施する。

存在場所を表す「に」→「で」の誤用が現れたのは、場所名詞句が文頭に置かれた場合もあった。以下の(7)は中国語を母語とする中級レベルの日本語学習者の用例であり、(12)、(13)はイタリア語を母語とする中級レベルの日本語学習者の用例であった。

日本語学習者の用例(母語：中国語)

- (5)ところで、正月といえば、私の国では、正月の日は、家族の全員で一緒に料理を作って、水餃子を作って、「春節晩会」というテレビ番組を見る。
- (6)・・・皆は一緒に踊ることがあまりない、中国で。
- (7)*中国で、お盆のような日もある。
- (8)でも、日本で、お盆の時、いろいろな所で盆踊が行われる。
- (9)森の中に七色しかという神様がいました。

日本語学習者の用例(母語：イタリア語)

- (10)台所の隣に小さい自習室がある。
- (11)一階の下に地下もある。ここで、洗濯し、・・・。
- (12)*家の外でほかの親類の家もあるから、庭が同じだ、広い。
- (13)*庭で、家の後に小さい家もある。

当該学習者は普段、動詞との関係において存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」を使い分けていると思われるが、場所名詞を文頭におき主題を表す場合には学習者独自の何らかの基準により「に」→「で」を誤用してしまうのではないかと考えられた。

6.2.1 中国語話者を対象とした調査

調査は中国語を母語とする日本語学習者に協力を得て、予備調査を行った上で本調査を行う。予備調査は格助詞選択式テストの調査と翻訳の調査であり、本調査は予備調査とは異なる格助詞選択式テストを用いて調査を実施する。予備調査と本調査には異なる日本語学習者に協力を得て行う。

6.2.2 仮説の検証

初級レベルの日本語学習者が「*家でいる」のように「に」→「で」を誤用するのは、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」を混同しているからであった。すなわち、初級レベルの日本語学習者は、場所名詞と動詞との関係によって存在場所を表す「に」を用いるのか動作場所を用いるのかという判断ができないということである。それに対し、文頭に置いた場所名詞句に「に」→「で」を用いる学習者は、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」は一応理解していると思われた。しかし、文頭に置かれた場所名詞句に現れた「に」→「で」の誤用は動作場所を表す「で」との混同による可能性もあるのである。

中国語を母語とする中級レベルの日本語学習者が用いる文頭に置かれた存在場所を表す「に」→「で」の誤用が、初級レベルの日本語学習者と「に」→「で」の誤用と同

じく存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同による「に」→「で」の誤用であるかに焦点を当て調査を行う。以下、仮説を再び示しておく。

仮説：「*寮にいません、大学でいる」と「*中国で、お盆のような日もある」の存在場所を表す「に」→「で」の誤用は動作場所を表す「で」との混同とは無関係に現れる。

仮説検証項目Ⅳ：場所名詞が文頭に置かれた場合に、存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用が見られる。

仮説検証項目Ⅴ：場所名詞が文頭に置かれた場合の場所を表す名詞が「文頭」に置かれた場合の方が、「文中」に置かれた場合よりも多い。

仮説検証項目Ⅵ：場所名詞が「文頭」に置かれた場合の存在場所を表す「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用は、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」と混同したことによるものではない。

6.2.3 予備調査

予備調査は、福岡市の九州産業大学に在籍している日本語能力が日本語能力試験 N4 以上に合格すると見なされるが N1 にはまだ合格していないという中級レベルの中国語を母語とする日本語学習者 78 人に協力を得た。調査は 2011 年 4 月に行った。格助詞選択式テストは、問題文中に埋め込まれた「に、で、を、から」の中から最も適当なもの 1 つを○で囲むというもので、全 36 問から成る。実際の調査票では以下の問題文を無作為に並べたものが 1 通りである。実際の調査票は付録に載せることとし、問題文の一部を以下に示す。

[予備調査の調査票]

・「文中ニ」：「文中」に場所を表す名詞が置かれた問題文である。述語の動詞は「いる」または「ある」が用いられている。正答は「に」であり 6 問の問題文である。本問の問題文の「に」→「で」の誤答数と以下の「文頭ニ」の問題文の「に」→「で」の誤答数を比較する。以下、問題文の一部を示す。

(14) 私は大学(に、で、を、から)います。

(15) 車は大学(に、で、を、から)あります。

・「文頭ニ」:「文頭」に場所を表す名詞が置かれた文である。述語の動詞には「いる」または「ある」が用いられている。正答は「に」であり 6 問の問題文である。本問の問題文の「に」→「で」の誤答数と(a)の「文中ニ」の問題文の「に」→「で」の誤答数を比較する。以下、問題文の一部を示す。

(16) 大学(に、で、を、から)私はいます。

(17) 大学(に、で、を、から)車はあります。

・ダミー文で「文中」または「文頭」に名詞が置かれた文である。「に」を正答とする述語が「住む」の問題文が 7 問、「を」を正答とする問題文が 6 問、「から」を正答とする問題文が 6 問、「で」を正答とする問題文が 6 問である。以下に問題文の一部を示す。

(18) 私は大学(に、で、を、から)住みます。

(19) 大学(に、で、を、から)私は住みます。

(20) 私はご飯(に、で、を、から)食べます。

(21) ご飯(に、で、を、から)私は食べます。

(22) 私はアメリカ(に、で、を、から)日本に来ました。

(23) アメリカ(に、で、を、から)日本に私は来ました。

(24) 私は日本(に、で、を、から)働きます。

(25) 日本(に、で、を、から)私は働きます。

翻訳の調査は、「私は日本にいる」のように場所を表す名詞が「文中」に置かれた文と「日本に私はいる」のように場所を表す名詞が「文頭」に置かれた文を対応する中国語の文に翻訳してもらうという調査である。調査票は付録に示す。

中国語では人や事物の存在や所有を表す動詞には「桌子上有书」(机の上に本がある)や「食堂里有人」(食堂に人がいる)のように場所を表す名詞を動詞に先行させる「有」が用いられ、その存在や所有を前提とした上で、人や事物がどこに位置するかという所在を表す動詞には「他在食堂里」(彼は食堂にいる)のように「在」が用いられる(杉村 1994, p. 31)。「在」は動詞として用いられるだけでなく、場所を表す名詞の前に置かれる「介詞」として「我在食堂吃饭」(私は食堂でご飯を食べる)や「在食堂什么好吃?」(食堂で何がおいしいですか?)のように用いられる。「介詞」の「在」は、日本語の「で」に対応するだけでなく、「他在黑板上写字」(彼は黑板に字を書いている)(顧 1983)のように「に」にも対応している。

翻訳の調査の「私は日本にいる」に対応する中国語の文は「我在日本」である。「我在日本」という中国語の「在」は存在を表す動詞であることから、「私は日本にいる」

の「に」に対応する「介詞」が存在しないということになる。しかし、中国語を母語とする日本語学習者は存在を表す動詞「在」を「～にいる」と覚えておけば、容易に「に」を選ぶことができる。一方、「日本に私はいる」では、文頭に場所表現が置かれているので、中国語を母語とする日本語学習者は日本語と同じく場所を表す名詞を動詞に先行させる中国語の「場所＋有」という構文を思い浮かべる可能性がある。しかし、日本の大学に所属する中国語を母語とする教員によれば、「日本に私はいる」をこの「場所＋有」を用いて「日本有我」（「日本に私はいる」）とするのは不自然であるという。そのため、「日本に私はいる」を自然な中国語に翻訳するとすれば「我在日本」ということになる。つまり、「私は日本にいます」に対応する中国語は「我在日本」という形式であり、「日本に私はいる」に対応する中国語の形式はないが、翻訳するとすれば「我在日本」になる。但し、「日本に私はいる」を忠実に中国語に翻訳しようとするならば、中国語としては不自然であるが「日本有我」ということになる。

このように日本語に対応する形式がない場合は、日本語に対応する形式がある場合に比べると、正確に中国語に翻訳できず、例えば「在日本我」のように「介詞」としての「在」を用いて誤った中国語の翻訳をしてしまい、誤った翻訳をした人は誤って「で」を選んでしまうことが考えられる。そこで、予備調査としての格助詞選択式テストの調査協力者の内 42 人に協力を得て、「私は日本にいます」、「日本に私はいる」を中国語に翻訳してもらうことにした。

予備調査としての格助詞選択式テストの結果は以下の通りである。以下、表 6-3 に「文中二」の「に」→「で」の誤答数と誤答率、「文頭二」の「に」→「で」の誤答数と誤答率を示す。「文中二」と「文頭二」の「に」→「を」の誤答数および「に」→「から」の誤答数も併せて示す。

表 6-3. 予備調査：「文中二」と「文頭二」の「に」→「で」の誤答数(誤答率)

	「で」の誤答数	「を」誤答数	「から」の誤答数	延べ問題数
「文中二」の「に」	64(14%)	6	3	468
「文頭二」の「に」	108(23%)	3	2	468

n=78.

表 6-3 より「文頭二」は、「に」を用いるべきところに誤って「で」を用いた誤答数が 108、誤答率が 23%(108/468)で、「文中二」は誤答数が 64、誤答率が 14%(64/468)であり、「文頭二」の「に」→「で」の誤用が圧倒的に多いことが分かる。このことから、「場所」が「文頭」に置かれると何らかの理由によって「で」の誤用が「文中」よりも増えることが分かる。

翻訳の調査の結果は表 6-4 と表 6-5 の通りである。表 6-4 が「私は日本にいます」とい

う「文中ニ」の文が中国語に翻訳された文であり、表 6-5 が「日本に私はいる」という「文頭ニ」の文が中国語に翻訳された文を示したものである。

表 6-4. 予備調査：「私は日本にいる」に対応する中国語の翻訳調査の結果

番号	中国語の翻訳文		計
26	我在日本		42
27	我現在日本		1
28	我現在人在日本		1
29	我是在日本		1

$n=42.$

表 6-4 によると、「私は日本にいる」に対応する中国語の翻訳は 4 種類である。日本の大学で中国語の科目を担当している中国語を母語とする 3 人の教員によると、(26)の翻訳が最も適当な翻訳文である。(27)～(29)の翻訳は不適当な翻訳文である。(26)は中国語としても正しい文である。(28)(29)は中国語としては正しい文だが、(27)は中国語としても誤りの文であるという 3 人の教員の意見は一致した。

表 6-5 の 1 列には番号を振った。2 列～4 列の「教員 A」～「教員 C」とは、日本の大学で中国語の科目を担当している中国語を母語とする 3 人の教員である。3 人の教員に 5 列の中国語に翻訳された文が「日本に私はいる」の翻訳として適当であるかの判定をしてもらった。5 列の中国語に翻訳された文が適当である文には○を、不自然だが誤りではない文には△を、不適当である文には×と判定してもらった。表の 6 列は、5 列の翻訳文に介詞「在」を伴う場合に○をつけている。5 列の翻訳文に動詞としての「在」を伴う場合には 7 列に○を、動詞としての「有」を伴う場合には 8 列に○をつけている。表の 9 列は、先に行われた予備調査としての格助詞選択式テストの問題文で、日本語学習者が「文頭ニ」の「に」を選ぶべきところに誤って「で」を選んだ(「文頭ニ」の「ニ→デ」の誤答)人の数を示している。10 列は、予備調査としての格助詞選択式テストの問題文で、「文頭ニ」も「文中ニ」も「に」→「で」の誤答がなかった人の数を示している。そして、最後の列は、9 列と 10 列の数の合計である。

表 6-5. 予備調査：「日本に私はいる」に対応する中国語の翻訳調査の結果

番号	教員 A	教員 B	教員 C	中国語の翻訳文	介詞 「在」 を伴う	動詞 「在」 を伴う	動詞 「有」 を伴う	「文頭ニ」の 「ニ→デ」の 誤答がある	「文頭ニ」 「文中ニ」の 「ニ→デ」誤 答がない	計
30	○	(×)	△	我在日本		○		1	3	4
31	×	×	×	日本就是我在的地方		○			1	1
32	×	×	×	日本是我所在的地方					1	1
33	×	△	△	在日本有我	○		○	6	2	8
34	△	×	×	在日本的我	○			1	1	2
35	×	×	△	在日本, 有我在	○	○	○	1		1
36	×	×	×	在日本, 我	○			1		1
37	×	×	×	在日本, 我現在	○			1		1
38	×	×	×	在日本里有我	○		○	1		1
39	×	×	×	在日本这个地方有我	○		○	1		1
40	△	△	○	日本有我			○	2	5	7
41	×	×	×	日本里有我			○	4	4	8
42	×	△	△	日本有我在		○	○	1	2	3
43	△	△	×	日本这个地方有我			○	1		1
44	×	○	△	在日本, 有我	○		○		2	2

n=42.

表 6-5 によると、「日本に私はいる」に対応する中国語の翻訳は 15 種類であり、表 6-4 の翻訳に比べると 3 倍以上であることが分かる。日本の大学で中国語の科目を担当している中国語を母語とする 3 人の教員の意見は一致せず、2 人の教員は(30)が適当な翻訳文であるとしたが、1 人は(30)でも間違いではないが、翻訳文としては(44)の方が適当であるという意見であった。(44)は「在日本」と「有我」の間に「,」があるため翻訳文としては良いということであった。(33)の「在日本有我」は「,」がないので不自然であるが、教員の 2 人は誤りとも言いにくいという意見であった。それに対し教員の 1 人は、(33)も(44)も不適當であると強く主張した。3 人の教員の意見で一致した点は、翻訳文に介詞の「在」を伴う文は基本的には不適當であるという点であった。しかしながら、(33)～(35)のように 3 人の意見が分かれるものもあった。翻訳文が中国語としては正しいか否かという回答も、3 人の意見は分かれていた。3 人が中国語として正しいとした文は(30)と(32)であった。残りは中国語としては不自然であるか誤りの文であるということであった。

また、表 6-5 によると、予備調査としての格助詞選択式テストで問題文の「文頭ニ」

の「ニ→デ」の誤答がある日本語学習者は、(33)～(39)のように介詞の「在」を伴う翻訳文を書いた人に多いことが分かる。表内のグレーの網掛けの箇所である。「文頭ニ」の問題文にも「文中ニ」の問題文にも「ニ→デ」の誤答がない人、つまり、正しく「に」を選んだ日本語学習者は、(51)(52)のように動詞としての「在」を伴う翻訳をした人や、(40)(41)(42)および(44)のように動詞としての「有」を伴う翻訳をした人であることが分かる。

以上のことから、「日本に私はいる」に対応する中国語の文として、介詞の「在」を用いて翻訳した日本語学習者は、「文頭ニ」に誤って「で」を選ぶ傾向があることが分かる。介詞の「在」は、先述したように「我在食堂吃飯」(私は食堂でご飯を食べる)の動作場所を表す「で」や「在食堂什么好吃？」(食堂で何がおいしいですか?)の範囲限定を表す「で」に対応している。したがって、「文頭ニ」に「に」→「で」も、日本語学習者が動作場所を表す「で」または、範囲限定を表す「で」と混同され用いられている可能性があることが推測される。

「日本有我」という翻訳をした日本語学習者2人のそれぞれにその翻訳をした理由を聞いてみると、2人とも「日本有我」が中国語では不自然な文ではあると理解しているが、「日本に私はいる」に対応する中国文として忠実に翻訳したということであった。

上記予備調査の結果を学会で研究発表した際に、日本の大学に所属している中国語を母語とする教員から以下のような指摘を受けた。予備調査としての格助詞選択式テストの問題文に用いた名詞が「日本」や「大学」といった場所を表す名詞に偏っていること、「私は大学にいる」「大学に私はいる」といった問題文が日本語の文としては不自然な文であるので問題文には日本語の文として自然な文を用いた方がよいこと、また、問題文には第一人称である「私」ではなく第三人称の「彼」または「彼女」あるいは固有名詞の「田中さん」などを用いた方がよいこと、さらに、存在場所を表す「に」の問題文には文末の動詞として「いる」「ある」を用いるだけでなく「～に～が置いてある」の「置いてある」のような動詞を用いた方がよいことである。そのため、本調査としての調査票にはそのことを取り入れて作成することにした。

6.2.4 本調査のための調査票作成の留意点

「に」→「で」の誤用が、存在を表す文の「文頭」に場所を表す名詞がある場合と、「文中」にある場合とでは、どちらが多いかを調べるために問題文を作成する。6.3.2.3で述べた中国語を母語とする教員からの指摘を受け、問題文には予備調査の格助詞選択テストとは異なり、建物、地名だけでなく、物、交通機関などを表わす名詞を用いて問題文を作成することにする。

[本調査の調査票]

調査票の問題文は全 37 問である。なお、実際の調査票の問題文は無作為に並べたものが 1 通りである。実際の調査票は付録につけることとする。

・「文頭ニ」：場所名詞を文頭に置いた存在を表わす問題文である。正答は「に」で 6 問である。以下、「文頭ニ」の問題文の一部を示す。

(45)中国(に、で、を、から)有名な建物があります。

(46)木(に、で、を、から)鳥がいます。

(47)この新幹線(に、で、を、から)田中さんがいます。

・「文中ニ」：場所名詞を文中に置いた存在を表わす問題文である。正答は「に」で 6 問である。以下、「文中ニ」の問題文の一部を示す。

(48)有名な建物は中国(に、で、を、から)あります。

(49)鳥が木(に、で、を、から)います。

(50)田中さんはこの新幹線(に、で、を、から)います。

・「動作デ」：動作場所「で」伴う問題文で正答は「で」で 6 問である。問題文の一部を以下に示す²⁸。

(51)東京(に、で、を、から)働きます。

(52)寮(に、で、を、から)テレビを見ます。

・「範囲デ」：範囲限定「で」を伴う問題文で正答は「で」で 7 問である。問題文の一部を以下に示す。

(53)東京(に、で、を、から)どこが一番好きですか。

(54)大学の中(に、で、を、から)誰が一番日本語が上手ですか。

・「ヲ」：「を」を正答とするダミーの問題文で 6 問である。問題文の一部を以下に示す。

²⁸ 「動作デ」の問題文は場所名詞を文頭に置いた文であるが、場所名詞を文中に置いた文も作成し正答数に差が見られるかどうか確認すべきであった。「範囲デ」の問題文についても同じである。

(55)小さな橋(に、で、を、から)渡りました。

(56)飛行機が空(に、で、を、から)飛んでいます。

・「カラ」:「から」を正答とするダミーの問題文で 6 問である。問題文の一部を以下に示す。

(57)大学(に、で、を、から)図書館まで自転車でいきます。

(58)去年、福岡(に、で、を、から)東京へ行きました。

6.2.5 調査協力者

調査協力者は中国語を母語とする中級レベルの日本語学習者である。日本語学習者は、初級日本語学習用教材を用いた学習を終えており、中級用日本語学習教材を用いた学習歴がある。日本語のレベルは日本語能力試験の N4 以上のいずれかに合格すると見なされるが N1 にはまだ合格していない中級レベルである。

6.2.6 分析の方法

仮説(V)については、本調査としての調査票の「文頭ニ」の問題文の「に」を選択すべきところに「で」を選んだ誤答率(「文頭ニ→デ誤答率」)の方が、「文中ニ」の問題文の「に」を選択すべきところに「で」を選んだ誤答率(「文中ニ→デ誤答率」)よりも、高いかどうかを調べる。そのためには、日本語学習者 1 人 1 人の「文頭ニ→デ誤答率」と「文中ニ→デ誤答率」との間に差があるか否かを t 検定すれば良い。

仮説(VI)については、回帰分析を行う。回帰分析は、本調査の「文頭ニ→デ誤答率」と「動作デ」の正答率を相関分析する。

6.2.7 中国語話者を対象とした調査の結果と考察

調査は福岡市の九州産業大学に在籍している中国語を母語とする日本語学習者 40 人に協力を得て 2012 年 7 月に実施した。本調査の調査協力者は予備調査の調査協力者とは異なる。

調査は筆者が担当する日本語の授業の科目が終了した後に、本調査は当該日本語の授業の試験ではなく成績評価には関係がないこと、調査の結果は研究のためにのみ使用すること、留学生 1 人 1 人が使っている助詞を知りたいので辞書や友達の手紙を見ないで回答してほしいこと、結果を知りたい場合は結果を知らせるので調査の後に希望を述べてほしいことを日本語で説明し、40 人全員一斉に行った。調査票の記入時間は特に設けなかったが調査票記入に要した時間は 10 分程度であった。

表 6-6 は、中国語を母語とする日本語学習者全体の「文頭ニ」「文中ニ」「動作デ」「範囲デ」および「ヲ」「カラ」のそれぞれの問を正しく回答した場合の正答率を示したも

のである。平均は 0.7446 であり、標準偏差は 0.1499 であった。以下に表 6-6 を示す。

表 6-6. 中国語話者の「文頭ニ」「文中ニ」「動作デ」「範囲デ」「ヲ」「カラ」の正答率

	「文頭ニ」	「文中ニ」	「動作デ」	「範囲デ」	「ヲ」	「カラ」
正答率	60.0%	77.08%	83.75%	72.14%	82.08%	72.08%

$n=40$.

問題数の 37 問を各 1 点とした合計得点は 37 点である。表 6-6 より、正答率は「文頭ニ」が 60.0%であり「文中ニ」が 77.0%であるので、「文中ニ」の方が高いことが分かる。次に、「文頭ニ」の「に」→「で」の誤答と「文中ニ」の「に」→「で」の誤答を比較するために、日本語学習者 1 人 1 人の「文頭ニ」の「に」→「で」の誤答率(「文頭ニ→デ誤答率」)が「文中ニ」の「に」→「で」の誤答率(「文中ニ→デ誤答率」)を計算した。日本語学習者 1 人 1 人の「文頭ニ」の「に」→「で」の誤答率(「文頭ニ→デ誤答率」)と「文中ニ」の「に」→「で」の誤答率(「文中ニ→デ誤答率」)の平均は表 6-7 の通りである。

表 6-7. 中国語話者の「文頭ニ→デ誤答率」の平均と「文中ニ→デ誤答率」の平均

	「文頭ニ→デ誤答率」	「文中ニ→デ誤答率」
誤答率	0.3208	0.1708

$n=40$.

日本語学習者 1 人 1 人の「文頭ニ→デ誤答率」と「文中ニ→デ誤答率」の 2 つの誤答率に有意差があるかどうかを見るために、対応のある t 検定を行ったところ、誤答率に有意差が見られた($t(-3.798)df=39$, $p < .01$)。すなわち、仮説Ⅶの存在を表わす文の文頭に場所名詞が置かれた場合の方が、文中に置かれた場合よりも、「に」を用いるべきところに誤って「で」を用いる誤答率が高いということが支持される結果が得られた。

次に、「文頭ニ」の「に」を選択すべきところに誤って選択された「で」が、初級レベルの日本語学習者と同様に、動作場所を表す「で」との混同であるのか、それとも、動作場所を表す「で」との混同ではないのかを調べるために、日本語学習者全体の「文頭ニ→デ誤答率」と「動作デ」正答率の相関関係を見たが、有意な関係は見られなかった。

調査の対象となった日本語学習者の日本語レベルは、日本語能力試験の N5 には合格すると見なされるが N1 にはまだ合格していないレベルであり、レベル差が大きい。そ

こで、「文頭ニ」の「に」を選ぶべきところに誤って「で」を選んでしまう日本語学習者が、調査票においてどの程度得点したレベルであるのかを調べた。調査票の問題文の合計得点の平均は 0.7446 であったので、合計得点における得点の割合が 75%以上の日本語学習者を対象として相関関係を見た。だが、本調査票の合計得点における得点の割合が 75%以上の日本語学習者であっても、「文頭ニ→デ誤答率」と「動作デ」正答率の間に有意な相関関係は見られなかった。つまり、「動作デ」を正しく選べるようになって、「文頭ニ」の誤答率には影響が見られないことを意味している。しかし、「文頭ニ」を「で」とする誤用がどのような用法の「で」なのかについては今後の課題となる。

6.2.8 韓国語話者を対象とした調査

中国語を母語とする日本語学習者に協力を得て調査を実施した結果、場所を表す名詞が文頭に置かれた文の方が文中に置かれた文よりも、「に」→「で」の誤用が多いことが分かった。そして、場所を表す名詞が文頭に置かれた文の「に」→「で」の誤用は、動作場所を表す「で」との混同によるものではない可能性があることが分かった。韓国語を母語とする日本語学習者にも同様の結果が得られれば、動作場所を表す「で」と存在場所を表す「に」の混同ではない文頭の場所名詞句に見られる「に」→「で」の誤用が日本語学習者に見られる一般的な誤用である可能性が高まる。

6.2.9 仮説の検証

韓国語は、5.3.4 で述べたように「彼は家にいる」の「に」が「e」に対応し、「太郎が図書館で勉強する」の「で」が「eso」であり、場所を表す「に」、「で」に当たる韓国語の「e」、「eso」の使い分けは日本語と並行的である(朴 1997)。そのため、文頭の場所名詞句に見られる存在場所を表す「に」→「で」の誤用は現れないかもしれない。しかし、場所名詞が文頭に置かれた場合の存在場所を表す「に」→「で」の誤用は、6.3.2 で述べたように中国語を母語とする中級レベルの日本語学習者だけに現れる誤用ではないため、中国語を母語とする日本語学習者以外にも見られることが推測される。

以下、仮説と検証項目を再び示しておく。

仮説：「*寮にいません、大学でいる」と「*中国で、お盆のような日もある」の存在場所を表す「に」→「で」の誤用は動作場所を表す「で」との混同とは無関係に現れる。

仮説検証項目Ⅳ：場所名詞が文頭に置かれた場合に、存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用が見られる。

仮説検証項目Ⅴ：場所名詞が文頭に置かれた場合の場所を表す名詞が「文頭」に置かれた場合の方が、「文中」に置かれた場合よりも多い。

仮説検証項目Ⅵ：場所名詞が「文頭」に置かれた場合の存在場所を表す「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用は、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」と混同したことによるものではない。

6.2.10 調査協力者

調査協力者は韓国語を母語とする中級レベルの日本語学習者である。日本語学習者は、初級日本語学習用教材を用いた学習を終えており、中級用日本語学習教材を用いた学習歴がある。日本語のレベルは日本語能力試験の N4 以上のいずれかに合格すると見なされるが N1 にはまだ合格していない中級レベルである。

6.2.11 分析の方法

中国語話者に協力を得て行った調査の分析と同じである。仮説(Ⅶ)については、本調査としての調査票の「文頭ニ」の問題文の「に」を選択するべきところに「で」を選んだ誤答率(「文頭ニ→デ誤答率」)の方が、「文中ニ」の問題文の「に」を選択するべきところに「で」を選んだ誤答率(「文中ニ→デ誤答率」)よりも、高いかどうかを調べる。そのためには、日本語学習者 1 人 1 人の「文頭ニ→デ誤答率」と「文中ニ→デ誤答率」との間に差があるか否かを t 検定する。仮説(Ⅷ)については、回帰分析を行う。回帰分析は、本調査の「文頭ニ→デ誤答率」と「動作デ」の正答率を相関分析する。

6.2.12 韓国語話者を対象とした調査の結果と考察

調査は韓国の釜山の釜慶大学と東義大学のいずれかの大学に在籍している 84 人と日本語を担当している教員に協力を得て、2013 年 9 月に実施した。調査は以下のことが日本語または韓国語で書かれた調査における注意書きを配布してから、当該大学の日本語授業の開始前、日本語授業の開始後、日本語授業の終了後のいずれかに一斉に行った。調査における注意書きは、付録に示す。調査における注意書きとは、調査は当該日本語授業のテストではなく成績には影響しないこと、留学生が使う助詞を知りたいので教えてほしいこと、辞書を使ったり人にこたえを聞いたりせずに回答してほしいこと、必ず全て記入してほしいこと、調査票は A4 用紙に 1 枚で裏表であること、10 分程で回答できるが時間制限はないこと、この調査で得た個人情報漏らさないこと、学術調査のために使うこと、この調査に基づく研究内容が知りたければ記載したメールアドレス宛に連絡をしてほしいことが書かれている。本調査票のような問題文の形式に不慣れな日本語学習者 1、2 名を除き、調査票記入に要した時間は中国語を母語とする日本語学習者と同じく 10 分程度であった。

表 6-8 は、韓国語を母語とする日本語学習者全体の「文頭ニ」「文中ニ」「動作デ」「範囲デ」「範囲ヲ」および「ヲ」「カラ」のそれぞれの問を正しく回答した場合の正答率を示したものである。平均は 0.7461 であり、標準偏差は 0.1924 であった。

表 6-8. 韓国語話者の「文頭ニ」「文中ニ」「動作デ」「範囲デ」「ヲ」「カラ」の正答率

	「文頭ニ」	「文中ニ」	「動作デ」	「範囲デ」	「ヲ」	「カラ」
正答率	77.18%	84.33%	74.21%	79.93%	77.58%	53.47%

$n=84$.

正答率は、中国語を母語とする日本語学習者は「文頭ニ」が 60.0%で「文中ニ」が 77.0%であったのに対し、韓国語を母語とする日本語学習者は高く「文頭ニ」が 77.18%で「文中ニ」が 84.33%である。「文中ニ」の正答率は「文頭ニ」の正答率より高く、中国語を母語とする日本語学習者と同じであることが分かる。

次に誤答率を計算した。韓国語を母語とする日本語学習者も中国語を母語とする日本語学習者と同様に、「文頭ニ」の「に」→「で」の誤用が見られる。表 6-9 は、韓国語を母語とする日本語学習者 1 人 1 人の「文頭ニ→デ誤答率」の平均と「文中ニ→デ誤答率」の平均である。

表 6-9. 韓国語話者の「文頭ニ→デ誤答率」の平均と「文中ニ→デ誤答率」の平均

	「文頭ニ→デ誤答率」	「文中ニ→デ誤答率」
誤答率	0.1786	0.1091

$n=84$.

韓国語を母語とする日本語学習者 1 人 1 人の「文頭ニ→デ誤答率」と「文中ニ→デ誤答率」の 2 つの誤答率にも有意差が見られた($t(2.837)$ df=83, $p<.01$)。すなわち、韓国語を母語とする日本語学習者にも中国語を母語とする日本語学習者と同様に、存在を表わす文の「文頭」に場所を表す名詞が置かれた場合の方が、「文中」に置かれた場合よりも、「に」→「で」を用いる誤答が多いという仮説Ⅶが支持される結果が得られた。次に、日本語学習者全体の「文頭ニ→デ誤答率」と「動作デ」の正答率の相関関係を見たが、有意な関係は見られなかった。韓国語を母語とする日本語学習者の合計得点の平均 0.7461 は、中国語を母語とする日本語学習者(0.7446)とほぼ同じであるので、中国語を母語とする日本語学習者と同様に、合計得点の得点の割合が 76%以上の日本語学習者を調べた。だが、合計得点の得点の割合が 76%以上の日本語学習者にも「文頭ニ

→デ誤答率」と「動作デ」の正答率との間には有意な相関関係が見られなかった。つまり、「動作デ」を正しく選べるようになって、「文頭ニ」の誤答率には影響が見られないことを意味している。

では、なぜ韓国語を母語とする日本語学習者にも場所名詞が文頭に置かれた場合の存在場所を表す「に」→「で」の誤用が見られたのか。4.3.4 でも述べたように、場所を表す「に」と「で」は韓国語の「e」と「eso」に並行的に対応している(朴 1997)。一方、場所を表す「に」と「で」以外の「に」と「で」の用法は韓国語の「e」「eso」が並行的に対応しているのではない(朴 1997)。そのため、韓国語を母語とする日本語学習者が、場所を表す「に」と「で」以外の「に」と「で」の用法を使い分けるときには、韓国語に1つ1つを対応させずに「に」と「で」を用いており、その結果、範囲限定を表す「で」と類似の概念を持つと思われる条件付存在文の「に」を「で」とする誤用が現れることが考えられた。ところが、本調査の結果から場所名詞が文頭に置かれた場合にも、韓国語を母語とする日本語学習者は韓国語に1つ1つを対応させずに「に」と「で」を用いたが、本調査の結果からは場所名詞が文頭に置かれた場合に現れた「に」→「で」の誤用がどのような用法の「で」との混同によるのかは分からなかった。

6.2.13 まとめ

存在を表す文における「に」→「で」の誤用は、場所を表す名詞が「文頭」にある場合の方が「文中」にある場合よりも多いという仮説が支持された。また、「文頭」の存在場所を表す「に」→「で」の誤用は、「文頭ニ→デ誤答率」と「動作デ」の正答率との間には有意な関係が見られなかったことから、動作場所を表す「で」との混同ではないと考えられた。

以上のことから、中級レベルの日本語学習者の、存在を表す文に場所を表す名詞が文頭に置かれた場合の「に」→「で」の誤用は、初級レベルの日本語学習者に見られる存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同によるものとは異なり、動作場所を表す「で」との混同ではないことが分かった。そして、上記の混同による「に」→「で」の誤用は、中国語を母語とする日本語学習者にも韓国語を母語とする日本語学習者にも見られたことから、中級レベルの日本語学習者には、上記の混同による「に」→「で」の誤用が現れるという発達段階があることが示唆される。存在を表す文に場所を表す名詞が文頭に置かれた場合の「に」→「で」の誤用がどのような「で」の用法との混同によるものかについては、今後の課題となる。

第 7 章

結論

7.1 本研究の要約

本論文は、以下の研究課題を設定し仮説を立て、仮説を検証するための調査を行った。

日本語能力が中級レベルには、

研究課題 1. 存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との混同により「に」→「で」の誤用が現れる発達段階があるか。

研究課題 2. 移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同により「で」→「に」の誤用が現れる発達段階があるか。

研究課題 3. 場所名詞が対比された場合と場所名詞が文頭に置かれた場合に動作場所を表す「で」とは無関係に存在場所を表す「に」→「で」の誤用が現れる発達段階があるか。

研究課題 1 については、以下の仮説を立て仮説項目を検証したそれぞれの結果が第 1 の研究課題の回答となった。

仮説：「*クラスで 2 人韓国人がいる」の「に」→「で」の誤用は、存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との混同によるものである。

仮説検証項目Ⅰ：数量詞、「中」などと共に用いられた場所名詞が集合体を表すような文に、存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用が見られる。

仮説検証項目Ⅱ：日本語を学習する環境が異なっても日本語レベルが同じであれば、数量詞、「中」などと共に用いられた場所名詞が集合体を表すような文に、存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用が見られる。

仮説検証項目Ⅲ：日本語を学習する母語が異なっても「中位レベル」であれば、数量詞、「中」などと共に用いられた場所名詞が集合体を表すような文に「で」を用いる誤用が見られる。

その結果を以下に示す。

仮説が支持される結果が得られた。仮説検証項目Ⅰでは、国内の日本語学習者 61 人を「中級の下」「中級の中」「中級の上」という日本語レベルに分け、格助詞選択穴埋め式調査を実施した。その結果、条件付存在文における存在場所を表す「に」の正答率が U 字型を示しており、「初級」を加えた U 字型の底辺にあたる「中級の下」「中級の中」では、範囲限定を表す「で」の正答率が上がると条件付存在文における「に」を「で」とした誤答率も上がるという一般的な言語習得とは逆の現象が見られた。このことから、条件付存在文における存在場所を表す「に」→「で」が範囲限定を表す「で」と何らかの関係があることが示唆された。

仮説検証項目Ⅱでは、JFL 環境の中国語を母語とする日本語学習者 179 人に協力を得て調査を行い日本語レベルが幅広い中級レベルに「中位レベル」を設定した。「中位レベル」の 104 人に、仮説検証科目Ⅰと同じ「に」→「で」の誤用が見られ、同様に、範囲限定を表す「で」の正答率が上がると条件付存在文の「に」を「で」とした誤答率も上がるという一般的な言語習得とは逆の現象が見られたことから、「中位レベル」を仮説検証科目Ⅰの U 字型の底辺の集団であるとした。JSL 環境の中国語を母語とする「中位レベル」37 人にも同様の結果が得られた。このことから、条件付存在文の存在場所を表す「に」→「で」が、存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」の混同に起因するものである可能性があることを示した。

仮説検証項目Ⅲでは、韓国語を母語とする「中位レベル」の日本語学習者の一部においても仮説検証項目Ⅱと同様の結果が得られた。存在場所を表す「に」の習得において、このような混同による誤用が見られる発達段階があるとする、この発達段階には中国語を母語とする日本語学習者の方が韓国語を母語とする日本語学習者よりも早く辿りつくものと考えられた。

また、初級レベルにおける単純な文における存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同が回帰分析ではどのように表れるのかを示し、回帰分析の結果に対する解釈の最大の根拠となることを示すことができた。また、初級レベルの日本語学習者には中級レベルの「中位レベル」で見られたものと同じ現象も見られた。すなわち、範囲限定を表す「で」の正答率が上がると条件付存在文の「に」→「で」の誤用も上がるという現象である。

初級レベルの日本語学習者のデータ分析結果と中級レベルの「中位レベル」の日本語学習者のデータ分析結果を合わせると以下のことが推測される。日本語学習者の存在場所を表す「に」は、初級レベルのときに動作場所を表す「で」との混同により単純な文における存在場所を表す「に」→「で」の誤用が現れるが、その一方では範囲限定を表す「で」との混同により「集合体」を表すとも解釈されるような文における存在場所を表す「に」→「で」の誤用も現れる。その後、日本語能力が向上し、初級レベルから中級レベルになると、動作場所を表す「で」との混同により単純な文における存在場所を

表す「に」→「で」の誤用は消えるが、範囲限定を表す「で」との混同により「集合体」を表すとも解釈されるような文における存在場所を表す「に」→「で」の誤用は残っている。

研究課題 2 については、以下の仮説を立て仮説項目を検証し得られたそれぞれの結果が第 2 の研究課題の回答となった。

仮説：「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」「で」→「に」の誤用は、移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同によるものである。

仮説検証項目 I：「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」の「で」→「に」の誤用は、中級レベルの日本語学習者にとって場所への移動があると判断された場合に、意味的に場所への移動が含意される「ル形」の文において動作場所を表す「で」を、移動先を表す「に」と混同したことによるのであって、存在場所を表す「に」と混同したことによるのではない。

仮説検証項目 II：場所に下接する「に」を正しく選ぶ正答率は、「入る」などの動詞類と共に用いられる場合、「集まる」などの動詞類と共に用いられる場合、「泊まる」などの動詞類と共に用いられる場合の順に高い。

その結果を以下に示す。

仮説は支持される結果が得られた。仮説検証項目 I では、中国語を母語とする中級レベルの日本語学習者に協力を得て調査を行った。その結果、「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」の「に」が、移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同によるものである可能性があることが分かった。日本語学習者は「喫茶店」と「飲む」という特定の名詞と動詞の組み合わせから「で」→「に」を用いるのではなく文を構成するすべての要素から「場所への移動がある」と判断した場合に「で」→「に」を用いていた。

仮説検証項目 II は一部のみ支持された。中国語を母語とする日本語学習者に協力を得て調査を行った結果、「入る」類、「集まる」類、「泊まる」類の順に、共に用いられる「に」の正答率が高いのではなく、「入る」類、「泊まる」類、「集まる」類の順に、共に用いられる「に」の正答率が高かった。このことから、動詞が表す「移動」の分かり易さが、共に用いられる「に」の正答率の高さと関係があるとは、「入る」類を除き言えなかった。「入る」類と共に用いられる「に」の正答率が高かったのも、動詞の移動性の分かり易さとは別の要因があるのかもしれない。また、日本語学習者が動詞の表す移動性が分かっていることと移動先を表す「に」を用いることは関係がなかった。

仮説検証項目 I と仮説検証項目 II から、「で」→「に」が用いられるのは、「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」が、「喫茶店」と「飲む」という特定の名詞と動詞の組み合わせ

せによるのではなく、文を構成するすべての要素から「場所への移動がある」と判断され用いられるのと同様に、移動先を表す「に」が用いられるのも、単に動詞が移動を表すから用いられるのではないことが考えられた。但し、先行研究で見たように蓮池(2004)の格助詞選択テストの結果では、日本語学習者が「入る」や「着く」といった動詞に着目し「に」を選択することが報告されている。このことを合わせて考えると、その後、日本語学習者は表そうとする意味と言語形式との両方に注意ができるようになり、移動先を表す「に」と移動を表す動詞とを共に用いることができるという発達段階に至るのではないかと推測された。

研究課題 3 については、以下の仮説を立て検証し得られたそれぞれの結果が第 3 の研究課題の回答となった。

仮説：「*寮にいません、大学でいる」と「*中国で、お盆のような日もある」の存在場所を表す「に」→「で」の誤用は動作場所を表す「で」との混同とは無関係に現れる。

仮説検証項目Ⅰ：2つの存在文が2つの場所を対比させる形で用いられている場合に、存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用が見られる。

仮説検証項目Ⅱ：2つの存在文が2つの場所を対比させる形で用いられている場合の存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用は、存在場所「に」と動作場所「で」とを混同したものではない。

仮説検証項目Ⅲ：日本語を学習する母語が異なっても中級レベルの学習者に2つの存在文が2つの場所を対比させる形で用いられている場合に、存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用が見られる。

仮説検証項目Ⅳ：場所名詞が文頭に置かれた場合に、存在場所「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用が見られる。

仮説検証項目Ⅴ：場所名詞が文頭に置かれた場合の場所を表す名詞が「文頭」に置かれた場合の方が、「文中」に置かれた場合よりも多い。

仮説検証項目Ⅵ：場所名詞が「文頭」に置かれた場合の存在場所を表す「に」を用いるべきところに「で」を用いる誤用は、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」と混同したことによるものではない。

以下、その結果を示す。

- ・場所名詞が対比された場合(「*寮にいません、大学でいる」)

仮説が支持される結果が得られた。本調査の格助詞選択式テストは、中国語を母語とする日本語学習者と韓国語を母語とする日本語学習者に協力を得て行い、同じ結果が得られた。すなわち、場所名詞が対比された文における存在場所を表す「に」→「で」の誤用が両学習者に見られた。また、場所名詞が対比された文における存在場所「に」→「で」の誤用率と、動作場所を表す「で」の正答率を相関分析した結果、相関関係は見られなかった。このことから、場所名詞が対比された文における存在場所を表す「に」→「で」の誤用は、動作場所を表す「で」との混同によるものではないと言える。

- ・場所名詞が文頭に置かれた場合(「*中国で、お盆のような日もある」)

仮説が支持される結果が得られた。本調査の格助詞選択式テストは、中国語を母語とする日本語学習者と韓国語を母語とする日本語学習者に協力を得て行い、同じ結果が得られた。存在を表わす文における「に」→「で」の誤用は、場所名詞が文頭に置かれた場合の方が文中に置かれた場合よりも多いという仮説が支持された。また、場所名詞が文頭に置かれた文における存在場所「に」→「で」の誤用率と、動作場所を表す「で」の正答率を相関分析した結果、相関関係は見られなかった。このことから、場所名詞が文頭に置かれた文における存在場所を表す「に」→「で」の誤用は、動作場所を表す「で」との混同によるものではないと言える。

日本語学習者の場所を表す「に」は、第2章の先行研究と第4章～第6章の調査の結果を合わせると以下のような発達段階を辿ると考える。日本語学習者は、初級レベルのときに存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」とを混同し、「*家でいる」や「*食堂にうどんを食べた」のような誤用の文を用いる。「*家でいる」は「場所を表す指標+で」という単位が想定されたとも考えられる誤用である(松田・斎藤 1992)。本研究では初級レベルのデータを分析した結果、「*家でいる」の「に」→「で」の誤用が先行研究で報告されていた通り(久保田 1994、八木 1996 等)存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同による誤用である可能性が高いことを示した。これは「建物・地名+で」のユニット形成ストラテジー(迫田 2001)へつながるのかもしれないと思われる。さらに、初級レベルにおいても条件付の存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との混同による「*クラスで2人韓国人がいる」の「に」→「で」の誤用が現れる可能性があることも示した。「*食堂にうどんを食べた」は存在場所を表す「に」の過剰使用によると考えられる誤用である(久保田 1994)。このような段階が第1の発達段階であると思われる。

中級レベルの日本語学習者は、3.1.1 で述べたように、作文によると「日本人の大学生」、「七色しかという神様」、「市民たち」、「ホームヘルパー」、「人魚」、「かかし」、「こ

の家」というさまざまな存在物が、それぞれ「まわり」、「森の中」、「道の両側」、「家」、「海」、「田園」、「うしろ」というさまざまな場所に存在することを、動詞の「いる」または「ある」との関係において、「に」を正しく用いて表すことができる。

存在場所を表す「に」→「で」の誤用も見られる。「*寮にいません。大学でいる」のように対比された場所における誤用、および、「*中国で、お盆のような日もある」ように文頭に置かれた場所の誤用である。文頭に置かれたこれらの誤用は「は」を用いて対照を表したり主題化したりしなければならないときに現れていることが考えられた。これらの誤用がどのような「で」の用法との混同による誤用なのかは分からないが、動作場所を表す「で」との混同によるものではない可能性が高い。また、第2章の先行研究で見たように、動詞がどのような動詞であるかを手がかりに「に」と「で」が用いられるものもある。日本語学習者は動詞の動作性に着目し「で」を用いたり(鈴木 1978)、「いる」や「ある」に着目し「に」を用いたりする(蓮池 2004)。

一方、日本語学習者は文の成分である名詞や動詞といった個々の成分にのみ着目するのではなく、文全体の意味を考慮して用いていると思われる「に」と「で」もある。その際には、「*クラスで2人韓国人がいる」、および、「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」のような誤用が現れる。本研究で行った調査の分析による結果から、前者は存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との混同による可能性が高く、後者は動作場所を表す「で」と移動先を表す「に」との混同による可能性があることが考えられた。「*クラスで2人韓国人がいる」は場所名詞が集合体を表すような文に現れ、「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」は当該行為主体の場所への移動が含意される文に現れる可能性が高い。これらの誤用は、日本語学習者が何らかの基準に基づき意識的に用いているものであることが考えられた。存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混合による「*家でいる」のような初級レベルに現れる誤用は中級レベルでは消えている可能性が高い。

このような段階が第2の段階であると考えられる。但し、「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」のような誤用が現れる発達段階があるか否かについては、今後、母語の異なる日本語学習者に協力を依頼し調査を実施し、当該中国語を母語とする日本語学習者のデータと同じ結果が得られるか否かを分析しなければならない。

このような段階を経て、日本語学習者はたとえ「集合体」における人の存在を表す文であっても、共に用いる動詞が存在を表す動詞であれば正しく「に」を用いるようになる次の発達段階へ進むのではないかと推測する。2.2.1 で予想した日本語学習者の場所を表す「に」の発達段階を修正すると以下のような発達段階が推測される。

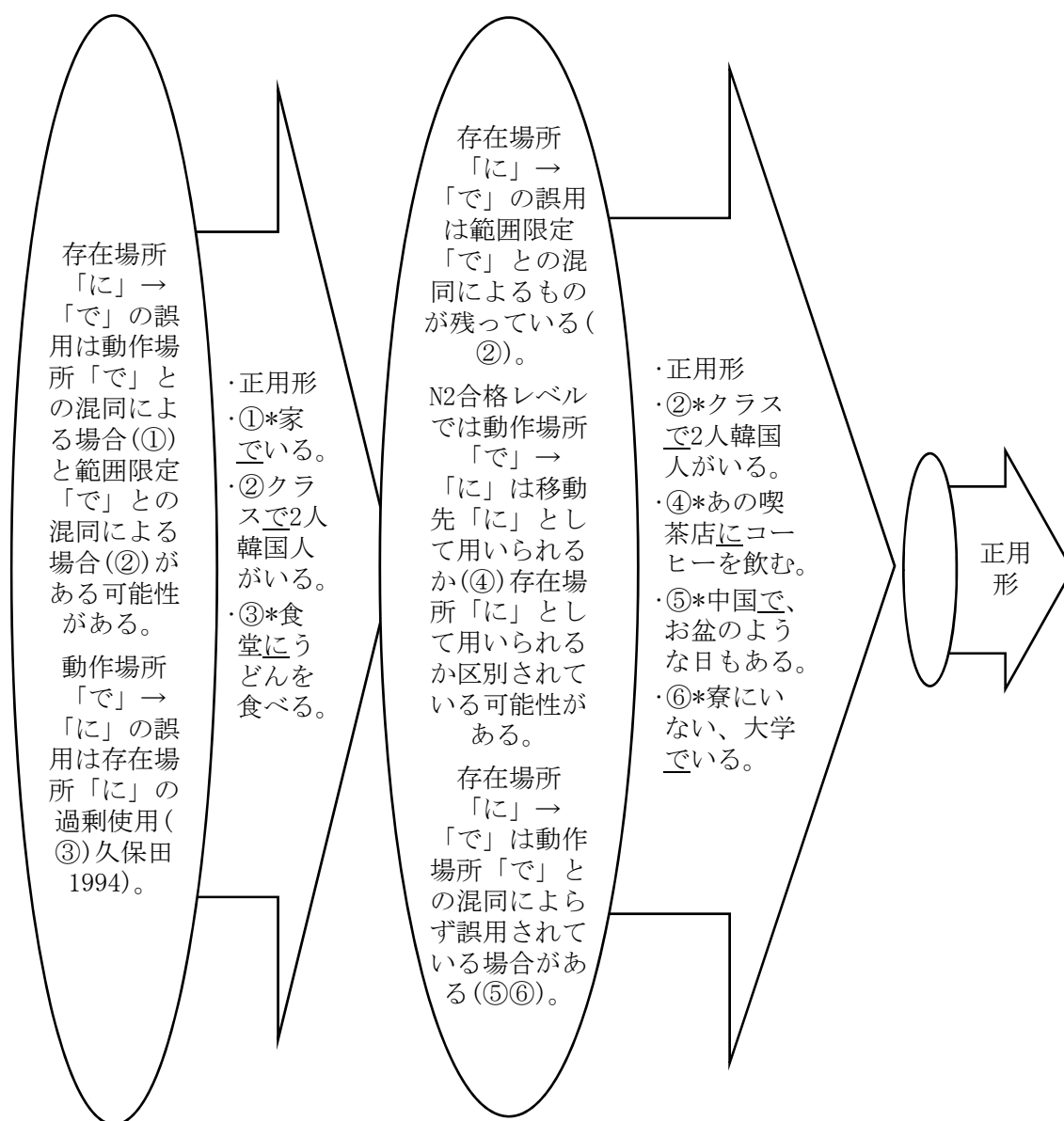


図 7-1. 推測される日本語学習者の場所を表す「に」の発達段階²⁹

7.2 本研究の意義

初級レベルの日本語学習者には、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同があるということはよく知られている事実であった。しかし、両者の混同による誤用

²⁹ 但し、初級レベルで現れる誤用の①③が中級レベルでは消えているのか、また、初級レベルで現れる誤用の①③が消えた後に④⑤⑥の誤用が中級レベルで現れるのかについてはまだ分らない。

は客観的に分析されたものではなかった。その後、存在場所を表す「に」の習得がどのように進むのかを探る研究も見当たらなかった。

中級レベルの日本語学習者の場所を表す「に」と「で」の誤用についての研究は、2.2の日本語教育における格助詞「に」の習得に関する先行研究で述べたように、迫田(2001)による「位置を表す名詞+に」および「建物・地名を表す名詞+で」のユニット形成ストラテジーが報告されて以降、そのストラテジーの追試、あるいはそのストラテジーの検証に関する研究が多かった。

本研究では一見初級レベルの誤用と同じに見える中級レベルの誤用を質的に分析して異なる点を示し、場所を表す「に」の発達の1つの段階の可能性を示したことに意義があると思われる。本研究の意義は、以下のようにまとめることができる。

研究課題 1. 中級レベルには、存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との混同による「に」→「で」の誤用が現れるという発達段階があるか。

これについては、中級レベルに見られる存在場所を表す「に」→「で」の誤用が、初級レベルに見られる存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同による誤用と異なり、存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との混同による誤用であることを仮説を立て検証し、そのような発達のある可能性を示したことである。

具体的には、本研究の第4章を通して実施した調査と分析で、まず「クラスに2人韓国人がいる」を問題文とした「に」の正答率がU字型を成しており、U字型の底辺の学習者における「*クラスで2人韓国人がいる」の「に」→「で」の誤用が範囲限定を表す「で」との混同により現れている可能性を示唆した。次に、日本語学習環境の異なる中級レベルの中国語話者でも「中位レベル」に見られた「*クラスで2人韓国人がいる」の「に」→「で」の誤用が範囲限定を表す「で」との混同による可能性を示し、さらに、同混同による誤用が母語の異なる「中位レベル」の一部の韓国語話者にも見られたことを示した。また、初級レベルのデータから、初級レベルにおいては「*家でいる」の「に」→「で」の誤用が先行研究で報告されていた通り(久保田 1994、八木 1996 等)存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同による誤用である可能性が高いことを示した。そして、初級レベルにおいても条件付存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」との混同により「*クラスで2人韓国人がいる」の「に」→「で」の誤用が現れる可能性があることを示した。

これより、中級レベルでは、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同による「*家でいる」のような誤用は消えるが、存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」の混同により「*クラスで2人韓国人がいる」の「に」→「で」の誤用は残っているという発達の1つの段階がある可能性が高いことを示したことが意義ある点である。

研究課題 2. 中級レベルには、移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同により動作場所を表す「で」→「に」の誤用が現れる発達段階があるか。

これについては、動作場所を表す「で」→「に」の誤用が、初級レベルに見られる存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同による誤用と異なり、移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同による誤用であることを、仮説を立て検証し、このような発達段階がある可能性を示したことである。

具体的には、本研究の第 5 章の予備調査と本調査を実施し、「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」のような「で」→「で」の誤用が、移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同による可能性を示したことが意義のある点である。

研究課題 3. 中級レベルには、場所名詞が対比された文および場所名詞が文頭に置かれた文において見られる、動作場所を表す「で」との混同ではない存在場所を表す「に」→「で」の誤用が現れる発達段階があるか。

これについては、存在場所を表す「に」→「で」の誤用が、初級レベルに見られる存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同による誤用と異なり、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同による誤用ではないことを仮説を立て検証し、このような発達段階がある可能性を示したことである。

具体的には、本研究の第 6 章の調査において「*寮にいません。大学でいる」のような場所名詞が対比された文の存在場所を表す「に」→「で」の誤用が動作場所を表す「で」との混同による誤用ではないこと、そして、「*中国で、お盆のような日もある」のような場所名詞が文頭に置かれた文の方が、場所名詞が文中に置かれた文の存在場所を表す「に」→「で」の誤用よりも多いことを示し、それが動作場所を表す「で」との混同による誤用ではない可能性が高いことを示したことが意義のある点である。

7.3 教育現場への応用

本研究によって、中級レベルの日本語学習者に現れる「*クラスで 2 人韓国人がいる」、 「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」のような誤用は、初級レベルの日本語学習者に現れる存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同による誤用とは異なる可能性が高いことが示された。また、「*寮にいません。大学でいる」のような場所名詞が対比された文および「*中国で、お盆のような日もある」のような場所名詞が文頭に置かれた文の存在場所を表す「に」→「で」の誤用も初級レベルの日本語学習者に現れる存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同による誤用ではない可能性が高いこ

とが示された。

筆者が働いている日本語教育の現場では、上記のような誤用が現れた場合、多くの日本語教師は、存在場所を表す「に」や動作場所を表す「で」の使い方が日本語学習者に「入っていない」という言い方をする。しかし、「日曜日、家にいた」、「日曜日、家で勉強した」を正しく用いることができる日本語学習者が、「*クラスで2人韓国人がいる」や「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」を用いた場合、それは、存在場所を表す「に」や動作場所を表す「で」の使い方が「入っていない」のではなく、むしろ、日本語学習者の「に」の習得が進んでいることを示す指標になると捉えることができるのではないか。すなわち、中級レベルの日本語学習者に「*クラスで2人韓国人がいる」や「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」が現れるのは、初級レベルでは存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」を動詞との関係において正しく用いることができなかったが、中級レベルのある段階では存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」を動詞との関係において正しく用いることができるということを表しているのである。

このようにして、一見、初級レベルに現れる誤用と現象的には同じに見えた中級レベルに現れる誤用は質的には異なる誤用もあることを日本語教育の現場に応用することは、「に」の習得における指標あるいは目安となり得ると思われる。

もちろん、本研究で得られた成果を応用した格助詞の学習教材の開発に結びつけられれば、教育現場に活用できると考える。しかし、本研究で得られた成果は格助詞の発達段階のほんの一部分にすぎない。そのため、今後も本研究のような調査を行い、場所を表す格助詞の発達の1つ1つの段階を明らかにしていき、すべての発達段階が明らかにされたときに格助詞の学習教材が開発できれば幸いである。

7.4 今後の課題

本研究において、不足している点が多い。場所を表す「に」の発達段階のすべてを明らかにするためには、以下のような点が課題となる。

第1に、本研究で対象とした「*あの喫茶店にコーヒーを飲む」の誤用および、場所名詞が対比された場合と文頭に置かれた場合の誤用の調査は、本来ならば比較対象として初級レベルの日本語学習者にも調査を実施すべきであった。今後は、初級レベルの日本語学習者、また、上級レベルの日本語学習者も対象として同じ調査を実施し、本研究で得られた中級レベルの日本語学習者の結果と比較しなければならない。

第2に、研究課題1では「*クラスで2人韓国人がいる」の誤用が存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」の混同によるという仮説が支持されたが、例えば「今、講義室()留学生がいる」といった場所名詞が「集合体」を表さない文や、「韓国人がクラス()2人いる」といった場所名詞句を文中に置いた文ではどのような結果が得られるのかを調べる必要がある。

第3に、場所名詞が対比された文および場所名詞が文頭に置かれた文における存在場所を表す「に」→「で」の誤用は、動作場所を表す「で」と存在場所を表す「に」との混同による誤用ではない可能性は高いという結果が得られたが、どのような「で」の用法との誤用によるものかは分からなかった。この点についても今後の課題となる。

第4に、本研究では取り上げられなかった中級レベルの日本語学習者に現れる存在場所を表す「に」→「で」の誤用を解明することである。例えば、6.3.6で見られた存在を表す文の場所名詞が「文中」に置かれた場合の「に」→「で」の誤用である。「文頭」に置かれた場合の「に」→「で」の誤用よりも少ないものの、「文中」の「に」→「で」の誤用も見られた。この存在場所を表す「に」→「で」の誤用がどのような混同によるものかを明らかにしなければならない。

第5に、本研究では主に中国語を母語とする日本語学習者、そして韓国語を母語とする日本語学習者に調査の協力を依頼した。今後は、同じ調査を英語を母語とする日本語学習者など母語の異なる日本語学習者に協力を得て調査を実施しなければならない。その際、本研究において用いた調査票の問題文で不自然であった問題文(例えば「寮の中に、で、を、から)みんないますが、リーさんは寮の外(に、で、を、から)います」など)については自然な問題文に改良して行わなければならない。

第6に、「住む」と共に用いられる「に」は本研究では直接分析の対象としなかったが、本研究の第5章の調査において、「住む」などと共に用いられる「に」は日本語学習者にとって存在場所を表す「に」に近い「に」として捉えられていた。今後は、「住む」などと共に用いられる「に」が、存在場所を表す「に」と移動先を表す「に」との関係において、どのようにして習得が進むのかを明らかにする必要がある。

また、本研究においては対象としなかったものについても明らかにしなければならない。それについては、以下の点が課題となる。

第7に、移動先を表す「に」→「で」の誤用、動作や行為の結果存在する人やモノの場所を表す「に」→「で」の誤用、場所を表す「を」→「に」の誤用、場所を表す「を」→「で」の誤用などである。

第8に、初級レベルを対象とした先行研究で示されている「*家でいる」(松田・斎藤1992)の「に」→「で」の誤用が本当に存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」の誤用であるのかどうかを確認しなければならない。

これらがどのような用法の格助詞の混同によるものであるのかを明らかにすることが今後の課題であろう。

今後も本研究で行った調査および分析を続け、多くの日本語学習者に共通する場所を表す格助詞の発達段階の全貌を明らかにすることを最終的な目標としている。本研究で得られた成果は大きな成果ではないが、日本語教育の現場における日本語学習者の格助詞習得の目安となり、引いては日本語を第2言語とする習得研究にわずかながらも貢献できることを願っている。

参考文献

- 青木伶子(1956)『『へ』と『に』の消長』『国語学』24, 107-120.
- 秋川卓也(2010)『文系のための SPSS 超入門』プレアデス出版
- 浅山友貴(2002)「場所格ニとデの差異をめぐって」『東京大学留学生センター紀要』12, 83-106.
- 浅山友貴・荒巻朋子・板井美佐・太田陽子・坂本まり子・杉本ろここ・副島昭夫・田代ひとみ・野田景子・本郷智子・編著：市川保子(2010)『日本語誤用辞典外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導のポイント』スリーエーネットワーク
- 阿刀田稔子(1972)「てにをは随想(8)－『に』と『で』－」『日本語教育研究』6, 54-62.
- 阿部純一・桃内佳雄・金子康朗・李光五(1999)『人間の言語情報処理－言語理解の認知科学－』サイエンス社
- 天野みどり(2002)『文の理解と意味の創造』笠間書院
- 荒木一雄(編)(1999)『A Dictionary on Technical Terms of English Linguistics』三省堂
- 家村伸子(2001)「日本語の否定形の習得－中国語母語話者に対する縦断的な発話調査に基づいて－」『第二言語としての日本語の習得研究』4, 63-81.
- 生田守・久保田美子(1997)「上級学習者における格助詞『を』『に』『で』習得上の問題点－助詞テストによる横断的研究から－」『日本語国際センター紀要』7, 17-34.
- 池上嘉彦(1993)『意味論』大修館書店
- 石垣謙二(1955)『助詞の歴史的研究』岩波書店
- 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠(2010)『言語研究のための統計入門』くろしお出版
- 石綿敏雄(1999)『現代言語理論と格』ひつじ書房
- 市川保子(1988)「クイズ・テストの結果と『習得状況の流れ』－文法教育への一考察－」『日本語教育』64, 164-175.
- 市川保子(1997)『日本語誤用例文小辞典』凡人社
- 伊藤克敏(2003)『こどものことば』勁草書房
- 伊藤健人(2008)『ひつじ研究叢書＜言語編＞第64巻イメージ・スキーマに基づく格パターン構文－日本語の構文モデルとして－』ひつじ書房
- 稲垣佳世子・鈴木宏昭・大浦容子(2007)『新訂認知過程研究－知識の獲得とその利用－』財団法人放送大学教育振興会
- 乾敏郎・安西祐一郎(2001)『運動と言語認知科学の新展開3』岩波書店
- 井上和子(1989)『日本文法小事典』大修館書店
- 猪崎保子(1995)「中国人日本語学習者にみられる助詞の習得について」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』21, 15-27.
- 岩崎卓(1995)「ニとデ」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(上)』くろしお出版

版, 74-82.

- 岩淵匡・蒲谷宏・松木正恵・森野崇・守屋三千代(2000)『日本語文法(第4版)』白帝社
- 内山潤(1996)「日本語学習者の格助詞の習得に関する研究」『1996年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 160-165.
- エリス、ロッド. (1988)『第2言語習得の基礎』牧野高吉(訳)ニューカレントインターナショナル
- 大河内康憲(1997)『中国語の諸相』白帝社
- 大島中正(1993)「動詞述語文における場所名詞のニ格とデ格」『同志社女子大学学術研究年報』44(4), 478-500.
- 大津由紀雄(2001)『認知心理学3 言語』東京大学出版会
- 大野晋(1977)「日本語の助動詞と助詞」『岩波講座日本語7 文法Ⅱ』岩波書店, 1-26.
- 大野晋・田中章夫(編)(1995)『角川必携国語辞典』角川書店
- 岡智之(2005)「場所的存在論による格助詞ニの統一的説明」『日本認知言語学会論文集』5, 12-22.
- 岡田直之(2009)『脳に宿る心』オーム社
- 岡田美穂(2004)「場所名詞を受ける『に』『で』の使い分けに関する研究—九州女子大学別科日本語学習者の場合—」『九州女子大学特別研究報告 書大学における日本語教授法の研究』5.2, 65-71.
- 岡田美穂(2007)「3言語使用学習者は2言語使用学習者より存在場所『に』の習得が促進されるか」文部科学省科研平成16—18年度<基盤研究B>『多言語併用環境における日本語の習得、教育、及び支援に関する研究』(研究代表者 長友和彦), 61-73.
- 岡田美穂・奥田俊博(2015)「場所を表す名詞に後接する格助詞『に』『で』『を』について—日本語教育の観点に基づく先行研究の整理と課題—」『九州共立大学紀要』, 99-105.
- 岡田美穂・志水俊広・李相穆(2012)「存在場所につくニ格の習得—JFL環境における中国語を母語とする日本語学習者の場合—」『東アジア日本語・日本文化研究』14, 32-47.
- 岡田美穂・志水俊広・李相穆(2014)「『文頭』に現れる存在場所『に』と範囲限定『で』の混同—中国語を母語とする学習者と韓国語を母語とする学習者—」『東アジア日本語・日本文化研究』18, 95-114.
- 岡田美穂・林田実(2007)「日本語学習者による格助詞の混同—存在場所の『に』範囲限定の『で』—」『日本語教育論集』23, 3-15.
- 岡田美穂・林田実(2016)「中国語を母語とする中級レベルの日本語学習者の移動先を表す『に』と動作場所を表す『で』の習得」『日本語教育』163, 48-63.
- 岡田美穂・林田実・李相穆(2014)「存在場所『に』と範囲限定『で』の混同—韓国語を母語とする『中位レベル』の日本語学習者の場合—」『日本學報』99, 121-135.
- 岡田美穂・Linda JOYCE・納富 淳子(2014)「中国語を母語とする日本語学習者の移動を表す動詞と共起する『に』の習得に関する研究」『九州産業大学語学教育研究センター

紀要』9, 20-37.

岡田幸彦(1996)「『〜で』格における動詞との結合に基づく現代日本語の名詞分類の試みー

動作の手段を表す場合と場所・空間を表す場合ー」『拓殖大学日本語紀要』6, 92-106.

奥田靖雄(1983)「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会編『日本語文法・連語編
(資料編)』むぎ書房, 281-323.

奥津敬一郎(1974)『生成日本文法論』大修館書店

奥津敬一郎(1987)「生成文法と国語学」『岩波講座日本語 6 文法 I』岩波書店

奥津敬一郎・沼田善子・杉本武(1986)『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社

尾上圭介(2001)『文法と意味 I』くろしお出版

郭春貴(2006)『誤用から学ぶ中国語基礎から応用まで』白帝社

影山太郎(1998)柴谷方良・西光義弘・影山太郎(編)『日英語対照研究シリーズ(5)動詞意味論』
くろしお出版

影山太郎(2003)『日英対照動詞の意味と構文』大修館書店

加藤重広(2006)「対象格と場所格の連続性ー格助詞試論(2)ー」『北大文学研究科紀要』118,
134-160.

神尾明雄(1980)「『に』と『で』ー日本語における空間的位置の表現」『言語』9, 55-63.

川野靖子(2006)「移動動詞と共起するヲ格句とニ格句ー結果性と限界性による動詞の分類と
格体制の記述ー」『現代日本語文法現象と理論のインタラクション』ひつじ書房

北原博雄(1997)「位置変化動詞と共起する場所ニ格句の意味役割ー着点と方向と二分ー」『国
語学研究』36, 43-52.

北原博雄(1998)「移動動詞と共起するニ格句とマデ格句ー数量表現との共起関係に基づいた
語彙意味論的考察ー」『国語学』195, 84-98.

金水敏(2006)『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房

金水敏・工藤真由美・沼田善子(2000)『時・否定と取り立て』岩波書店

金田一春彦(1978)『日本語動詞のアスペクト』麦書房

楠見孝(編)(2010)『現代の認知心理学 3 思考と言語』北大路書房

工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキストー現代日本語の時間の表現ー』ひつ
じ書房

國廣哲彌(1962)「日本語格助詞の意義素試論」『島根大学論集人文科学』12, 81-92.

国広哲弥(1970)『ELEC 言語叢書意味の諸相』三省堂

国広哲弥(2006)『日本語の多義動詞ー理想の国語辞典Ⅱ』大修館書店

國廣哲彌・黒田成幸・奥津敬一郎・中右実・寺村秀夫(1980) 國廣哲彌(編)『日英語比較講
座 2 文法』大修館書店

久野暉(1973)『日本文法研究』大修館書店

久保田美子(1994)「第 2 言語としての日本語の縦断的習得研究ー格助詞『を』『に』『で』『へ』
の習得過程についてー」『日本語教育』82, 72-85.

- 顧海根(1983)「中国人学習者によくみられる誤用例－格助詞、係助詞『も』、接続助詞『て』などを中心に－」『日本語教育』49, 105-118.
- 小池清治・田邊知成(2004)「格助詞ヲ・ニの表すもの－『ヲ格型構文』に見られるヲ→ニ原則－」『宇都宮大学国際学部研究論集』18, 99-120.
- 国際交流基金 (2012)「2012 年海外日本語教育機関調査」
<http://www.jpft.go.jp/j/japanese/survey/result/survey12.html>(2014 年 3 月 19 日)
- 国際交流基金日本語国際センター(1978)『教師用日本語教育ハンドブック③ 文法 I 助詞の諸問題 1』凡人社
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会「日本語能力試験 JLPT」
<http://www.jlpt.jp/about/comparison.html>(2014 年 3 月 19 日)
- 国立国語研究所(1951)『国立国語研究所報告 3 現代語の助詞・助動詞－用法と実例－』日秀英出版
- 国立国語研究所(1997)『日本語教育指導参考書 4 日本語の文法(上)』大蔵省印刷局
- 国立国語研究所(1997)『日本語における表層格と深層格の対応関係』三省堂
- 国立国語研究所(1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 児玉一宏・野澤元(2009)『言語習得と用法基盤モデル』研究社
- 児玉徳美(1987)『語順の普遍性』山口書店
- 小西友七(1977)『英語の前置詞』大修館書店
- 此島正年(1966)『国語助詞の研究』桜楓社
- 小林好日(1927)『國語國文法要義』京文社
- 小林好日(1930)『國語學概論』萬上閣
- 小森早江子・坂野永理(1988)「集団テストによる初級文法の習得について」『日本語教育』65, 126-127.
- 小矢野哲夫(1989)「名詞と格」『講座日本語と日本語教育 4 日本語の文法・文体(上)』明治書院, 73-97.
- 近藤泰弘(2003)北原保雄(監修・編集)『朝倉日本語講座 5 文法 I』朝倉書店
- 佐伯梅友(1956)「ニアリからデアルへ」『国語学』26, 1-6.
- 佐伯哲夫(1962)「現代文における語順支配の論理」『国語学』50, 34-44.
- 坂本正「第 13 回第二言語習得研究会全国大会パネルディスカッション報告 言語教育における知識と運用『わかる』と『できる』の違い－誤用はなぜ起きるのか－」『第二言語としての日本語の習得研究』6, 121-129.
- 佐久間鼎(1983)『現代日本語法の研究<改訂版>』くろしお出版
- 迫田久美子(2001)「学習者の誤用を産み出す言語処理のストラテジー(1)－場所を表す『に』と『で』の場合－」『広島大学教育学部日本語教育学講座紀要』, 17-22.
- 迫田久美子(2002)『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク
- 佐々木嘉則(2008)「問答集 今さら訊けない新 M1 のための、第二言語習得再入門」『第二

- 言語習得・教育の研究最前線 2008 年版』凡人社, 191-241.
- 定延利之(2004)「モノの存在場所を表す『で』?」『日本語の分析と言語類型—柴谷方良教授還暦記念論文集—』くろしお出版, 181-198.
- 柴谷方良(1978)『日本語の分析』大修館書店, 284.
- 初相娟・玉川賀津雄・早川杏子(2013)「中国人日本語学習者の場所を表す格助詞「で」と「に」の習得に影響する諸要因」『日中言語研究と日本語教育』6, 59-70.
- 白石大二(1963)「基本語彙設定以前の問題」『国語学』53, 49-64.
- 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則(1999)『英語教育用語辞典』大修館書店
- 白畑知彦・若林茂則・村野井仁 (2010).『詳説第二言語習得研究—理論から研究法まで—』研究社
- 城田俊(1993)「文法格と副詞格」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版, 67-94.
- スカーセラ・オックスフォード. (1997)『第 2 言語習得の理論と実践タペストリー・アプローチ』牧野高吉(監修)松柏社
- 菅井三実(1997)「格助詞『で』の意味考察に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集(文学)』43, 23-40.
- 菅井三実(2000)「格助詞『に』の意味特性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要 第 2 分冊 言語系教育・社会系教育・芸術系教育 20』, 13-24.
- 菅谷奈津恵「プロトタイプ理論と第二言語としての日本語の習得研究」『第二言語としての日本語の習得研究』7, 121-140.
- 杉井鈴子(1954)「助詞『へ』の成立」『国語学』19, 42-49.
- 杉村博文(1994)『中国語文法教室』大修館書店
- 杉山有香(2002)「上級日本語学習者の格助詞使用と省略—『が』『を』『に』『で』を中心に—」『南山日本語教育』9, 137-169.
- 鈴木一彦・林巨樹(1984)『研究資料日本語文法 5 助辞編(一)助詞』明治書院
- 鈴木一彦・林巨樹(1985)『研究資料日本語文法 7 助辞編(三)助詞・助動詞辞典』明治書院
- 鈴木重幸(1968)「現代語」『国語学』73, 31-44.
- 鈴木忍(1978)「文法上の誤用例から何を学ぶか—格助詞を中心に—」『日本語教育』34, 1-14.
- 鈴木英夫(1969)「にて—格助詞<古代語>」『古代語現代語助詞助動詞詳説』学燈社, 367-370.
- 鈴木英夫(1969)「で—格助詞<現代語>」『古代語現代語助詞助動詞詳説』学燈社, 370-373.
- 高橋太郎(1994)『動詞の研究動詞の動詞らしさの発展と消滅』むぎ書房
- 高見沢孟・ハント蔭山裕子・池田悠子・伊藤博文・宇佐美まゆみ・西川寿美(2008)『新・はじめての日本語教育 1 日本語教育の基礎知識』アスク
- 田中章夫(1977)「助詞(3)」『岩波講座日本語 7 文法Ⅱ』岩波書店, 359-454.
- 田中章夫(2001)『近代日本語の文法と表現』明治書院

- 田中茂範・松本曜(1997)『日英語比較選書 6 空間と移動の表現』研究社出版
- チョムスキー、ノーム.(1963)『文法の構造』勇康雄(訳)研究社
- チョムスキー、ノーム.(1970)『文法理論の諸相』安井稔(訳)研究社
- 辻幸夫(編)(2001)『ことばの認知科学事典』大修館書店
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 土井忠生(1958)「格助詞一の・が・な・つ・だ・い・を・に・と・へ・より・よ・ゆり・ゆ・から・てー」『國文學解釋と鑑賞』23(4)至文堂, 27-49.
- 時枝誠記(1950)『日本文法口語篇』岩波書店
- 時枝誠記(1954)『日本文法文語篇』岩波書店
- 時枝誠記(1958)『國語學言論續篇』岩波書店
- 中川正之(1977)「中国語の『有・在』と『ある・いる』の対照研究(上)」『日本語と中国語の対照研究』3, 1-10.
- 中川正之(1990)「中国語と日本語」『講座日本語と日本語教育 12』明治書院, 219-240.
- 中島平三(1994)「ことばの階層性を捉える」『言語』23(3).大修館書店, 26-33.
- 永野賢(1959)「幼児の言語発達について―主として助詞の習得過程を中心に―」『国立国語研究所論集 1 ことばの研究』秀英出版, 383-396.
- 新村出(編)(1998)『広辞苑第五版』岩波書店
- 西田直敏(1977)「助詞(1)」『岩波講座日本語 7 文法 II』岩波書店
- 西光義弘(1997)「第 6 章 語用論」西光義弘編『英語学概論』くろしお出版, 243-286.
- 西山佑司(1994)「日本語の存在文と変項名詞句」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』26, 115-148.
- 西山佑司(2001)「関連性理論」辻幸夫編著(2001)『ことばの認知科学事典』大修館書店, 295-303.
- 西山佑司(2003)『日本語研究叢書第 3 期第 2 巻 日本語名詞句の意味論と誤用論―指示的名詞句と非指示的名詞句―』ひつじ書房
- 仁田義雄(編)(1993)『日本語の格をめぐる』くろしお出版
- 仁田義雄(1997)『日本語文法研究序説―日本語の記述文法を目指して―』くろしお出版
- 仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人(2000)『日本語の文法 1 文の骨格』岩波書店
- 日本語教育学会編(1982)『日本語教育事典 縮刷版』大修館書店
- 野田尚史(1991)『はじめての人の日本語文法』くろしお出版
- 野田尚史(1996)『新日本語文法選書 1 「は」と「が」』くろしお出版
- 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子(2001)『日本語学習者の文法習得』大修館書店
- 野村益寛(2001)「認知言語学」辻幸夫(編)『ことばの認知科学事典』大修館書店, 132-146.
- 野林正路(1965)「核文の設定と変形への段どり」『国語学』63, 61-74.
- 橋田浩一・大津由紀雄・田窪行則・杉下守弘(1995)『岩波講座認知科学 言語』岩波書店
- 橋本進吉(1948)『國語法研究』岩波書店

- 橋本進吉(1959)『國文法體系論』岩波書店
- 橋本進吉(1969)『助詞・助動詞の研究(講義集三)』岩波書店
- 蓮池いずみ(2004)「場所を示す格助詞『に』の過剰使用に関する一考察－中級レベルの中国語母語話者の助詞選択ストラテジー分析－」『日本語教育』122, 52-61.
- 蓮池いずみ(2007)「日本語の空間表現に見られる母語の影響について－韓国語,中国語,英語母語話者を中心に－」『第二言語としての日本語の習得研究』10, 68-86.
- 蓮池いずみ(2012)「日本語の空間表現「に」と「で」の選択にみられる母語の影響－助詞選択テストの結果分析」『言葉と文化』, 59-76.
- www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/issue/pdf/13/13-05.pdf(2013年11月30日)
- 長谷川信子(1999)『生成日本語学入門』大修館
- 林田実(2013)『サイコロを振って、統計学!』創成社
- 早瀬尚子・堀田優子(2005)『英語学モノグラフシリーズ 19 認知文法の新展開カテゴリー化と用法基盤モデル』研究社
- 朴在權(1997)『現代日本語・韓国語の格助詞の比較研究』勉誠社
- 平井明代(2012)『教育・心理系研究のためのデータ分析入門－理論と実践から学ぶ SPSS 活用法』東京図書
- フィルモア、チャールズ J. (1975)『格文法の原理－言語の意味と構造』田中晴美・船越道雄(訳)三省堂
- 福井久蔵「日本文法學」(1937)『岩波講座國語教育第二卷』岩波書店, 23-40.
- 福間康子(1996)「作文からみた初級学習者の格助詞『に』の誤用」『九州大学留学生センター紀要』8, 九州大学留学生センター, 61-74.
- 文化庁 (2012)「平成 24 年度国内の日本語教育の概要」
http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/jittaichousa/h24/gaikoku_4.html(2013 年 10 月 3 日)
- 牧野成一・鎌田修・山内博之・斎藤眞理子・荻原雅稚佳子・伊藤とく美・池崎美代子・中島和子(2001)『ACTFL-OPI 入門－日本語学習者の「話す力」を客観的に測る－』アルク
- 益岡隆志(2000)『命題の文法－日本語文法序説』くろしお書店
- 益岡隆志・田窪行則(2002)『日本語文法セルフ・マスターシリーズ 3 格助詞』くろしお出版
- 増田恭子(2001)「第二言語としての日本語学習者の場所格に関するストラテジー使用の変化」『2001 年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会, 55-60.
- 松尾捨(1969)「を－格助詞＜古典語・現代語＞」松村明(編)『古代語現代語助詞助動詞詳説』学燈社, 335-340.
- 松尾捨(1969)「に－格助詞＜古典語・現代語＞」松村明(編)『古代語現代語助詞助動詞詳説』学燈社, 340-346.

- 松尾捨(1969)「へー格助詞＜古典語・現代語＞」松村明(編)『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社, 346-365.
- 松下大三郎(1927)『標準日本口語法』中文館書店
- 松下大三郎(1984)『改撰標準日本文法』勉誠社
- 松田由美子・斎藤俊一(1992)「第 2 言語としての日本語学習に関する横断的事例研究」『世界の日本語教育』2, 129-156.
- 松村明(1957)『江戸語東京語の研究』東京堂
- 松本恭子(2000)「ある中国人児童の来日 2 年間の助詞機能の使用状況－発話資料と作文資料の縦断的調査報告－」『日本語教育論集』16, 1-22.
- 間淵洋子(2000)「格助詞『で』の意味拡張に関する一考察」『国語学』51.1, 15-30.
- 丸尾誠(2005)『現代中国語の空間移動表現に関する研究』白帝社
- 丸山敬介(2000)『日本語教育演習シリーズ① 教えるためのことばの整理 VOL.1』凡人社, 144-145.
- 水野義道(1987)「場所を示す中国語の介詞＜在＞と日本語の格助詞『ニ』『デ』」『日本語教育』62, 105-117.
- 三原健一(1997)「第 3 章 統語論 生成文法」西光義弘(編)『英語学概論』くろしお出版, 97-136.
- 榎山洋介(2010)『認知言語学入門』研究社
- 森田良行(1980)『基礎日本語 2－意味と使い方』角川書店
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
- 森田良行(1994)『動詞の意味論的文法研究』明治書院
- 森田良行(2002)『日本語文法の発想』ひつじ書房
- 森山新(2000)『新日本語学研究叢書 認知と第二言語習得』
- 森山新(2002)「日本語の格助詞習得はどのようになされるか－韓国語母語話者に対する実験的研究－」『東アジア日本語教育シンポジウム論文集』, 38-52.
- 森山新(2004)「格助詞デの放射状カテゴリー構造と習得との関係」『日本認知言語学会論文集』4, 66-75.
- 森山新(2005)『認知言語学的観点を取り入れた格助詞の意味ネットワーク構造解明とその習得過程』平成 14～16 年度科学研究費補助金研究基盤研究(C)(2)研究成果報告書課題番号 14510615
- 森山新(2008a)『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得』ひつじ書房
- 森山新(2008b)「日本語の習得・教育研究への認知言語学の応用可能性」『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書 Vol.平成 19 年度 海外研修事業編』お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」事務局, 132-135.
- <http://hdl.handle.net/10083/35125>(2014 年 10 月 8 日)

- 森山卓郎(2000)『ここからはじまる日本語文法』ひつじ書房
- 八木公子(1996)「初級学習者の作文に見られる日本語の助詞の正用順序－助詞別，助詞の機能別，機能グループ別に－」『世界の日本語教育』6, 65-81.
- 山岡俊比古(1997)『第2言語習得研究<新装改訂版>』桐原ユニ
- 山岡政紀(2000)『日本語の述語と文機能』くろしお出版
- 山口明穂(2004)『日本語の論理言葉に現れる思想』大修館書店
- 山崎良幸(1958)『現代語の文法』武蔵野書院
- 山崎良幸(2001)『古典語の文法』武蔵野書院
- 山田進(1981)「機能語の意味と比較」『意味と語彙』大修館書店, 53-99.
- 山田孝雄(1908)『日本文法論』寶文館
- 山田孝雄(1922)『日本口語法講義』寶文館
- 山田孝雄(1936)『日本文法學概論』寶文館
- 山梨正明(1995)『認知文法論』ひつじ書房
- 山梨正明(2004)『ことばの認知空間』開拓社
- 山梨正明(2009)『認知構文論－文法のゲシュタルト性－』大修館書店
- 山本和之(1995)「移動と所在：日英語における『着在点』の語彙概念構造」『英語と英米文学』30, 117-135.
- 湯澤幸吉郎(1954)『江戸言葉の研究』明治書院
- 油谷幸利(2005)『日韓対照言語学入門』白帝社
- 横林宙世(1994)「中級・上級日本語学習者の中間言語－助詞習得を中心に－」『日本語教育学会春季大会予稿集 1993.5』, 7-12.
- 吉野忠(1964)「『ニシテ』から『デ』へ」『高知大学教育学部研究報告』16, 15-24.
- 米川和雄・山崎貞政(2011)『超初心者向け SPSS 統計解析マニュアル統計の基礎から多変量解析まで』北大路書房, 87-96.
- 頼怡玲(2002)「場所を表す『に』と『で』の使い分けに関する研究－台湾人日本語学習者の場合－」お茶の水女子大学修士論文
- ラーセンフリーマン・ロング. (1995)『第2言語習得への招待』牧野高吉・萬谷隆一・大場浩正(訳)鷹書房弓プレス
- 刘月華・潘文娛・故韓(1988)『現代中国語文法総覧(上)』相原茂(監訳)くろしお出版
- 若生正和(2012)「韓国語日本語学習者による場所の格助詞『に』と『で』の選択に関する研究」『大阪教育大学紀要』第1部門 60.2, 91-99.
- 鷺見幸美(2003)「移動を表す日本語動詞の意味と格表示－『わたる』を例として－」『中部大学人文学部研究論集』10, 113-132.
- 渡辺明(2009)『生成文法』東京大学出版会
- Andersen, R. W. (1984) The one to one Principle of interlanguage construction. *Language Learning* 34, 77-95.

- Baidi, S. M. (1999) *The acquisition of second language syntax*. London: Arnold.
- Chomsky, N. (1957) *Syntactic structures*. The Hague: Mouton.
- Chomsky, N. (1965) *Aspects of the theory of syntax*. The M. I. T. Press.
- Ellis, R. (1985) *Understanding second language acquisition*. Oxford University Press.
- Ellis, R. (2008) *The study of second language acquisition* (2nd ed.). Oxford: Oxford University Press.
- Ellis, R. (1985) *Understanding second language acquisition*, Oxford University Press.
- Kellerman, E. (1979) Transfer and non-transfer: Where we are now?, *Studies in second language acquisition* 2, 37-57.
- Krashen, S. (1977) Some issues relating to the Monitor Model. In Brown, H., Yorio, C., & Crymes, R. (Eds.) *On TESOL 77*. Washington, D.C.: TESOL, 144-158.
- Larsen-Freeman, D., & Long, M. H. (1991) *An introduction to second language acquisition research*. Longman Group UK Limited.
- Lightbown, P. M., & Spada, N. (1993) *How languages are learned*. Oxford: Oxford University Press.
- Scarcella, R. C. & Oxford, R. L. (1992) *The tapestry of language learning: The individual in the communicative classroom*, Heinle and Heinle Publishers.
- Schumann, J. (1979) The acquisition of English negation by speakers of Spanish: A review of the literature. in R. W. Andersen (Ed.) *The acquisition and use of Spanish and English as first and second languages*. Washington, D.C.: TESOL, 3-32.
- Selinker, L. (1972) Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics* X, 209-230.
- Towell, R., & Hawkins, R. (1994) *Approaches to second language acquisition*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.

参考図書

- 荒井礼子・太田純子・大薮直子・亀田美保・木川和子・永田龍典・松田浩志(1991)『テーマ別中級で学ぶ日本語』研究社
- 国際日本語普及協会(2006)『Japanese for Busy People I』講談社インターナショナル
- スリーエーネットワーク(1998)『みんなの日本語初級 I、II 本冊』スリーエーネットワーク
- 筑波大学日本語教育研究会(編)(1991)『日本語表現文型中級 I、II』凡人社
- 筑波ランゲージグループ(1991)『Situational Functional Japanese』凡人社
- 土岐哲他・関正昭・平高史也・新内康子・鶴尾能子(1995)『日本語中級 J301－基礎から中級へー』スリーエーネットワーク

名古屋大学日本語教育研究グループ(1988)『現代日本語コース中級Ⅰ、Ⅱ』名古屋大学出版会

坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子(2011)『GENKI: An Integrated Course in Elementary Japanese I [Second Edition] 初級日本語 げんきⅠ[第2版]』ジャパントイムズ

水谷修・水谷信子(1977)『An Introduction to Modern Japanese』ジャパントイムズ

Tohsaku Yasu-Hiro(1994)『YOOKOSO! An Invitation to Contemporary Japanese』McGraw-Hill, Inc.

付録 I : 資料

資料 A 第 4 章 4.1.2 調査票 (国内の多国籍の日本語学習者)

- くみ なまえ くに にほんごのうりよくしけん きゅうごうかく
組 名前 国 日本語能力試験 級合格
- なか か
「に」「で」「から」「を」の中の1つを()に書いてください。
- 1 食堂()彼がいます。
しよくどう かれ
 - 2 中国()おば(さん)がいません。
ちゅうごく
 - 3 食堂()ごはんを食べます。
しよくどう た
 - 4 東京()大きな病院があります。
とうきょう おお びょういん
 - 5 食堂()ごはんを食べています。
しよくどう た
 - 6 大学()図書館まで自転車で行きます。
だいがく としょかん じてんしゃ い
 - 7 去年、福岡()東京へ行きました。
きょねん ふくおか とうきょう い
 - 8 食堂の前()イさんがいます。食堂の中()誰もいません。
しよくどう まえ しよくどう なか だれ
 - 9 銀行()お金が100万円あります。
ぎんこう かね まんえん
 - 10 小さな橋()渡りました。
ちい はし わた
 - 11 京都のホテル()予約します。
きょうと しょうとく
 - 12 リーさんはいつも寮()ごはんを食べています。
にほん じょう ちゅうごく じょう
 - 13 日本()ボーリング場があります。中国()ボーリング場はあまりありません。
にほん お からだ いた
 - 14 ベッド()落ちたので、体が痛いです。
だいがく なか だれ いちばんて にす じょうず
 - 15 大学の中()誰が一番テニスが上手ですか。
りょう なか りょう そと
 - 16 寮の中()みんないます。寮の外()リーさんがいます。
だいがく りゅうがくせい なか い いちばんせ たか
 - 17 大学の留学生の中()イさんが一番背が高いです。
いえ ある ぶん
 - 18 家()歩いて10分かかります。
ちゅうごく ゆうめい
 - 19 中国()有名なところはどこですか。
りょう ひと
 - 20 寮()アメリカの人がいますか。
かんこく ちち にほん はは あに いもうと
 - 21 韓国()父がいます。日本()母と兄と妹がいます。
にほん たべもの なか
 - 22 日本の食べ物の中()おいしいのはラーメンです。
かんこく ゆうめい ひと だれ
 - 23 韓国()有名な人は誰ですか。
いえ なか
 - 24 家の中()ネコはいません。あそこ()います。
ひこうき そら と い
 - 25 飛行機が空()飛んで行きました。
だいがく でんわ
 - 26 きのう、大学()電話がありました。
わたし おお いえ か
 - 27 私は大きな家()買いたいです。

- 28 どろぼうが家の2階()入りました。
いえ かい はい
- 29 きのう、みんなは日本料理を食べました。私もその中()いました。
にほんりょうり た わたし なか
- 30 教室()テレビが1台しかありません。あそこ()3台あります。
きょうしつ だい だい
- 31 帰るとき、公園()通りました。
かえ こうえん とお
- 32 あの店の中()何がほしいですか。
みせ なか なに
- 33 寮()5人メキシコの人があります。
りょう にん ひと
- 34 あした朝早く、家()出なければなりません。
あさはや いえ で
- 35 電車()降りてから、歩いて行きました。
でんしゃ お ある い
- 36 大きな病院は東京()いくつありますか。
おお びょういん とうきょう
- 37 この家()入口が3つありますか。
いえ いりぐち
- 38 中国の人は大学()何人いますか。
ちゅうごく ひと だいがく なんにん
- 39 勉強しているとき、窓()飛行機が見えました。
べんきょう まど ひこうき み
- 40 いろいろな料理がありました。その中()中国料理もありました。
りょうり なか ちゅうごくりょうり
- 41 家()お金がありません。銀行()お金が50万円あります。
いえ おかね ぎんこう おかね まんえん
- 42 東京()どこが一番好きですか。
とうきょう いちばんず

資料B 第4章 4.2.2 調査票(JSLの中国語話者)

くみ なまえ くに にほんごのうりよくしけん きゅうごうかく
組 名前 国 日本語能力試験 級 合格

なか か
「に」「で」「から」「を」の中の1つを()に書いてください。

- 1 食堂()彼がいます。
しよくどう かれ
- 2 中国()おば(さん)がいません。
ちゅうごく
- 3 食堂()ごはんを食べます。
しよくどう た
- 4 東京()大きな病院があります。
とうきょう おお びょういん
- 5 食堂()ごはんを食べています。
しよくどう た
- 6 大学()図書館まで自転車で行きます。
だいがく としょかん じてんしゃ い
- 7 去年、福岡()東京へ行きました。
きょねん ふくおか とうきょう い
- 8 食堂の前()イさんがいます。食堂の中()誰もいません。
しよくどう まえ しよくどう なか だれ
- 9 銀行()お金が100万円あります。
ぎんこう かね まんえん
- 10 小さな橋()渡りました。
ちい はし わた
- 11 京都のホテル()予約します。
きょうと ちい はし わた
- 12 リーさんはいつも寮()ごはんを食べています。
しよくどう まえ しよくどう なか だれ
- 13 日本()ボーリング場があります。中国()ボーリング場はあまりありません。
にほん じょう ちゅうごく じょう
- 14 ベッド()落ちたので、体が痛いです。
だいがく なか だれ いちばんて にす じょうず
- 15 大学の中()誰が一番テニスが上手ですか。
だいがく なか だれ いちばんて にす じょうず
- 16 寮の中()みんないます。寮の外()リーさんがいます。
りょう なか りょう そと
- 17 大学の留学生の中()イさんが一番背が高いです。
だいがく りゅうがくせい なか い いちばんせ たか
- 18 家()歩いて10分かかります。
いえ ある ぶん
- 19 中国()有名なところはどこですか。
ちゅうごく ゆうめい
- 20 寮()アメリカの人がいますか。
りょう ひと
- 21 韓国()父がいます。日本()母と兄と妹がいます。
かんこく ちち にほん はは あに いもうと
- 22 日本の食べ物の中()おいしいのはラーメンです。
にほん たべもの なか
- 23 韓国()有名な人は誰ですか。
かんこく ゆうめい ひと だれ
- 24 家の中()ネコはいません。あそこ()います。
いえ なか
- 25 飛行機が空()飛んで行きました。
ひこうき そら と い
- 26 きのう、大学()電話がありました。
だいがく でんわ
- 27 私は大きな家()買いたいです。
わたし おお いえ か
- 28 だろぼうが家の2階()入りました。
いえ かい はい
- 29 きのう、みんなは日本料理を食べました。私もその中()いました。
きょうしつ だいに
- 30 教室()テレビが1台しかありません。あそこ()3台あります。
きょうしつ だいに

- 31 帰るとき、公園() 通りました。
かえ こうえん とお
- 32 あの店の中() 何がほしいですか。
みせ なか なに
- 33 寮() 5 人メキシコの人があります。
りょう にん ひと
- 34 あした朝早く、家() 出なければなりません。
あさはや いえ で
- 35 電車() 降りてから、歩いて行きました。
でんしゃ お ある い
- 36 大きな病院は東京() いくつありますか。
おお びょういん とうきょう
- 37 この家() 入口が3つありますか。
いえ いりぐち
- 38 中国の人は大学() 何人いますか。
ちゅうごく ひと だいがく なんにん
- 39 勉強しているとき、窓() 飛行機が見えました。
べんきょう まど ひこうき み
- 40 いろいろな料理がありました。その中() 中国料理もありました。
りょうり なか ちゅうごくりょうり
- 41 家() お金がありません。銀行() お金が50万円あります。
いえ おかね ぎんこう おかね まんえん
- 42 東京() どこが一番好きですか。
とうきょう いちばんず

資料C 第4章 4.2.2 調査票(JFLの中国語話者)

_____年生 日本語学習歴_____年間ぐらい 名前_____A

日本語能力試験を受けた人は教えてください _____年

日本語能力試験_____級に合格 _____点ぐらい _____年

日本語能力試験_____級を受けたが不合格 _____点ぐらい

*いちばんいいものを1つえらんで○をつけください。

しよくどう かれ
食 堂 (に、で、を、から) 彼 がいいます。

ちゅうごく
中 国 (に、で、を、から) おば(さん) はいません。

しよくどう た
食 堂 (に、で、を、から) ごはんを 食べます。

とうきょう おお びょういん
東 京 (に、で、を、から) 大きな 病 院 があります。

ちい はし わた
小さな 橋 (に、で、を、から) 渡 りました。

だいがく としょかん じてんしゃ い
大 学 (に、で、を、から) 図書館まで 自 転 車 で 行きます。

きょねん ふくおか とうきょう い
去 年、福 岡 (に、で、を、から) 東 京 へ 行きました。

しよくどう まえ しよくどう なか だれ
食 堂 の 前 (に、で、を、から) は イ さん がいいます。 食 堂 の 中 (に、で、を、から) は 誰 も いません。

ぎんこう かね まんえん
銀 行 (に、で、を、から) お金 が 100 万 円 あります。

しよくどう た
食 堂 (に、で、を、から) ごはんを 食べています。

きょうと よやく
京 都 の ホテル (に、で、を、から) 予 約 します。

りょう た
い つ も 寮 (に、で、を、から) リー さん は ごはんを 食べています。

にほん じょう ちゅうごく じょう
日 本 (に、で、を、から) ボーリング 場 が たくさん あります。 中 国 (に、で、を、から) ボーリング 場 は あまり あり
ません。

お からだ いた
ベ ッ ド (に、で、を、から) 落 ち た の で、 体 が 痛 い です。

だいがく なか だれ いちばん て に す じょうず
大 学 の 中 (に、で、を、から) 誰 が 一 番 テニス が 上 手 ですか。

りょう なか りょう そと
寮 の 中 (に、で、を、から) みんない ますが、リー さん は 寮 の 外 (に、で、を、から) います。

だいがく りゅうがくせい なか い いちばん せ たか
大 学 の 留 学 生 の 中 (に、で、を、から) イ さん が 一 番 背 が 高 い です。

いえ ある ぶん
家 (に、で、を、から) 大 学 まで 歩 いて 10 分 か かり ます。

ちゅうごく ゆうめい
中 国 (に、で、を、から) 有 名 な ところ は どこ ですか。

りょう ひと
寮 (に、で、を、から) ア メ リ カ の 人 が います ですか。

→うらへつづく A

父は韓 国 (に、で、を、から) いますが、母 と 兄 と 妹 は日本 (に、で、を、から) います。
 日本 の食べ物の中 (に、で、を、から) おいしいのはラーメンです。
 韓 国 (に、で、を、から) 有 名 な人は誰ですか。
 家の中 (に、で、を、から) ネコはいません。あそこ (に、で、を、から) います。
 飛行機が空 (に、で、を、から) 飛んでいます。
 きょう、大 学 (に、で、を、から) 電話をもらいました。
 私 は大きな家 (に、で、を、から) 買いたいです。
 どろぼうが家の2 階 (に、で、を、から) 入りました。
 きょうカラオケパーティーがありました。私 もその中 (に、で、を、から) いました。
 教 室 (に、で、を、から) テレビはありませんが、あそこ (に、で、を、から) あります。
 帰るとき、公 園 (に、で、を、から) 通りました。
 この店の中のもの (に、で、を、から) 何がほしいですか。
 寮 (に、で、を、から) 5 人メキシコの人があります。
 来年、家 (に、で、を、から) 建てます。
 空港は東 京 (に、で、を、から) いくつありますか。
 あした会 社 (に、で、を、から) 休まなければなりません。
 この家 (に、で、を、から) 入 口が3 つありますか。
 留 学 生は大連外国語大 学 (に、で、を、から) 何 人いますか。
 勉強 しているとき、窓 (に、で、を、から) 飛行機が見えました。
 いろいろな料 理がありました。その中 (に、で、を、から) 中 国 料 理もありました。
 家 (に、で、を、から) お金がありません。銀 行 (に、で、を、から) お金があります。
 東 京 (に、で、を、から) どこが一 番好きですか。

資料C 第4章 4.2.2 調査票(JFLの中国語話者)

大連外国語学院__年生 日本語学習歴__年間ぐらい 名前_____B

日本語能力試験を受けた人は教えてください__年 日本語能力試験__級に合格__点ぐらい
__年 日本語能力試験__級を受けたが不合格__点ぐらい

*いちばんいいものを1つえらんで○をつけください。

だいがく なか だれ いちばんてにす じょうず
大学の中(に、で、を、から)誰が一番テニスが上手ですか。
いえ なか
家の中(に、で、を、から)ネコはいません。あそこ(に、で、を、から)います。
いえ ある ぶん
家(に、で、を、から)大学まで歩いて10分かかります。
くうこう とうきやう
空港は東京(に、で、を、から)いくつありますか。
りやう なか りやう そと
寮の中(に、で、を、から)みんないますが、リーさんは寮の外(に、で、を、から)います。
いえ かい はい
どろぼうが家の2階(に、で、を、から)入りました。
ちゅうごく ゆうめい
中国(に、で、を、から)有名なところはどこですか。
にほん たべもの なか
日本の食べ物の中(に、で、を、から)おいしいのはラーメンです。
ひこうき そら と
飛行機が空(に、で、を、から)飛んでいます。
かんこく はは あに いもうと にほん
父は韓国(に、で、を、から)いますが、母と兄と妹は日本(に、で、を、から)います。
だいがく りゅうがくせい なか い いちばんせ たか
大学の留学生の中(に、で、を、から)イさんが一番背が高いです。
だいがく でんわ
きのう、大学(に、で、を、から)電話をもらいました。
かんこく ゆうめい ひと だれ
韓国(に、で、を、から)有名な人は誰ですか。
わたし おお いえ か
私は大きな家(に、で、を、から)買いたいです。
りやう ひと
寮(に、で、を、から)アメリカの人がいますか。
みせ なか なに
この店の中のもの(に、で、を、から)何がほしいですか。
わたし なか
きのうカラオケパーティーがありました。私もその中(に、で、を、から)いました。
かえ こうえん とお
帰るとき、公園(に、で、を、から)通りました。
りやう にん ひと
寮(に、で、を、から)5人メキシコの人があります。
きょうしつ
教室(に、で、を、から)テレビはありませんが、あそこ(に、で、を、から)あります。
らいねん いえ た
来年、家(に、で、を、から)建てます。

→うらへつづく

あした会 社 (に、で、を、から) 休まなければなりません。
 食 堂 (に、で、を、から) 彼がいます。
 東 京 (に、で、を、から) どこが一番好きですか。
 この家 (に、で、を、から) 入 口が3つありますか。
 食 堂 (に、で、を、から) ごはんを食べます。
 食 堂 の前 (に、で、を、から) はイさんがいます。食 堂 の中 (に、で、を、から) は誰もいません。
 勉 強 しているとき、窓 (に、で、を、から) 飛行機が見えました。
 大 学 (に、で、を、から) 図書館まで自転車で行きます。
 家 (に、で、を、から) お金がありません。銀 行 (に、で、を、から) お金があります。
 中 国 (に、で、を、から) おば(さん)はいません。
 食 堂 (に、で、を、から) ごはんを食べています。
 小 さいな橋 (に、で、を、から) 渡りました。
 いろいろな料 理がありました。その中 (に、で、を、から) 中 国 料 理もありました。
 いつも 寮 (に、で、を、から) リーさんはごはんを食べています。
 去 年、福 岡 (に、で、を、から) 東 京 へ行きました。
 銀 行 (に、で、を、から) お金が100万 円あります。
 京 都のホテル (に、で、を、から) 予約します。
 日本 (に、で、を、から) ボーリング 場 がたくさんあります。中 国 (に、で、を、から) ボーリング 場 はあまりありません。
 留 学 生は大連外国語大 学 (に、で、を、から) 何 人いますか。
 ベッド (に、で、を、から) 落ちたので、体 が痛いです。
 東 京 (に、で、を、から) 大きな病 院 があります。

資料C 第4章 4.2.2 調査票(JFLの中国語話者)

大連外国語学院__年生 日本語学習歴__年間ぐらい 名前_____C

日本語能力試験を受けた人は教えてください。__年 日本語能力試験__級に合格_____点ぐらい

__年 日本語能力試験_____級を受けたが不合格_____点ぐらい

*いちばんいいものを1つえらんで○をつけください。

きょうしつ

教室(に、で、を、から)テレビはありませんが、あそこ(に、で、を、から)あります。

らいねん いえ

来年、家(に、で、を、から)建てます。

しょくどう

食堂(に、で、を、から)ごはんを食べます。

りょうり

いろいろな料理(に、で、を、から)ありました。その中(に、で、を、から)中国料理もありました。

かえ こうえん

帰るとき、公園(に、で、を、から)通りました。

わたし なか

きのうカラオケパーティーがありました。私もその中(に、で、を、から)いました。

くうこう とうきょう

空港は東京(に、で、を、から)いくつありますか。

りょう

寮(に、で、を、から)5人メキシコの人があります。

だいがく

大学(に、で、を、から)図書館まで自転車で行きます。

いえ

この家(に、で、を、から)入口が3つありますか。

べんきょう

勉強しているとき、窓(に、で、を、から)飛行機が見えました。

いえ

家(に、で、を、から)お金がありません。銀行(に、で、を、から)お金があります。

とうきょう

東京(に、で、を、から)どこが一番好きですか。

しょくどう

食堂(に、で、を、から)彼(かれ)がいます。

りゅうがくせい だいいれんがいくごうだいがく

留学生は大連外国語大学(に、で、を、から)何人(なんにん)いますか。

みせ なか

この店(みせ)の中のもの(なか)の(に、で、を、から)何がほしいですか。

とうきょう

東京(に、で、を、から)大きな病院(びょういん)があります。

ちゅうごく

中国(に、で、を、から)おば(さん)はいません。

かいしゃ

あした会社(かいしゃ)(に、で、を、から)休まなければなりません。

りょう なか

寮(りょう)の(なか)中(に、で、を、から)みんないますが、リー(りょう)さんは寮(りょう)の外(そと)(に、で、を、から)います。

ちい はし

小さな橋(ちい)(に、で、を、から)渡(わた)りました。

→うらへつづく

きょねん ふくおか とうきょう い
 去 年、福 岡 (に、で、を、から) 東 京 へ行きました。
 にほん たべもの なか
 日本 の食べ物の中 (に、で、を、から) おいしいのはラーメンです。
 いえ かい はい
 どろぼうが家の2階 (に、で、を、から) 入りました。
 だいがく なか だれ いちばんて に す じょうず
 大 学の中 (に、で、を、から) 誰 が一 番テニス が上 手ですか。
 しょくどう まえ しょくどう なか だれ
 食 堂の前 (に、で、を、から) はイさんがいます。食 堂の中 (に、で、を、から) は誰もいません。
 しょくどう た
 食 堂 (に、で、を、から) ごはんを食べています。
 わたし おお いえ か
 私 は大きな家 (に、で、を、から) 買いたいです。
 きょうと よやく
 京 都のホテル (に、で、を、から) 予約します。
 りょう ひと
 寮 (に、で、を、から) アメリカの人 がいますか。
 お からだ いた
 ベッド (に、で、を、から) 落ちたので、体 が痛いんです。
 ひこうき そら と
 飛行機が空 (に、で、を、から) 飛んでいます。
 いえ ある ぶん
 家 (に、で、を、から) 大学まで歩いて 10 分かかります。
 かんこく はは あに いもうと にほん
 父は韓 国 (に、で、を、から) いますが、母と兄と 妹 は日本 (に、で、を、から) います。
 ぎんこう かね まんえん
 銀 行 (に、で、を、から) お金が 100 万 円 あります。
 かんこく ゆうめい ひと だれ
 韓 国 (に、で、を、から) 有名な人は誰ですか。
 りょう た
 いつも 寮 (に、で、を、から) リーさんはごはんを食べています。
 いえ なか
 家の中 (に、で、を、から) ネコはいません。あそこ (に、で、を、から) います。
 だいがく でんわ
 き のう、大 学 (に、で、を、から) 電話をもらいました。
 だいがく りゅうがくせい なか い いちばんせ たか
 大 学 の留 学 生 の中 (に、で、を、から) イさんが一番背が高いです。
 にほん じょう ちゅうごく じょう
 日本 (に、で、を、から) ボーリング 場 がたくさんあります。中 国 (に、で、を、から) ボーリング 場 はあまりあり
 ません。
 ちゅうごく ゆうめい
 中 国 (に、で、を、から) 有名 なところはどこですか。

資料C 第4章 4.2.2 調査票(初級レベルの英語話者)

①大学^{だいがく} 年生^{ねんせい} 名前^{なまえ} _____ ・ L1: (Circle one) English, Chamorro , other (_____)
・ Did you take the Japanese-Language Proficiency Test? Yes _____ year _____ month) , No
If yes, circle one. N 1 ・ N 2 ・ N 3 ・ N 4 ・ N 5 Score _____ points

* いちばんいいものを1つえらんで○をかくてください。

- 1 食堂^{しょくどう}(に、で、を、から)田中^{たなか}さんがいます。
- 2 田中^{たなか}さんが食堂^{しょくどう}(に、で、を、から)います。
- 3 私^{わたし}は大きな家^{おおいえ}(に、で、を、から)買^かいたいです。
- 4 きょう、大学^{だいがく}(に、で、を、から)電話^{でんわ}がありました。
- 5 中国^{ちゅうごく}(に、で、を、から)おば(さん)はいません。
- 6 飛行機^{ひこうき}が空^{そら}(に、で、を、から)飛^とんでいます。
- 7 大学^{だいがく}(に、で、を、から)図書館^{としょかん}まで自転車^{じてんしゃ}で行^いきます。
- 8 大きな病院^{びょういん}は東京^{とうきょう}(に、で、を、から)あります。
- 9 帰^{かえ}るとき、公園^{こうえん}(に、で、を、から)通^{とお}りました。
- 10 食堂^{しょくどう}(に、で、を、から)ご飯^{ごはん}を食^たべます。
- 11 リーさんはいつも寮^{りょう(dormitory)}(に、で、を、から)ご飯^{はん}を食^たべています。
- 12 教室^{きょうしつ}(に、で、を、から)テレビ^{てれび}がありませんが、あそこ(に、で、を、から)あります。
- 13 寮^{りょう(dormitory)}(に、で、を、から)リーさんはいつもご飯^{はん}を食^たべています。
- 14 東京^{とうきょう}(に、で、を、から)どこが一番^{いちばん}好き^すですか。
- 15 家^{いえ}の中^{なか}(に、で、を、から)ネコ^{ねこ}はいません。あそこ(に、で、を、から)います。
- 16 去年^{きょねん}、京都^{きょうと}(に、で、を、から)東京^{とうきょう}へ行^いきました。
- 17 韓国^{かんこく}(に、で、を、から)有名^{ゆうめい}な人^{ひと}は誰^{だれ}ですか。
- 18 家^{いえ}(に、で、を、から)お金^{かね}がありません。銀行^{ぎんこう}(に、で、を、から)お金^{かね}があります。
- 19 勉強^{べんきょう}しているとき、窓^{まど}(に、で、を、から)飛行機^{ひこうき}が見^みえました。
- 20 ベッド^{べっど}(に、で、を、から)落^おちたので、体^{からだ}が痛^{いた}いです。
- 21 この家^{いえ}(に、で、を、から)入口^{いりぐち}が三^{みつ}つありますか。
- 22 きょう、カラオケパーティー^{からおけパーティー(karaoke-party)}がありました。私^{わたし}もその中^{なか}(に、で、を、から)いました。
- 23 銀行^{ぎんこう}(に、で、を、から)お金^{かね}が100万円^{まんえん}あります。

→うらへつづく

- 24 父は韓国(に、で、を、から)いますが、母と兄と妹は日本(に、で、を、から)います。
- 25 寮(に、で、を、から)5人メキシコの人(ひと)がいます。
- 26 留学生はグアム大学(に、で、を、から)何人(なんにん)いますか。
- 27 いろいろな料理(りょうり)がありました。その中(なか)(に、で、を、から)中国料理(ちゅうごくりょうり)もありました。
- 28 京都(きょうと)のホテル(ほてる)(に、で、を、から)予約(よやく)します。
- 29 日本(にほん)(に、で、を、から)ボーリング場(bowling allys)がたくさんあります。中国(ちゅうごく)(に、で、を、から)ボーリング場(bowling allys)はあまりありません。
- 30 来年(らいねん)、家(いえ)(に、で、を、から)建て(た)ます。
- 31 大学(だいがく)の中(なか)(に、で、を、から)だれ(だれ)が一番(いちばん)テニス(てにす)が上手(じょうず)ですか。
- 32 この店(みせ)の中(なか)のもの(に、で、を、から)何(なに)がほしい(ほしい)ですか。
- 33 電車(でんしゃ)(に、で、を、から)降り(お)てから、歩(ある)いて行(い)きました。
- 34 おば(さん)は中国(ちゅうごく)(に、で、を、から)います。
- 35 東京(とうきょう)(に、で、を、から)大(おお)きな病院(びょういん)があります。
- 36 寮(りょう)の中(なか)(に、で、を、から)みんない(ない)ますが、リー(リー)さんは寮(りょう)の外(そと)(に、で、を、から)います。
- 37 小(こ)さな橋(はし)(に、で、を、から)渡(わた)りました。
- 38 家(いえ)(に、で、を、から)大(だ)学(がく)まで歩(ある)いて10分(じゅうぶん)かかります。
- 39 大(だ)学(がく)の留(りゅう)学(がく)生(せい)の中(なか)(に、で、を、から)イ(い)さん(さん)が最(いちばん)高(たか)い(高い)です。
- 40 どろぼう(どろぼう)が家(いえ)の2階(かい)(に、で、を、から)入(はい)りました。
- 41 大(おお)きな病(び)院(いん)は東(とう)京(きょう)(に、で、を、から)いくつ(いくつ)あ(あ)りますか。
- 42 食(しょく)堂(どう)の前(まえ)(に、で、を、から)はイ(い)さん(さん)がいます。食(しょく)堂(どう)の中(なか)(に、で、を、から)は誰(だれ)もいません。
- 43 中(ちゅう)国(ごく)(に、で、を、から)有(ゆう)名(めい)なところ(ところ)はど(ど)こ(どこ)ですか。
- 44 田(た)中(なか)さん(さん)は食(しょく)堂(どう)(に、で、を、から)ご飯(はん)を食(た)べ(べ)ます。
- 45 食(しょく)堂(どう)(に、で、を、から)ご飯(はん)を食(た)べ(べ)て(て)います。
- 46 佐(さ)藤(とう)さん(さん)が食(しょく)堂(どう)(に、で、を、から)ご飯(はん)を食(た)べ(べ)て(て)います。
- 47 日(に)本(ぽん)の食(た)べ(べ)物(もの)の中(なか)(に、で、を、から)お(お)い(い)し(し)い(い)のはラ(ら)ー(ー)メ(め)ン(ん)です。
- 48 寮(りょう)(に、で、を、から)ア(あ)メ(め)リ(り)カ(か)の(の)人(ひと)が(が)いますか。

ありがとうございました：①

②大学^{だいがく}____年生^{ねんせい} 名前^{なまえ}____・L1: (Circle one) English, Chamorro , other (____)
 ・Did you take the Japanese-Language Proficiency Test? Yes (____year____month), No
 If yes, circle one. N 1 ・ N 2 ・ N 3 ・ N 4 ・ N 5 Score____points

*** いちばんいいものを1つえらんで○をかくてください。**

- 1 私^{わたし}は大きな家^{いえ}(に、で、を、から)買^かいたいです。
- 2 き^きのう、大学^{だいがく}(に、で、を、から)電話^{でんわ}がありました。
- 3 中国^{ちゅうごく}(に、で、を、から)おば(さん)はいません。
- 4 教室^{きょうしつ}(に、で、を、から)テレビ^{てれび}がありませんが、あそこ(に、で、を、から)あります。
- 5 寮^{りょう(dormitory)}(に、で、を、から)リーさんはいつもご飯^{はん}を食^たべています。
- 6 飛行機^{ひこうき}が空^{そら}(に、で、を、から)飛^とんでいます。
- 7 食堂^{しょくどう}(に、で、を、から)田中^{たなか}さんがいます。
- 8 田中^{たなか}さんが食堂^{しょくどう}(に、で、を、から)います。
- 9 大学^{だいがく}(に、で、を、から)図書館^{としょかん}まで自転車^{じてんしゃ}で行^いきます。
- 10 大きな病院^{びょういん}は東京^{とうきょう}(に、で、を、から)あります。
- 11 帰^{かえ}るとき、公園^{こうえん}(に、で、を、から)通^{とお}りました。
- 12 食堂^{しょくどう}(に、で、を、から)ご飯^{はん}を食^たべます。
- 13 リーさんはいつも寮^{りょう(dormitory)}(に、で、を、から)ご飯^{はん}を食^たべています。
- 14 家^{いえ}(に、で、を、から)お金^{かね}がありません。銀行^{ぎんこう}(に、で、を、から)お金^{かね}があります。
- 15 勉強^{べんきょう}しているとき、窓^{まど}(に、で、を、から)飛行機^{ひこうき}が見^みえました。
- 16 ベッド^{べっど}(に、で、を、から)落^おちたので、体^{からだ}が痛^{いた}いです。
- 17 この家^{いえ}(に、で、を、から)入口^{いりぐち}が三^{みつ}つありますか。
- 18 き^きのう、カラオケパーティー^{karaoke-party}がありました。私^{わたし}もその中^{なか}(に、で、を、から)いました。
- 19 銀行^{ぎんこう}(に、で、を、から)お金^{かね}が 100万円^{まんえん}あります。
- 20 東京^{とうきょう}(に、で、を、から)どこが^{いちばん}好き^すですか。
- 21 家^{いえ}の中^{なか}(に、で、を、から)ネコ^{ねこ}はいません。あそこ(に、で、を、から)います。
- 22 去年^{きょねん}、京都^{きょうと}(に、で、を、から)東京^{とうきょう}へ行^いきました。
- 23 韓国^{かんこく}(に、で、を、から)有名^{ゆうめい}な人^{ひと}は誰^{だれ}ですか。

→うらへつづく

- 24 来年、家(に、で、を、から)建てます。
- 25 大学の中(に、で、を、から)だれが一番テニスが上手ですか。
- 26 この店の中のもの(に、で、を、から)何がほしいですか。
- 27 電車(に、で、を、から)降りてから、歩いて行きました。
- 28 おば(さん)は中国(に、で、を、から)います。
- 29 東京(に、で、を、から)大きな病院があります。
- 30 寮(に、で、を、から)みんないますが、リーさんは寮の外(に、で、を、から)います。
- 31 小さな橋(に、で、を、から)渡りました。
- 32 中国(に、で、を、から)有名なところはどこですか。
- 33 田中さんは食堂(に、で、を、から)ご飯を食べます。
- 34 家(に、で、を、から)大学まで歩いて10分かかります。
- 35 大学の留学生の中(に、で、を、から)イさんが一番背が高いです。
- 36 食堂(に、で、を、から)ご飯を食べています。
- 37 父は韓国(に、で、を、から)いますが、母と兄と妹は日本(に、で、を、から)います。
- 38 寮(に、で、を、から)5人メキシコの人があります。
- 39 留学生はグアム大学(に、で、を、から)何人いますか。
- 40 いろいろな料理がありました。その中(に、で、を、から)中国料理もありました。
- 41 京都のホテル(に、で、を、から)予約します。
- 42 日本(に、で、を、から)ボーリング場がたくさんあります。中国(に、で、を、から)ボーリング場はありません。
- 43 どろぼうが家の2階(に、で、を、から)入りました。
- 44 大きな病院は東京(に、で、を、から)いくつありますか。
- 45 食堂の前(に、で、を、から)はイさんがいます。食堂の中(に、で、を、から)は誰もいません。
- 46 佐藤さんが食堂(に、で、を、から)ご飯を食べています。
- 47 日本の食べ物の中(に、で、を、から)おいしいのはラーメンです。
- 48 寮(に、で、を、から)アメリカの人がありますか。

ありがとうございました：②

③大学^{だいがく} 年生^{ねんせい} 名前^{なまえ} _____ ・ L1: (Circle one) English, Chamorro , other (_____)
 ・ Did you take the Japanese-Language Proficiency Test? Yes (_____ year _____ month) , No
 If yes, circle one. N 1 ・ N 2 ・ N 3 ・ N 4 ・ N 5 Score _____ points

*** いちばんいいものを1つえらんで○をかくてください。**

- 1 大学^{だいがく}(に、で、を、から)図書館^{としよかん}まで自転車^{じてんしゃ}で行きます。
- 2 大きな病院^{びやういん}は東京^{とうきやう}(に、で、を、から)あります。
- 3 帰^{かえ}るとき、公園^{こうえん}(に、で、を、から)通^{とお}りました。
- 4 食堂^{しよくどう}(に、で、を、から)ご飯^{ごはん}を食^たべます。
- 5 リーさんはいつも寮^{りやう(dormitory)}(に、で、を、から)ご飯^{ごはん}を食^たべています。
- 6 家^{いえ}(に、で、を、から)お金^{かね}がありません。銀行^{ぎんこう}(に、で、を、から)お金^{かね}があります。
- 7 勉強^{べんきやう}しているとき、窓^{まど}(に、で、を、から)飛行機^{ひこうき}が見^みえました。
- 8 ベッド^{べっど}(に、で、を、から)落^おちたので、体^{からだ}が痛^{いた}いです。
- 9 この家^{いえ}(に、で、を、から)入口^{いりぐち}が三^{みつ}つありますか。
- 10 き^きのう、カラオケパーティー^{からおけぱーてぃー(karaoke-party)}がありました。私^{わたし}もその中^{なか}(に、で、を、から)いました。
- 11 銀行^{ぎんこう}(に、で、を、から)お金^{かね}が100万円^{まんえん}あります。
- 12 東京^{とうきやう}(に、で、を、から)どこが一番^{いちばん}好き^すですか。
- 13 私^{わたし}は大きな家^{おお いえ}(に、で、を、から)買^かいたいです。
- 14 き^きのう、大学^{だいがく}(に、で、を、から)電話^{でんわ}がありました。
- 15 中国^{ちゆうごく}(に、で、を、から)おば(さん)はいません。
- 16 教室^{きやうしつ}(に、で、を、から)テレビ^{て れ び}がありませんが、あそこ(に、で、を、から)あります。
- 17 寮^{りやう(dormitory)}(に、で、を、から)リーさんはいつもご飯^{ごはん}を食^たべています。
- 18 飛行機^{ひこうき}が空^{そら}(に、で、を、から)飛^とんでいます。
- 19 食堂^{しよくどう}(に、で、を、から)田中^{たなか}さんがいます。
- 20 田中^{たなか}さんが食堂^{しよくどう}(に、で、を、から)います。
- 21 家^{いえ}の中^{なか}(に、で、を、から)ネコ^{ねこ}はいません。あそこ(に、で、を、から)います。
- 22 去年^{きょねん}、京都^{きやうと}(に、で、を、から)東京^{とうきやう}へ行^いきました。
- 23 韓国^{かんこく}(に、で、を、から)有名^{ゆうめい}な人^{ひと}は誰^{だれ}ですか。

→うらへつづく

- 24 ^{りょう(dormitory) なか}寮の中(に、で、を、から)みんないますが、リーさんは^{りょう(dormitory) そと}寮の外(に、で、を、から)います。
- 25 ^{ちいさなはし}小さな橋(に、で、を、から)^{わた}渡りました。
- 26 ^{ちゅうごく}中国(に、で、を、から)有名なところはどこですか。
- 27 ^{たなか}田中さんは^{しょくどう}食堂(に、で、を、から)ご飯を^{はん た}食べます。
- 28 ^{いえ}家(に、で、を、から)^{だいがく ある}大学まで歩いて10分^{ぶん}かかります。
- 29 ^{だいがく りゅうがくせい なか}大学の留学生の中(に、で、を、から)イさんが一番^{いちばん}背が^{せ たか}高いです。
- 30 ^{しょくどう}食堂(に、で、を、から)ご飯を^{はん た}食べています。
- 31 ^{ちち かんこく}父は韓国(に、で、を、から)いますが、母と兄と妹は^{はは あに いもうと にほん}日本(に、で、を、から)います。
- 32 ^{りょう(dormitory)}寮(に、で、を、から)5人^{ごにん}メキシコ^{めキシコ}の人がいます。
- 33 ^{らいねん いえ}来年、家(に、で、を、から)^た建てます。
- 34 ^{だいがく なか}大学の中(に、で、を、から)だれが^{いちばん}テニス^{て に す}が上手^{じょうず}ですか。
- 35 ^(もろぼう)どろぼうが^{いえ}家の2階^{かい}(に、で、を、から)^{はい}入りました。
- 36 ^{おお びょういん とうきやう}大きな病院は東京(に、で、を、から)いくつありますか。
- 37 ^{しょくどう まえ}食堂の前(に、で、を、から)はイさんがいます。^{しょくどう なか}食堂の中(に、で、を、から)は^{だれ}誰もいません。
- 38 ^{きとう}佐藤さんが^{しょくどう}食堂(に、で、を、から)ご飯^{はん た}を食べています。
- 39 ^{にほん たべもの なか}日本の食べ物の中(に、で、を、から)おいしいのは^{らーめん}ラーメンです。
- 40 ^{みせ なか}この店の中のもの(に、で、を、から)^{なに}何がほしいですか。
- 41 ^{でんしや}電車(に、で、を、から)^お降りてから、^{ある}歩いて行きました。
- 42 ^{おば(さん)}おば(さん)は^{ちゅうごく}中国(に、で、を、から)います。
- 43 ^{とうきやう}東京(に、で、を、から)^{おお びょういん}大きな病院があります。
- 44 ^{りゅうがくせい ぐ. あ む だいがく}留学生はグアム大学(に、で、を、から)^{なんにん}何人いますか。
- 45 ^{りょうり}いろいろな料理がありました。その中(に、で、を、から)^{ちゅうごく りょうり}中国料理もありました。
- 46 ^{きやうと ほてる}京都のホテル(に、で、を、から)^{とや}予約します。
- 47 ^{にほん}日本(に、で、を、から)^{ぼーりんぐじやう(bowling allys)}ボーリング場がたくさんあります。^{ちゅうごく}中国(に、で、を、から)^{ぼーりんぐじやう(bowling allys)}ボーリング場はあまりありません。
- 48 ^{りょう(dormitory)}寮(に、で、を、から)^{あめりか}アメリカ^{ひと}の人がいますか。

ありがとうございました：③

資料D 第4章 4.3.2 調査票(韓国語話者)

^{だいがく}大学^{ねんせい}年生^{ねんかん}年間ぐらい日本語を^{にほんご}勉強した。^{なまえ}名前
^{にほんごのうりよくしけん}日本語能力試験を受けた人は教えてください。^{うけ た ひと}____年^{ねん}に^{きゅう}級^うを受けた。点数は^{てんすう}____点^{てん}ぐらいだった

*いちばんいいとおもうものを(に、で、を、から)から1つえらんで○をつけください。

- 1 ^{しょくどう}食堂(に、で、を、から)^{やまだ}山田さんがいます。
- 2 ^{ふじさん}富士山は日本(に、で、を、から)あります。
- 3 ^{ちゅうごく}中国(に、で、を、から)おば(さん)はいません。
- 4 ^{しょくどう}食堂(に、で、を、から)^たごはんを食べます。
- 5 ^{とうきょう}東京(に、で、を、から)大きな病院^{おお びょういん}があります。
- 6 ^{ちい はし}小さな橋(に、で、を、から)^{わた}渡りました。
- 7 ^{だいがく}大学(に、で、を、から)^{としょかん}図書館まで自転車^{じてんしゃ}で行きます。
- 8 ^{わたし としょかん}私は図書館(に、で、を、から)^{べんきょう}勉強します。
- 9 ^{きょねん ふくおか}去年、福岡(に、で、を、から)^{とうきょう}東京へ行きました。
- 10 ^{やまだ}山田さんは大学(に、で、を、から)^{だいがく}います。
- 11 ^{しょくどう まえ}食堂の前(に、で、を、から)^りは李さんがいます。食堂の中(に、で、を、から)^{しょくどう なか}は誰も^{だれ}いません。
- 12 ^{ぎんこう}銀行(に、で、を、から)^{かね まんえん}お金が100万円あります。
- 13 ^{しょくどう}食堂(に、で、を、から)^たごはんを食べています。
- 14 ^{はは あめりか}母はアメリカ(に、で、を、から)います。
- 15 ^{きょうと ほてる}京都のホテル(に、で、を、から)^{よやく}予約します。
- 16 ^{やまだ}山田さんはいつも寮(に、で、を、から)^{りょう}ごはんを食べています。
- 17 ^{とうきょう}東京(に、で、を、から)^{だいがくびょういん}大学病院がたくさんあります。京都(に、で、を、から)^{きょうと}大学病院はあまりあり^{だいがくびょういん}ません。
- 18 ^{べっど}ベッド(に、で、を、から)^{お からだ}落ちたので、体^{いた}が痛いです。
- 19 ^{だいがく なか}大学の中(に、で、を、から)^{だれ}誰が^{いちばんにほんご}一番日本語が^{じょうず}上手ですか。
- 20 ^{りょう なか}寮の中(に、で、を、から)^りみんないますが、李さんは寮の外(に、で、を、から)^{りょう そと}います。
- 21 ^{りゅうがくせい なか}留学生の中(に、で、を、から)^り李さんが一番^{いちばんせ たか}背が高いです。
- 22 ^{いえ}家(に、で、を、から)^{だいがく}大学まで歩いて^{ある}10分^{ぶん}かかります。
- 23 ^{ちゅうごく}中国(に、で、を、から)^{ゆうめい}有名なところはどこですか。

→うらへつづく

- 24 寮 (に、で、を、から)アメリカの人がいますか。
りょう あめりか ひと
- 25 山田さんは今、寮 (に、で、を、から)遊んでいます。
やまだ いま りょう あそ
- 26 父は韓国 (に、で、を、から)いますが、母と兄と妹 は日本 (に、で、を、から)います。
ちち かんこく はは あに いもうと にほん
- 27 日本の食べ物の中 (に、で、を、から)すしが好きです。
にほん たべもの なか す
- 28 韓国 (に、で、を、から)有名な人は誰ですか。
かんこく ゆうめい ひと だれ
- 29 家の中 (に、で、を、から)ネコはいません。あそこ (に、で、を、から)います。
いえ なか ねこ
- 30 飛行機が空 (に、で、を、から)飛んでいます。
ひこうき そら と
- 31 きのう、大学 (に、で、を、から)電話をもらいました。
だいがく でんわ
- 32 山田さんは今、大学 (に、で、を、から)働いています。
やまだ いま だいがく はたら
- 33 私は大きな家 (に、で、を、から)買いたいです。
わたし おお いえ か
- 34 だれかが2階の窓 (に、で、を、から)入りました。
かい まど はい
- 35 きのうパーティーありました。私もその中 (に、で、を、から)いました。
ぱーてぃー わたし なか
- 36 教室 (に、で、を、から)はテレビがありませんが、あそこ (に、で、を、から)あります。
きょうしつ てれび
- 37 帰るとき、公園 (に、で、を、から)通りました。
かえ こうえん とお
- 38 この店の中のもの (に、で、を、から)何がほしいですか。
みせ なか なに
- 39 寮 (に、で、を、から)5人メキシコの人があります。
りょう にんめきしこ ひと
- 40 来年、家 (に、で、を、から)建てます。
らいねん いえ た
- 41 大学病院は東京 (に、で、を、から)いくつありますか。
だいがくびょういん とうきょう
- 42 あした会社 (に、で、を、から)休まなければなりません。
かいしゃ やす
- 43 この家 (に、で、を、から)入口が3つありますか。
いえ いりぐち
- 44 留学生はあなたの大学 (に、で、を、から)何人いますか。
りゅうがくせい だいがく なんにん
- 45 勉強しているとき、窓 (に、で、を、から)飛行機が見えました。
べんきょう まど ひこうき み
- 46 いろいろな料理がありました。その中 (に、で、を、から)中国料理もありました。
りょうり なか ちゅうごくりょうり
- 47 家 (に、で、を、から)お金がありません。銀行 (に、で、を、から)お金があります。
いえ かね ぎんこう かね
- 48 東京 (に、で、を、から)どこが一番好きですか。
とうきょう いちばんず

資料D 第4章 4.3.2 調査票(韓国語話者)

^{だいがく}大学^{ねんせい}年生^{ねんかん}年間ぐらい日本語を勉強した。名前^{なまえ}
^{にほんごのうりよくしけん}日本語能力試験を受けた人は教えてください。^う年に^{おし}級を受けた。点数は^{ねん きゅう う てんすう}点ぐらいだった

*いちばんいいとおもうものを(に、で、を、から)から1つえらんで○をつけください。

- 1 ^{はは あめりか}母はアメリカ(に、で、を、から)います。
- 2 ^{きょうと ほてる}京都のホテル(に、で、を、から)予約します
- 3 ^{やまだ りょう}山田さんはいつも寮(に、で、を、から)ごはんを食べています。
- 4 ^{とうきょう}東京(に、で、を、から)大学病院^{だいがくびやういん}がたくさんあります。京都(に、で、を、から)はあまりありません。
- 5 ^{べっど}ベッド(に、で、を、から)落ちたので、体^{からだ}が痛^{いた}いです。
- 6 ^{だいがく なか}大学の中(に、で、を、から)誰^{だれ}が一番日本語が上^{じょうず}手ですか。
- 7 ^{りょう なか}寮の中(に、で、を、から)みんないますが、李^りさんは寮の外^{りょう そと}(に、で、を、から)います。
- 8 ^{りゅうがくせい なか}留学生の中(に、で、を、から)李^りさんが一番背^いが高いです。
- 9 ^{いえ}家(に、で、を、から)大学まで歩いて10分^{だいがく ある ぶん}かかります。
- 10 ^{しょくどう やまだ}食堂(に、で、を、から)山田さんがいます。
- 11 ^{ふじさん にほん}富士山は日本(に、で、を、から)あります。
- 12 ^{ちゅうごく}中国(に、で、を、から)おば(さん)はいません。
- 13 ^{しょくどう}食堂(に、で、を、から)ごはんを食^たべます。
- 14 ^{とうきょう}東京(に、で、を、から)大きな病^{おお}院^{びやういん}があります。
- 15 ^{ちい はし わた}小さな橋(に、で、を、から)渡^{わた}りました。
- 16 ^{だいがく}大学(に、で、を、から)図書館^{としょかん}まで自^{じてんしゃ}転^い車でいきます。
- 17 ^{わたし としょかん}私は図書館(に、で、を、から)勉^{べんきょう}強^うします。
- 18 ^{きよねん ふくおか}去年、福岡(に、で、を、から)東^{とうきょう}京^いへ行きました。
- 19 ^{やまだ}山田さんは大学(に、で、を、から)います。
- 20 ^{しょくどう まえ}食堂の前(に、で、を、から)は李^りさんがいます。食^{しょくどう}堂^{なか}の中(に、で、を、から)は誰^{だれ}もいません。
- 21 ^{ぎんこう}銀行(に、で、を、から)お金^{かね}が100万^{まんえん}円あります。
- 22 ^{しょくどう}食堂(に、で、を、から)ごはんを食^たべています。
- 23 ^{ちゅうごく}中国(に、で、を、から)有^{ゆうめい}名^いなところはどこですか。

→うらへつづく

- 24 帰るとき、公園(に、で、を、から)通りました。
かえ こうえん とお
- 25 この店の中のもの(に、で、を、から)何がほしいですか。
みせ なか なに
- 26 寮(に、で、を、から)5人メキシコの人があります。
りょう にんめきしこ ひと
- 27 来年、家(に、で、を、から)建てます。
らいねん いえ た
- 28 大学病院は東京(に、で、を、から)いくつありますか。
だいがくびょういん とうきょう
- 29 あした会社(に、で、を、から)休まなければなりません。
かいしゃ やす
- 30 この家(に、で、を、から)入口が3つありますか。
いえ いりぐち
- 31 留学生はあなたの大学(に、で、を、から)何人いますか。
りゅうがくせい だいがく なんにん
- 32 勉強しているとき、窓(に、で、を、から)飛行機が見えました。
べんきょう まど ひこうき み
- 33 いろいろな料理がありました。その中(に、で、を、から)中国料理もありました。
りょうり なか ちゅうごくりょうり
- 34 家(に、で、を、から)お金がありません。銀行(に、で、を、から)お金があります。
いえ かね ぎんこう かね
- 35 東京(に、で、を、から)どこが一番好きですか。
とうきょう いちばんず
- 36 寮(に、で、を、から)アメリカの人がありますか。
りょう あめりか ひと
- 37 山田さんは今、寮(に、で、を、から)遊んでいます。
やまだ いま りょう あそ
- 38 父は韓国(に、で、を、から)いますが、母と兄と妹は日本(に、で、を、から)います。
ちち かんこく はは あに いもうと にほん
- 39 日本の食べ物の中(に、で、を、から)すしが好きです。
にほん たべもの なか す
- 40 韓国(に、で、を、から)有名な人は誰ですか。
かんこく ゆうめい ひと だれ
- 41 家の中(に、で、を、から)ネコはいません。あそこ(に、で、を、から)います。
いえ なか ねこ
- 42 飛行機が空(に、で、を、から)飛んでいます。
ひこうき そら と
- 43 きょう、大学(に、で、を、から)電話をもらいました。
だいがく でんわ
- 44 山田さんは今、大学(に、で、を、から)働いています。
やまだ いま だいがく はたら
- 45 私は大きな家(に、で、を、から)買いたいです。
わたし おお いえ か
- 46 だれかが2階の窓(に、で、を、から)入りました。
かい まど はい
- 47 きょうパーティーありました。私もその中(に、で、を、から)いました。
パーティー わたし なか
- 48 教室(に、で、を、から)はテレビがありませんが、あそこ(に、で、を、から)あります。
きょうしつ てれび

資料D 第4章 4.3.2 調査票(韓国語話者)

^{だいがく}大学^{ねんせい}年生^{ねんかん}年間^{にほんご}ぐらい日本語を^{べんきょう}勉強した。名前^{なまえ}
^{にほんごのうりよくしけん}日本語能力試験を受けた人は教えてください。^{ねん}年に^{きゅうう}級を受けた。点数は^{てんすう}点^{てん}ぐらいだった

*いちばんいいとおもうものを(に、で、を、から)から1つえらんで○をつけください。

- 1 ^{わたし}私^{としょかん}は図書館(に、で、を、から)^{べんきょう}勉強します。
- 2 ^{きょねん}去年、^{ふくおか}福岡(に、で、を、から)^{とうきょう}東京へ行きました。
- 3 ^{やまだ}山田さんは^{だいがく}大学(に、で、を、から)います。
- 4 ^{しょくどう}食堂の前(に、で、を、から)は^り李さんがいます。^{しょくどう}食堂の中(に、で、を、から)は^{だれ}誰もいません。
- 5 ^{ぎんこう}銀行(に、で、を、から)お金が100万円あります。
- 6 ^{しょくどう}食堂(に、で、を、から)ごはんを食べています。
- 7 ^{はは}母は^{あめりか}アメリカ(に、で、を、から)います。
- 8 ^{きょうと}京都のホテル(に、で、を、から)^{よやく}予約します
- 9 ^{しょくどう}食堂(に、で、を、から)^{かれ}彼がいます。
- 10 ^{ふじさん}富士山は^{にほん}日本(に、で、を、から)あります。
- 11 ^{ちゅうごく}中国(に、で、を、から)おば(さん)はいません。
- 12 ^{しょくどう}食堂(に、で、を、から)ごはんを食べます。
- 13 ^{とうきょう}東京(に、で、を、から)大きな病院があります。
- 14 ^{ちい}小さな橋(に、で、を、から)^{わた}渡りました。
- 15 ^{だいがく}大学(に、で、を、から)図書館まで自転車で行きます。
- 16 ^{やまだ}山田さんはいつも^{りょう}寮(に、で、を、から)ごはんを食べています。
- 17 ^{とうきょう}東京(に、で、を、から)大学病院がたくさんあります。^{きょうと}京都(に、で、を、から)はあまりありません。
- 18 ^{べっど}ベッド(に、で、を、から)^お落ちたので、^{からだ}体が痛いです。
- 19 ^{だいがく}大学の中(に、で、を、から)^{なか}誰が^{だれ}一番^{いちばん}日本語が^{ほんご}上手^{じょうず}ですか。
- 20 ^{りょう}寮の中(に、で、を、から)^{なか}みんないますが、^り李さんは^{りょう}寮の外(に、で、を、から)^{そと}います。
- 21 ^{りゅうがくせい}留学生の中(に、で、を、から)^{なか}李さんが一番^{いちばん}背^せが高い^{たか}です。
- 22 ^{いえ}家(に、で、を、から)大学まで歩いて10分かかります。
- 23 ^{ちゅうごく}中国(に、で、を、から)^{ゆうめい}有名なところはどこですか。

→うらへつづく

- 24 やまだ いま だいがく はたら 山田さんは今、大学(に、で、を、から)働いています。
- 25 わたし おお いえ か 私 は大きな家(に、で、を、から)買いたいです。
- 26 だれかが 2 階の窓(に、で、を、から)入りました。
- 27 き の う パーティー ありました。私 も その 中(に、で、を、から)いました。
- 28 きょうしつ てれび 教室(に、で、を、から)はテレビがありませんが、あそこ(に、で、を、から)あります。
- 29 かえ こうえん とお 帰るとき、公園(に、で、を、から)通りました。
- 30 みせ なか なに この店の中のもの(に、で、を、から)何がほしいですか。
- 31 りょう にんめきしこひと 寮(に、で、を、から)5人メキシコの人があります。
- 32 らいねん いえ た 来年、家(に、で、を、から)建てます。
- 33 だいがくびやういん どうきやう 大学病院は東京(に、で、を、から)いくつありますか。
- 34 りょう あめりかひと 寮(に、で、を、から)アメリカの人がありますか。
- 35 やまだ いま りょう あそ 山田さんは今、寮(に、で、を、から)遊んでいます。
- 36 ちち かんこく はは あに いもうと にほん 父は韓国(に、で、を、から)いますが、母と兄と妹は日本(に、で、を、から)います。
- 37 にほん たべもの なか す 日本の食べ物の中(に、で、を、から)すしが好きです。
- 38 かんこく ゆうめいひとだれ 韓国(に、で、を、から)有名な人は誰ですか。
- 39 いえ なか ねこ 家の中(に、で、を、から)ネコはいません。あそこ(に、で、を、から)います。
- 40 ひこうき そら と 飛行機が空(に、で、を、から)飛んでいます。
- 41 き の う、だいがく でんわ きのう、大学(に、で、を、から)電話をもらいました。
- 42 かいしゃ やす あした会社(に、で、を、から)休まなければなりません。
- 43 いえ いりぐち この家(に、で、を、から)入口が3つありますか。
- 44 りゅうがくせい だいがく なんにん 留学生はあなたの大学(に、で、を、から)何人いますか。
- 45 べんきやう まど ひこうき み 勉強しているとき、窓(に、で、を、から)飛行機が見えました。
- 46 りょうり なか ちゅうごくりょうり いろいろな料理がありました。その中(に、で、を、から)中国料理もありました。
- 47 いえ かね ぎんこう かね 家(に、で、を、から)お金がありません。銀行(に、で、を、から)お金があります。
- 48 どうきやう いちばんず 東京(に、で、を、から)どこが一番好きですか。

資料E 第4章 4.3.2 調査票についての注意(韓国語話者用)

日本語を勉強しているみなさんへ

岡田 美穂(おかだ みほ)

- ① この調査はテストではありません。みなさんが使う助詞を知りたいので、教えてください。
- ② この調査は成績には影響しません。
- ③ 調査票は、A4用紙に1枚で、裏もあります。
- ④ 10分ほどで回答できますが、時間制限はありません。
- ⑤ 辞書を使ったり、人に答えを聞いたりしないで、教えてください。
- ⑥ この調査で得た個人的な情報はどこにも漏らしません。学術調査のために使います。
- ⑦ 必ず、全部記入してください。
- ⑧ この調査に基づく私の研究内容を知りたい方は以下のメールアドレスにご連絡ください。

OKADA MIHO
(Kyushu University, Japan)
okada050914@hi.enjoy.ne.jp

資料E 第4章 4.3.2 調査票についての注意(韓国語話者用)

일본어를 공부하고 계신 여러분께

- ① 이 조사는 시험이 아닙니다. 여러분께서 사용하고 계신 조사를 알고자 하는 것입니다.
- ② 이 조사는 성적에는 영향을 미치지 않습니다.
- ③ 조사표는 A4 용지 1 장이며, 뒷 면도 있습니다.
- ④ 예상 소요시간은 10 분 정도입니다만, 시간 제한은 없습니다.
- ⑤ 사전을 사용하거나, 다른 사람에게 답을 묻지 마시고 응답하여 주십시오.
- ⑥ 이 조사를 통해 얻은 개인적인 정보는 어디에도 누설하지 않고, 학술조사를 위해서만 사용합니다.
- ⑦ 반드시 전부 기입하여 주십시오.
- ⑧ 이 조사에 따른 저의 연구내용을 알고자 하시는 분께서는 아래의 메일 주소로 연락 주시기 바랍니다.

OKADA MIHO
(Kyushu University, Japan)
okada050914@hi.enjoy.ne.jp

資料F 第5章 予備調査(1)(「去」か「在」翻訳の調査)

自分の国のことばに翻訳してみよう。(例: 私は大学へ行った。→I went to the university.)

1. 学生は体育館に集まった。→
2. そのニュースは全国に広がった。→
3. ゴミ置き場にテレビを捨てた。→
4. 雨水が川に集まった。→
5. 水面に波紋が広がった。→
6. 食堂に花が飾ってある。→
7. 田中さんは家で勉強している。→
8. 店で帽子をかぶる。→

9. 食堂^{しょくどう}で田中^{たなか}さんを探^{さが}した。→
10. あのレストラン^{れすとらん}で食べよう。→
11. 遠く^{とおく}で食事^{しょくじ}する。→
12. 李^りさんは部屋^{へや}でレポート^{れぽーと}を書いている。→

資料F 第5章 予備調査(2-1) (文脈があるもの)

した下のBは留学生^{りゅうがくせい}です。どうして、Bは、「に」を使^{つか}ったんでしょうか？それは、どんな意味^{いみ}の「に」でしょうか？私^{わたし}は、留学生^{りゅうがくせい}の気持ち^{きもち}が分かりませんから、教^{おし}えてください。①、②のどちらか1つに○を書^かいてください。①、②ではない場合^{ばあい}は、③に書^かいてください。

- ①「～に行く(行^いって)」の「に」の意味^{いみ}
②「～にいる(い^いて)」の「に」の意味^{いみ}
③その他^た(例^{れい}：○○○○の「に」の意味^{いみ})

(1)

A: 一緒に勉強しませんか。

B: うん。じゃあ、寮に勉強しましょう。

①()・②()・③その他_____

(3)

A: 来年、卒業ですね。

B: あ、私は来年、大学院に勉強するんです。

①()・②()・③その他_____

(5)

A: 授業ぜんぶ終わったね。買い物、行かない?

B: ごめん。今から部屋にビデオを見るんです。

①()・②()・③その他_____

(7)

A: 来年、働きますか。

B: ええ。来年、車の会社に働きます。

①()・②()・③その他_____

(9)

A: おなかですきましたね。

B: うん。じゃあ、食堂に食事しよう。

①()・②()・③その他_____

(11)

A: 一緒に帰らない?

B: ごめん。今から、pc室にレポートを書くんだ。

①()・②()・③その他_____

(2)

A: ねえ。Cさんは?

B: ああ、Cさんは今、寮に勉強してるよ。

①()・②()・③その他_____

(4)

A: 日本語、上手ですね。

B: 2年間、大学に勉強したんです。

①()・②()・③その他_____

(6)

A: 日曜日、どこか行った?

B: ううん。部屋に宿題をしたよ。

①()・②()・③その他_____

(8)

A: 働いたことがありますか。

B: 3年間、車の会社に働きました。

①()・②()・③その他_____

(10)

A: キムさんは?

B: 今、食堂に食事してるよ。

①()・②()・③その他_____

(12)

A: レポート、ワープロで書いた?

B: うん。学校のpc室に書いたよ。

①()・②()・③その他_____

資料F 第5章 予備調査(2-2)(文脈がないもの)

a: 名前_____大学入学前の日本語学習機関_____日本語学習年数_____

b: 日本語能力試験N1合格した・N1は1~10点不足・N1は11~20点不足・N1合格を目指している
日本語能力試験N2合格した・N2は1~10点不足・N2は11~20点不足・N2合格を目指している

・留学生は(1)~(10)の「に」を使うことがあります。(1)~(10)の「に」を使うとき、留学生は、①移動する場所として使っているのでしょうか、②存在する場所として使っているのでしょうか。教えてください。①か②に○を書いてください。①と②のどちらでもな

い場合は③に書いてください。

(1) 「来年、大学に勉強する」

- ① 移動する場所
- ② 存在する場所
- ③ その他()

(2) 「今、大学に勉強している」

- ① 移動する場所
- ② 存在する場所
- ③ その他()

(3) 「あの食堂にご飯を食べる」

- ① 移動する場所
- ② 存在する場所
- ③ その他()

(4) 「食堂にご飯を食べている」

- ① 移動する場所
- ② 存在する場所
- ③ その他()

(5) 「あの教室に読書する」

- ① 移動する場所
- ② 存在する場所
- ③ その他()

(6) 「教室に読書している」

- ① 移動する場所
- ② 存在する場所
- ③ その他()

(7) 「来年、事務所に働く」

- ① 移動する場所
- ② 存在する場所
- ③ その他()

(8) 「今、事務所に働いている」

- ① 移動する場所
- ② 存在する場所
- ③ その他()

(9) 「来年、銀行にお金を換える」

- ① 移動する場所

(10) 「今、銀行にお金を換えている」

- ① 移動する場所

② ^{そんざい} 存在する場所

③ その他()

② ^{そんざい} 存在する場所

③ その他()

資料F 第5章 予備調査(3) (「この食堂()ご飯を食べよう」)

母語 _____ 名前 _____

・「N1」か「N2」、「合格」か「不合格」を○で囲ってください。おおよその点数を教えてください。受けたことがない人は「受けたことがない」を○で囲ってください。

日本語能力試験の N1・N2 合格・不合格。()点ぐらいだった。受けたことがない。

・()に最も^{もつとも}適切な^{じょし}助詞^{かい}を書いてください。そして自分の国のことばに^{ほんやく}翻訳してください。

1)あの喫茶店(^{きっさてん})コーヒーを飲みましょう。→

- 2)きのう喫茶店()コーヒーを飲みました。→
- 3)来年、アメリカ()勉強します。→
- 4)3年間、アメリカ()勉強した。→
- 5)食堂()田中さんを探しました。→
- 6)来年もこの大学()勉強する。→
- 7)この食堂()ご飯を食べましょう。→
- 8)部屋()テレビを置いた。それで、部屋が狭くなった。→
- 9)地震があったので、みんな体育館()集まった。→
- 10)コーヒーをあの喫茶店()飲んだ。→

資料G 第5章 本調査の調査票(移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」)

学籍番号

名前

・いちばん良いと思うものに1つ○をつけてください。50問あります

- 1、(あなたは今、九産大の教室です)東京(に、で、を、から)行く
- 2、運動場(に、で、を、から)走る
- 3、来年、事務所(に、で、を、から)仕事をする
- 4、山田さん(に、で、を、から)本をあげる
- 5、(あなたは今、九産大の教室です)中国(に、で、を、から)手紙を送る

- 6、あのレストラン(に、で、を、から)食事する
- 7、海の向こう(に、で、を、から)来た
- 8、橋(に、で、を、から)渡る
- 9、弟(に、で、を、から)時計をやる
- 10、山田さん(に、で、を、から)話を聞く
- 11、電車(に、で、を、から)降りる
- 12、来年、事務所(に、で、を、から)働く
- 13、公園(に、で、を、から)散歩する
- 14、会社(に、で、を、から)辞める
- 15、田中さん(に、で、を、から)お土産をあげる
- 16、大学(に、で、を、から)作る
- 17、駅前(に、で、を、から)通る
- 18、あの教室(に、で、を、から)本を読む
- 19、引出し(に、で、を、から)ボールペンを出す
- 20、妹(に、で、を、から)辞書をやる
- 21、あの教室(に、で、を、から)読書する
- 22、来年、大学(に、で、を、から)日本語を学ぶ
- 23、(あなたは今、九産大の教室です)食堂(に、で、を、から)荷物を運ぶ
- 24、中国(に、で、を、から)来た
- 25、来年、大学(に、で、を、から)勉強する
- 26、家(に、で、を、から)ここまで30分かかる
- 27、あのレストラン(に、で、を、から)ご飯を食べる
- 28、家(に、で、を、から)建てる
- 29、空(に、で、を、から)飛ぶ
- 30、彼女(に、で、を、から)中国語を教える

うら
裏へ→

- 31、兄(に、で、を、から)カバンを買ってもらう
- 32、アメリカ(に、で、を、から)手紙が来る
- 33、あの部屋(に、で、を、から)服を洗う
- 34、(あなたは今、九産大の教室です)京都(に、で、を、から)泊まる
- 35、李さん(に、で、を、から)日本語を教える
- 36、王さん(に、で、を、から)中国語を習う
- 37、(あなたは今、九産大の教室です)中国(に、で、を、から)帰る
- 38、山口さん(に、で、を、から)教えてもらう
- 39、公園(に、で、を、から)ゲームをして遊ぶ
- 40、あの部屋(に、で、を、から)洗濯する

- 41、田中さん(に、で、を、から)本^{ほん}をもらう
- 42、駅^{えき}(に、で、を、から)ここまで歩^{ある}く
- 43、(あなたは今、九産大^{きゅうさんだい}の教室^{きょうしつ}です)体育館^{たいいくかん}(に、で、を、から)集^{あつ}まる
- 44、階段^{かいだん}(に、で、を、から)下^おりる
- 45、来年^{らいねん}、銀行^{ぎんこう}(に、で、を、から)換^{かん}金^{きん}する
- 46、道^{みち}(に、で、を、から)歩^{ある}く
- 47、京都^{きょうと}(に、で、を、から)案内^{あんない}する
- 48、来年^{らいねん}、銀行^{ぎんこう}(に、で、を、から)お金^{おかね}を換^かえる
- 49、中国^{ちゅうごく}(に、で、を、から)荷物^{にもつ}が来^くる
- 50、公園^{こうえん}(に、で、を、から)遊^{あそ}ぶ

資料G 第5章 本調査の調査票(移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」)

学籍番号

名前

・いちばん良^よいと思^{おも}うものに1つ○をつけてください。48問あります

- 1、タクシ-^{たくしー}(に、で、を、から)呼^よぶ
- 2、どこが韓^{かん}国^{こく}(に、で、を、から)おもしろい?
- 3、ロボッ^{ろぼっ}ト^と(に、で、を、から)見^{けん}学^{がく}する
- 4、部^へ屋^や(に、で、を、から)星^{ほし}が見^みえる
- 5、机^{つくえ}(に、で、を、から)荷物^{にもつ}が置^おいてある

- 6、この店^{みせ}じゃないよ。隣^{となり}の店^{みせ}(に、で、を、から)何^{なに}が食^たべたい？
- 7、冷^{れい}凍^{とう}庫^こ(に、で、を、から)アイスクリー^{あいうすくりーむ}ムが入^いれてある
- 8、木^き(に、で、を、から)落^おちる
- 9、田中^{たなか}さん(に、で、を、から)探^{さが}す
- 10、2階^{かい}(に、で、を、から)飛^とび降^おりる
- 11、韓^{かん}国^{こく}じゃないよ。日^に本^{ほん}(に、で、を、から)ど^どこが有^{ゆう}名^{めい}な観^{かん}光^{こう}地^ち？
- 12、本^{ほん}を教^{きょう}室^{しつ}(に、で、を、から)読^よむ
- 13、わから^きないことば(に、で、を、から)聞^きく
- 14、食^{しょく}堂^{どう}(に、で、を、から)花^{はな}が飾^{かざ}ってある
- 15、ご飯^{ごはん}を食^{しょく}堂^{どう}(に、で、を、から)食^たべる
- 16、会^{かい}社^{しゃ}(に、で、を、から)おじ(さん)が^がいる
- 17、服^{ふく}を部^へ屋^や(に、で、を、から)洗^{あら}う
- 18、駅^{えき}(に、で、を、から)自^{じてん}転^{しや}車^おが置^おいてある
- 19、本^{ほん}(に、で、を、から)返^{かえ}す
- 20、寮^{りょう}(に、で、を、から)留^{りゅう}学^{がく}生^{せい}が^がいる
- 21、ど^どの店^{みせ}が駅^{えき}の中^{なか}(に、で、を、から)い^いい？
- 22、ど^どこが日^に本^{ほん}(に、で、を、から)有^{ゆう}名^{めい}な観^{かん}光^{こう}地^ち？
- 23、図^と書^{しょ}館^{かん}(に、で、を、から)山^や田^{まだ}先^{せん}生^{せい}が^がいる
- 24、3階^{かい}の窓^{まど}(に、で、を、から)入^{はい}る
- 25、仕^し事^{ごと}を事^じ務^む所^{しょ}(に、で、を、から)す^する
- 26、何^{なに}が隣^{となり}の店^{みせ}(に、で、を、から)食^たべたい？
- 27、日^に本^{ほん}語^ごを大^{だい}学^{がく}(に、で、を、から)学^{まな}ぶ
- 28、教^{きょう}室^{しつ}(に、で、を、から)山^{やま}が^みえ^える
- 29、2階^{かい}の窓^{まど}(に、で、を、から)出^でる
- 30、お金^{かね}を銀^{ぎん}行^{こう}(に、で、を、から)換^かえる

うら
裏へ→

- 31、寒^{さむ}いのは日^に本^{ほん}(に、で、を、から)ど^どこ？
- 32、ことば(に、で、を、から)調^{しら}べる
- 33、中^{ちゅう}国^{ごく}じゃないよ。日^に本^{ほん}(に、で、を、から)寒^{さむ}いのはど^どこ？
- 34、大^{だい}学^{がく}(に、で、を、から)車^{くるま}が^がとめ^めてある
- 35、棚^{たな}(に、で、を、から)漫^{まん}画^がが^がある
- 36、靴^{くつ}(に、で、を、から)は^はく
- 37、4階^{かい}(に、で、を、から)海^{うみ}が^みえ^える
- 38、中^{ちゅう}国^{ごく}じゃないよ。韓^{かん}国^{こく}(に、で、を、から)ど^どこが^がおもしろ^しい？
- 39、上^{うわ}着^ぎ(に、で、を、から)着^きる

- 40、ベッド(に、で、を、から)落ちる
- 41、ベッド(に、で、を、から)子供がいる
- 42、誰が3人の中(に、で、を、から)日本語が上手？
- 43、ソファ(に、で、を、から)猫がいる
- 44、帽子(に、で、を、から)かぶる
- 45、博多駅の外じゃないよ。駅の中(に、で、を、から)どの店がいい？
- 46、高いところ(に、で、を、から)飛びおりる
- 47、テーブル(に、で、を、から)写真が飾ってある
- 48、2人じゃないよ。3人の中(に、で、を、から)誰が日本語が上手？

資料H 第5章 問題文の種類(動詞が表す「移動」と「に」の正答率)

(1)「に」を正答とする問題文。

(1)-1 教室に入った。

ホテルに到着する。

新幹線に乗る。

家に荷物が届いた。

寮に着いた。

2 階の部屋に上がる。

(1)-2 体育館に集まった。

海に近づく。

海に沈む。

体育館に集まる。

そのニュースは全国に広がった。

(1)-3 京都に泊まった。

東京に住む。

やわらかい椅子に座った。

夕方いつもの場所に立った。

まだ道に雪が残っている。

人気のパン屋に並んだ。

(1)-4 教室に留学生がいる。

寮に留学生がいる。

会社におじ(さん)がいる。

大学におば(さん)がいる。

教室にパソコンがある。

寮にピアノがある。

大学に電気自転車がある。

(2)「で」を正答とする問題文。

(2)-1 公園で遊ぶ。

寮で料理を作る。

あの食堂でご飯を食べる。

向こうの部屋で本を読む。

(2)-2 古本を 500 円で買った。

空港まで 1 人で行ける。

小説を 20 分で読む。

彼はあと 1 年で帰国する。

レポートは 1 週間で書いた。

(2)-3 ペンで書く。

紙で人形を作る。

電車で行く。

事故で入院した。

かぜで休んだ。

(2)-4 定期試験は今日で終わった。

次の駅で降りる。

このドラマはあしたで終わる。

次の駅で運転をかわる。

あしたでバイトをやめる。

(2)-5 みんなで決める。

兄弟で助け合う。

夫婦で話しあう。

私たちでよければ手伝いますよ。

子供でいいから手伝ってほしい。

(3)「を」を正答とするダミー問題文。

橋を渡る。

海を渡る。

公園を通る。

駅を通る。

道路を渡った。

駅を通過する。

橋を渡った。

公園を通った。

海を渡った。

運動場を走る。

廊下を歩く。

空を飛ぶ。

道を歩く。

公園を散歩する。

山の中を走った。

廊下を歩いた。

空を飛んでみたい。

駅を出たのは9時だ。

会社を出て、店へ向かった。

8時に家を出た。

9時に店を出た。

大学を卒業する。

食堂を探す。

京都を案内する。

(4) 「から」を正答とするダミー問題文。24 問

駅から 30 分かかる。
ここから始める。
駅から家まで歩く。
3 階から飛びおりる。
ベッドから落ちる。
木から落ちる。
2 階の窓から落ちた。
2 階の窓から出る。
机からノートを出す。
冷蔵庫から氷を出す。
部屋から荷物を出した。
引き出しからペンを出す。
引き出しからペンを出す。
家からゴミをぜんぶ出した。
引越すので部屋から荷物を出した。
2 階の窓から入る。
後ろのドアから入る。
カギをなくしたので 2 階から入った。
カギをなくしたのでトイレから入った。
ここから山が見える。
部屋から星が見える。
教室から星が見える。
あの部屋から星が見える。
向こうの教室から山が見える。

資料 H 第 5 章 調査票(動詞が表す「移動」と「に」の正答率)

学籍番号_____名前_____日本語学校_____話せる言語_____

日本語能力試験 N _____合格_____点ぐらい 留学試験_____点ぐらい

使った本に○を書いてください。 みんなの日本語 1・みんなの日本語 2・中級から学ぶ・
上級で学ぶ(その他_____)

* (に、で、を、から)から正しいと思うものを選んで、○を 1 つ書いてください。

- (1)、駅(に、で、を、から)通る。
- (2)、道(に、で、を、から)歩く。
- (3)、彼はあと1年(に、で、を、から)帰国する。
- (4)、ペン(に、で、を、から)書く。
- (5)、家(に、で、を、から)ゴミをぜんぶ出した。
- (6)、空港まで1人(に、で、を、から)行ける。
- (7)、電車(に、で、を、から)行く。
- (8)、ベッド(に、で、を、から)落ちる。
- (9)、小説を20分(に、で、を、から)読む。
- (10)、事故(に、で、を、から)入院した。
- (11)、部屋(に、で、を、から)星が見える
- (12)、あした(に、で、を、から)バイトをやめる。
- (13)、橋(に、で、を、から)渡る。
- (14)、ここ(に、で、を、から)始める。
- (15)、引き出し(に、で、を、から)ペンを出す。
- (16)、大学(に、で、を、から)卒業する。
- (17)、食堂(に、で、を、から)探す。
- (18)、次の駅(に、で、を、から)降りる。
- (19)、体育館(に、で、を、から)集まる。
- (20)、レポートは1週間(に、で、を、から)書いた。
- (21)、ここ(に、で、を、から)山が見える。
- (22)、かぜ(に、で、を、から)休んだ。
- (23)、2階の窓(に、で、を、から)出る
- (24)、海(に、で、を、から)沈む。
- (25)、駅(に、で、を、から)30分かかる。
- (26)、2階の窓(に、で、を、から)入る。
- (27)、次の駅(に、で、を、から)運転をかわる。
- (28)、定期試験は今日(に、で、を、から)終わった。
- (29)、このドラマはあした(に、で、を、から)終わる。
- (30)、教室(に、で、を、から)山が見える。
- (1)、部屋(に、で、を、から)荷物を出した。
- (2)、寮(に、で、を、から)着いた。
- (3)、駅(に、で、を、から)通過する。
- (4)、教室(に、で、を、から)入った。
- (5)、ホテル(に、で、を、から)到着する。
- (6)、海(に、で、を、から)近づく。

- (7)、海(に、で、を、から)渡る。
(8)、家(に、で、を、から)荷物が届いた。
(9)、3階(に、で、を、から)飛びおりる。
(10)、新幹線(に、で、を、から)乗る。
(11)、そのニュースは全国(に、で、を、から)広がった。
(12)、2階の部屋(に、で、を、から)上がる。
(13)、運動場(に、で、を、から)走る。
(14)、京都(に、で、を、から)案内する。
(15)、やわらかい椅子(に、で、を、から)座った。
(16)、公園(に、で、を、から)散歩する。
(17)、後ろのドア(に、で、を、から)入る。
(18)、京都(に、で、を、から)泊まった。
(19)、紙(に、で、を、から)人形を作る。
(20)、東京(に、で、を、から)住む。
(21)、夕方、いつもの場所(に、で、を、から)立った。
(22)、まだ道(に、で、を、から)雪が残っている。
(23)、廊下(に、で、を、から)歩く。
(24)、公園(に、で、を、から)通る。
(25)、空(に、で、を、から)飛ぶ。
(26)、道路(に、で、を、から)渡った。
(27)、山の中(に、で、を、から)走った。
(28)、古本を 500 円(に、で、を、から)買った。
(29)、駅(に、で、を、から)家まで歩く。
(30)、木(に、で、を、から)落ちる。

資料H 第5章 調査票(動詞が表す「移動」と「に」の正答率)

学籍番号_____名前_____

7月に日本語能力試験のN_____を受ける予定

* (に、で、を、から)から正しいと思うもの選んで○を1つ書いてください。36問です。

- (1) 私^{わたし}たち(に、で、を、から)よければ、手^て伝^ついますよ。
- (2) 海^{うみ}(に、で、を、から)渡^{わた}った。
- (3) 8時^じに家^{いえ}(に、で、を、から)出^でた。
- (4) 大学^{だいがく}(に、で、を、から)電^{でん}気^き自^じ転^{てん}車^{しゃ}がある。
- (5) 兄^{きょうだい}弟^{だい}(に、で、を、から)助^{たす}け合^あう。
- (6) 向^むこうの教^{きょう}室^{しつ}(に、で、を、から)山^{やま}が見^みえる
- (7) 人^{にん}気^きのパン屋^や(に、で、を、から)並^{なら}んだ。
- (8) 大学^{だいがく}(に、で、を、から)おば(さん)が^がいる。
- (9) カギをなくしたので、2階^{かい}(に、で、を、から)入^{はい}った。
- (10) 橋^{はし}(に、で、を、から)渡^{わた}った。
- (11) 会^{かい}社^{しゃ}(に、で、を、から)出^でて、店^{みせ}へ向^むかった。
- (12) 体^{たい}育^{いく}館^{かん}(に、で、を、から)集^{あつ}まった。
- (13) 教^{きょう}室^{しつ}(に、で、を、から)留^{りゅう}学^{がく}生^{せい}が^がいる。
- (14) 引^ひき出^だし(に、で、を、から)ペ^だンを出^だす。
- (15) 子^こ供^{ども}(に、で、を、から)い^いいから手^て伝^つってほ^ほしい。
- (16) 廊^{ろう}下^か(に、で、を、から)歩^{ある}いた。
- (17) 教^{きょう}室^{しつ}(に、で、を、から)パソコ^んがある。
- (18) 空^{そら}(に、で、を、から)飛^とんでみ^みたい。

- (19) みん^きな(に、で、を、から)決^きめる。
- (20) 寮^{りょう}(に、で、を、から)ピア^ノがある。
- (21) あ^{しよくどう}の食^{しょく}堂^{どう}(に、で、を、から)ご飯^{はん}を食^たべる。
- (22) 公^{こう}園^{えん}(に、で、を、から)通^{とお}った。
- (23) 駅^{えき}(に、で、を、から)出^でたのは、9時^じだ。
- (24) 向^むこうの教^{きょう}室^{しつ}(に、で、を、から)本^{ほん}を読^よむ。

- (25) 寮(に、で、を、から)料理をつくる。
(26) 9時に店(に、で、を、から)出た。
(27) あの部屋(に、で、を、から)星が見える
(28) カギをなくしたので、トイレ(に、で、を、から)はいった。
(29) 公園(に、で、を、から)遊ぶ。
(30) 2階の窓(に、で、を、から)落ちた。
(31) 会社(に、で、を、から)おじ(さん)がいる。
(32) 机(に、で、を、から)ノートを出す。
(33) 夫婦(に、で、を、から)話しあう。
(34) 冷蔵庫(に、で、を、から)水を出す。
(35) 引越すので、部屋(に、で、を、から)荷物を出した。
(36) 寮(に、で、を、から)留学生がいる。

資料Ⅰ 第5章 アンケート調査(「移動」が分かり易い動詞とは)

学籍番号_____名前_____

a、九産大入学前に日本語を勉強した学校の名前_____

b、日本語学習に使った本の名前:_____

c、日本語学習期間_____年_____カ月間勉強した。

d、日本語能力試験N _____を受けた。 _____点ぐらい。

(1) A. 以下の文には、①人の動作や物の動きと、②人や物の移動のどちらが強く感じられますか。強く感じられるほうに○を書いてください。他に感じられることがあれば③その他に書いてください。但し、動作や動きも移動もないと感じられるものは、④に○を書いてください。

- | | |
|------------------|-------------------------------------|
| 1、教室に入る。 | (①動作や動き、②移動、③その他 _____、④動作や動き・移動なし) |
| 2、寮に着く。 | (①動作や動き、②移動、③その他 _____、④動作や動き・移動なし) |
| 3、イスに座る。 | (①動作や動き、②移動、③その他 _____、④動作や動き・移動なし) |
| 4、体育館に集まる。 | (①動作や動き、②移動、③その他 _____、④動作や動き・移動なし) |
| 5、東京に住む。 | (①動作や動き、②移動、③その他 _____、④動作や動き・移動なし) |
| 6、京都に泊まる。 | (①動作や動き、②移動、③その他 _____、④動作や動き・移動なし) |
| 7、いつもの場所に立つ。 | (①動作や動き、②移動、③その他 _____、④動作や動き・移動なし) |
| 8、新幹線に乗る。 | (①動作や動き、②移動、③その他 _____、④動作や動き・移動なし) |
| 9、パン屋に並ぶ。 | (①動作や動き、②移動、③その他 _____、④動作や動き・移動なし) |
| 10、海に近づく。 | (①動作や動き、②移動、③その他 _____、④動作や動き・移動なし) |
| 11、海に沈む。 | (①動作や動き、②移動、③その他 _____、④動作や動き・移動なし) |
| 12、道に雪が残っている。 | (①動作や動き、②移動、③その他 _____、④動作や動き・移動なし) |
| 13、ニュースが全国に広がる。 | (①動作や動き、②移動、③その他 _____、④動作や動き・移動なし) |
| 14、家に荷物が届く。 | (①動作や動き、②移動、③その他 _____、④動作や動き・移動なし) |
| 15、2階に上がる。 | (①動作や動き、②移動、③その他 _____、④動作や動き・移動なし) |
| 16、大学に電気自動車がある。 | (①動作や動き、②移動、③その他 _____、④動作や動き・移動なし) |
| 17、寮にピアノがある。 | (①動作や動き、②移動、③その他 _____、④動作や動き・移動なし) |
| 18、大学におばさんがいる。 | (①動作や動き、②移動、③その他 _____、④動作や動き・移動なし) |
| 19、体育館で入学式がある。 | (①動作や動き、②移動、③その他 _____、④動作や動き・移動なし) |
| 20、教室に留学生がいる。 | (①動作や動き、②移動、③その他 _____、④動作や動き・移動なし) |
| 21、韓国でどこがおもしろい？ | (①動作や動き、②移動、③その他 _____、④動作や動き・移動なし) |
| 22、日本でどこが有名な観光地？ | (①動作や動き、②移動、③その他 _____、④動作や動き・移動なし) |

B. 1～22の文の中で、人や物の「移動」が分かりやすい文はどれですか。「移動」が分かりやすいすべての文の番号(1～22)を○で囲んでください。

資料J 第6章 予備調査(「文頭」と「文中」)

名前 _____ 国 _____ にほんごのうりよくしけん _____ 級に合格した _____ 点ぐらい
日本語能力試験 _____ 級を受けたが不合格 _____ 点ぐらい

1. 私はご飯(に、を、で、から、)食べます。
2. 8時(に、を、で、から)5時まで私は勉強します。
3. 私は大学(に、を、で、から)います。
4. 日本(に、を、で、から)私は住みます。
5. 私は勉強(に、を、で、から)します。
6. 私は東京(に、を、で、から)います。
7. 私はアメリカ(に、を、で、から)日本に来ました。
8. 私は日本(に、を、で、から)働きます。
9. 私は日本(に、を、で、から)います。
10. 勉強(に、を、で、から)私はします。
11. 私は大学(に、を、で、から)住みます。
12. 私は東京(に、を、で、から)遊びます。
13. 家(に、を、で、から)大学まで私は自転車でいきます。
14. 日本(に、を、で、から)私はいます。
15. ご飯(に、を、で、から)私は食べます。
16. 車は大学(に、を、で、から)あります。
17. 大学(に、を、で、から)私は勉強します。
18. 私は東京(に、を、で、から)住みます。
19. 私は8時(に、を、で、から)5時まで勉強します。
20. 大学(に、を、で、から)車はあります。
21. 東京(に、を、で、から)私は遊びます。
22. アメリカ(に、を、で、から)日本に私は来ました。
23. 東京(に、を、で、から)私は住みます。
24. 私は家(に、を、で、から)大学まで自転車でいきます。
25. 私は日本(に、を、で、から)住みます。
26. 車は東京(に、を、で、から)あります。
27. 私は大学(に、を、で、から)勉強します。
28. 大学(に、を、で、から)私はいます。
29. 日本(に、を、で、から)私は働きます。
30. 車は日本(に、を、で、から)あります。
31. 私は本(に、を、で、から)読みます。
32. 東京(に、を、で、から)私はいます。
33. 大学(に、を、で、から)私は住みます。
34. 東京(に、を、で、から)車はあります。
35. 本(に、を、で、から)私は読みます。
36. 日本(に、を、で、から)車はあります。

資料J 第6章 予備調査(「文頭」と「文中」の翻訳調査)

自分の^{じぶん}国^{くに}のことばに^{ほんやく}翻訳してみよう。

(1) 私は日本にいる。

(2) 日本に私はいる。

資料K 第6章 本調査の調査票(「文頭」と「文中」)

名前

* 1つ○をつけてください

- 1、田中さんはこの新幹線(に、で、を、から)います
- 2、カギを忘れたので窓(に、で、を、から)入ります。
- 3、鳥が木(に、で、を、から)います。
- 4、木がたくさん要りますから、木(に、で、を、から)切ります。
- 5、服が洗濯機(に、で、を、から)入れてあります。
- 6、レストランはこのビル(に、で、を、から)あります。
- 7、有名な建物は中国(に、で、を、から)あります。
- 8、電車の中は誰もいません。電車の前(に、で、を、から)は1人います。
- 9、この食堂(に、で、を、から)は何がおいしいですか。
- 10、食堂がありません。来年、食堂(に、で、を、から)建てます。
- 11、中国(に、で、を、から)有名な建物があります。
- 12、荷物が食堂(に、で、を、から)おいてあります。
- 13、大学(に、で、を、から)家まで歩きます。
- 14、このビル(に、で、を、から)レストランがあります。
- 15、食堂(に、で、を、から)荷物がおいてあります。
- 16、洗濯機(に、で、を、から)は何でも洗えます。
- 17、今、日本です。中国(に、で、を、から)来ました。
- 18、あのビルは食堂がありません。となりのビル(に、で、を、から)は食堂がありますよ。

- 19、木(に、で、を、から)は何でも作れます。
- 20、中国(に、で、を、から)一番良かったのはペキンです。
- 21、この新幹線(に、で、を、から)田中さんがいます。
- 22、3人(に、で、を、から)は難しいです。
- 23、中国の人がこの新幹線(に、で、を、から)3人います。

- 24、新幹線(に、で、を、から)は遠くへ行けます。
- 25、家の中は誰もいません。家の外(に、で、を、から)は李さんがいます。
- 26、留学生が食堂(に、で、を、から) 3人います。
- 27、ビルが古くなったので、ビル(に、で、を、から)壊します。
- 28、木(に、で、を、から)鳥がいます。
- 29、仕事は新幹線のデザインです。私は新幹線(に、で、を、から)作ります。
- 30、洗濯機(に、で、を、から)服が入れてあります。
- 31、結婚しましたから、家(に、で、を、から)買います。
- 32、国(に、で、を、から)愛することは大切です。
- 33、火事の際は、ビルの2階(に、で、を、から)降ります。
- 34、寒いときは虫がいません。春になると、木(に、で、を、から)虫がでます。
- 35、木の下は何もいません。木の上(に、で、を、から)は鳥がいますよ。
- 36、家(に、で、を、から)山が見えます。

付録Ⅱ：表 2-2. 表 2-3.

表 2-2. 日本語学習者の場所を表す格助詞の習得を対象とした先行研究のまとめ

先行研究	母語または出身国	人数	日本語レベルなど学習者の情報	分析した資料やテスト	日本語学習用の教材	調査分析の対象
(初級レベル)						
松田・斎藤 (1992)	韓国語	2人	平仮名の読み書きがようやくできる程度の日本語レベルから、週に1回約90分、6カ月の日本語学習 (JSL)	6カ月間に計16回観察した発話資料。	新日本語の基礎 I	格助詞「に」「で」「を」「から」「より」「から」「まで」「と」「の」「へ」
久保田 (1994)	英語	2人	資料収集は学習開始後2カ月、学習時間24時間から開始し、以後1年10カ月 (学習時間231時間) の日本語学習 (JSL)	1年10カ月をⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期、Ⅳ期に分け集計している。日本語学習者が書いた資料は穴埋めテスト、日記などと発話の資料は、対話タスクやストーリーテリングなどにより収集したもの。	An Introduction to Modern Japanese	存在場所を表す「に」その他の「に」動作場所を表す「で」対象を表す「を」方向を表す「へ」
八木 (1996)	タイ語、マレー語、インドネシア語、タガログ語	10人のグループと7人のグループ	10人のグループと7人のグループは同じ大学院で異なる時期にそれぞれ11カ月平均週2クラス (計3時間) のペースで日本語学習を100時間 (JSL)	日本語学習が100時間経った時点の作文資料。	Japanese for Busy People I	存在場所を表す「に」その他の「に」動作場所を表す「で」場所を表す「を」対象を表す「を」「は」「が」「と」「の」「も」「へ」「から」「まで」「や」「だけ」「が」「から」「の」で
福間 (1996)	バングラディッシュ、シリア、ネパール、スロバキア、コロンビア、フィジー、マレーシア、ブラジル、ジャマイカ、インド、スリランカ、ジンバブエ、ボリビア、アルゼンチン、ロシア、パナマ	19人	ゼロからスタートし6カ月間の日本語学習 (JSL)	日本語学習が100時間までの作文資料。Vol.1 (L1～L8) を前半、Vol.2 (L9～L16) を後半としてクイズ・テストとして行われた作文。	Situational Functional Japanese Vol.1、Vol.2	格助詞「に」 (存在場所「に」は「住む」と共に用いられるものを含む)
松本 (2000)	中国語 (9歳4カ月～11歳3カ月)	1人	来日2週から100週 (JSL)	発話資料は日本語の授業約40分間と休み時間10分間 (計50分×34回分)、作文資料は2年目の授業中に書かれた作文12回分。	1年目の日本語の授業は会話中心、2年目は作文中心	助詞
森山 (2005・2008a・2008b)	韓国語	初めの2回が19人、その後3回が12人	日本語学習の経験がなく、日本語の授業週3回×16週×2学期 (JFL)	動詞を習い始めた直後から5回 (5月下旬、6月上旬、10月初旬、10月中旬、11月下旬) 1人ずつ。動詞絵カードを用い、口頭で産出された動詞が用いられた文。	世宗大学出版部刊『大学日本語』	助詞

存在場所を表す「に」	移動先を表す「に(へ)」	動作場所を表す「で」	「を」	(存在場所「に」・移動先「に」・動作場所「で」・「を」以外の) 分析の結果	先行研究
					(初級レベル)
場所を表す「に」の使用に 関して誤選択が多いのは場 所という実質の意味にのみ 着目する方法がとられてい る。		場所を表す「で」の使用に 関して誤選択が多いのは場 所という実質の意味にのみ 着目する方法がとられてい る。「場所を表す指標+ で」といった単位を想定し ている。「家でいます」の 誤用がある。	「公園に歩く」の ように「を」→ 「に」の誤用例が3 例示されている。 格と動詞の関係よ りも名詞句の実質 的な意味に着目し ていることが考え られる。		松田・斎藤 (1992)
「で」と「に」の機能混同 の中で「に」を過剰一般化 する傾向がある。「食堂に うどんを食べました」の誤 用がある。「に」の「書き 資料」の正用率は1人がⅠ 期89.7%、Ⅱ期100%、Ⅲ 期100%、Ⅳ期100%、もう1 人がⅠ期75%、Ⅱ期100%、 Ⅲ期100%、Ⅳ期100%、「発 話資料」の正用率が1人がⅠ 期81.8%、Ⅱ期100%、Ⅲ 期100%、Ⅳ期75%、もう1 人がⅠ期72.4%、Ⅱ期90%、 Ⅲ期78.6%、Ⅳ期40%であ る。	「カナダへ(に)帰る」のよ うな「到達点・目的地」は 誤選択がなかったのに対し 「プールへ泳ぎに行く」、 「渋谷へ映画を見に行く」 の文型中では「へ」の正用 率が低く「へ」→「で」の 誤選択の割合が1人は 100%、もう1人は66.7%で ある。「*横浜に遊びへ行 く」の「に」は存在場所を 表す「に」として誤用され たものである。	「で」の「書き資料」の正 用率は1人がⅠ期73.7%、 Ⅱ期82.9%、Ⅲ期87.5%、 Ⅳ期84.2%、もう1人がⅠ 期89.5%、Ⅱ期53.3%、Ⅲ 期69.2%、Ⅳ期50%、「発話 資料」の正用率が1人がⅠ 期53.8%、Ⅱ期66.7%、Ⅲ 期85.8%、Ⅳ期62.5%、もう1 人がⅠ期71.4%、Ⅱ期 25%、Ⅲ期75%、Ⅳ期 57.1%である。	「部屋に入る」 「友達を会う」の ような誤用が多 い。	「に」と共に用いられる「住む」 「泊まる」は、「に」動詞との組 み合わせによる記憶が成功してい るとも考えられるが、「に」の過 剰一般化により結果的に誤用が抑 えられているとも考えられる。	久保田 (1994)
両グループとも「に」の正 用率が57.1% (サンプル数 7)。		「で」の正用率は10人のグ ループが60% (サンプル数 15) 7人のグループが 63.6% (サンプル数11)。	場所を表す「を」 の正用率0% (サン プル数1)。対象を 「を」の正用率は 10人のグループが 7.5% (サンプル数 40) 7人のグルー プが88.6% (サン プル数44)。		八木 (1996)
存在場所「に」と動作場所 を表す「で」の混同。 「に」の過剰使用がある。					福岡 (1996)
発話資料では、「存在の場 所」の「に」が13週に出現 した。	発話資料では、「到達場 所」の「に」が24週に出現 した。	発話資料では、「動作・活 動の場所」の「で」が34週 に出現した。	発話資料では、 「通過・移動動詞 の範囲」の「を」 が43週に出現し た。		松本 (2000)
				他動詞文では対格「を」、主格 「は」と「が」、自動詞文では主 格「は」、場所格・時格・与格 「に」、主格「が」の順に習得が 進むと考えられる(森山2005)。 格助詞「に」、「を」、「で」習 得は、「に」が「移動先」、「存 在の位置・時」、「動作の相手・ 経験主」という習得順序、「で」 が「場所」、「道具」、「様 態」、「原因」、「時間」という 習得順序、「を」が「対格」、 「場所」、「状況・時」という習 得順序である(森山2008a, 2008b)	森山 (2005・ 2008a・ 2008b)

先行研究	母語または出身国	人数	日本語レベルなど学習者の情報	分析した資料やテスト	日本語学習用の教材	調査分析の対象
(中級レベル)						
鈴木 (1978)	東アジア (タイ・マレーシアなど)		中級レベル (JSL) (日本語能力の具体的な記載なし)	作文資料。		助詞
願 (1983)	中国語		中級レベル (日本語能力の具体的な記載なし)			助詞
内山 (1996)	韓国語 (中国語) (両者にレベル差があり最終的な分析対象は韓国語話者)	58人 (28人)	中級レベル (JSL)	正用文1、誤用文4の計5文から正用の文を選ぶ格助詞テスト。		格助詞「が」「を」「に」「と」
迫田 (2001)	中国語、韓国語、その他の言語話者	計60人	平均学習歴は中国語話者20人が1.49年、韓国語話者20人が1.46年、その他の言語話者20人が1.66年 (JSL)	「に」「で」「を」「と」から1つ選ぶ穴埋めテストで33文からなる49問の問題文。		位置を表す名詞+「に」および建物・地名を表す名詞+「で」の多用の有無。
蓮池 (2004)	中国語、韓国語	計120人	上級レベルの韓国語話者30人・中国語話者30人、中級レベルの韓国語話者30人・中国語話者30人	「に」「で」「を」「と」から1つ選ぶ穴埋めテストで50問の問題文。		場所を表す「に」の過剰使用、迫田 (2001) のユニットストラテジー使用の有無。
蓮池 (2007)	中国語、韓国語、英語	計97人	初中級レベル、中上級レベル	絵を描写する筆記形式のタスク。		場所を表す「に」の過剰使用、迫田 (2001) のユニットストラテジー使用の有無。
蓮池 (2012)	中国語、韓国語、英語	計97人	初中級レベル、中上級レベル	蓮池 (2007) の日本語学習者の「に」「で」「を」「と」から1つ選ぶ穴埋めテストで37問の問題文。		場所を表す「に」「で」の選択におけるL1の影響
初・玉岡・早川 (2013)	中国語	計201人	大学1～3年生、16点満点の読解テストから13点以上を上位群62人、10点～12点を中位群70人、9点以下を下位群69人に分けた (JFL)	選択肢が異なるが、4つの格助詞から1つを選ぶ穴埋めテストで「に」が正答と「で」が正答の48問の問題文。ダミー文は「を」「へ」などが正答の10問。		迫田 (2001) のユニットストラテジーの多用による誤用の有無、中国語の介詞「在」の干渉の有無。
(上級レベル)						
生田・久保田 (1997)	多国籍	50人	1級合格者か1級合格レベルと同レベル。職業は日本語教員	「を」「に」「で」「へ」「と」「から」「より」「まで」が正答となる選択肢なしの穴埋めテスト		格助詞「を」「に」「で」の問題点。
杉山 (2002)	中国語32 (内台湾語3広東語3)、韓国語5、タイ3、英語1、タガログ語1	41人	日本語学習時間800時間以上で1級合格者かそれに相当するレベル	文章・会話完成テスト。		日本語母語話者と日本語学習者が使用する格助詞「が」「を」「に」「で」の揺れ。
坂本 (2002)	中国語	4人	1級合格者	30分間のインタビューによるスクリプト。		迫田 (2001) のユニットストラテジーの多用による誤用の有無、「に」の過剰使用の有無。

存在場所を表す「に」	移動先を表す「に」	動作場所を表す「で」	「を」	(存在場所「に」・移動先「に」・動作場所「で」・「を」以外の) 分析の結果	先行研究
					(中級レベル)
	場所を表す「に」→「で」の混同による多くの誤用がある。動詞が動作性の動詞であるために、動作・作用の行われる場所を示す「で」の用法に引かれ「で」を多用する。	場所を表す「に」→「で」の混同による多くの誤用がある。動詞が動作性の動詞であるために、動作・作用の行われる場所を示す「で」の用法に引かれ「で」を多用する。		場所を表す「に」→「で」の混同による多くの誤用がある。場所を表す「で」と「へ」「に」、「を」の混同がある。	鈴木 (1978)
	場所の「に」と「で」の誤用がある。場所を表す「に」と「で」の2つの格助詞は中国語では場所名詞の前に置かれる介詞「在」に当たるため「に」と「で」の使い分けは中国語話者にとって頭を痛める問題の1つ。	場所の「に」と「で」の誤用がある。場所を表す「に」と「で」の2つの格助詞は中国語では場所名詞の前に置かれる介詞「在」に当たるため「に」と「で」の使い分けは中国語話者にとって頭を痛める問題の1つ。「あの喫茶店にコーヒーを飲みましょう」の誤用がある。			顧(1983)
			「を」の正用順序は「対象」、「場所」、「起点」であり、「対象」はほぼ習得している。	「に」は2項動詞の正用順序は「目標」「場所」「結果・「対象」、「誘因」の順。	内山 (1996)
				「位置を表す名詞+に」「建物・地名を表す名詞+で」ユニット形成ストラテジーの多用による「に」「で」の誤用がある。	迫田 (2001)
				「位置を表す名詞+に」のユニット形成ストラテジーは見られたが、「建物・地名を表す名詞+で」ユニット形成ストラテジーは見られなかった。中国語話者には「いる」「入る」など特定の動詞に着目し「に」の多用による過剰使用がある。	蓮池 (2004)
				韓国語話者にも「に」の過剰使用がある。	蓮池 (2007)
				中国語話者は位置を表す名詞の存在の有無にかかわらず、「に」の過剰使用が著しい。初中級レベルの中国語話者は他動詞文の方が自動詞文よりも「で」を選択し易い。	蓮池 (2012)
				読解力が上がるほど場所を表す格助詞の正答率が上がっていた。上位群では場所と位置の影響が見られ、場所では動詞の難易、位置では格助詞の「に」と「で」が影響していた。中位・下位群では、動詞の難易・その次に動詞の自他が影響していた。ユニット形成は上位群の位置の場合に見られ「在」の干渉は見られなかった。	初・玉岡・早川(2013)
					(上級レベル)
問題文「はら、あの建物の隣(に)ある木」の正答数50/50。		問題文2問の内、1問の正答数が49/50でもう1問の正答数が50/50。	通過場所を表す「を」の問題文の正答数は3問の内、1問が40/50、もう1問が49/50、残りの1問が50/50。		生田・久保田(1997)
日本語母語話者と日本語学習者共に80%以上が同一の回答だった問題文は「高原は長野県(に)ある」。			日本語母語話者と日本語学習者共に80%以上が同一の回答だった問題文は「気分転換に家(を)出て近所を散歩する」「長男は今年大学(を)卒業してコンピュータ関係の会社に入った」。		杉山 (2002)
				「に」の過剰使用は「あまり観察できなかった」が、「中+に」というユニット形成の多用による「で」→「に」の誤用が「多少見られた」。	坂本 (2002)

表 2-3. 先行研究で示された日本語学習者の場所を表す「に」「で」「を」の誤用

日本語能力が初級レベル		
格助詞と共に用いられた動詞		日本語学習者の誤用
「いる」「ある」	1	観光バス <u>で</u> 人が6人しかいませんでした(松田・斎藤 1992。)
	2	私の家 <u>で</u> あるんです(松田・斎藤 1992)。
	3	(主人は)家 <u>で</u> いました(松田・斎藤 1992)。
	4	家 <u>で</u> 一人でいました(松田・斎藤 1992)。
	5	家 <u>で</u> 一人でいるとき(松田・斎藤 1992)。
	6	妹は一人で家 <u>で</u> います(松田・斎藤 1992)。
	7	材料が家 <u>で</u> ありません(松田・斎藤 1992)。
	8	結婚指輪は家 <u>で</u> (あります)(松田・斎藤 1992)。
	9	(主人は)研究室でいるかしら(松田・斎藤 1992)。
	10	家 <u>で</u> います(松田・斎藤 1992)。
	11	そと <u>で</u> います(松田・斎藤 1992)。
	12	階段の左 <u>で</u> あります(松田・斎藤 1992)。
	13	本町 <u>で</u> 店があります(松田・斎藤 1992)。
	14	ここ <u>で</u> 本があります(久保田 1994)。
	15	いま大学 <u>で</u> ともだちがたくさんいます(福間 1996)。
	16	日本 <u>で</u> たくさん車がありますから、ちょっとふべんです(福間 1996)。
	17	コロンビア <u>で</u> は夏やふゆなどありません(福間 1996)。
	18	私のへや <u>に</u> パーティーがあります(福間 1996)。
	19	タイでは病院があるんですけど、いなか <u>で</u> あまりありません。 ＜タイ・半年前後＞(市川 1997)
	20	北川大学 <u>で</u> すばらしい先生、田山さんがいるという記事が出 ていた。＜アメリカ 1～2 年＞(市川 1997)
「行く」「来る」「帰る」	21	会社 <u>で</u> 行きませんでした(松田・斎藤 1992)。
	22	韓国から日本 <u>で</u> 来ました(松田・斎藤 1992)。
	23	ここ <u>で</u> 家から歩いて・・・(松田・斎藤 1992)。
	24	家 <u>で</u> 帰るとき・・・(松田・斎藤 1992)。
	25	朝は教会 <u>で</u> 行きます(松田・斎藤 1992)。
	26	家 <u>で</u> 遅く帰ります(松田・斎藤 1992)。
	27	友だちの家 <u>で</u> 遊びに行きます(松田・斎藤 1992)。
	28	家 <u>で</u> 遊びに来ました(松田・斎藤 1992)。

	29	韓国で日本へ来て・・・(松田・斎藤 1992)。
	30	プールで泳ぎに行く(久保田 1994)。
	31	渋谷で映画を見に行く(久保田 1994)。
	32	あしたひまなら、私の家であそびにきてください。＜アルバニア・半年前後＞市川(1997)
	33	食堂でごはんを食べにいきます。＜タイ・半年前後＞(市川 1997)
	34	先生が早く車をのって帰りなさいと言いました＜タイ・半年～1年＞(市川 1997)
「住む」	35	大学のそばで住んでいます(松田・斎藤 1992)。
	36	そこで住んでいました(松田・斎藤 1992)。
	37	いま私は留学生かい館ですんでいます(福岡 1996)。
	38	しょくしゃ(宿舎)で日本人の大学生がいっぱいすんでいます。＜タイ・半年前後＞市川(1997)
	39	日本の文化をわかるように、日本で何年もすまなければなりません。＜ブラジル・半年前後＞(市川 1997)
「電話する」「かける」「建つ」「勤める」「通う」「座る」	40	妹が家で電話します(松田・斎藤 1992)。
	41	私の家で電話をかけます(松田・斎藤 1992)。
	42	外でアパートが(建っています)(松田・斎藤 1992)。
	43	韓国で小学校にタンバリンを習います(松田・斎藤 1992)。
	44	会社で勤めていたとき(松田・斎藤 1992)。
	45	新通り小学校で通っています(松田・斎藤 1992)。
	46	私は日本人のとなりですわっていました(福岡 1996)。
	47	フィジーのむらにはよるのときぜんぶの男の人がひとりの人のいえですわってビールとおなじのみものをのみます(福岡 1996)。
「飲む」「会う」「習う」「休む」「する」「食べる」「運転する」「見る」「やる」	48	私の家に飲みません(松田・斎藤 1992)。
	49	食堂に会います(松田・斎藤 1992)。
	50	たばこ屋の前に会うように言って下さい。＜アメリカ・1～2年＞(市川 1997)
	51	スポーツセンターに習いました(松田・斎藤 1992)。
	52	家に休みます(松田・斎藤 1992)。
	53	国際交流会館に外国人がみんな会います(松田・斎藤 1992)。
	54	家に色々な仕事をしています(松田・斎藤 1992)。
	55	食堂にうどんを食べます(久保田 1994)。

「案内する」「出る」「歩く」	56	ガタのなかに <u>じ</u> てんしゃをうんでんするがおもしろかったです(福間 1996)。
	57	ネパールには今も 90%の人口は農業をしています(福間 1996)。
	58	ブラジルに <u>皆</u> がサーカーをやります。＜ブラジル・半年～1年＞(市川 1997)
	59	アメリカには、主婦は一度テレビメロドラマを見るのが癖になるともうやめられません。＜アメリカ・1～2年＞(市川 1997)
	60	妹がソウルに案内します(松田・斎藤 1992)。
	61	家に出る時・・・(松田・斎藤 1992)。
	62	一人で公園に歩いていました(松田・斎藤 1992)。
日本語能力が中級レベル		
誤用の「で」と共に 用いられた動詞		日本語学習者の誤用
「いる」「ある」	63	食堂 <u>で</u> わたしたちの生けた花があります(鈴木 1978)。
	64	そこで百年も前に植えた松がありました(鈴木 1978)。
	65	その近く <u>で</u> メコン川の流れる平野があります(鈴木 1978)。
	66	〇〇さんの方は、田舎 <u>で</u> 20 年間、私は都会 <u>で</u> 20 年間いると(性格が)ちがうですよ。＜韓国・8 カ月＞(迫田 2001)
「座る」	67	道のそばにあった大きい石 <u>で</u> すわって、持ってきたジュースを飲みました(鈴木 1978)。
「敷く」「置く」「植える」	68	へや <u>で</u> 花のもようのあるござをしきました(鈴木 1978)。
	69	へや <u>で</u> テレビを置いたので、狭くなりました(鈴木 1978)。
	70	わたしたちは庭 <u>で</u> さくらの木を植えました(鈴木 1978)。
「見える」(認知活動を表す動詞) 「持つ」「借りる」(所有動詞) 「作る」「書く」「建つ」(出現性の意味を持つ生産動詞) 「咲く」「生える」「できる」(出現動詞)	71	海の上 <u>で</u> 小さい船がたくさん見えます(鈴木 1978)。
	72	私の父はバンコックの郊外 <u>で</u> 農園をもっています(鈴木 1978)。
	73	私の先輩は大学の近く <u>で</u> アパートを借りました(鈴木 1978)。
	74	中河原駅の前 <u>で</u> 歩道橋をつくりました(鈴木 1978)。
	75	先生は黒板 <u>で</u> 字を書きました(鈴木 1978、顧 1983)。
	76	シンガポールの南の海に面した所は商業地帯だ。そこ <u>で</u> りっぱな建物がたくさんたっています(鈴木 1978)。
	77	春になると庭 <u>で</u> きれいな花がたくさんさきます(鈴木 1978)。
	78	テニスコート <u>で</u> 草がはえているので、みんなで草をとりました(鈴木 1978)。
	79	顔 <u>で</u> にきびがたくさんできました(鈴木 1978)。

集まる	80	9 時に中河原駅で <u>集</u> まりました(鈴木 1978)。
	81	朝 8 時半に学生たちはみんな玄関の前で <u>集</u> まって、8 時 45 分にでかけました(鈴木 1978)。
食べる 泳ぐ 散歩する	82	あの喫茶店に <u>こ</u> ーヒーを飲みましょう(顧 1983)。
	83	私は毎日プールを <u>よ</u> ぎます(鈴木 1978)。
	84	私たちは旅館の近く <u>に</u> 散歩しました(鈴木 1978)。
	85	多摩川のそばで <u>を</u> 散歩します(鈴木 1978)。

表内の＜中国、半年～1 年＞という表記は、市川(1997)および迫田(2001)に示されている誤用であり、「中国語を母語とする日本語学習者の誤用で日本語学習歴が半年～1 年である」ことを表している。＜？・半年～1 年＞の「？」は、国籍が不明のものであることを表している(市川 1997)。

謝辞

本論文の執筆にあたりご指導いただきました、指導教員主査の志水俊広先生(九州大学大学院言語文化研究院准教授)、指導教員副査の松永典子先生(九州大学大学院比較社会文化研究院教授)、山村ひろみ先生(九州大学大学院言語文化研究院教授)、李相穆先生(九州大学大学院言語文化研究院准教授)、そして、林田実先生(北九州市立大学経済学部教授)に心より感謝申し上げます。

本当に有難うございました。